

アフリカン・アメリカン児童文学におけるエンパワメント  
- 可視化、受容、接続 -

2017年2月3日

鈴木宏枝

## アフリカン・アメリカン児童文学におけるエンパワメント

### - 可視化、受容、接続 -

はじめに .....	6
1. アフリカン・アメリカン児童文学の形成 .....	7
i . 19世紀アメリカ児童文学の中の黒人 .....	7
ii . アンクル・リーマスの功罪 .....	11
iii . アフリカン・アメリカン児童文学の成立から発展まで .....	17
2. アフリカン・アメリカン児童文学への接近 .....	23
i . 文学と児童文学の相違 .....	23
ii . 「エンパワメント」と文化 .....	27
iii . 複層的な発展 - 可視化、受容、接続 .....	32
I エンパワメントの土台 - <i>The Brownies' Book</i> .....	38
1. <i>The Brownies' Book</i> の概要 .....	38
i . 雑誌の誕生 .....	38
ii . 読者像 .....	43
2. 可視化、受容、接続の萌芽 .....	49
i . 可視化 - 伝記を例に .....	49
ii . 受容 - アフリカへの親近感 .....	55
iii . 接続 - 絵画 .....	60
II 可視化の展開 .....	66
1. アフリカン・アメリカンの存在感 - 偉人、英雄、民衆 .....	66
i . 伝記 - <i>Narrative of the Life of Frederick Douglass, an American Slave</i> を例に .....	66
ii . トール・テール - <i>John Henry</i> (1940) .....	73

iii . 昔話 - <i>The African-American Folktales</i> (1985) .....	81
2. 抑圧への異議申し立て .....	86
i . 人種差別の告発 - <i>Roll of Thunder, Hear My Cry</i> (1976) .....	86
ii . 無力な白人少年 - <i>Mississippi Bridge</i> (1990) .....	94
iii . 開拓者の複数性 - <i>The Land</i> (2001) .....	99
III 受容の展開 .....	108
1. 「中間航路」の再受容 .....	109
i . ハイチに見る夢 - <i>Popo and Fifina</i> (1932) .....	109
ii . アフリカへの憧憬 - “All the God’s Chillun Had Wings” (1975) .....	118
2. 家族史の受容 .....	124
i . 正の受容 - <i>M.C.Higgins, the Great</i> (1974) .....	124
ii . 負の受容 - <i>Sweet Whispers, Brother Rush</i> (1982) .....	129
3. アフリカン・アメリカン史の受容 .....	137
i . 神話創造の試み - <i>The Magical Adventures of Pretty Pearl</i> (1984) .....	137
ii . 南部への回帰 - <i>Toning the Sweep</i> (1993) .....	150
IV 接続の展開 .....	157
1. 逃亡における接続 - 逃亡奴隷と「地下鉄道」 .....	158
i . 「地下鉄道」というネットワーク - <i>Scenes in the Life of Harriet Tubman</i> (1869) から <i>Harriet Tubman: Conductor on the Underground Railroad</i> (1955) へ .....	158
ii . 「地下鉄道」がつなぐ過去と現在 - <i>Time Pieces: A Book of Times</i> (2000) .....	169
2. 欠落による接続 - 路上の人間関係 .....	173

i . 「新しい人類」の空想 - <i>The Planet of Junior Brown</i> (1971)	173
ii . 共同する場 - <i>145<sup>th</sup> Street</i> (2000)	181
3.言葉による接続	188
i . フラニ語と英語 - <i>Second Daughter</i> (1996)	188
ii . ポエトリー・リーディングの力 - <i>Bronx Masquerade</i> (2002)	197
おわりに - アフリカン・アメリカン児童文学の現在と今後の展望 ...	206
1.アフリカン・アメリカン児童文学の現在	206
2. アフリカン・アメリカン児童文学の展望	209
注	218
引用・参考文献	239
資料	268
謝辞	280

## 初出一覧（大幅な加筆修正を加えている）

II 可視化の展開 2. 抑圧への異議申し立て i. 人種差別の告発, iii. 開拓者の複数性 / III 受容の展開 2. 家族史の受容 i. 正の受容 / IV 接続の展開 1. 逃亡における接続 ii. 「地下鉄道」がつなぐ過去と現在  
「アフリカ系アメリカ人作家の捉えるくふたつの世界」 - ミルドレッド・テーラーとヴァージニア・ハミルトン』『児童文学におけるくふたつの世界』井辻朱美監修, てらいんく, 2004. pp.163-189.

-----

III. 受容の展開 3. アフリカン・アメリカン史の受容 i. 神話創造の試み  
「アフリカ系アメリカ人少女の成長と言葉の力 - ヴァージニア・ハミルトンの『プリティ・パールのふしぎな冒険』」吉田純子, 鈴木宏枝, 大喜多香枝  
『マイノリティは苦しみをのりこえて - アメリカ思春期文学を読む』冬弓舎, 2013. pp.159-181.

-----

III. 受容の展開 2. 家族史の受容 ii. 負の受容  
「『マイゴーストアंकクル』再読」『ネバーランド』4 (2005): 114-127.

-----

IV 接続の展開 2. 欠落による接続 i. 「新しい人類」の空想  
「*The Planet of Junior Brown* と映画 *Junior's Groove*: 少女, planet, street の観点から」『英語圏児童文学研究 Tinker Bell』54(2009): 27-44.

-----

IV 接続の展開 2. 欠落による接続 ii. 共同する場  
「ニューヨーク・ハーレムの濃密な人間関係」『12歳からの読書案内』金原瑞人編, すばる舎, 2006. pp.148-149.

## 凡例

1. 「アフリカン・アメリカン」と「黒人」は、奴隷制時代にアフリカから北アメリカに奴隷として連れてこられた人々とその子孫を指す。肌の色が特に問題とされる場合は「黒人」、ハイフン付のアメリカ人として出自を問題にする場合は「アフリカン・アメリカン」を用いるが、基本的に二者は同じ民族集団を指す。
2. 作家、画家、芸術家の名前は原綴りと生没年を付記するが、研究者や評論家は原綴りのみとする。

はじめに

アフリカン・アメリカン児童文学は、アフリカン・アメリカンの作家がアフリカン・アメリカンの子どものために書いた作品と限定的に (“exclusively”) 捉えるか、アフリカン・アメリカンが書いた作品やアフリカン・アメリカンの子どもが書かれた作品を包括的に (“inclusively”) 含めるかによって定義が異なる (Martin “African American” 10)。だが、アフリカン・アメリカンの作家が十代までのアフリカン・アメリカンの子どもや若者のために書いた作品を主に指し、19世紀の作家・作品を源流として1920年代のハーレム・ルネッサンス (Harlem Renaissance) 期に盛り上がり、大恐慌とともにしぼんだものの、1960年代末から質量ともに再び拡大した (Bishop *Free Within Ourselves* “Introduction” n.pag.) というまとめで、おおむね合意を得るようである。本論では、この合意を踏まえた上で、主にアフリカン・アメリカンの作家がアフリカン・アメリカンの子どもを「内包された読者」 (“implied reader”) <sup>1</sup>と想定し、彼らの心的成長を促したり、認知的な転換をさせたりすることを意図した文学をアフリカン・アメリカン児童文学と考える。

児童文学の読者対象は、文字を拾い読みできる5歳前後の子どもから成人直前のヤングアダルト読者まで幅広いが、読者対象の中央領域は、字を習ってストーリーを楽しめる6歳から12歳と考えられ、アメリカで最も権威ある児童文学賞のひとつであるニューベリー賞 (Newbery Award) の選考対象は、12歳以下の児童向けに書かれた作品である。本論では、学童期から十代までの読者を児童文学の主な対象と捉え、絵本にも一部言及する。

## 1. アフリカン・アメリカン児童文学の形成

### i. 19世紀アメリカ児童文学の中の黒人

アメリカ国産の児童文学は、19世紀前半のアメリカン・ルネッサンス（American Renaissance）とほぼ同じ時期に、宗教小説や大衆小説など複数の源流から形成された。モラルを伝えるという目的と社会的な制約を前提としているため、人種的混淆を防ぐという当時の建前に与し、「徹底して異人種間の混交を禁止し、混血の誕生を阻止し、生まれてしまった混血をできるかぎり白人から区別していこうと」（山田 9）する制度のもとで、分離主義の原則が貫かれていた。

家庭小説の正典である *Little Women* (1868) の作者ルイーザ・メイ・オルコット（Louisa May Alcott, 1832-88；以下オルコット）は、熱心な奴隷制度廃止論者だった<sup>2</sup>。父親のエイモス・ブロンソン・オルコット（Amos Bronson Alcott, 1799-1888）は、私財を投じて設立したテンプル・スクール（The Temple School）に黒人の生徒を入学させ、経営難の学園に最後の一撃をくわえて倒産させたほどの人物で、オルコットも黒人奴隷に強い同情の念を持っていた。南北戦争（Civil War, 1861-65）で北軍の従軍看護師として働いた体験を土台に書いた大人向けの中編小説 *Hospital Sketches*（1863）には、オルコットの分身で主人公の白人女性トリビュレイション（Tribulation；トリブ[Trib]）が、黒人の赤ちゃんにキスをしたり、黒人の中に「決着がつくときまで待ちながら希望を見つめ続ける辛抱強い魂」（“the patient hearts that wait and watch and hope until the end” 75）を見いだしたりする場面が描かれている。

だが、少女向けに執筆された *Little Women* には黒人への共感は周到



に隠されている。メグ (Meg)、ジョー (Joe)、ベス (Beth)、エイミー (Amy) の四姉妹の父親であるマーチ氏 (Mr. March) は北軍の従軍牧師として出征しているが、全編を通じて自由黒人や奴隷の描写はなく、続編の *Little Men* (1871) や *Jo's Boys* (1887) にも黒人はほとんど登場しない<sup>3</sup>。 *Little Men* で、次女のジョーと夫のベア (Bhaer) 教授が設立するプラムフィールド学園 (Plumfield) は、ブロンソン・オルコットのテンプル・スクールをモデルにしているにもかかわらず、生徒は、メグやジョーの子どもたちのほか、青い眼のナット (Nat)、金髪のフランツ (Franz)、背中が曲がっているディック (Dick) など 12 人全員が白人である。奴隷問題に意識的でも、オルコットは児童文学に人種の問題を織り込むことはせず、子ども向けに黒人と白人の共存を書くという過激さを避けている。

少年小説の *The Adventures of Tom Sawyer* (1876) を書いたマーク・トウェイン (Mark Twain [Samuel Langhorne Clemens], 1835-1910) も、自伝によると、ミシシッピ川流域で「すべての黒人はぼくたちの友だちだった」 (“All the negroes were friends of ours” Twain *Autobiography* 1348/9152) といえる幼少期を過ごした。近所に住んでいた奴隷のアンクル・ダニエル (Uncle Dan'l) は特になつかしく回顧され (Pettit 19)、 *The Adventures of Huckleberry Finn* (1885) に登場する逃亡奴隷のジム (Jim) の造形にも影響している。作中で、ジムは、後見人の家から逃げ出した白人少年ハック (Huck) を知的に論じ、「文学史上最大のエポックをなした」 (原 854) と評価されている。

一方で、トウェインは、奴隷と「ぼくたちは仲間だったが、やはり仲間ではなかった。肌の色と置かれた事情でかすかな線引きがなされていた。その分離の線をどちらの集団も認識し、完全な融合を不可能にして

いた」(“We were comrades, and yet not comrades; color and condition interposed a subtle line which both parties were conscious of and which rendered complete fusion impossible” *Autobiography* 1365/9151) ことも明らかにしている。

主体的な逃亡奴隷ジムを創造したトウェインにとってさえ、人種分離は自明であり、*Huckleberry Finn* のハックとジムの命がけの道程は、結局のところ「ジムがトムを助けるために喜んで自己犠牲を払うことを通じて、また、トムが見受け金を支払う代わりに、ジムより優位に立ち、ジムの命を自分の楽しみのためにもてあそべるという仮定を通じて」

(“Through Jim’s willingness to sacrifice his freedom to care for Tom, and through Tom’s assumption that he can pay Jim for taking advantage of him, for playing games with Jim’s life for his own amusement” Nilon 1349)、白人少年トム (Tom) の遊びに矮小化され、人間としての黒人奴隷の誇りの深みには達しない。

さらに、同時代の廉価な挿絵付の本では、黒人への偏見が視覚的にも拡大されていた。イギリス人作家ヘレン・バンナーマン (Helen Bannerman, 1862-1946) は、夫の赴任でインドに滞在していたときに自分の子どものために *The Story of Little Black Sambo* (1899) の絵本を書き、出版した。この作品は、本来、宗主国であるイギリスと植民地インドの関係性を土台にし、特権階級のイギリス人作家が現地人の子どもを小さく滑稽な者として捉えるものである。散歩に出かけたサンボ (Sambo) 少年の服や傘を奪ったトラたちは、互いに互いを追いかけて回り続けた挙句に、インドでよく食べられているギィ (澄ましバター) に変わる点でも、地域性が強調されている。

しかし、この作品がアメリカに輸入されると、新しい服を買ってもら

って意気揚々と歩くインド人の子どもは黒人という二級市民の子どもに翻訳され、 minstrel・ショウ<sup>4</sup>の風味が増す。バンナーマンの自筆以外による挿絵の版も出回り、1927年のマクミラン社版のフランク・ドビアス (Frank Dobias, 1902-?)<sup>5</sup>をはじめ 1930年代までに出された *Little Black Sambo* の挿絵の多くは、サンボとその両親を、 minstrel・ショウと同様に、丸い目や厚く赤いくちびるを強調した造形で描いて、無意識的な黒人蔑視を伝えている。

アメリカ生まれのイギリス人挿絵画家のフローレンス・ケイト・アプトン (Florence Kate Upton, 1873-1922) は、 *The Adventures of Two Dutch Dolls and a Golliwogg* (1895) という絵本をアメリカとイギリスの両方で出版した。この絵本には、オランダ人形とともに、縮れた黒髪や極端に赤い唇を持つゴリウオグ (Golliwogg) という黒人の人形が登場する。派生して、人種的な特徴が引き継がれた人形や玩具も製造され、公民権運動の高まりとともにアフリカン・アメリカンから強い批判を浴びるようになった。

アンテベラム期に奴隷制度廃止論の新聞に連載され、世論に大きな影響を与えたハリエット・ビーチャー・ストウ (Harriet Beecher Stowe, 1811-96) の小説 *Uncle Tom's Cabin* (1852)<sup>6</sup>には、嘘つきで乱暴なトプシー (Topsy) という奴隷少女が脇役として登場する。彼女は、白人の大農園主セントクレア (St. Clare) 氏の家内奴隷で、セントクレア氏の従姉のオフィーリア (Ophelia) という淑女が、理想通りに奴隷を啓蒙できるかを見るために買われてきた「素材」である。この企てにオフィーリアは失敗するが、トプシーは、自分に同情を寄せ、友だちになろうと言ったセントクレア氏の娘のエヴァ (Eva) の気高さに打たれて改心する。絵本では、ぼろぼろの服をまとい、丸い目と編みこんだ縮れ毛

のトプシー像が強調される。規範から逸脱して暴れまわる「悪い」トプシーの道化ぶりは、ジム・クロウ (Jim Crow)<sup>7</sup> やジップ・クーン (Zip Coon)<sup>8</sup> のような minstrel show のキャラクターを想起させ、戯画的で醜い。 *The Story of Topsy from Uncle Tom's Cabin* (作者不詳 1908) のように「良くなった」トプシーが描かれる場合はその改心も劇的で、原作と筋も異なり、オフィーリアの薫陶を受けたトプシーはアフリカに渡り、教師になるという結末になっている。19世紀から20世紀初めまで、子どもの本の中で、アフリカン・アメリカンの登場人物は不在または偏見に満ちた姿で登場していた。

## ii. アンクル・リーマスの功罪

次に、アフリカン・アメリカンの文芸に知的な興味を持って接近した白人によるテキストはどうだっただろうか。ジョージア州の *Atlanta Constitution* 紙の白人ジャーナリストだったジョエル・チャンドラー・ハリス (Joel Chandler Harris, 1848-1908) は、同僚記者のサム・スモール (Sam W. Small, 1851-1931) がコラムで黒人英語を用いていたことを参考に、奴隷のリーマス (Remus) が屋敷の7歳の白人少年に語り聞かせるという枠形式を用いて、同紙のコラム欄に1876年から黒人民話を連載した。

連載されたのは、ハリス自身が大農園の黒人奴隷から聞いたことのある話、ハリスの子どもの遊び友達の黒人少年から聞いた話、新聞広告で募集した語り手から聞いた話である。連載後は単行本にまとめられ、 *Uncle Remus; His Songs and Sayings* 以下、 *Nights with Uncle Remus* (1883)、 *Uncle Remus and His Friends* (1892)、 *Told by Uncle Remus*

(1905)、*Uncle Remus and Brer Rabbit* (1907)、*Uncle Remus and the Little Boy* (1910)、*Uncle Remus Returns* (1918)、*Seven Tales of Uncle Remus* (1948) と続いた。

*Uncle Remus* は、「熟達した技巧をもって、およそ民話のほんの粗筋以上のものではないものに手を加え、緻密に研究したジョージア州の黒人に特徴的な話し言葉でふくらませ、語り手としての素晴らしい才能を用いた」(“worked with much skill on what was often not more than a bare outline of a folk-story, enriching it with characteristic Georgia Negro speech, which he had studied closely, and using his own considerable talents as a story-teller” Carpenter & Prichard 240) とされ、黒人の生活感情や英語の表記工夫も評価されている(池本 77)。しかし、アフリカン・アメリカンの批評においては

ジョエル・チャンドラー・ハリスのアンクル・リーマスのような共感的な黒人の人物造形でさえ、話し言葉を文字化したということよりも、 minstrel・ショウや大農園小説やボードビル演芸から生まれた人種差別的な文芸伝統の方にはるかに深く関連している

(.....) even sympathetic characterizations of the black, such as *Uncle Remus* by Joel Chandler Harris, were far more related to a racist textual tradition that stemmed from minstrelsy, the plantation novel, and vaudeville than to a representations of spoken language

(Gates *Signifying* Chapter5)

と厳しく批判されている。

そもそも、奴隷たちの共同体では、

「外」の世界である奴隷居住区という集団の場では、成員の精神の点でも、機能の点でも、あるいは他の奴隷居住区との結びつきや主人に内緒の訪問、秘密の通信手段による情報（奴隷の売買や処遇に関するローカルな話題から、奴隷制度をめぐる社会運動や政治など高度に社会的な情報まで）収集と伝達が白人農園主には想像もつかないほどのすばやさで正確さで共有されていたという。

（Webber [邦訳] 378-409）

といわれ、民話や昔話は白人の目につかないネットワークの中で語られていた。昼間は炎天下の畑で肉体労働をしている奴隷たちは、夜になると互いに語り手や聞き手となり、合いの手を入れながら共同作業で物語に命を吹き込み、共有していた。

だが、リーマスは、白人の少年に話を聞かせるためだけに造形された奴隷なので、家の周辺から移動できず、他の奴隷との交流もない。彼は、インドの思想家ガヤトリ・チャクラヴォルティ・スピヴァク（Gayatri Chakravorty Spivak）のサバルタン論における「ネイティブ・インフォーマント」（Spivak *Critique* [邦訳] 22）すなわち、「それ自体としては空白でありながら、西洋（あるいは西洋モデルの学問）のみが書き込むことのできる文化アイデンティティのテキスト」（*ibid.* 22）に見える。リーマスは、一見声を持つようであるが、主流の側に操られる現地人に過ぎず、権威者であるハリスは、隷属集団の代表者の声を聞き取り、書き直し、リバイズして先進国の読者に提供する。このとき、情報提供者の言葉は、発信者には訂正不可能な形で伝達され、隷属的集団の声じた

いは沈黙のまま、隷属集団の情報は西洋的規範や理性を多彩化するための装置となる。独自の身体性と感情を持つはずの奴隷の声は書き換えられ、支配者の文脈に落とし込まれる。これに従い、ハリスが収奪した民話の質は変化し、白人の耳と目に理解しやすく楽しめる方向に変わり、聞き手との掛け合いや相互作用の中で体験されるべき民話は、白人の消費物となる。

アフリカでは、野生で暮らす動物たちは捕食関係にあり、民話においても食をめぐる闘争は自然な日常である。民話の中で、動物たちは食べ物を得るために知恵をしばり、体力で勝ろうとする。有名なトリックスターのアナンシ (Anansi / Annancy) <sup>9</sup>は弱いクモであるが、しばしば知恵に勝って強い相手を騙し、勝利する。不条理や暴力に満ちているように見える関係性の背後には、乏しい食や資源をめぐって優位に立とうとする根源的なエネルギーがあり、互いに殺したり、食べてしまったり、仕返しをしたり、半死半生の目にあわせたりしても、日常の食料獲得や食物連鎖の延長なのである。大きな動物は、しばしば小さい動物に知恵で負け、ときには煮られて食べられてしまうが、そこに生命を軽んじる遊びや残酷さの要素はない。

しかし、アメリカでは、闘争の質も変化する。キツネの仕掛けたタール人形にウサギの手足がくっついて捕まる“The Wonderful Tar-Baby Story”の話にも、捕まったウサギがキツネを騙して無事に生まれ故郷のイバラの茂みに戻る後日譚の“How Mr. Rabbit Was Too Sharp for Mr. Fox”にも、捕食の切実さはない。ウサギは、キツネの仕掛けたタール人形が挨拶せず、敬意も払わないという「社交性と礼儀」(Fray & Griffith [邦訳] 242) をめぐって怒り、殴りかかる。食欲ではなく、感情に関係する愚かしさの喜劇に変わるのである。

その闘争の中身も変わる。たとえば “How Mr. Rabbit Was Too Sharp for Mr. Fox” では、キツネが計略にかかり、「とんだりはねたり、泣いたりわめいたりしたが、ミスター・マンは、クマンバチの巣をやっつけるみたいに雨あられと叩きつづけた」 (“he juk en he jump, en he squeal en he squall, but Mr. Man, he shower down on'im he did, like fightin' a red was'nes” (Harris *Complete* 90) と語られる。この暴力は、白人農園主が黒人奴隷にふるっていた暴力を想起させる。アナンシがのびのびと食べ物を狩っていたアフリカの大地から、集約的に管理されたアメリカの農地に舞台を移すとき、*Uncle Remus* の動物たちのふるまいの残酷さや暴力も大農園の主人-奴隷の文脈に根ざすものになる。

リーマスの語る暴力を笑う白人の読者は minstrel show や奴隷へのリンチを見て笑う観客と同じである。黒人作家のラルフ・エリソン (Ralph Waldo Ellison, 1914-94) は、アメリカで黒人として生きることの現実を追求した。リーマスの話で語られる暴力を笑える観客は、エリソンの *Invisible Man* (1952) で、電流を通したカーペットにコインをばらまいて黒人の子どもに拾わせ、お金欲しさに感電する様子を笑う白人の旦那衆に似ている。あるいは、人種差別の激しいミシシッピ州出身の黒人作家リチャード・ライト (Richard Wright, 1908-1960) の自伝的な *Black Boy* (1945) に描かれる白人にも似ている。*Black Boy* の中で、作家の分身であるリチャード (Richard) 少年は、白人のファイトマネーに釣られた別の黒人少年と拳闘の対戦をさせられ、見世物になる。リチャード少年は戦いながら、観衆に怒りを感じているが、それが白人に伝わることはない。

ぼくたちは、突いたり、強打したり、唸ったり、唾を吐いたり、の



のしったり、叫んだり、出血したりしながら、激しく4ラウンドを戦った。騙されたことで感じる恥や怒りが拳にこもり、血が目の中に入ってきて、半分見えなくなった。ぼくたちが欺こうと思っていた男たちに感じる憎しみが、互いに繰り出すパンチにこめられた。

We fought four hard rounds, stabbing, slugging, grunting, spitting, cursing, crying, bleeding. The shame and anger we felt for having allowed ourselves to be duped crept into our blows and blood ran into our eyes, half blinding us. The hate we felt for the men whom we had tried to cheat went into the blows we threw at each other.

(Wright *Black Boy* Chapter12)

リーマスが白人に操られた狂言回しであると捉えれば、動物たちは、ショウの中で騒々しく愚かしく立ち振る舞い、お定まりの役割を演じる役者と見なせる。アフリカの大地にいたときは生き生きと動きまわっていた動物たちは、アメリカに移植されたときに生命力を奪われ、寒気がする騒ぎとともに困り込まれる。

結果的に、ハリスが工夫したリーマスという枠は、それ自体、奴隷に拳闘をさせるような抑圧となる。ハリスが買いとった話は消費され、固定性の中に置かれたウサギやキツネは、ミンストレル・ショウの枠の中で同じ場面を演じさせられている。ハリス自身は、話にミンストレル・ショウの要素があることを否定しているが、実際にウサギは、「タカにおじき / カラスにおじぎ / つま先の柔らかい紳士[ウサギ]を連れてこい / ジム・クロウ跳びをするために」(“Make a bow ter de Buzzard en / den ter de Crow, / Takes a limber-toe gemmun fer / ter jump Jim Crow”

Harris 92) とジム・クロウ風の踊りすら踊っている。リーマスという枠から語られた民話は、白人をおもしろがらせるかもしれないが、アフリカン・アメリカンの子どもを支えるものにはならない。

### iii. アフリカン・アメリカン児童文学の成立から発展まで

20世紀になると<sup>10</sup>、アフリカン・アメリカンの知識人の中で、白人の児童文学の中の固定観念を転覆し、アフリカン・アメリカンの子どもたちが自己投影できるような子ども像を提示して、自己肯定や成長を実感できる文学を与えたいという願いが高まっていった。アフリカン・アメリカン児童文学の揺籃期は黒人文化がニューヨークで花開いた1920年代のハーレム・ルネッサンス期で、Iで扱う雑誌 *The Brownies' Book* の発行がメルクマールとなった。作家や知識人は、血肉の通う等身大のアフリカン・アメリカンの子どもの自画像を提示しようとし、実際に雑誌が発行にこぎつけ、読まれたのである。

ハーレム・ルネッサンスの女性文学者として知られるジェシー・レッドモン・フォーセット (Jessie Redmon Fauset, 1882-1961) やネラ・ラーセン (Nella Larsen, 1891-1964) は *The Brownies' Book* の発行にも関わった。文学作品の *Plum Bun: A Novel without Moral* (Fauset, 1928) や *Passing* (Larsen, 1929) は、肌の色が白く生まれついたアフリカン・アメリカンの「パッシング (なりすまし)」<sup>11</sup>の問題を鋭く投げかけ、アメリカでアフリカン・アメリカンを生きることの難しさに迫るが、いずれの作家も、子ども向けには別の顔を見せる。

フォーセットは、子どもの動物園訪問を扱った詩の中で「そして思った『動物たちが不機嫌なのも当たり前』 / いらいらしていじわるでおか

しくなっているみたい / 動物たちが悲しいのももつともだ。 / もし私が檻に閉じこめられていたら / ひどくむしゃくしゃするはず / 動物たちはみんな遠くの国の子どもたちなのだ / あるいは、毎日自分たちを見物に来る子どもたちの友だちなのだ / きっと夜になると夢を見る 自由になっている自分の / 緑豊かな日陰のある森で」 (“And thought, “No wonder that they’re in blue, / and look so cross and mean and mad, / they have enough to make them sad. / If I were locked up in a cage, / I’d just be in an awful rage. / Perhaps they are children of far away, / or friends who watch for them every day; / Perhaps they dream at night, they’re free / In forests green and shadowy” Du Bois [1920] 86) と書き、動物愛護に寄せて、野生の場所から連れ去られて閉じ込められる動物をアフリカン・アメリカンの先祖の寓意にしている。

デンマーク人の母親と黒人の父親の間に生まれたラーセンは、父親を早く亡くし、母親が白人と再婚したために、当時としては特異な状況で育った。白人と黒人の間の葛藤は小説の *Passing* (1929) に現れているが、子ども向けの読み物の中では、母親のルーツに立ち返り、北欧の遊びや風物についてのエッセイを寄せ、自分の中の白人の血を肯定しているようである。

*The Brownies’ Book* が経済的理由により 2 年間で廃刊になると、アフリカン・アメリカン児童文学の火は一度、ほとんど消える。ハーレム・ルネッサンス期に高校教師や図書館員の仕事をし、執筆を始めたアーナ・ボンタン (Arna Bontemps, 1902-73) <sup>12</sup>は、中編 *Bubber Goes to Heaven* (1998, 原題: *Bubber Joins the Band*, 1932-33?) を 1932 年ごろに執筆したものの、生前には出版されなかった。この作品の主人公は黒人少年のババー (Bubber) で、親戚と一緒に蛋白源のアライグマを

狩りに行ったときに木から落ち、昏睡状態で寝ている間に天国を訪れる。天国は食べ物がふんだんで空を飛べる翼が生えるという場所以上のものではなく、天使のシスター・エスター（**Sister Esther**）は冷ややかで、学習発表会ではババーは暗記に苦勞する。飛翔に失敗して地上に戻ってくる。愉快的な天国を描ききれなかったボンタンの迷いが見え隠れし、尊厳を持たず、人種的困難に突き当たらざるを得ないという失望と悲しげな子どものイメージが合体する。天国を描いたはずなのに天国が示せない。ババーは自己の内面を深めるような往還を経験したわけではなく、平面的な天国に、脳震盪で寝込んでいる間のうたかたの夢の中で行き来するだけである<sup>13</sup>。

*Bubber*と同じ時期の1932年にボンタンが出版した作品に、Ⅲ・1・iで扱う、ラングストン・ヒューズと共著の *Popo and Fifina* があり、アフリカン・アメリカン初の児童文学作品と見なされている。だが、*Popo and Fifina* の明るさと穏やかさを、ニューヨークのアフリカン・アメリカンの暮らしから想像するのは難しく、舞台をハイチにしなければ生まれなかった。その制約は、*Bubber* が未出版に終わった閉塞感と同じところに由来するといえるだろう。

さらに、ボンタンの同時期中編 *Sad-Faced Boy* (Bontemps, 1937) にももの悲しさがつきまとう。楽器が得意なアラバマ州の三兄弟が叔父を訪ねてハーレムに行く話であるが、少年たちの滞在は必ずしもうまくいかず、かろうじて町とつながりを持てたのは音楽の力が大きい

(Martin “Performing” Web)。3人は強盗に遭い、新品の靴を脱がされて奪われるという屈辱を受けて都会を去る。

時代の暗い空気の中で、1950年代に公民権運動が再び盛り上がるまで、アフリカン・アメリカン児童文学は、個別的な階層上昇を散発的に書く

にとどまった。ジェシー・ジャクソン (Jesse Jackson, 1908-83) の *Call Me Charlie* (1945) は、父親が転職して黒人地区のボトムス (Bottoms) から白人地区のハイツ (Heights) に転入し、文字通り上昇を経験する少年チャーリー (Charlie) の物語である。本来、「白人たちにはけっして口答えするものじゃないよ、たとえおまえが正しくて、白人たちが絶対に間違っているとしてもだよ」(Guy *Children* [邦訳] 156) と教え込まれるのが当たり前の時代にあって、チャーリーは自分を「黒んぼ」(Sambo) と呼んだ白人少年トム (Tom) に、憶することなく「ぼくの名前はチャールズ。チャールズ・モスだ」(“My name is Charles. Charles Moss” Jackson *Call* 7) といい、親しくなる。偏見のないトムの両親や、チャーリーの父親の雇い主であるカニングガム (Cunningham) 医師らがチャーリーを助け、例外的な援助を与える。

公民権運動が盛り上がる前の時代に、アフリカン・アメリカン児童文学は軽々しい成功譚は示せず、一度幸運をつかんだなら、そこから滑り落ちまいとする個人の努力に現実味がある。チャーリーの例外的な階層上昇は、白人の求めるものに合わせ、白人の場所に定住しようとする点で、黒人霊歌と白人の大衆音楽を融合させてマーケットに切り込み、音楽業界に定住したレイ・チャールズ (Ray Charles Robinson, 1930-2004) やサム・クック (Sam Cooke, 1931-64) らの音楽戦略にも通じるかもしれない。チャーリーはその後のシリーズで、陸上で頭角を現し、才能を示すことで認められる。

1960年代以降、公民権運動が再び盛り上がっていくと、自らの子ども時代を振り返って、同時代の子どもたちによりよいロール・モデルや自信を与えたいというアフリカン・アメリカン作家の願いも強まっていった。

やがて、小さいながらもマーケットができ、ヒューズやボンタンの作品が引き続き読まれる一方、ヴァージニア・ハミルトン(Virginia Hamilton, 1936-2002)、ミルドレッド・テイラー (Mildred Taylor, 1943-)、ジュリアス・レスター (Julius Lester, 1939-)、ウォルター・ディーン・マイヤーズ (Walter Dean Myers, 1937-2014)、アリス・チルドレス (Alice Childress, 1912-94)、ローザ・ギー (Rosa Guy, 1922-2012) などの作家が台頭し、「何を書くか」から「どのように書くか」へ、アフリカン・アメリカン児童文学は豊穡化していく。1970年には、アメリカ図書館協会 (American Library Association; ALA) の後押しを受けて、その年に活躍したアフリカン・アメリカン作家を表彰するコレッタ・スコット・キング賞<sup>14</sup> (Coretta Scott King Award) が創設された。初代受賞者には、*Martin Luther King, Jr.: Man of Peace* (1969) を書いたリリー・パターソン (Lillie Patterson, 1917-99) が選ばれ、1974年からは作家賞のほかに画家賞も設けられて拡充している<sup>15</sup>。

広範で大衆的な読者の獲得という点で、ジョン・H・ジョンソン (John H. Johnson, 1918-2005) は、1973年にジョンソン出版社 (Johnson Publishing Company) を設立し、雑誌 *Ebony Jr!* を創刊した。親雑誌の *Ebony!* は1945年創刊の総合誌で、アフリカン・アメリカンがいかに幸福に生きるかに焦点を当て、アフリカン・アメリカンの有名人へのインタビューから人種差別問題までさまざまな切り口を持つ。マイケル・ジャクソン (Michael Jackson, 1958-2009) やマライア・キャリー (Mariah Carey, 1970-) らのアフリカン・アメリカン著名人を積極的に表紙に起用し、創刊時の5万部から、2011年には120万部以上を売り上げている。若者向けの *Ebony Jr!* は1985年に一度休刊されたものの、2007年にオンライン上で復刊し、子ども向けの短編やクイズを掲載して

いる<sup>16</sup>。

こうした発展は、「人種のるつぼ」(“the melting pot” Zangwill) 意識の形成や、文化的覚醒が進んでいく過程とも並行する。1970年代以降は、奴隷制と人種差別に付随する残酷性から目をそむけないアメリカ史を理解させようという社会意識の高まりも、アフリカン・アメリカン児童文学の大きな推進力になった。1980年代以後は、パトリシア・マキザック (Patricia McKissack, 1944-)、アンジェラ・ジョンソン (Angela Johnson, 1961-)、ニッキ・グライムズ (Nikki Grimes, 1950-) らの次世代の作家が現れた。新しい作品の中でも、闘争と勝利の記憶である公民権運動はしばしば意識され、クリストファー・ポール・カーティス (Christopher Paul Curtis, 1953-) の *The Watsons Go to Birmingham-1963* (1995) は、公民権運動のさなかに起きた1963年のバーミングガム教会爆破事件を背景にし、リタ・ウィリアムズ＝ガルシア (Rita Williams-Garcia, 1957-) の *One Crazy Summer* (2010) も、背景には1960年代の公民権運動の空気がある。

現代では、2017年のメイ・ヒル・アーバスノット・レクチャー賞 (May Hill Arbuthnot Honor Lecture Award) を受賞したジャクリーン・ウッドソン (Jacqueline Woodson, 1963-) は最重要作家の一人である。両親を亡くしたアフリカン・アメリカンの三兄弟の生活を描く *Miracle's Boy's* (2000) のほか、*Last Summer with Maizon* (1990)、*Maizon at Blue Hill* (1992)、*Between Madison and Palmetto* (1993) の3部作は、アフリカン・アメリカンのマーガレット (Margaret) とメイゾン (Maizon) の親友同士の関係を描く。メイゾンは父親の死により、マーガレットとの学校生活を離れ、ニューヨークを出てコネティカット州の寄宿学校に入る。白人が大多数を占める学校で感じる居心地の悪さを乗

り越え、ブルックリンでマーガレットに再会すると、2人の関係は昔のようではなくなっている。少女の友情という普遍的な主題であるが、その背景には、アフリカン・アメリカンの多いブルックリン地区からの転出や、単なる転入生であるだけでなく少数者にならざるを得ない苦勞、さらに、ニューヨークに戻ってきてからは、白人の少女を交えた新しい友情を展開し、人種をめぐる環境が若者の自己形成にいかにか大きな影響を与えるかを掘り下げている。

## 2. アフリカン・アメリカン児童文学への接近

### i. 文学と児童文学の相違

アフリカン・アメリカン児童文学の通史は、おおむね以上のように俯瞰できるが、その深層では、どのようなダイナミクスが働いているのだろうか。アフリカン・アメリカン児童文学の内的な質は、どのように評価できるだろうか。

読者対象が限定される点で、児童文学は文学とは異なる。児童文学は、文学から大きな影響を受けつつも、その批評方法をそのままあてはめられない。「『子どもとは何か』を考え続けるその自意識のなかにこそ児童文学の独自性がある」（横田順子 186）とするなら、アフリカン・アメリカンの子どもという読者対象について考え続けるアフリカン・アメリカン児童文学は、その自意識の中で、大人向けの文学では描きにくい楽天性や希望をあえて構築し、冷笑性や痛みを引きずられる態度を後退させているように見える。

アフリカン・アメリカン文学と児童文学は、第一に、モチーフに対す



る見解が異なる。たとえば、文学では、アフリカはアンビバレントな場所である。ラングストン・ヒューズがイタリアのエチオピア侵攻（第二次エチオピア戦争, 1935-36）に反対して“Call of Ethiopia”（1935）から始まる三部構成の詩でイタリアを批判し（Callahan 174）、カウンティ・カレンが“Heritage”の詩で「銅の太陽 あるいは 緋色の海 / ジャングルの星 あるいは ジャングルの道」（“Copper sun or scarlet sea, / Jungle star or jungle track” Cullen *Color* 24）と書いて、アフリカに精神的な憧れを投影している一方で、リチャード・ライトは、*Black Power*（1954）の中でアフリカが物理的にも精神的にもアメリカから隔たっていると感じる。奴隷として捕えられた苦い過去や「中間航路」（Middle Passage）の恐怖とアフリカを結びつける場合もある。トニ・モリスン（Toni Morrison, 1931-）の *The Bluest Eye*（1970）では、縮れた毛や黒い肌が呪わしさの刻印となり<sup>17</sup>、*Beloved*（1987）では、「中間航路」や奴隷労働における死者を象徴する少女ピラヴド（Beloved）が現れる。アリス・ウォーカー（Alice Walker, 1944-）は、家父長意識の強いアフリカを批判し、*Possessing the Secret of Joy*（1992）で、アフリカで強制的に行われている女性器削除の習慣を断罪している。

他方で児童文学は、アフリカをより素朴に、ルーツの受容と結びつけることができる。*Popo and Fifina*（1932）は素朴な家庭物語の舞台にハイチを選んでいる。Ⅲ - 1 - ii で扱う“All the God’s Chillun Had Wings”の民話は、厳しい労働と懲罰のさなかに飛び方を思い出し、翼を生やして大農園からアフリカに飛び帰る奴隷の軌跡を称えている。

第二に、文学と児童文学は、表現の制約の度合いが異なる。文学では、アフリカン・アメリカンの男性作家がアメリカ社会で去勢され、男としての尊厳を保てない苦渋と無力感を都会や農村での生活の中に表現し、

時に女性に暴力をふるうことで偽りの力を誇示することもある。女性作家は、ジェンダー・セクシュアリティ・黒い肌という三重の抑圧を見つめ、性暴力や夫からの抑圧、出産や、産んだ子どもが奴隷とされる悲哀など、児童文学で扱いにくいテーマの中に本質的な力強さがある。モリスンの *Beloved* では、奴隷女性のセテ (Sethe) が妊娠中に逃亡し、川岸で貧乏白人<sup>フェア・ホワイト</sup>の少女の助けを借りて出産するという場面もあり、嬰兒を抱えて逃げるセテの足は肉の塊になり、肉体的な痛みが謎めいた亡霊ビラウドの精神的な痛みと重なる。

極端な苦痛なしには奴隷の経験は描けず、その精神的・肉体的な苦痛をつまびらかにする点で、モリスンを旗手とするアフリカン・アメリカン女性文学には凄味がある。しかし、児童文学の読者対象の問題を考えると、こうした底なしの絶望や物理的な痛苦の詳細は除去されざるを得ない。奴隷の逃亡というテーマひとつ取っても、暴力で迫る追走や、追手につかまった逃亡奴隷への残酷な刑やリンチの詳細も避けられなければならない、迫力を移植しにくい。

付随して、スラングや黒人英語を多用する言語表現や、麻薬や暴力と隣り合わせの緊張感も、子どもを対象とするときに吟味される。リンチや殺害の詳細は省かれ、写實的に暴力が描かれることはない。もとは絶望的な欠乏の中から生まれた音楽文化や、極端な差別や貧困、さらに表現としての猥雑な言葉やフレーズも、子どもの本では削除される。実際に若者が視聴しているラップやレゲエの、性や暴力や麻薬に関する仔細な内容や、若者が好んで使う挑発的な言葉遣いも、なぞる身振りをしていても、実際の表現は穏やかになると考えられる。

第三に、文学と児童文学は、同じ用語を用いても、その意味するところが異なる場合がある。「抵抗」はそのひとつである。アフリカン・アメ

リカン文学は、自伝、死者の声の利用、民話や神話の援用、女性の声などその手法を様々に変えながら、一貫して同じ、白人支配への可視的・不可視的な抵抗をおこなっているとされる (McDowell “Preface” n.pag.)。この「抵抗」は、しばしば無残な敗北やパッシング (白人へのなりすまし) まで含み、成人の社会において黒い肌の悲哀や、その悲惨さを笑い飛ばすようなユーモア、あるいは深い諦めをも伴い、複雑で偽装的ですらある。

*The Oxford Encyclopedia of Children’s Literature* によるとアフリカン・アメリカン児童文学も「抵抗の文学」 (“a literature of protest” 30) とされる。だが、無気力や報復的暴力とも結びつく文学の「抵抗」と異なり、児童文学の「抵抗」は、アフリカン・アメリカンの子ども読者の自尊感情を育てようという試みと同義であり、立体的な自画像を与え、精神的に躍動させ、自信を与えることが目標となる (Kline 11-12)。白人の子どもしか登場しない児童文学への抵抗という点でアフリカン・アメリカンを好ましく描くため敗北や無力感を避け、一般文学にはない希望を示しうるのではないだろうか。

第四に、アフリカン・アメリカン文学や文化の中で重要な概念が、児童文学であるゆえに機能しない場合がある。ヘンリー・ルイス・ゲイツ・ジュニア (Henry Louis Gates Jr.) が提唱した「もの騙り」 (“Signify” *Signifying* [邦訳]84) は「茶化す／揶揄する／模倣する」という意味を持つ文学用語で、黒人の行為の背後にある高度な反意的メッセージを示す。奴隷がのろのろと仕事をして農園主に損害を与えることは、相手に気づかせることなく抵抗するという意味で身体的な抵抗の「もの騙り」である。愚かなふるまいをしたり、言葉が分からないふりをしたりすることで、権力がふるわれるのを巧妙に避け、権力が否定的に捉える怠惰

や愚鈍さも武器になる。

だが、解釈の問題と裏表になる「もの騙り」を児童文学に読み取るとは難しい。*Huckleberry Finn* のジムは、愚かしく頑迷な奴隷であることを装い、「アフリカ民話でもアフリカン・アメリカン民話でも『もの騙り』と深く結びつけられているトリックスターとしてもふるまって」

(“He was also behaving as a ‘trickster,’ a figure intimately linked with ‘signifying’ in both African and African-American folklore”

Fishkin 65) いるとされる。だが、*Huckleberry Finn* を児童文学の範疇で考えるなら、彼が「信頼できない語り手」(“unreliable [fallible] narrator” 川口&岡本 147) であることを見抜くのは難しい。サボターージュが白人への抵抗であったり、愚かなふりをすることで罰を免れたりするような裏を読む行動は児童文学にはなじまず、ある登場人物が「怠け者である」と地の文で語られれば、本当に怠け者である。子ども読者がそこに抵抗の意味を読み取るとは困難である。児童文学は、直接的で平易な語彙を用い、ストーリーの流れで子ども読者にもうひとつの人生を経験させる文学であるので、現実をからかったり、別な言葉に偽装して本意を伝えたりする手法とは相性が悪い。

主題、表現の点や書き方、モチーフの点で、アフリカン・アメリカン児童文学は、文学と同じ方法で論じることは難しい。同じ土壌から芽生えつつ、読者対象というフィルターを通さねばならない児童文学は、児童文学のための方法で論じる必要がある。

## ii. 「エンパワメント」と文化

児童文学とは何かという問いに対し、これまで多くの批評家や研究者

が分析を試みてきた。フレッド・イングリス(Fred Inglis)は *The Promise of Happiness* (1981) の中で、*Winnie the Pooh* (A. A. Milne, 1926) や *Swallows and Amazons* (Arthur Ransome, 1930) を例に子どもに「自信と未来への希望」( [邦訳] 297) を与える文学が児童文学であると論じ、「小説は子どもたちに向かって幸福と、笑いの確実性を約束するものでなければならない」(482) と述べている。シーラ・イーゴフ (Sheila Egoff) は、*Worlds Within* (1988) でファンタジーが「読者を非現実というネバーランドに留めることを目的としているのではなく、現実に戻ったときに世界や読者自身について新たな見方ができることをめざしている」([邦訳]44) と述べ、読者の変化の促進が児童文学の特質であると考えている。ピーター・ホリンデイル (Peter Hollindale) は、*Signs of Childness in Children's Literature* (1997) の中で、児童文学について、想像力にあふれ、様々なことを試そうとする意欲があり、相互交流を求め、興味関心が移ろいやすい子どもを読者として想像し、大人である作家がやりとりをおこなう文学であると定義し (23-43)、大人の作家から子ども読者への贈与と見なしている。

これらに並ぶ特質として、本論では「エンパワメント」を考える。児童文学は、子どもに権力を与えることはできないが、児童文学を通し、子どもに、自己決定力、主体性、自己肯定力など、自助努力と能動性に結びつく「力」を引き出せるのではないだろうか。

「エンパワメント」とはもともと、臨床心理学者のバーバラ・ブライアント・ソロモン (Barbara Bryant Solomon) が *Black Empowerment: Social Work in Oppressed Community* (1976) の中で挙げた言葉で、1980年代の女性運動でも用いられたことがある。*Black Empowerment* は、人種差別のために無力であることを感じているアフリカン・アメリ

カンのクライアントに「エンパワメント」を与えるようソーシャルワーカーに助言する心理学書で、ソロモンによると、「ソーシャルワーカーがクライアントやクライアントをとりまく制度とともに一連のアクティビティにとりくみ、烙印を押された集団の一員という状態に基づいたネガティブな評価から生み出されてきた無力感を軽減することを目指す過程」(“a process whereby the social worker engages in a set of activities with the client or the client system that aim to reduce the powerlessness that has been created by negative valuations based on membership on a stigmatized group” Solomon 19) を通じて「エンパワメント」が実現される。臨床心理士は、グループワークや一対一のカウンセリングを通じて、個人が意思決定力を持てるように援助する必要がある。

本論では、この「エンパワメント」が国や地域や民族集団などの文化に依拠していると考えられる。共同体が願う未来が投影される児童文学の源泉にあるのは、その国や民族集団の文化である。アフリカン・アメリカンの子どもへの「エンパワメント」であるアフリカン・アメリカン児童文学は、アフリカン・アメリカンという集団の持つ歴史や過去や文化を源にしなくてはならない。

「文化」は、『大辞泉』によると「人間の生活様式の全体。人類がみずからの手で築き上げてきた有形・無形の成果の総体。それぞれの民族・地域・社会に固有の文化があり、学習によって伝習されるとともに、相互の交流によって発展してきた」と定義されているが、アフリカン・アメリカン文化は、「人間がみずからの手で築き上げ」という点で、きわだって人間的な熱情と切迫感を持つ。シドニー・W・ミンツ (Sidney W. Mintz) は、南北アメリカとカリブ海域全体を包括した文化を捉えて、

人間として生きのびてみせたこと、それ自体が抵抗だった。生きのびることそのものが抵抗だった。そのためには、創造力と偉大な人間性が必要とされた。その二つを土台にして、奴隷とよばれた非自由人は文化をつくった。それはアフリカの文化を直接に移植したものではなかったが、アフリカの伝統なくしては『新世界』に生まれることはなかったものだ。

(Mintz [邦訳] 3)

と述べている。

文化には本来、複数の側面があり、アフリカン・アメリカン文化にも、粗野で、子どもには向かない冗談や上品ではない表現がある。言葉も習慣も異なるアフリカの諸部族が奴隷船に詰め込まれて運ばれた「中間航路」から生まれ、新大陸で生きのびるという点で、正統性や古典を持たないアフリカン・アメリカン文化は、根を下ろさざるを得なかった場所で同じ境遇の者同士をつなぐための言葉やしぐさの積み重なりを核にして培われた。最底辺の状況に置かれた人々の文化は、ときに野卑であり、暴力性や倫理の欠如や裏切りをあらわにする場合もある。

他方で、ハーレム・ルネッサンス期の女性作家ゾラ・ニール・ハーストン (Zola Neale Hurston, 1891-1960) は、アフリカン・アメリカンの悲哀を徹底的に描きつつ、エッセイでは「私は悲劇的に有色なのではない」(“I am not tragically colored” Walker, S. 153) と宣言し、「彼女は彼女の属する民族の根源的な健全さを疑ったことがない」(藤本 6) とされる。アフリカン・アメリカン文化の土台には、したたかに生きのびる集合的な前進力や態度があり、「子ども」といういわば共同体の希望の

対象者を媒介にするとき、文化から、よりポジティブな「創造力と偉大な人間性」が引き出され、抑圧された環境でも生きのびようとさせる無二の強さを前景化する。「エンパワメント」は、文化のこのポジティブな面を母胎として生まれる。

これまでのアフリカン・アメリカン児童文学についての議論において、たとえば、*This Land is Our Land* (Helbig and Perkins, 1994) では、「どれほど共感的に描かれていたとしても、固定観念で書かれた登場人物は、読み手の感情を揺さぶりこそすれ真の理解は生まない」(“However sympathetically portrayed, stereotyped characters may engage the reader’s emotions but do not promote real understanding” Helbig and Perkins “Preface” n.pag.) ことを出発点に、固定観念に拠らない人物造形が重視される。ルディン・シムズ・ビショップは、1980年代以降のアフリカン・アメリカン児童文学について、アフリカン・アメリカンの子どもに、自分と同じ主人公が登場していると思わせる本を与える意義や、アフリカン・アメリカンの子どもを文学的に覚醒させ、よい読者にする必要性を説き、「こうした文学作品は子どもに肯定的な自己イメージを示し、アフリカン・アメリカンのコミュニティの中で共有されている価値観のうちいくらかを発信し、子どもが『背筋を伸ばして世間を歩く』方法を学ぶ手助けをする」(“such literature will reflect back to the children the positive images of themselves, transmit some of the shared values of the African American community, and help them learn how to ‘walk tall’ in the world” Bishop “Walk Tall” 563) と締めくくっている。アフリカン・アメリカンの子どもに自己肯定感を与え、視野を広げることをアフリカン・アメリカン児童文学の評価点にする態度は、「エンパワメント」に先行するものといえるだろう。



ただし、本論で試みるのは、単に「固定観念で描かれない」「肯定的な自己イメージを示す」というだけでなく、そのおおもとに、アフリカン・アメリカン文化からの援助があつてはじめて「エンパワメント」になっているという指摘である。奴隷制度にさかのぼる文化に軸足を置き、痛苦の歴史があるが、そこから形成されてきた文化から、児童文学はポジティブなイメージやモチーフを引き出すことができるのではないだろうか。

### iii. 複層的な発展 - 可視化、受容、接続

では、アフリカン・アメリカン文化に依拠して生み出される「エンパワメント」の内部にはどのような質があるのだろうか。本論では、「可視化」「受容」「接続」の3つの要素を挙げて考えたい。

「可視化」は、社会に存在しているにもかかわらず、一人の人間として認識してもらいにくく、不可視的<sup>18</sup>な状態に留め置かれているアフリカン・アメリカンの子どもに光を当て、社会の中での存在感を示そうとする意思である。目に見えない存在から目に見える存在にさせるために、児童文学は白人の大人から見えにくいアフリカン・アメリカンの子どもを対象とし、アフリカン・アメリカンの子どもを描き、自己肯定感を持たせることでエンパワメントを与えようとする。

「受容」は、アイデンティティを肯定的に再獲得させようとする力で、子どもの主体性と結びつく。荒このみは『『アメリカの黒人』にとってのアフリカは現実に帰り着くところというよりは、精神の領域における故郷なのである』（『アフリカン・アメリカンの文学』116）と述べ、マヤ・アンジェロウ（Maya Angelou, 1928-2014）のアフリカ体験を引きなが

ら『アメリカの黒人』の祖先は自分の意思で生まれ故郷を離れたのではないがゆえに、その子孫である現代の黒人たちはアフリカ大陸への癒し難い渴望を抱いている。他者によって強制的に連れてこられたがために先祖の国を求める意思がそこには働いている」(123)と分析している。児童文学が子どもの自己受容や自己発見を大きな主題と見なすとき、奴隷の痛苦をあえて看過し、アフリカや西インド諸島を憧憬の対象にすることが可能である。アフリカへの拒否感は成人以降に生まれる感情であり、アフリカ系の子どもがアフリカを見るとき、そこにある色彩やパフォーマンスや音楽や表現の豊かさを「受容」させるところから内面の充足を導きうる。

音楽文化に依拠する「接続」は、アフリカン・アメリカンの言語や音楽をメディアとして、様々な人が協働する関係性への志向を指す。たとえば、黒人霊歌は、源流となる被抑圧者の経験とアメリカの教育思想や宗教が合致し、アフリカの響きを保ちながらアメリカで白人のコードと混淆しながら変容し、受容され、展開してきた。南北戦争期、奴隷制度廃止論者で超越主義者のトーマス・ウェントウォース・ヒギンソン

(Thomas Wentworth Higginson, 1823-1911)<sup>19</sup>は、黒人部隊の兵士の歌の歌詞や、「シャウト」(手拍子や足拍子を取り、歌いながら輪になって動いていく動作)の様子を書きとめ、戦後の1867年6月に *The Atlantic Monthly* 紙に37編を報告した(Higginson Web)。1865年にテネシー州に設立されたフィスク黒人学校(Fisk Free Colored School, 後のフィスク大学[Fisk University])の白人音楽教師ジョージ・L・ホワイト(George L. White, 1838-94)は黒人合唱団のフィスク・ジュビリー・シンガーズ(Fisk Jubilee Singers)を指導し、コンサートツアーをおこなう中で「奴隷歌」(“slave songs”)のレパートリーを増やし、

大衆に訴求した（バーダマン 115-7）。発見され、洗練された黒人霊歌は、数十年の間にアメリカの大衆音楽に融解し、ジャズやブルースに展開した。

ジャズは、19世紀に、ニューオリンズのクレオールたちの持つヨーロッパ的雰囲気とアフリカン・アメリカンの「定型崩し」が融合して自然発生的に誕生したとされ、固定観念にしばられずにピアノやトロンボーンを自由に操って演奏し、アフリカ風のリズムに西洋の音色を重ね、シカゴやニューヨークでジャンルとして大きく発展して、ライブや録音媒体で知られるようになった。スコット・フィッツジェラルド（Francis Scott Key Fitzgerald, 1896-1940）が *Tales of the Jazz Age*（1922）で享乐的な都市文化の時代を「ジャズ・エイジ」（“Jazz Age”）と呼んだように、ジャズの退廃感や逸脱性はアメリカの都市文化の中で増幅され、音楽場面に不可欠のものとなった。

ジャズから発展したブルースは、アミリ・バラカ（Amiri Baraka, 1934-2014）によると、西欧音楽から逸脱した音階に特徴がある。当初は宗教的な主題も多かったブルースは、しだいに恋愛や金銭など世俗の事柄も扱いはじめ、20世紀以降、アフリカン・アメリカンの生活や立場に依拠した大衆音楽に発展した。「西アフリカの音階と西洋音階、奴隷制と賃金労働、個人的感情の発露とコマーシャリズムといった、あらゆる対立のあいだで宙吊りにされながら、しかも同時にそれ以後のあらゆる音楽のルーツとみなされ」（鈴木雅雄 401）、アメリカの大衆音楽に及ぼした影響はきわめて大きい。

ブルースは、ミシシッピ川流域のミシシッピ・デルタ・ブルース、西海岸に広がったテキサス・ブルース、アイルランド系のバラッドと黒人音楽が融合したアパラチア山脈沿いのブルースなど、地域による特徴を

生みながら広がった。特にミシシッピ・デルタ・ブルースは、黒人音楽にビジネスの可能性を見出したレコード会社によって売り出され、1926年にフレディ・スプルエル (Freddie Spruell, 1893-1956) がシカゴで初めて“Milk Cow Blues”の録音をおこない、トミー・ジョンソン (Tommy Johnson, 1896-1956) やビッグ・ジョー・ウィリアムズ (Big Joe Williams, 1903-1982) がライブやレコード制作で後に続いた。

黒人霊歌、ジャズ、ブルースのいずれもアフリカ音楽の「<sup>アンティフォナル</sup>交唱的歌唱技術」に関係する。テーマを歌うリーダーと、それに応えるコーラスのやりとりにより、参加者が続けたいだけ即興で続けることができる。この唱法から派生した「コール・アンド・レスポンス」<sup>20</sup>はアフリカン・アメリカン音楽の最も分かりやすい特長である。ジャズは、「構造それ自体が、最初のテーマについての即興的応答あるいはコメントを好きなだけメロディとして提示」できる (Jones [邦訳] 60)。ブルースも即興とセッションを大きな柱とし、楽理的には I コード (トニック)、IV コード (サブドミナント)、V コード (ドミナント) を基本に、12 小節コードの中で「I I または IV I I / IV IV I I / V IV I I」と展開する気軽さで、演奏者は延々とセッションできる。本論では、こうした音楽性に「接続」という特徴を見出し、同じ欠落を抱える者同士のセッションや、協働的な言葉による接続の場が児童文学の中でも形成されていることを考える。

アフリカン・アメリカンは、周縁や他者として留め置かれただけでなく、奴隷というサバルタンの状況を経由し、なおかつ、奴隷制時代において自由黒人と奴隷が併存していた矛盾や、ジム・クロー法による意図的な選挙制度の不利益など、アメリカという近代国家における制度内の抑圧と感情的憎悪を引き受けてきた。沈黙を強いられ、あるいは、「もの

騙る」ことでしか表現できず、文字や言葉ではなく歌や踊りに感情や思考を込めざるをえなかった歴史を踏まえてこそ、アフリカン・アメリカンの文化は切実に、社会の中で可視化され、アフリカ系のルーツを誇り、アフリカに帰属する音楽やパフォーマンスを通じて、同じ文化指向性を持つ人とつながりあいたいという願いを強める。

個々の作品は、「可視化」「受容」「接続」のどこかひとつにカテゴライズされるものではなく、ひとつひとつの中に、この3つの要素が含まれる場合もある。この複数性もまた、文化に依拠するときに見えるアフリカン・アメリカン児童文学のあり方である。全体として、現在の最先端の状況をつねに過去から続いてきた一定の運動の努力の成果とみなし、不足していたものがだんだん増大するという直線的な発展史ではなく、1920年代からすでにひとつの完成形がありながら、行きつ戻りつして社会変化とともに広がりを見せてきたことが明らかになる。

本論で分析する作家の中では、インターレイシャルなヴァージニア・ハミルトンの作品が複数取り上げられている。ハミルトンは、奴隷制時代には自由州の入り口であったオハイオ州で生まれ、地縁血縁に囲まれて育った。ニューヨークのニュー・スクール・フォー・ソーシャル・リサーチ (New School For Social Research) で学んだときに、ユダヤ系アメリカ人である詩人のアーノルド・エイドフ (Arnold Adoff, 1935-) と出会い、結婚した。もともとは一般文学の作家志望であったが、曾祖父が逃亡奴隷であった家族史に影響を受け、アフリカン・アメリカンの歴史を現代の文脈で子ども向けに書き直すことを試みて、児童文学という形式が自分に一番よくあてはまることを発見した。

彼女は、白人を排除するのではなく、多様な民族集団を「平行文化」 (“Parallel Culture” Hamilton *Speeches* 218) と名づけ、様々な困

難な状況におかれた「平行文化」の子どもを描きながら、その一人一人に、人種や民族集団を超越した普遍性を持たせ、高く評価されている。相対的な視点を持ち、象徴を多用しながら、アフリカン・アメリカンの奴隷制と人種差別のサバイバルを肯定的に捉え直している点で、文化に依拠した「エンパワメント」としてのアフリカン・アメリカン児童文学の質を持ち合わせているため、結果的に多くの作品を論じることとなった。ハミルトンは、アフリカン・アメリカン児童文学についてのひとつの解答を、デビュー時の1960年代にすでに持っていたのかもしれない。

本論は「はじめに」と「おわりに」を除き、4章で構成されている。

I章では、エンパワメントの嚆矢となる1920年代の雑誌 *The Brownies' Book* が「可視性」「受容」「接続」をすべて包含した文学活動をおこなって、アフリカン・アメリカン児童文学の土台を形成したことを確認する。

II章からIV章は、それぞれの特徴が20世紀のアフリカン・アメリカン児童文学でどのように展開したのかを検討する。最後に、アフリカン・アメリカン児童文学は、文化的源泉に根つつ、アメリカ児童文学の境界を広げる多様性と混沌の最前線となっていると結論づける。

## I エンパワメントの土台 - *The Brownies' Book*

I 章では、1920年代に発刊された雑誌 *The Brownies' Book* の意義を考える。これは、1909年に全米黒人地位向上協会 (National Association for the Advancement of Colored People; NAACP) による月刊誌で、編集長の W.E.B.デュボイスの知的背景も含め、この雑誌の理念がアフリカン・アメリカン児童文学の方向性を決定づけた。*The Brownies' Book* は、アフリカン・アメリカンの子どもを可視化し、彼らが自分たちのルーツが受容できるように促すアフリカや西インド諸島の記事を掲載し、大西洋の両岸に広がる文化的ダイナミズムを受けて、アフリカン・アメリカンを立体的に好ましく描く表紙絵や挿絵を用いた。すなわち、アフリカン・アメリカン児童文学の「エンパワメント」の土台を形成した。

### 1. *The Brownies' Book* の概要

#### i. 雑誌の誕生

アフリカン・アメリカンによる子どものための本格的なテキストが書かれるようになったのは、1920年代のハーレム・ルネッサンス期である (Harris “African American Children’s Literature” 540)。頻発する人種暴動を契機に、1909年に黒人問題を考える全米黒人地位向上協会 (NAACP) が結成され、そこに加わった2名のアフリカン・アメリカンのうちの一人が思想家の W・E・B・デュボイスである。デュボイスは、言論面で黒人運動を牽引し、月刊機関誌の *The Crisis* の編集長を務めた。*The Crisis* は、人種平等や黒人へのリンチ反対を訴えるエッセイや書評、

詩から構成され、現在も発行が続けられている。*The Crisis* の別冊として 1912 年から年に 1 冊刊行された子ども向けの別冊を月刊誌として独立させたのが *The Brownies' Book* で、創刊号の宣伝が *The Crisis* の 1919 年 12 月号に掲載されている。

デュボイスは、白人の権威と黒人の現実の間でバランスをとりながら、白人の語法で黒人のための主張をおこない、「アフリカの歴史、文化、芸術への関心を高めること、合衆国における人種的平等を求める黒人の闘争とほかの地域でのヨーロッパの植民地支配に対する黒人の闘争の結合を強調することなども訴えた」(Segal [邦訳] 441)。彼が学生時代を過ごした時期のハーバード大学では、チャールズ・サンダース・パーズ (Charles Sanders Peirce, 1839-1914) やウィリアム・ジェイムズ (William James, 1842-1910) らが、様々な背景を持つ移民が構成する社会で「最後のもの、結実、帰結、事実に向かおうとする態度」(James [邦訳] 62) を伴うプラグマティズムが必要であると論じていた。

ジョン・デューイ (John Dewey, 1859-1952) はプラグマティズムと教育を結びつけ、創造的知性や実験的知性を教えることにより、環境に適応していけるようになるという教育論を提唱した。デュボイスも、その思想を理解し、それをいかにアフリカン・アメリカンへの啓蒙に用いていけるかを模索していたようである。

*The Brownies' Book* がメルクマールとなりえたのは、同時代で現物が残った希少性に加え、稀な知的達成をなしえ、進歩的な考えを持ちつつ、アメリカの思想的背景に慎重に与したデュボイスの個人的な知性の力が大きい。「(1) 体系を排すること、(2) 眼前の事実を重視すること、(3) 物事の理由を権威にたよらずに独力で探究し、結果をめざして前進すること、(4) 定式をとおして物事の本質をみぬくこと」(魚津 11-12) と



いうプラグマティズムを通じて、デュボイスはアフリカン・アメリカンの子どもを見つめた。デュボイスの考えでは、人種偏見は不快な事実であるが、感情的に非難することは得策ではない、また、粗野なまま留め置かれている多くの黒人が持ち合わせているかもしれない野心や向上心を過小評価してはいけない。結果的に、彼は教育を重要事項に挙げ、黒人教育を阻害する圧力に反発し続けた（*Du Bois Souls Chapter6*）。彼にとって、教育はきわめて実践的な武器であり、その実践性は、彼と白人知識人たちとの間で形成された合意だったといえる。

児童雑誌の出版を含め、デュボイスの戦略は、白人の思潮に周到に添い、白人の子どもに許される環境の中にアフリカン・アメリカンの子どもも侵入させていこうとした。結果的に、雑誌は、アメリカという国に受容される質を備えつつ、アフリカン・アメリカンの権利を主張し得ている。

創刊号の目次は以下の通りである。

- Cover Picture. Photograph. By *Batthey*.
- Frontpiece-The Empress Zaouditou
- Pumpkin Land. A Story. *Peggy Poe*. Illustrated by *Hilda Wilkinson*
- The Wishing Game. A Poem. *Annette Browne*
- The Origin of White Folks. A Poem. *Annie Virginia Culberton*
- A Boy Scout Troop of Philadelphia. A Picture
- Over the Ocean Wave. A Geography Story. Illustrated
- Whole Duty of Children. A Poem. Reprinted from *Robert Louis Stevenson*
- Some Little Friends of Ours. Nine Pictures

- The Judge
- Waiting for a Howard-Fisk Football Game. A Picture
- The Jury
- Celebrating Baby Week at Tuskegee. A Picture
- The Ouija Board. A Story. Edna May Harrold
- Playtime. “Hark, Hark, the Dogs Do Bark.” A Nursery Rhyme. Dance by Carriedel B. Cole, with music by Farwell
- Girl’s School in Abyssinia; Y.W.C.A Girls in New York City Pictures
- As the Crow Flies
- The Grown-Ups’ Corner
- Children in the Silent Protest Parade in New York City
- Katy Ferguson. A True Story
- Little People of the Month
- After School. A Poem. Jessie Fauset. Drawings by *Laura Wheeler*
- GYP. A Fairy Story. *A. T. Kilpatrick*
- The Boy’s Answer. *A.U. Craig*
- Poems. Illustrated. Recruit, Georgia Douglass Johnson; the Tale of a Kitten, *James Weldon Johnson*; The Happy Quail., *William T. Wallace*; Singing, from *Robert Lewis Stevenson*; Dedication. *Jessie Fauset*)

(Du Bois *The Brownies’ Book* 3)

構成は2年間ほぼ変わらず、小話、詩、連載物語、アフリカン・アメリカンの子どもの写真とその解説、読者からの手紙、モラルや日常の話題について「先生」（“Judge”）と3人の子どもが考える教育コーナーなど

から誌面が成り立っている。

当時、多くの白人の子どもが読んでいた雑誌の筆頭に挙がるのは、メアリー・メイプス・ドッジ (Mary Mapes Dodge, 1831-1905) が 1873 年から 1940 年まで編集長を務めた *St. Nicholas Magazine for Boys and Girls* である。*St. Nicholas* が端正な英語の小さな文字で書かれ、毎号 90 ページ弱の厚みがあったのに対し、*The Brownies' Book* は 32 ページに過ぎず、挿絵や写真が多く、語彙や構成も平易だった。しかし、提供するイメージはきわめて豊かで新鮮であり、アフリカン・アメリカンの子どもたちがアメリカ人としての自己に誇りを持つように意図された。

*The Brownies' Books* は創刊当初から財政難に苦しみ、1920 年 12 月号には、12,000 部を売らないと発行が難しいにもかかわらず実売数が 5,000 部以下にとどまっているという窮状を訴えて、5 年分前払いをした読者には 1 年分を無料にする、という広告が出されている。財政逼迫を裏付けるように、1921 年 1 月号(資料⑩)から表紙が単色刷りになり、最終的にはそれから 1 年間もたずに廃刊することになった。しかし、

黒人の子ども時代に社会的、政治的な投資の取り組みをした雑誌として、*The Brownies' Book* はまさに画期的だった。より端的にいえば、これは黒人の子どもを真面目に扱い、人種の偏見や文化の独自性について述べた最初の雑誌である。

As a magazine that addressed the social and political investments of black childhood, *The Brownies' Book* was truly groundbreaking. More to the point, it was the first magazine to take black children seriously, to tell them the truth about racial prejudice and cultural distinctiveness

(Smith Web)

といわれるように、その歴史的意義はきわめて大きい。アフリカン・アメリカンの経験に依拠しつつ、現在を生きのびようとする同じ民族集団の子ども読者にエンパワメントを与えようとする、ひとつのまとまった仕事だった。

## ii. 読者像

### ① 「ブラウニー」へのまなざし

*The Brownies' Book* という命名からは、褐色の肌、子どもの好きな菓子、ボーイスカウトやガールスカウトの中の年少隊の名前、家付き妖精のブラウニー、カナダ生まれのパーマー・コックス (Palmer Cox, 1840-1924) がイギリスの小人妖精をモチーフに書いた *The Brownies* のシリーズなど、様々なイメージが喚起される。小ささ、愛らしさ、肌の色を含めた「ブラウニー」は読み手の愛称であり、編集者や執筆者は、読み手として想定されるアフリカン・アメリカンの子どもや登場人物の子どもに「ブラウニー」(“Brownie”) と呼びかけている。

*The Brownies' Book* の登場以前、ある程度の文化的基盤を持つアフリカン・アメリカンの家庭の子どもが自分と同じアフリカン・アメリカンの子どもの登場する雑誌を楽しむ機会はほとんどなかった。識字や教育の問題に加え、恵まれた中産階級の子どもが、白人の子どもが読むのと同じ雑誌を手にとったとしても、たとえば *The Brownies' Book* と同じ 1920 年 1 月に発行された雑誌 *St. Nicholas Magazine for Boys and*

*Girls* には、背景も含めてアフリカン・アメリカンは一人も登場していない。

1920年代にニューヨークで流行していたブルースの主題は陰鬱で、子どもが登場する場合でも変わらなかった。そもそもブルースは、作曲家のウィリアム・クリストファー・ハンディ (William Christopher Handy, 1873-1958) が、奇妙な風体の貧しい黒人がナイフをピック代わりに駆で奏でていたギターの音色を「これまで聞いた中で一番奇妙な音楽」

(“the weirdest music I had ever heard” Handy 74) として聞き取ったというエピソードを起源とし (大和田 27-8)、陽気な音階であっても、内容は深刻である。救いのない人生のやるせなさを歌詞に乗せ、その音楽は「見捨てられた者のすすり泣きであり、自立の叫びであり、元気いっばいの者の情熱であり、苛立つ者の怒りであり、運命論者の笑いである。それは、優柔不断の苦悩であり、無職の絶望であり、家族を亡くした者の苦悩であり、冷笑家の理性である」 (“Blues is the wail of the forsaken, the cry of independence, the passion of the lusty, the anger of the frustrated and the laughter of the fatalist. It’s the agony of indecision, the despair of jobless, the anguish of the bereaved and the wit of the cynic” Oliver 3)。

ブルースの中では、子どもも希望を持ってない。カウンティ・カレン (County Cullen, 1903-46) は、ナーサリーライムの “A Week of Birthdays” の一節 「土曜日生まれの子どもはあくせく働く」 (“Saturday’s child works hard for his living”) を土台に書いた “Saturday’s Child” の詩で、「だってぼくは土曜日生まれだから / 『種まきには時期が悪い』 / としか父さんはいわなかった / あと、『養い口がまたひとつ』と」 (“For I was born on Saturday— / ‘Bad time for

planting a seed,' / Was all my father had to say, / And, 'One mouth more to feed' ” Gates & McKay 1342) と哀調をこめて書いている。同じカレンの“Mother to Son”の詩では、母親が子どもに「私の人生はクリスタルの階段ではなかった」(“Life for me ain't been no crystal stair”)けれど、「振り返ってはいけないよ」(“So boy, don't you turn back”)「落ちてはいけないよ」(“Don't you fall now” Gates & McKay 1292) と語り、苦い現実への無力感を打ち出している。

W・E・B・デュボイスは、そのような現実の子ども像を理解した上で、あえて明るい面に目を向けた。雑誌が目指したのは、ブルースの暗さを払拭し、生き生きしたアフリカン・アメリカンの子どもを登場させ、大衆的な子どもの本で流布していた偏見に満ちた像を転覆することであり、創刊号には、正装のエチオピアの女王の写真やアフリカン・アメリカンのボーイスカウト団の写真が掲載されている。

*The Brownies' Book* は、白人が白人の子どものために目指してきた啓蒙と同じ手法で、アフリカン・アメリカンの子どもを目覚めさせ、誇りにつながるイメージを明示する。“Little People of the Month”のコーナーでは、全米各地のアフリカン・アメリカンの YMCA 活動、演劇クラブ、バレエ、スポーツ、グループ研究などのレポートを掲載している。1921年5月号では、演劇活動の報告と、それぞれの役柄の子どもたちが持つ野心を伝え、高校入学や大学入学をいかに待ちわびているかを好ましく伝えている。

*The Brownies' Book* の購入者、購読者、また、そこに掲載される子どもやお便りを編集部に送ってくる子どもたちは社会的にはきわめて恵まれた家庭の子どもたちであり、本当に絶望していた子どもには届いていなかったかもしれない。しかし、「見捨てられた者のすすり泣き」でもな

く、苦しい生活を強いられる「土曜日の子ども」でもなく、肌の色をハンディとせず夢に向かおうとするアフリカン・アメリカンの子どもを描き、いつかすべての子どもにそのメッセージが届いていくという夢をもって、雑誌は発行されていた。

## ②多様な子ども像の提示

アメリカで黒人であることの生きづらさを冷静に見ていたラングストン・ヒューズも *The Brownies' Book* では明るさを前面に出している。1921年7月号に掲載の戯曲“*The Gold Piece*” (Du Bois *The Brownies' Book* [1921] 191-194) は、パブロ (Pablo) とローザ (Rosa) という若夫婦を描いた一幕物である。10匹のブタを売って50セント金貨を手に入れた2人は、時計やショールなど様々な買い物のことを考えて喜んでいる。しかし、家の戸口に目の見えない老婆が来て休憩を乞い、話を聞くと、幼い頃から18年間目の見えない息子がいて、探し当てた医者には50セントの治療費がかかるといわれ、あきらめて帰宅する途中だと言う。2人は自分たちのほしいものをあきらめ、「息子さんへちょっとしたものを」 (“*Something from us to your boy*” 193) と金貨を老婆のカバンに入れる。老婆は目が見えないので何をもらったか知らずに帰り、2人は満足する。挿絵では夫婦の肌は褐色ではなく、金貨も「1ローレン」という架空の通貨を用いているが、アフリカン・アメリカンの子どもが自己投影して、夫婦の善意を疑似体験できる小品である。

1921年4月号にヒューズが寄せた紀行文“*In a Mexican City*” (Johnson-Feeling 306-9) は、メキシコのトルカ地方の習俗や人々を説明するものである。彼自身の旅の記録と重なり、スペイン語表記の店

の看板や、広場を中心にした街並み、買い物するときには必ず値切り交渉をする習慣、帽子をたくさん重ねてかぶっている男性、11月2日の死者の日の風習など、彼自身の目で見てきたこと、感じたことが生き生きと記され、アメリカより外の世界に子ども読者の目を開く手助けとなっている。また、ルーツの受容に関わる詩としては、1921年1月号の“Winter Sweetness”で雪のつもった家の中をそっと覗くと「カエデ糖の子ども」 (“a maple-sugar child” Du Bois *The Brownies’ Book* [1921] 27) があるという表現があり、さりげなく肌の色に言及している。

*St. Nicholas* の1920年1月号には“The Future Democracy of America” (Knox and Lutkenhaus) というページェントが掲載されている。ここでは、「さえない過去」(The Drab Past) や「輝かしい未来」(The Golden Future) と対話する白人の子どもが石鯨箱に乗って演説する。

アメリカ人という言葉に血は関係ない。君たちは、アイルランド人、ドイツ人、ロシア人、ユダヤ人、イタリア人、フランス人、オーストリア人、あるいは、ポーランド人の血を引いていてもなお、まるで、君たちの先祖がかつてこの国に来て、ワシントンと共に戦ってこの共和国をつくり、リンカーンと共に戦ってこれを維持したかのようにアメリカ人である。

The word American has no relation to blood. You may be of pure Irish, German, Russian, Hebrew, Italian, French, Austrian, or Polish blood, and yet to be as real an American as your ancestors had come to this country in the early days and fought with Washington to make our Republic and with Lincoln to preserve it.



アフリカン・アメリカンは当たり前のようにかき消され、南北戦争に 100 万人の黒人部隊が参戦したことは考慮されていない。デュボイスは、*The Brownies' Book* を創刊することで、*St. Nicholas* があからさまにとりこぼした子どもに、そしてまた、とりこぼされた子どもがいることにも気づかない、アフリカン・アメリカン以外の子どもに語りかけている。結果的に、*The Brownies' Book* は、アメリカの子ども像としてドラスティックな多様性を示した。1920 年 4 月号の“A Kindergarten Song”では、様々な国を出身地とする様々な肌の色の子どもを並立させ、成人した絵には「神の大きな子どもたちはみんな仕事をしている」(“God’s big children all at work” Du Bois *The Brownies Book* [1920] 124) という詩が添えられ、肌の色を平等に扱っている。文化思潮の渦から、白人アメリカ児童文学に弾き出された混血の子どもにまなざしを向けている。

*The Brownies' Book* は、アフリカン・アメリカンの子ども読者に初めて等身大の娯楽を与え、ハーレム・ルネッサンスと子どもを出会わせ、白人か黒人かにかかわらず人種差別に反対といえるリベラルな家庭に生まれ育った子どもを、読者として手に入れた (Johnson-Feelings “Introduction”)。編集者と作家は、アメリカの子どもがいかに豊饒で多彩であるかを示そうとし、創刊号の冒頭で「この雑誌はあらゆる小さい人たち - 黒、褐色、黄色、白 - のために普遍的な愛と兄弟愛を教えることを目指すだろう」(“It will seek to teach Universal Love and Brotherhood for all little folk-black and brown and yellow and white” Du Bois *The Brownies Book* n.pag.) と宣言し、黒さがもたらす多様性／混血性を前提に革新的な編集をおこない、白人の子どもと並べた。

付け加えるなら、白人と同じ「アメリカ人」の立ち位置を感じさせるのは先住民の扱いである。創刊号の小話の“GYP: A Fairy Story”では、外に出て絵の具で遊んでいた子どもたちが眠っている間に、いたずらな妖精が来て、彼らがそれぞれに好んだ赤と茶色に顔を塗る。「家にいた子どもは白いまま、赤い肌の子どもは森や平原で騒ぎまわり、茶色い肌の子どもはあらゆる場所において、幸せと日の光を届けた」(“Those children who were at home remained white, but the red little children still love to roam about in the forest and on the plains. The little brown children can be found most everywhere, carrying happiness and sunshine to all they see” Du Bois *The Brownies Book* [1920] 31)) という言説では、ネイティブ・アメリカンを野育ちの未開人と見なし、白人と同じ身振りで見つめる。前出の“The Kindergarten Song”は、白人、アフリカン・アメリカンに加え、羽飾りをつけた酋長風のステレオタイプなネイティブ・アメリカンが土地を耕している。先住民に対して抑圧的にふるまっているとあってよく、皮肉にもアフリカン・アメリカンは、同時代的に「正しく」アメリカ的な態度を身につけている。

雑誌は廃刊しても、その意思は残り、公民権運動の高まりとともに再び個別的な本の中に、その意思が溶解して広がった。アフリカン・アメリカンの子どもに何を手渡して読ませるかという問いは、*The Brownies' Book* によって投げかけられたのである。

## 2. 可視化、受容、連接の萌芽

### i. 可視化 - 伝記を例に

I・1・ii で論じた読者像のイメージ化には、読者としてのアフリカン・アメリカンの子ども、また、登場人物としてのアフリカン・アメリカンの子どもを、偏見のない形で可視化させた功績がある。本項では、さらに、その子ども読者たちに何を可視化したのかを考える。

ラングストン・ヒューズは、1926年に出版した詩集 *The Weary Blues* で“*I, too*”から始まる詩を発表し、「ぼくもアメリカを歌う / ぼくは肌の色の黒い兄弟だ (.....) ぼくも、アメリカなのだ」 (“*I, too, sing America. / I am the darker brother. (.....) I, too, am America*” Hughes *Collected* 23) と書いてアフリカン・アメリカンもまたアメリカを形成する市民であることを愛国的に宣言した。同じ主張を持って、*The Brownies' Book* は、白人 - 男性のアメリカから不可視化されてきた「肌の色の黒い兄弟」の伝記もアメリカの偉人の物語として受容され、生き方を語る同じテキストとして並び立つべきものであることを主張した。

“*I, too*”に先立つ *The Brownies' Book* は、“*True Story*”として多くのアフリカン・アメリカンの伝記を掲載し、自分たちも白人と同じ志のあるアメリカ人であることを伝えている。アフリカン・アメリカンであってもくじけずに道を開いていった人物の歩みは「ぼろから金持ちへ」 (“*rags-to-riches*”) のパターンにも重なり、教養小説的でもある。

フィリップ・ルジュンヌ (Philippe Lejeune) は、フランスの伝記や回顧録について、「人格の歴史を主として強調する」(Lejeune [邦訳] 10, 傍点ママ) ものであり、自伝は「思い出を秩序づけ、そこから作者の自我の歴史を構築しよう」と (16) すると述べている。幼少期から現在までの時間軸の中で、思い出を取捨選択しながら「生の深い統一性と意味」 (18, 傍点ママ) を明らかにするものとして、自伝の形式で過去を語り起こすことは、自分の人生への意味づけになる。また、それと同時に、

個人の生き方を民族集団に敷衍するものになるのではないだろうか。

アフリカン・アメリカンの伝記は、抑圧された半生を自己実現と社会的成功の文脈から再構成するテキストであり、伝記作家と編集者の手を経て、子どもに受容されやすい語法と「コメモレイション」の一形態としての機能を持つ。「コメモレイション」とは、公共の記憶をめぐる共同体的な作業を指し（小関 5-22）、制度が固定した事象を、複数の個人がその時々現在の現在によみがえらせていく行為、なおかつ未来への時間軸の刻み目にもなる記念ないしは顕彰の行為とされる。公民権運動がひとつの闘争であると考えるとき、アフリカン・アメリカンの「コメモレイション」は、たとえば、エイブラハム・リンカーン（Abraham Lincoln, 1809-65）が奴隷解放を宣言した日、ローザ・パークス（Rosa Parks, 1913-2005）がバスのボイコット運動を始めた日、マーティン・ルーサー・キング・ジュニア（Martin Luther King Jr., 1929-68）牧師が10万人の前で演説をおこなった日に対しておこなわれる。

こうした「コメモレイション」の選択と合意の中で、二次的なテキストとなる伝記はその思想を再強化する役割を担う。ある時代に、現代に続く価値観をもって先人として生きた人物の人生史を共同体の思想の中に置き直す伝記により、読者はその過去の人生と意義を現在の文脈で追体験できる。自伝や伝記は「コメモレイション」と直結し、自己肯定の繰り返しに必要なテキストとして子ども読者に手渡される。子どもの手本になる成功譚としての伝記を書く伝記作家は、個人的な限界と社会的な限界の双方に挑戦した人々を物語化することで、よりよい人生を真摯に追求するよう子ども読者に促している。これは、アメリカ社会で「見えない人間」にされていたアフリカン・アメリカンの偉人を可視化する試みでもあった。

*The Brownies' Book* の創刊号では、奴隷に生まれつつ、努力と幸運で自由になり、ニューヨークで初めて日曜学校を開いたケティ・ファーガソン (Katy [Catherine] Ferguson, 1779-1854) が扱われ、日曜学校に行ったらケティに感謝するようにと促し、「これで気高い黒人女性のことが分かりましたね。だけど、自分の民族のために素晴らしいことをなした女性は彼女だけではありません。素晴らしい男性たちもいます。まだまだこれから素晴らしい人たちの話を聞けることを考えてみましょう！」

(“So now you know the story of a noble colored woman. But she is not the only colored woman to do great deeds for her race. There are many splendid colored men, too. Think of all the wonderful folks you have still to hear about!” Du Bois *The Brownies' Book* [1920] 27) と結んでいる。

1920年5月号には、ハイチ革命 (The Haitian Revolution, 1791-1804) を成功させたフランソワ・ドミニク・トゥーサン＝ルーヴェルチュール (François-Dominique Toussaint Louverture, ?-1803) の伝記が掲載されている。書き手は「告白しますが、私が好きなのは、貧しかったり無名だったりする少年少女、男性女性が苦心してどんどん身を起こし、ついにはお金持ちや有名人、有用人物、人々のリーダー、国の救世主に至る部分です」 (“I confess my favorite is the one where the poor or unknown boy or girl, man or woman, struggles up, up, up until he becomes rich or famous, or useful, or the leader of his people, the savior of his fatherland” *The Brownies' Book* [1920] 149) と述べ、抑圧された奴隷が権力に打ち勝ち、建国するドラマに、大人であっても共感を寄せることを伝えている。

23号しか出版されなかった雑誌に掲載された人物伝は15編にのぼり、

1920年の1年間は、ほぼ毎月偉人伝が掲載された。1920年3月号の“A Story of a Former Slave Boy”は白人農園主の父と奴隷の母の間に生まれ、自由と教育を与えられて政治家になり、1875-81年にミシシッピ州代表として共和党の上院議員を務めたブランチ・ブルース (Blanche Kelso Bruce, 1841-98)を扱う。1920年4月号の“A Pioneer Suffragette: Sojourner Truth”は元逃亡奴隷で運動家のソジャーナ・トゥルース (Sojourner Truth [Isabella Baumfree], 1797-1883)、1920年6月号の“Benjamin Banneker”は、暦や時計作りに貢献しアフリカン・アメリカンとして初めての科学者といわれるベンジャミン・バネカー (Benjamin Banneker, 1731-1806)、1920年7月号の“America’s First Martyr-Patriot: A True Story”は、植民地時代にイギリス軍兵士によって殺害された混血の民間人クリスパス・アタックス (Crispus Attucks, 1723-70)、1920年8月号の“The Story of Phillis Wheatley: A True Story”は、奴隷制度時代に詩集を出版した女性奴隷のフィリス・ホイートリー (Phillis Wheatley, 1753-84)、1920年9月号の“The Story of Frederick Douglass: A True Story”は、逃亡奴隷で運動家のフレデリック・ダグラス (Frederick Douglass, 1818-95)、1920年11月号の“The Bravest of the Brave: A true Story”は、逃亡奴隷援助組織である「地下鉄道」 (“Underground Railways”) <sup>21</sup>の力を借りてノース・カロライナ州からカナダまで逃亡した市井の少女エリザベス・ブレイクスリー (Elizabeth Blakesley)、1920年12月号の“Samuel Coleridge-Taylor: A True Story”は、「黒いマーラー」 (“Black Mahler” Elford Web) と呼ばれた混血のイギリス人作曲家サミュエル・コールリッジ＝テイラー (Samuel Coleridge-Taylor, 1875-1912)、1921年1月号の“Alexandre Dumas, A Great Dramatist: A True Story”は「ダルタニャン物語」

(D'Artagnan, 1844, 1845, 1851) や『モンテ・クリスト伯』(*Le Comte de Monte-Cristo*, 1844-46) を書いたフランス系クレオール劇作家アレクサンドル・デュマ (Alexandre Dumas, 1802-70)、1921年3月号の“The Story of Harriet Tubman”は女性逃亡奴隷で何度も北部から南部に戻って他の奴隷の逃亡も助けたハリエット・タブマン (Harriet Tubman, 1820-1913)、1921年6月号の“A Black Russian: A True Story”は母親の祖父が元黒人奴隷だったロシア人文豪のアレクサンドル・プーシキン (Alexander Pushkin, 1799-1837)、1921年8月号と9月号の“Lafayette and the Dark Races”は、フランス革命とアメリカの独立革命に功績のあったフランスの侯爵で軍人のマルキ・ド・ラファイエット (Marquis de La Fayette, 1757-1834) が紹介されている。

同時期の *St. Nicholas Magazine* には伝記や個人史はほとんど掲載されず、ナサニエル・ホーソン (Nathaniel Hawthorne, 1804-64)、詩人のヘンリー・ワズワース・ロングフェロウ (Henry Wadsworth Longfellow, 1807-82)、登山家のジョン・ミュール (John Muir, 1838-1914)、赤十字社のクララ・バートン (Clara Burton, 1821-1912)、ジョージ・ワシントン (George Washington, 1732-99) 大統領、エイブラハム・リンカーン大統領、フランクリン・ルーズベルト (Franklin Delano Roosevelt, 1882-1945) 大統領らの人生の一断片が抽出されているだけである (島「セント・ニコラス」 118-9)。それと比較すると、*The Brownies' Book* で作家や編集者が伝記を重視している傾向が明白に読み取れる。

伝記や人物伝は、書き手自身を鼓舞する役割も持ち、読み手と書き手は、偉人の人生の前に同列だった。伝記に描かれる先人の歩みは、立ちすくんでしまうかもしれない現在のアフリカン・アメリカンの子ども読者を動かし、前進する力を与える。と同時に、その編者にも力を与える。

苦難を超克してきたアフリカン・アメリカンが可視化されることで、そのエネルギーが総体となって子ども読者を力づけ、主体性を持つように促す。ポジティブなアイデンティティ形成と自己受容に寄与して「エンパワメント」につながっている。

## ii. 受容 - アフリカへの親近感

*The Brownies' Book* は、アフリカン・アメリカンのルーツに新しい光を当てて、誇るものとして受容させることをめざした。冒頭で「太陽の子どもたち」(“the Children of the Sun” *The Brownies' Book* [1920] 2) に呼びかけ、「『太陽の子どもたち』に声と足場を与え、新しい声、イメージ、対話が生まれるための扉を開けた」(“[It] gave voice and platform to ‘Children of the Sun,’ and opened the door for new voices, images, and dialogs to emerge” Wilkins 68)。雑誌の中では、暑い国、日焼け、明るさといったイメージと、混血ゆえのさまざまな肌の色が示され、そのルーツとして、アフリカが太陽の輝く土地として空想された。

他の移民のようにアメリカに受容されず、拒絶され、ののしられ、暴力を受けるとき、黒人のルーツをどのように構築するべきか。編集者は、アフリカからアフリカ人を奴隷としてアメリカ大陸に運んだ忌まわしい海路として認識される「中間航路」の起点にあえて目を向け、誇りの持てる故郷を再創造した。

1920年3月号には、黒人英語で書かれた“Anancy an’ Tiger Ridin’ Horse”が掲載されている。西インド諸島で有名なアナンシの話であると注記されているが、アナンシは本来、アフリカの民話のトリックスターでクモの形をしているが、雑誌の中では、とがり帽をかぶった小人のよ



うな姿で描かれ、中庸化している。

アナンシとトラは、一人の娘をめぐるライバル関係にある。アナンシが娘に、あのトラはただの乗用馬に過ぎないと嘘をつき、怒ったトラがアナンシのところにやってくるが、アナンシは病気のふりをし、背中に乗せて医者へ連れて行ってほしいと頼む。アナンシはそのままトラに鞍をつけ、器用に操って、娘の家に乗りつけ、「言ったでしょう、お嬢さん。あの老いぼれトラはおいらの父さんの老いぼれの耳の垂れた乗用ロバ[まぬけ]だって」(“Me no tell you so, Missus! Dat dis old Tiger was not’ing but me fada’s old long-ear jackass ridin’ horse?” Du Bois *The Brownies’ Book* [1920] 79) と叫ぶ。他愛のない話であるが、アナンシを身近なものとして感じさせるところに意図がある。

同じ号には、メアリー・クック (Mary Cook) という女子学生が「1886年にマドリッドで出版されたスペイン語の *La Biblioteoa de las Tradiciones Populares Espanõlas*(Machado y Alvarez, 1886) 所収の“El Principe Jalma”を翻訳した」(*The Brownies’ Book* [1920] 67-70) という注のついた“The Story of Prince Jalma”を掲載している。このお話は、J・L・ド＝ボーモン (Jeanne-Marie Leprince de Beaumont, 1711-80) 版の“*La Belle et la Bête*” (1757) やノルウェー民話の“Østenfor Sol og Vestenfor Måne” (Asbjørnsen and Moe. *Norske Folkeeventyr*, 1841-44 所収) を想起させる婚姻譚である。

誤って精霊の住む木を切ってしまった父親の命を救う代わりに、娘は、不思議な老人と結婚する。生活に満足していたものの、あるとき、娘は魔女にそそのかされ、見てはいけないと言われた夫の姿を見てしまう。夫は、姿を変えられたジャルマ (Jalma) 王子であったが、禁忌が破られたため飛び去ってしまう。娘は鉄の靴を履いて世界中を探しまわる。

南風、北風、東風、西風のところを訪れて援助を受け、最後にたどりついた魔法の館で、4日後に魔法の娘と結婚することになっている王子を見つけ、最終的に魔法を解き、改めて結ばれる。この話は、チリのお話として分類される場合もあり(Heiner 771-4)、クックが関心を示したのが南米経由の話かスペインに由来する話かは不明だが、*The Brownies' Book*では、南アメリカの話として共感を持って掲載し、非 - 西欧世界への親近感を持たせている。

1920年8月号の“The Quaintness of St. Helena”は「ガラ (Gullah) の地域」に焦点を当てている。サウス・カロライナ州チャールストンからジョージア州サバンナまで続く沿岸部を指し、アフリカの言葉や文化が保存されているために特異な文化圏を形成している。地理的には、ニューオリンズやカリブ地域に連続し、クレオール的な風土を持ち、海岸近くに大小の島が並び、奴隷制時代には各島でプランテーション経営がおこなわれていた。記事を書いたジュリア・プライス・バレル (Julia Price Burrell) は、そのうちのひとつであるセント・ヘレナ島取材し、暮らしの貧しさや訛りの強い言葉、独特の服装などを描写しつつ、人々の気持ちの温かさや海の景色の美しさを好ましく伝えている。

1921年4月号のお便りコーナー “The Jury”には、キューバのクラリス・スカボロー (Claris Scarbrough) という少女がスペイン語を交えた手紙を投稿している。最終号の1921年12月号では毎号約4000人の購読者がいたと記されているが、人数の多寡にかかわらず、少なくとも読者の範囲は国境を越えて幅広くカリブも巻きこんでいたことが示唆される。W・E・B・デュボイスの編集方針は常に、アフリカやカリブと接続するルーツを受容しつつ、誇りを持ってアメリカで生きていこうというものであった。

## ② 児童文化からの接近

*The Brownies' Book* には、アフリカに由来する音楽を肯定的に受け止める記事もいくつかある。1920年5月号の“Playtime”のコーナーでは「雷の女神の服で地上に落ちたものは何？ 答え - 虹の端」(“What are the thunder god's garments which fall on the earth? Answer-The ends of the rainbow”) というアフリカのなぞなぞや「ゾウは自分の鼻の重さを知らない」(“The elephant does not find his trunk heavy”) などのことわざを掲載している (Du Bois *The Brownies' Book* [1920] 154)。そして、こうしたなぞなぞやことわざ、動物物語や神話がアフリカの文学を構成していることを伝え、

詩は歌われたり詠唱されたりし、歌詞なしの声楽曲はまれだ。民話の語りは人々とともにあって、ほとんど情熱とっていいところまで達している。アフリカ人はいつでも即興ができ、子どもでさえもまったく苦もなく即興曲を生み出すことができる

“Poetry is sung or chanted and vocal music is rarely expressed without words. The telling of folks tales amounts almost to a passion, it is said, with the people. The African is a ready extemporizer and not even a child finds difficulty at any time in producing an extemporaneous song”

(Ibid. 155)

と説明している。アフリカ音楽と即興性への言及と理解は正しく、アフ

リカへの共感と、その言葉の芸術が音声や音楽とともにあることを積極的に評価している。

また、1920年9月号の同じ“Playtime”では、南東部のクレオール地域であるセント・ヘレナの遊び歌が紹介されている。

リーダー：メアリー？

全員：奥様

リーダー：私の七面鳥を見た？

全員：はい、奥様

リーダー：どっちのほうへ行った？

全員（指さしながら）：そちら！

リーダー：見つけるのを手伝ってくれる？

全員：はい、奥様

リーダー：用意、ドン。

Leader: Mary?

All: Ma'am?

Leader: Have you seen my turkeys?

All: Yes, Ma'am.

Leader: Which way did they go?

All (pointing south): So!

Leader: Will you help me find them?

All: Yes, Ma'am.

Leader: Get ready. Let's go.

(Du Bois *The Brownies' Book* [1920]283)

語句に奴隷制時代の主従関係が想起される点は問題視されるかもしれないが、通常の子どもの遊び歌のやりとり以上に交唱の素地があり、黒人霊歌の中でメインボーカルとコーラスが掛け合いをする「コール・アンド・レスポンス」に見られるリーダーと会衆の同調性を保持している。文化に根ざした記事の掲載は、アフリカとのつながりを強化し、ルーツの受容を促すことで「エンパワメント」となっている。

### iii. 接続 - 絵画

*The Brownies' Book* では、アメリカ以外の土地との接続が挿絵から感じられる。特に表紙絵は、雑誌の主張を具体的に伝え、斬新さと高揚感を示している。創刊号、1920年2月号、9月号、1921年4月号の4冊では表紙に写真が用いられ、創刊号では、天使の衣装をまとい、羽ばたこうとしているかのように笑うアフリカン・アメリカンの少女に雑誌が目指す躍動感が託されている（資料①）。

写真のほか、表紙絵は、数名の画家が担当していた。ヒルダ・ウィルキンソン（Hilda Wilkinson, 1894-1981）の絵はふっくらとした愛らしい子どもの造形を特長とし、1921年2月号（資料⑭）では幼い少年と少女の淡い恋心をバレンタイン・デーのイメージとし、1921年7月号（資料⑲）では、夏休みが始まって喜び遊ぶ学童の様子を躍動的に描いている。

アルバート・アレクサンダー・スミス（Albert Alexander Smith, 1896-1940）は黒人運動にも深く関わった画家で、*The Crisis* にも多数の風刺画を描いていた。1920年11月号の“*They Have Ears but They Hear Not*”（Smith Web）と題された痛烈な風刺絵では、法廷で訴える

黒人の前で、南部の判事や陪審員たちはヘッドホンのような耳あてをして、文字通り聞く耳を持っていない。彼が描いた *The Brownies' Book* の1920年3月号(資料③)の表紙絵では、茶色のチョコレート菓子のブラウニーと、いたずらな妖精のブラウニーを掛けて「ブラウニーの国」(“Brownies Land”)を描き、黒人の少女を座らせている。アーサー・ラッカム (Arthur Rackham, 1867-1939) の妖精画のようなオーセンティックな妖精がいる背後には、アフリカを思わせるジャングルらしき木があり、サルが枝からぶらさがっている。ヨーロッパとアフリカが融合した妖精の国のようである。1920年7月号は独立記念日をモチーフにし、正面の人物が鎖を断ち切ってクリスパス・アタックスに花を捧げている。宗主国イギリスの横暴に対して自由と自治を求めて立ち上がったアメリカ国民という自画像に黒人を描き加えることで、アメリカ市民としての誇りを示している。1920年12月号(資料⑩)では、つぎはぎの靴下に「サンタさんへ この靴下をぼくたちのためにいっぱいにしてください」(“Dear Santa, Please fill this for us”) というメモが添えられ、まだ手に入れていない市民としての自由や人権への願いをユーモラスに切実に表現している。いずれも、複数の視点が1枚の絵の中に配置され、アフリカン・アメリカンの夢が描きこまれている。

ローラ・ウィーラー・ワリング (Laura Wheeler Waring, 1887-1948) は、コネティカット州で最初に設立された黒人教会の牧師の家に生まれ、ペンシルヴァニア美術学校で学び、卒業時に奨学金を得てパリに渡った。肖像画に優れ、ハーモン財団 (The Harmon Foundation) に支援されて、1927年にニューヨークで初めて開催された黒人美術展にも出展している。芸術家としての自己実現よりも教育に力を注ぎ、ペンシルヴァニア・チェイニー州立教育大学 (Pennsylvania's Cheyney State Teachers

College)で教員となって一生を終えた。彼女が描いた1920年5月号(資料⑤)の楽しくメイポールダンスを踊る少女たちの手にあるリボンの流れ、1920年11月号(資料⑪)の機能的な大皿を思わせる八角形の枠、1921年5月号(資料⑰)の遊ぶ子どもたちの白と黒の反転や水流のような布置、1921年8月号(資料⑳)のチェスボードのような斬新な升目の中に置かれた遊びに見られる鋭い都会性に、機能と装飾を併せ持つアール・デコの工夫がある。

*The Brownies' Book*の挿絵や表紙絵は、親雑誌である*The Crisis*と近接し、同時代の子ども向け雑誌のスタイルからは離れていた。1920年代の*St. Nicholas*の表紙絵が、資料㉔～㉕に見られるように<sup>22</sup>、秩序の中にあり、統一され、理想の白人少年少女を明示し、伝統的な遠近法を用いた奥行のある絵画であるのに対し、*The Brownies' Book*の表紙絵の方向性は、スミス、ワリング、ウィルキンソンらの間で特に統一されず、*The Brownies' Book*というタイトルデザインも様々である。技法や手段の多様性は、褐色の肌の色の子どものために新しい雑誌を作ろうとしていた雑誌の機運の中でのびやかに推進された。

1920年に月刊で発行された*The Crisis*の表紙(資料㉔～㉕)は、*The Brownies' Book*と同様に、絵の場合もあれば写真の場合もある。1917年から20年まで、同紙の表紙絵を主に担当していたフランク・ウォルツ(Frank Walts, ?-?)は、*The New Yorker*や*Colliers*のような一般的な雑誌や、*The Masses*、*New Masses*、*The Liberator*などの左翼系の雑誌でも仕事をしており(Witek Web)、同じ思想的傾倒の延長上に、リベラルな主張と現代性を持つ*The Crisis*での仕事もあった。*The Crisis*におけるウォルツの挑戦と革新は、黄色と黒を効かせた斬新なデザイン(資料㉘)や、白と黒で大胆にほほえむ黒人女性を浮かび上がらせ

た絵（資料③④）に見てとることができる。*The Brownies' Book*の表紙絵は、*The Crisis*におけるウォルツの態度に近い。黒人自身が自分たちを「モダン」と呼ぼうとした試み（Baker [邦訳] 33）であるハーレム・ルネッサンスの中で、*The Crisis*と*The Brownies' Book*は、テキストと絵の両方からともに同じ主張をおこなっていた。

挿絵の先端性は、NAACPがニューヨークを拠点にしていたことにも依拠する。当時、芸術の中心はパリやミラノで、アメリカは広大な辺境に過ぎなかったが、ニューヨークだけは、ヨーロッパの先端的芸術とアメリカのナショナリズムが混淆する貴重な場所だった。写真家のアルフレッド・スティーグリッツ（Alfred Stieglitz, 1864-1946）が1904年に開いた小画廊「291」（291 Gallery）や、イマジズムの詩人ウォルター・アレンズバーグ（Walter Conrad Arensberg, 1878-1954）のアパートは、ヨーロッパの文化とアメリカの文化人の交流の場所となり、マン・レイ（Man Ray, 1890-1976）やジェラルド・マーフィー（Gerald Murphy, 1888-1964）らの芸術家を生んでいる。

*The Crisis*や*The Brownies' Book*の画家たちは、アフリカン・アメリカンとして比較的恵まれた立場にいて、ニューヨークを經由してヨーロッパとつながることができた。人種差別のない自由な空気に触れながら美術を学び、アメリカと往復しながら活動を続けた。いずれの画家たちも、子どもと社会をつなぐインターフェイスとして表紙絵を描いているように見える。画家たちの自由さと挑戦は、大西洋を行き来できるという点で、特権的ともいえる移動の成果である。彼らは、ヨーロッパの白人と出会い、俯瞰性と自由な精神、最先端の技法を手に入れることができた。そして、黒人の子どもに向けて描くという定点的な作業を通じ、アメリカという国全体の子どものイラストレーションも活性化させたの



である。

*The Brownies' Book* の絵は

それ自体が絵本だったわけではないが、絵本の発展の中で重要な転換点として残っている。黒人の子どものための最初の雑誌であったという歴史的な重要性だけでなく、この計画 - 大きく実を結ぶのは1970年代以降になってからであったが - を構想するクリエイターたちの明確な表現力もその理由になる。

(T)hough not a picture book itself, remains a key turning point in the evolution of picture books not only because of its historical significance as the first magazine for black children but also because of its creators' articulation of their vision for this project—a vision which in some ways only began to come to fruition within the larger body of children's literature in the 1970s and later.

(Martin 39)。

これらの絵は、以後長い間地中で眠ることになるアフリカン・アメリカンの画家による絵本の種子となった。短い発行期間の中で、*The Brownies' Book* の画家たちは黒人の子どもに誇りと自信を与えようというハーレム・ルネッサンスの機運を背負って活動し、ユニークな絵を生み出し、大西洋を越境して最先端の絵画文化と接続した。アメリカらしい行事であるバレンタインやイースターを楽しむ黒人の子ども像を描いた表紙絵は、たしかに、黒人の子どもが自分のものとして読むことのできる絵本の正史の始まりであり、エンパワメントとなっている。

接続性はまた、その月に世界の国々で起こった出来事を俯瞰的に並べる“*As the Crow Flies*”というコーナーにも見出せるかもしれない。カラスが空を飛びながら人間の動向を見聞きし、報告するという形式で、同時代の世界のニュースが並列されている。1921年6月号では、ロシアからアメリカへの要求、英露関係の強化とアメリカの孤立、日本のヤップ島進出、英連邦に所属するカナダが独自の大使をアメリカに派遣したこと、戦後補償を抱えたドイツの苦境と孤立、イギリスの炭鉱ストライキ、イギリスからアメリカへの借金返済、イタリアの過激派による内乱、チャールズ元国王のオーストリア帰還と王権の要求、ポーランドがロシアやウクライナとの条約と領地をめぐり戦争状態に入っていることを伝えている。ランダムでありながら同時代を俯瞰し、ストライキでは労働者側に立って、抑圧されている側を支持する姿勢を明らかにしている。場所は離れていても、共振しあうニュースを選択、分類し、子どもに分かりやすく提示する方法は、世界の世論とニューヨークのアフリカン・アメリカンたちとのセッションであるともいえるのではないだろうか。行動しているのは自分たちだけではないというつながりを感じさせ、その動きをすくい上げて子ども読者に伝える姿勢そのものが、読者を力づけている。

## II 可視化の展開

II～IV章では、*The Brownies' Book* で撒かれた種子が、大恐慌以降の低迷期を経て、公民権運動と連動しながら、20世紀後半にどのように文学として豊穡化していったかを考える。II章では、可視化の展開を扱う。アフリカン・アメリカンの伝記、トール・テール、民話は、共同体の中で「見えない」人間であるアフリカン・アメリカンがアメリカでいかに多様な像を形成し、アメリカの民衆文化に奥行きを与えたかを考える。

次に、児童文学作品として、ミルドレッド・テイラーの *Logan Saga* を扱う。このシリーズは、アフリカン・アメリカンをアメリカ人として認めず、見えない存在にしようとする圧力への抵抗であり、裏返せば、可視化を推進する。アメリカ社会でのアフリカン・アメリカンの存在感を示すことでエンパワメントを与えようとしている。

### 1. アフリカン・アメリカンの存在感 - 偉人、英雄、民衆

i. 伝記 - *Narrative of the Life of Frederick Douglass, an American Slave* を例に

#### ① フレデリック・ダグラスの自伝の意味

伝記は、アフリカン・アメリカンの子どもに、同じ肌の色の偉人がいることを伝える。アンテベラム期の逃亡奴隷フレデリック・ダグラスの自伝 *Narrative of the Life of Frederick Douglass, an American Slave* (1845; *Frederick Douglass*) やウィリアム・ウェルズ・ブラウン

(William Wells Brown, 1814-84) の *Narrative of William W. Brown, a Fugitive Slave. Written by Himself* (1847) は読み物としての自伝や伝記の水源となり、以後の伝記の作法の礎になった。

スレイブ・ナラティブとは、奴隷の身分ではなくなったのちに、奴隷だった頃のことを併せて人生史を語る奴隷体験記で、多くは黒人英語の聞き書きであるため、社会学的史料の要素が強い。だが、特にダグラスの場合は、艱難辛苦を乗り越えた人生の総括として思想を伝達する「自伝」としての質を備えていた。1838年にメリーランド州から北部へ逃亡し、活動家となったダグラスの手記は、発表当時から衝撃を持って受けとめられ、奴隷解放運動に大きな影響を与えるとともに、20世紀の公民権運動に至っても、指針的な著作物のひとつであり続ける自伝となっている。

奴隷制度に目を背けず、さかのぼれば奴隷制度に行きついてしまうルーツから逃げずに構築されることで、自伝は、必ずしも子ども向けでなくても、子ども読者に訴求する。他者に語るという再構築行為を通じてルーツを肯定する自伝は、アフリカン・アメリカンの精神的幸福のための支柱のひとつとなり、子どもへの指標的な役割も果たす。そのテキストは、「アメリカ人の、自由や『生活、解放、幸福の追求』のための個人的探究」(“the national myth of the American individual’s quest for freedom and for a society based on ‘life, liberty, and the pursuit of happiness’” Andrews 8) に昇華され、個人の人生史を越えて、ルーツを見すえた上で集団が自己肯定をおこなえるような敷衍性を内包する。

*Frederick Douglass* によると、ダグラスは7歳で母親を亡くし、いくつかの農園や屋敷で奴隷として働いた。父親は白人農園主だったと類推され、彼自身は、混血であることを恥じ、自分の身体の中で白人と黒人

が引き裂かれ、暴力をふるう側と無力にふるわれる側が同時に存在するような嫌悪感があった。母親とはほぼ没交渉のまま死に別れている。

少年時代には、子守の最中に寝入ってしまったために殴り殺された少女や、隣の農園との境界を越えて釣りをしてしまったために射殺された少年の奴隷のエピソードが登場する。支給される生活用品の少なさから、彼自身も飢えや寒さに苦しんだ。16歳のとき、粗暴な農園労働監督者に抵抗し、相手の喉をつかんで殴り返したエピソードは「後の彼自身の自伝につながる英雄的な転回点であり、アンテベラム期の黒人文学すべての中で最も祝福すべき場面のひとつ」(“the heroic turning point of his future autobiographies and one of the most celebrated scenes in all of antebellum African American literature” Gates and McKay 300)と見なされる。一度は逃亡に失敗したものの、1838年に偽造の身分証を持って汽車に乗り、24時間でニューヨーク州入りするという鮮やかな逃亡を成し遂げた。

その後、ダグラスは、奴隷制度廃止論者の集会に偶然に参加し、奴隷であることについて演説する。それがきっかけで白人社会改革家のウィリアム・ロイド・ギャリソン (William Lloyd Garrison, 1805-79) に見いだされ、活動家になってからは、奴隷制度廃止論を推進する *The North Star* 紙を発行し、南北戦争ではエイブラハム・リンカーン大統領に黒人部隊の編成を進言し、再建期にはアンドルー・ジョンソン (Andrew Johnson, 1808-75) 大統領に黒人参政権を求めた。

*Frederick Douglass* とそれにつづく *My Bondage and My Freedom* (1855)、*Life and Times of Frederick Douglass* (1881/1892) は、正確で豊かな語彙を用いて書かれ、明快な論理的主張に立っている点で、素養のない(元)黒人奴隷からの聞き書きである多くのスレイブ・ナラ

タイプとは一線を画していた。ダグラスは、自分の出自や複数の奴隷所有者や賃貸し相手先での労働の中で思考したことを述べ、奴隷とはどのようなものであるか冷静に分析している。時系列にエピソードを並べるだけではなく、それが現在の自分にどのような意味を持つものであったかという視点に立ち返っているので、読者が受容しやすい。心情の動きや思想の変化をつづり、神への信仰によって心を強く保つことができた反面で、奴隷所有者たちが自宅に牧師を招き、宗教心の篤さを競っているにもかかわらず、いかに無学で欺瞞に満ちているかを辛辣に描写し、信仰と奴隷制の矛盾について鋭い問いかけをおこなっている。

読み書きも称揚されている。「読み書き能力の探究」(“Quest for Literacy” Childers and Hentzi [邦訳] 337) は、アフリカン・アメリカン文学の中で大きな位置を占め、「(自由とリテラシー) の二重の探究が、ほとんどのアフリカ系アメリカ人の初期の著作に主題と構造を与え、後の文学形式にも影響を与え続けて」(ibid. 337) いるものだが、流暢な英語を話し、正しい読み書きができることがアメリカ人として白人に並び立とうというときの手形となることはダグラスの人生史そのものによって証明されたといっている。

ダグラスは、2人目の所有者の妻からアルファベットの字の書き方を受けたが、ほどなくして、所有者から教育を禁じられた。しかし、そのことによって逆に読み書きが「奴隷制から自由にいたる小道」(“pathway from slavery to freedom” *Frederick Douglass* 115) であることを直感し、裏通りに住む<sup>ブア・ホワイト</sup>貧乏白人の子どもたちからひそかに学びはじめる。「女主人は、私に(読み書きを)教えることで『インチ』を与えてしまった。どんな用心も、私が『エル』[長さの単位で約 45 インチ]を得たいと思うことを防げなかった」(“Mistress, in teaching me, had given me the

*inch*, and no precaution could prevent me from taking the *ell*" 124-5)

という目覚めは、識字教育から疎外されたアフリカン・アメリカンが自助努力で身につけるべき能力として、読み手を力づける。

ダグラスは本を<sup>・</sup>読<sup>・</sup>んで、自分が奴隷であることに強い疑念を感じ、一度目の逃亡では、仲間の通行証を書<sup>・</sup>いて偽造する。アルファベットと英語を操ることは、その先の力に直結している。ダグラスの自伝は、奴隷という制度の内側にある感情的摩耗と理不尽さを正統に暴き立てるものであると同時に、彼が英語力と知恵をもって逃亡に成功した場所から語り下ろす点で、教養小説となっている。その象徴は名前である。「自分が自分自身の主人となった」(“I was now on my own master” 239) 後、「フレデリック・オーガスタ・ワシントン・ベイリー」(Frederick Augustus Washington Bailey) という本名を、ウォルター・スコット卿 (Sir Walter Scott, 1771-1832) の *The Lady of the Lake* (1810) の登場人物から採った「フレデリック・ダグラス」に変えて、文字通り生まれ変わっている。

その後、この自伝をもとにしたダグラスの伝記も多く書かれた。現在出版されている伝記は、奴隷制度と時代の簡単な解説から入り、奴隷であることに気づかなかった幼年時代から、制度の残酷さへの気づき、逃亡から奴隷制度廃止論の運動に身を投じるまでが説明される。*Who Was Frederick Douglass?* (Prince, 2014) はダグラスの語りを再編し、現代からの批評を付け加えて「言葉を武器とし、フレデリックはすべての人のための平等の権利を勝ち得るために戦う一生を送った。彼は公民権運動の父である」(“With words as his weapons, Frederick spent his life fighting for equal rights for all people. He was the father of the civil rights movement” Prince 37/465) と定義している。*A Picture Book of*

*Frederick Douglass* (Adler, 1995)、*Frederick Douglass: Writer, Speaker, and Opponent of Slavery* (Slade, 2007)、*Frederick Douglass: A Noble Life* (Adler, 2010) も、ダグラスの卓越した自由への意思と才能と、ほとんどの黒人が法律で読み書きを禁じられていた時代に、白人が死守していた自由に至る読み書きの道をこじ開けたことを、現代の視点から賞賛している。奴隷が手に入れることを白人が頑なに拒んだ読み書きと自由を、卓越した知性と行動力で手に入れたアフリカン・アメリカンとして可視化され、勇気あった人物として示されている。

ブッカー・T・ワシントン (Booker T Washington, 1856-1915) の自伝 *Up from Slavery* (1901) も、タイトルが立身出世をそのまま表し、続く *Working with the Hands* (1904) はタスキギー大学での職能訓練を自信として、「立ち上がった」その後を支える土台となったことを語る。これらの自伝も、他者による伝記の底本となり、「奴隷より立ち上がって」「自らの手で働く」自由の意義を伝えようとしている。

黒人男性が奴隷から鮮やかに脱出し、よき未来に向けた主体的な行動をとったことは英雄視され<sup>23</sup>、勇気ある「肌の色の黒いアメリカの兄弟」の物語になっている。奴隷制度や人種差別を告発し、独立心、神の前での平等、自分のために働く自由などのアメリカの価値観と合致するテキストとして、逃亡奴隷の自伝は、アメリカ人としてアフリカン・アメリカンを付け加えている。

## ②アフリカン・アメリカンの偉人伝

次の段階として、ダグラスやW・E・B・デュボイスに匹敵する偉人の発掘もおこなわれる。デュボイスの妻のシャーリー・グレアム・デュボ



イス (Shirley Graham Du Bois, 1896-1977) は、40年代から50年代に、ダグラスやブッカー・T・ワシントンのほか、タスキギー研究所 (Tuskegee Institute) で南部の気候や土壌に合う農作物の研究に取り組んだ植物学者のジョージ・ワシントン・カーバー (George Washington Carver, 1864-1943) や、エンターテイメントにも才能を見せた公民権運動家のポール・ロブスン (Paul LeRoy Bustill Robeson, 1898-1976) の伝記を精力的に執筆した。*Story of the Negro* (1948) を書いたアーナ・ボンタンは、*Famous Negro Athletes* (1964) で運動選手を総説してパイオニアたちの功績を称えた。

スポーツでは有色人種参加の壁は厚く、選手や観客のカラーフォビア以上に、この時代の黒人は、科学的に白人より知的にも身体的にも劣ると考えられていた (川島 20-23) が、伝記作家はそれを転覆しようとした。ボンタンが取り上げたモーセス・フリート・ウォーカー (Moses Fleetwood "Fleet" Walker, 1856-1924) は、プロのマイナーリーグで初めてプレイした黒人選手である。やがて人種隔離が進み、黒人のプロ野球はニグロ・リーグ (Negro League Baseball, 1920-48) に人種分離されたが、まだニグロ・リーグがある時代に、アフリカン・アメリカンのジャッキー・ロビンソン (Jackie Robinson, 1919-72) は、メジャーリーグで初めてプレイした。1947年にチーム入りし、差別や嫌がらせを受けつつ、最初のシーズンに新人王のタイトルを得て、1957年に引退後に彼の背番号42は永久欠番となり、1987年から新人王は彼の名を冠して「ジャッキー・ロビンソン賞」(Jackie Robinson Award) と命名されている。差別されても耐え、野球で認められていったロビンソンの半生は、伝記という顕彰作業にふさわしい。

奴隷制という国家としての暗部と直結するアフリカン・アメリカンに

は、肌の色を越えた感情的嫌悪がつきつけられる。このとき、伝記の執筆は文化集団からの切実な欲求であるともいえ、現代でも、アフリカン・アメリカン児童文学のカテゴリーの中で伝記は大きな位置を占める。伝記は、フィクションと同様に必要とされ、子ども読者に対してきわめて実用的な意義を持つ。

公民権運動のデモに参加した名も知られない普通の市民の人生がダグラスやロビンソンのような偉人と重ね合わせることができる点にも、アフリカン・アメリカンの伝記というテキストの特質がある。アフリカン・アメリカンが求める伝記は、脚色されつつ「本当のお話」として受容され、真実味のある物語として子どもに手渡され、誇りへの切実な願いをかなえる。

ロビンソンの伝記を知った黒人の子どもに起きる変化は、ベーブ・ルース (George Herman Ruth, Jr.; Babe Ruth, 1895-1948) を知った白人の子どもよりも大きく、先人の物語を必要とする渴望は、白人よりはるかに切実だったのではないだろうか。肌の色や貧困による逆境を越えきれない子ども読者に対し、伝記を書く作家たちは、境界を跳べた先人がいたという事実をまず伝えた。成功した黒人の物語は子ども読者を力づけ、手本になる像を示す。ラングストン・ヒューズの示した “I, too America” の思想を受け継いだ自伝や伝記は、アフリカン・アメリカンであるというだけで日陰に置かれてきた偉大な輪郭を示す。称えるべきアフリカン・アメリカンの像をアメリカ社会で可視化し、ロール・モデルを示すことによって、エンパワメントとなっている。

## ii. トール・テール - *John Henry* (1940)

## ① トール・テールとは何か

トール・テールは、民間伝承のほら話を指し、特にアメリカで発展した文芸である。開墾作業の中で仲間同士が楽しい時間を共有するために語られ、語りの巧みさや誇張が評価されている。たとえば、伝説的な木こりのポール・バニヤン (Paul Bunyan) は、生後 3 週間で 6.4 キロメートルの大木をけり倒し、成長後はベーブ (Babe) という青色の牛を連れて、見事な伐採作業をおこなうとされる。アライグマの帽子がトレードマークの軍人デイヴィー・クロケット (Davy Crockett, 1786-1836) や探検家ダニエル・ブーン (Daniel Boone, 1734-1820) は実在の人物であるが、その開拓者精神や勇気を誇張した逸話も素材になり、洗練されてトール・テールになる。トール・テールは、史実や実在の人物を脚色し、情報網やメディアの先駆けともいえる人為的ルートに拠って伝播し、白人アメリカが好むヒロイズムをふくらませながら、文化の磁場を形成してきた。

ドイツで収集されたグリム兄弟 (Jacob Ludwig Karl Grimm, 1785-1863 and Wilhelm Carl Grimm, 1786-1859) の『子どもたちと家庭の童話』 (*Kinder und Hausmärchen*) の第 2 版 (1819) の巻頭には、市井の農婦の肖像画が掲げられている。これはグリム兄弟が「各時代に栄えたりっぱなものは、時がたつにつれて衰え忘れられることがあるが、目立たない、たいして価値のなさそうなものはもちこたえて、永くその民族の滋養になっていくと考えている (中略) 今日の術語でいえば基層文化こそ強靱さがある」 (小澤 56) と考えていたからであり、作者不詳の昔話においては、華やかなものではなく、小さく、弱く、目立たない存在のものに真の価値が潜む。小さな者が大きく華やかなものに

打ち勝つというメルヘンには人間の価値についての真実があり、「土着的な文化の方は、なかなか変わらず、脈々と生きている」(58)。この点でトール・テールは、同時代の中の突出したできごとをきらびやかに語る点で正反対である。

## ②ハンマー・ソングからの展開 - バラッドかブルースか

民衆の英雄である白人のポール・バニヤンやデイヴィー・クロケットと並ぶアフリカン・アメリカンの登場人物がジョン・ヘンリー (John Henry) である。ジョン・ヘンリーは、19世紀の鉄道敷設現場で働いていたアフリカン・アメリカン労働者とされ<sup>24</sup>、そもそもは、彼を歌ったハンマー・ソングが大衆歌として知られ、19世紀後半から、様々な細部が付け加えられたり誇張されたりして、トール・テールに発展した。

ハンマー・ソングは、大勢が調子を合わせて肉体労働をするときにテンポを取る役割を果たす黒人の労働歌で、工事現場でツルハシやシャベルを一斉に振り上げたり振り下ろしたりする作業をおこなうときの掛け声代わりである。2-3節で構成され、メロディは単調で延々と続く。ハンマー・ソングの中のジョン・ヘンリーは、ハンマーを打つ重労働で死んだ、ということだけが (Nelson 116)、あるいは、「恋歌とフォークロア、自分の仕事に対する誇りの表現、あるいは他の歌から借りた歌詞など、特に意味のつながりを持たないことが思いつくままにとどめ(ママ)なく歌われてい」(ウェルズ 78) た。

本来は名も知られない、力の強い一鉄道工夫にすぎないジョン・ヘンリーは、掛け声の中で繰り返されるうちに人物としての像を結び始め、歌として発展していくようになった。このとき、歌には2つの方向性、

すなわち、バラッド（民衆の物語歌）になる版と、ブルースになる版がある。

バラッドの場合、現在手に入るほとんどの版では、ジョン・ヘンリーは現場のリーダーに強いられる形で蒸気ドリルと対決し、精一杯の努力で機械に打ち勝ったのちに、心臓が破れて死ぬ。ヘンリー・ゲイツ・ジュニアとネリー・イヴォンヌ・マッケイ（Nellie Yvonne McKay）が 26 連の 4 行詩でまとめたバラッド（Gates and McKay 31-34）では、ヴァージニア州東部出身のジョン・ヘンリーは、幼いときから自分がビッグ・ベンドの現場で死ぬことを予期している。彼は成長して、ポリー・アン（Polly Ann）と結婚し、12 ポンドのハンマーを操って、鉄道敷設現場で重宝される。ビッグ・ベンドまで工事が進んだとき、現場監督から、セールスマンが持ち込んできた蒸気ドリルとの掘削勝負を打診されて引き受ける。山を掘り進む競争で、蒸気ドリルが 9 フィートしか進まなかったところ、ジョン・ヘンリーは 14 フィートを掘るが、勝負に勝ったところで力尽き、ポリー・アンの腕の中で死ぬ。工夫らは、ジョン・ヘンリーの遺体を川べりに埋葬する。そのそばを蒸気機関車が通るとその音がジョン・ヘンリーを追憶しているような響きに聞こえる。

バラッドでは、ハンマー・ソングのジョン・ヘンリーの背景として、恋愛や誇張や誇りを付け加えられ、素朴な力自慢から、抑圧される労働者の闘争、勝利、失望の過程を語るフォークロアに変容した。このとき、

ジョン・ヘンリーの人生もパワー - どんなシステムも一人の人間から取り去ることのできない個人のなまの強さに関係する。また、彼が押しつけられている社会的地位であるところの弱さにも関係する。何千人もの鉄道労働者に彼は刺激を与え、手本になった。惨めで容

赦のない空気の中で働きつつも、なんとか彼の足跡を残そうとした彼らのような男が。

John Henry's life was about power - the individual, raw strength that no system could take from a man - and about weakness - the societal position in which he was thrust. To the thousands of railroad hands, he was an inspiration and an example, a man just like they who worked in a deplorable, unforgiving atmosphere but managed to make his mark.

(Hempel Web)

として、勇敢な労働者像が仮託される。「機械の導入をきっかけにリストラをもくろむ白人オーナーと、それに抵抗する黒人労働者たち。ジョン・ヘンリーは自分たちの方が作業が早いことを証明するために、機械（蒸気ハンマー）との対決をオーナーに直訴する」（大和田 33-4）話と捉えるなら、バラッドのジョン・ヘンリーは、労働者として普遍化される存在にもなり、社会のマイノリティや抑圧を受けている者に広く共感可能なストーリーとして展開しうる。肉体的な強さを権力によって無効化される弱さは、資本家 - 労働者の枠組における労働者のメンタリティとも関連し、ジョン・ヘンリーが強ければ強いほど、その体力を収奪される客体であるという矛盾を生む。勝ちながら死ぬという結末に、ジョン・ヘンリーの怪力是一種の異形の哀しさを持つ。ジョン・ヘンリーの悲哀は、機械との競争という無謀な挑戦を受けて立たなくてはならなかった工夫の悲哀である。

他方で、ブルースは、アフリカン・アメリカンの音楽であるため、バラッドとは異なる方向性を持つ。ブルースでジョン・ヘンリーが素材に

なる場合、奴隷解放後に極貧の<sup>シェアクロッパー</sup>小作人か肉体労働者になるより生きる道がなかった南部のアフリカン・アメリカンとしての像に焦点が合わせられる。たとえば、作者不詳のブルース“**This Old Hammer**”の歌詞で、歌い手は、「この古いハンマーはジョン・ヘンリーを殺した / けどおれのことは殺せない、おれのことは殺せない」(“**This old hammer killed John Henry / But it won't kill me, it won't kill me**” Sabatella Web)と死からの逃走を決意している。

ハディ・レドベリー (Huddie Ledbetter [Leadbelly], 1885-1949) の“**Take This Hammer**” (1965) は、「このハンマーを持っていってくれ、リーダーのところへ」(“**Take this hammer, carry it to the captain**”)の繰り返しののち、「もし逃げたのかと聞かれたら / 飛んで逃げたと言ってくれ」(“**Tell him I'm gone / If he asks you was I runnin'**”), 「あいつらはおれにコーンブレッドと糖蜜をくれたがるが / おれには誇りがある」(“**They wanna feed me cornbread and molasses / But I got my pride**” Leadbelly Web) と歌う。

ジョン・ヘンリーがブルースに展開する場合、アフリカン・アメリカンにまつわる徴を残しつつ、人間として逃亡を選ぼうとする。自分の命も賭けなければならないことが分かっているが、勝負に巻き込まれていく末端の労働者の悲哀を避けることを人間らしさと捉え、バラッドとは正反対のアプローチになっている。

### ③ 子どもの本への展開

バラッド寄りか、ブルース寄りか。ジョン・ヘンリーのトール・テールは、アフリカン・アメリカンが再話するときにはブルース寄りになり<sup>25</sup>、

さらに子ども向けには、そこに見出し得る主体性や希望が中心化されるようである。

黒人歌を収集したアフリカン・アメリカンのジョン・ウェズリー・ワーク・ジュニア (John Wesley Work Jr., 1871-1925) は、ジョン・ヘンリーがきわめて優秀な「ハンマー使い」(“steel drivin’ man” Work 39) で、掘削競争や力自慢のコンテストでことごとく優勝していたため、トンネルを掘るための蒸気ドリルの営業がやってきたときに「その機械はジョン・ヘンリーの怒りと侮蔑をかい、彼と蒸気ドリルの一日かけた対決を営業代理人に申し出た。挑戦は受け入れられた」(“This machine excited John Henry’s ire and contempt, and he challenged the agent to an all day drilling contest between himself and the steam drill. The challenge was accepted” Work 39) と書き、挑戦が彼自身の意思であることを強調している。人間対機械の無謀な挑戦は、権力者である上司に強いられた戦いというよりは、機械を人間の領域に持ち込もうとする近代化への不満を端緒としているようであり、労働者としてのジョン・ヘンリーの主体性が確認できる。

ジュリアス・レスターとジェリー・ピンクニー (Jerry Pinkney, 1939-) の絵本 *John Henry* (1994) は、ジョン・ヘンリーの男性としての誇りに光を当て、ポリー・アンは登場しない。蒸気ドリルが現場に来たときには、ジョン・ヘンリー自身が「競争しようぜ。あんたの蒸気ドリルと、ハンマーを持ったおれとで」(“Let’s have a contest. Your steam drill against me and my hammers” Lester *John Henry* n.pag.) と宣言する。

*John Henry* は、ジョン・ヘンリーが他者を楽にするために、主体性を持って誠実に労働するありようと、強さが自然の営みと結びついていることを強調し、誇張表現でユーモアを醸し出す。たとえば、彼が生ま



れたときには鳥やけものが集まり、にぎやかに鳴いたりさえずったりして祝福する。父親を助けて木を切ったり修繕の仕事をしたりするために早起きするときには、まだ地平線に上ってこない太陽を恫喝して夜明けを呼ぶ。祖父の形見の 2 つの 20 ポンドハンマーを受け継ぎ、道路建設の途中の岩山まで来たときは、ハンマーをふるって山を崩すが、ハンマーを振り上げては下ろす動きに合わせて、体にまきつくように虹<sup>26</sup>が生まれる。

虹は、ジョン・ヘンリーの魂のように空想され、人生における短い至高の瞬間、肌の色の多様性、魂の美しさを象徴する。彼は、仕事をしながら「おれには虹がある / リン！ リン！ / 肩に虹をまきつける リン！ リン！ / 雨は降りっこない / リン！ リン！」(“I got a rainbow / RINGGGG! RINGGGG! / Tied round my shoulder / RINGGGG! RINGGGG! / It ain’t gon’ rain, / No, it ain’t gon’ rain. / RINGGGG! RINGGGG!” Lester *John Henry* n.pag.) と歌う。

レスターのジョン・ヘンリーが自分の汗と腕の軌跡から生み出す虹は、腕力を示すのと同時に、自分を寿ぎ、自分を見守る自然を取り込んで、より完璧な男性像を作りあげる。ジョン・ヘンリーは、蒸気ドリルに打ち勝つが、山の外に出た瞬間に静かに倒れ、虹は山肌を滑り落ち、太陽が涙を流す。ジョン・ヘンリーと虹は有機的に組み合わせられ、相乗効果を生む。虹を見ながら、人々はジョン・ヘンリーに敬意を表し、「大事なものは、いかに良く生きたかだ」(“What matters is how well you do your living” Lester *John Henry* n.pag.) といいあう。

歌や話の大多数のバージョンでは、ジョン・ヘンリーは線路のそばに埋葬され、機関車がトンネルを通るときの音が、ジョン・ヘンリーの叫び声に比せられるが、レスター版は、彼はホワイトハウスに埋葬され、

静かな夜に歌声が聞こえる、と結ばれる。合衆国市民としてのジョン・ヘンリーの誇りが前景化され、アメリカの政治の頂点であるホワイトハウスを選択するところに、レスターの再話の意図が明示されている。アフリカン・アメリカンがその底辺労働においてアメリカの建設事業に尽くし、威厳をかけて機械と対決した点で、英雄に多様性を付け加え、アフリカン・アメリカンの顔を持つ登場人物が人間としての矜持を持っていることを可視化する。結果的に死を迎えても、それは敗北ではなく、人生を精一杯生きた結果であるという称揚のメッセージを、子どもにも伝え、英雄として示すのである。

### iii. 昔話 - *The African-American Folktales* (1985)

#### ① アフリカン・アメリカン民話の越境性

アメリカの主流文化は旧宗主国を源流とするものであり、ヨーロッパの風物が新大陸で変化を起しつつも、イギリスやオランダやドイツの痕跡をとどめている。アイルランド、オランダ、ドイツ、北欧など様々な地域から運ばれてきた民話は、アメリカの内側に点在する小さな共同体のつながりを強化し、むしろ、アメリカの話ではない、という異質さを強調する。

土着の民話に関しては、白人同化政策<sup>27</sup>のもとでネイティブ・アメリカンの文化伝承は大きな打撃を受け、アメリカの口承的な民話は一度ほとんど滅びた。1970年代以降の先住民復権運動に至って、ネイティブ・アメリカンの神話や民話が注目を浴び、諸部族の創生譚や動物物語は英語に書き起こされて再配布されるようになった。しかし、言語の問題、

諸部族の差異が無化されている点、一種のエコロジー主義<sup>28</sup>の視点に基づいた話を選び取られている点で、すでにそれらは語られていたときのままではない。

この状況において、アフリカン・アメリカンは、アフリカやカリブと結びついた民話を語り、独自の発展をとげていた。1980年代に民俗学者のロジャー・エイブラハムズ（Roger Abrahams）が編纂した *African-American Folktales*（1985/1999）に収録された民話を検討すると、アフリカン・アメリカン民話が、カリブや西アフリカと自在に接続し、共同体の物語を構築した上で、白人のアメリカとは異なる地図を浮かび上がらせ、アメリカという土地に根を張っていることが分かる。エイブラハムズは、

アフロ・アメリカンの他の形の創造的活動——歌、舞踏、多様な身体装飾の技法——と同じように、これらの物語は、根から切り離され奴隷にされた人々の忍耐力を立証しているだけではなく、その人々が保存し、その上に築き上げてきた文化的伝統の活力をも立証している。物語を語るという要素は、この人々が携えて来ることのできた、たった一つの「手荷物」の中に入れていたのだ——かれらが個人をまた社会を飾る伝統的なスタイルとして、また、かれらのパフォーマンスと祝祭のやり方として。本書に収録した物語のきわめて多くのは、事実上、サブ・サハラ・アフリカのいたるところで見られるものの新世界版であり、したがって、アフリカの美学が持ち続けている活力を実証する、他の偉大な黒人のパフォーマンスの伝統と並存している。

（Abrahams [邦訳] 37）

と述べる。

エイブラハムズが再話した 107 話のうち、アメリカ合衆国で採話されたのは 46 話で、残りは西インド諸島やジャマイカでの採話だが、どの話もどの地域で採集されていても不思議はない。ガラ方言の語り口やスラングの多用、動物や悪魔などの登場人物、唐突な始まりと暴力的な終わり方などの点でいずれも互いに連関している。

トリックスターのアナンシは、西インド諸島の再話に頻繁に登場する。“Buh Nansi Scares Buh Lion”(No.17)は、トバゴの再話でライオンがナンシに家を明け渡す羽目になり、“Anansi Plays Dead”はセント・ヴィンセント島の再話で、死んだふりをして皆を騙そうとしたアナンシが「死者はおならをする」とスズメバトに言われておならをし、逆に馬鹿にされる (No. 70)。トリックスターはその行為の善悪ではなく、企みが成功したかどうかで評価されるので、ライオンには勝利し、スズメバトには敗北しているといえるだろう。

アナンシという名前はアメリカ南部での再話にはあまり見られず、*African-American Folktales* でアナンシが主役／脇役として登場する 13 話はいずれも西インド諸島の採話である。しかし、トリックスターは、「くも、うさぎ、はと、ときには毛の抜けた宿なし犬の姿で」(Abrahams [邦訳] 263) 現れると考えれば、キツネを騙す“Brer Rabbit’s Riddle”のウサギ (ジョージア州) も、“The Signifying Monkey”でゾウやライオンを戦わせてジャングルをかき回すサル (フィラデルフィア州) も、アナンシの別様態と考えられる。

アメリカ南部と西インド諸島に共通する類話もある。“Three Killed Florie, Florie Killed Ten”(No.86)はセント・ヴィンセント島のお話で、

弱そうに見える者が機知を使ってほうびを得るプロットである。クリケット (Cricket) という名前の「魔法使いの男の子」(the Old Witch Boy) が、王様の娘に解けない謎を出し、娘と結婚することになる。それを妬んだ家臣は、布で覆ったコップの中にコオロギを入れ、何が入っているか当てるといふ謎を出す。クリケットは、自分自身を憐れんで「かわいそうなコオロギ」(“Poor me, poor Cricket”) と言い、その課題も乗り越える。ヴァージニア・ハミルトンが編集した *The People Could Fly* (1985) には、アメリカ南部の民話として“Florie”の類話の“Manuel Had a Riddle” (Hamilton *People* 65-75) が収められている。賢いマニユエル (Manuel) は、懸賞金を目当てに城に行き、王女に解けない謎を出して勝利する。ほうびを惜しんだ王から再度出された課題も魔女の助けを借りて克服し、賞金を得て母親のもとに帰る。“Florie”と“Manuel”は構成もほぼ同じで、家畜 (犬[“Florie”]/ロバ[“Manuel”]) がケーキに仕込まれた毒で死ぬ、その家畜を食べてハゲワシが死ぬ、そのハゲワシを食べた者 (コンドル[“Florie”]/盗賊[“Manuel”]) も死ぬ、という食物連鎖も一致している。

神の像も類似している。ノース・カロライナ州で採集された“Hankering for a Long Tail” (Abrahams No.10) では、ウシやウマのような長い尻尾が欲しいと考えたウサギが、神に交渉しに行く。神がウサギに与えた課題は他の動物を傷つけるものであったため、最終的にそれをやりとげてきたウサギは罰せられ、願いは叶わない。神はウサギがいた松の木に雷を落とす。ウサギはかろうじて逃げられるものの、木は黒焦げになってしまう。慈悲深い神とは一線を画した荒々しさである。ジュリアス・レスター編の *Black Folktales* (1969) に登場する神も、気さくな伊達男といった様子で、“How God Made the Butterflies”では、

世界を作ったあとの神は揺り椅子でタバコをくゆらせ、「悪くない仕事だぞ、おい」(“Not a bad job, if I say so myself” Lester *Folktales* 3)とつぶやく。

アフリカン・アメリカン民話は、西インド諸島とアメリカ南部を包括して国境を越えた地図を描くことができ、登場人物たちはアフリカでのふるまいを取り戻して连接的に躍動する。民話は、奴隷としてその土地に根づかざるを得なかった人たち同士をつなぎ、土着性に変容しつつ、アフリカとのつながりを積極的に受容させる役割を担い、もうひとつのアメリカの物語として可視化される。

アフリカン・アメリカンからの主張という点では、それを語る黒人英語にも大きな意味がある。アフリカン・アメリカンの特質は肌の色や血筋ではなく、言説や言葉で規定されるとゲイツが考えているように

(Gates *Signifying* [邦訳] 17-29)、アフリカン・アメリカンは、自分たちで作り上げた言葉によって自意識や共同性を形成してきた。

黒人英語は、アフリカン・アメリカン文化のポジティブな面の土台となる。新大陸に荷揚げされたアフリカ人は、その環境に適応し、暴力をふるわれずに生きのびるため、白人農園主には分からないコードを用いて、様々なコミュニケーションの手段を生み出した。アフリカン・アメリカンとして、アメリカ語とアフリカの諸地域の言葉が単に混ざり合っただけのピジン語（どちらの言語にも属さない混成語）から、独自の語彙や文法を持つ黒人英語（エボニクス）を体系的に発展させた。

白人の英語から見れば「崩れた」「野蛮な」黒人英語は、独自の複雑な文法を持ち、“You is beautiful”“I loves you”などの人称無視、“been”による過去の強調、“be”を用いた習慣的現在表現、接頭辞“a-”を現在分詞形につけることによる近未来などの複雑な時制表現のほか、“I don’t

have nothing”という二重否定による否定の強調、“Us don't say nothing”のような人称格変化の無視など、話者間で合意される複雑な文法が存在し、正式な体系を持つ（泉山 230-237）。アフリカン・アメリカンの「人種の意識を背景にした同胞意識、その固有の特徴を意識化」（菅原 18）した言語は、いわば「黒人の精神世界の遺産」（藤本 11）の核となった。

アメリカで生まれ、アメリカで生きのびるために洗練されていった黒人英語で語られてきた昔話は、弱い者が強い者を倒すストーリーに農園主と奴隷の関係を読み取って溜飲を下げる文化も含め、アフリカン・アメリカンにとって精神的な遺産である。と同時に、これらの民話には、ヨーロッパから移入された昔話や、ワシントン・アーヴィング

（Washington Irving, 1783-1859）が独立戦争の記憶や移民の文化を利用して創り上げた話にはない土着的なアメリカらしさがあり、アメリカの語りに複数性を与え、民衆にアフリカ出身の者たちが混淆していたことを可視化する。

## 2. 抑圧への異議申し立て

### i. 人種差別の告発 - *Roll of Thunder, Hear My Cry* (1976)

#### ① Logan Saga について

「可視化」のもうひとつの展開例として、アフリカン・アメリカンを「見えない人間」におしとどめようとする政治に反発する作品がある。

ミシシッピ州生まれのミルドレッド・テイラーは、人種差別がはびこる南部で子育てすることを避けた両親とともに生後3ヶ月のときにオハ

イオ州に移り住んだ。子ども時代は、親戚付き合いでしばしばミシシッピ州を訪れ、一族の物語や歴史を聞くのを楽しみ、南部への愛着と、アフリカン・アメリカンであることの誇りを育んだ。他方で、オハイオ州で過ごした子ども時代には、クラスで唯一のアフリカン・アメリカンになることが多く、級友や教師の先入観と自分が知っている親族や友人の姿の乖離に悩まされた。暖かい愛情と強い自尊心を持つ人間としてのアフリカン・アメリカン像を描きたいという強い欲求から文学を志し、醜悪な差別主義の告発を目指した。

1973年に、児童人種問題図書評議会（Council on Interracial Books for Children）のコンテストに応募した *Songs of the Trees*（1975 [出版]）が一位を獲得して、この作品から始まる Logan Saga をライフワークとしている。シリーズは、1930年代のミシシッピ州に暮らすアフリカン・アメリカンのローガン家の年代記となっている。*Songs of the Trees* は、父のデイヴィッド（David）が出稼ぎで不在の間に、ローガン家の子どもたちが自分たちの土地の木を不当に伐採する白人たちの行為を目撃し、父の帰りを待ちわびる。ニューベリー賞受賞作の2作目 *Roll of Thunder, Hear My Cry*（1977）、*Let the Circle Unbroken*（1981）、*The Gold Cadillac*（1987）、*The Friendship*（1987）、*The Road to Memphis*（1990）、*The Well: David's Story*（1995）と続いた。好奇心旺盛で正義感が強い少女キャシー（Cassie）の視点から、様々な局面での人種差別への抵抗を主張し、最終巻となる *The Land*（2001）でキャシーと同居する祖母キャロライン（Caroline）の若い時代に遡る。

公民権運動の闘いの相手は、白人ではなく差別主義である。1963年の「ワシントン大行進」(The March on Washington for Jobs and Freedom)のときに、リンカーン像の前でおこなわれたマーティン・ルーサー・キ



キングの“I Have a Dream”の演説は、アメリカの根ざす資本主義と自由の意識を反映し、経済という共通言語を用いて、アフリカン・アメリカンに白人と同等の権利を求めた。

即興の演説の中で、キングは「いつの日にか、ジョージア州の赤土の丘の上で、かつての奴隷の息子たちと、かつての奴隷所有者の息子たちが、仲間として同じテーブルにつけるだろう」(“[O]ne day on the red hills of Georgia, the sons of former slaves and the former slave owners will be able to sit down together at the table of brotherhood” King 104) と述べた。英語を話し、労働し、忠実に国民の義務を果たしているにもかかわらず、アフリカン・アメリカンは抑圧された状況に置かれ続けているという不当性を起点に、キングは、白人も加えたアメリカ全体における平等社会の樹立を大きな夢として掲げ、結果的に、革新派寄りの白人有権者の理解を得ることにも成功した。

キングの演説は、一義的には黒人の権利を求めつつ、きわめて直截にアメリカの夢を語り、黒人を含むアメリカ市民像を目指している。Logan Saga も、公民権運動の理念を受けて、黒人が白人世界に巻きこまれながら共生することを求め、それを受け入れる白人の協力を得ながら、運動を展開しようとしている。

ワシントン大行進という特殊なデモの状況下で、経済の語法を用いたキングの演説は、解釈され、広がっていく。差別主義者を貶めるのではなく、正しく義務を果たしている「わたしたち」に正当な支払いをしてほしいと依頼し、白人も巻き込んだ夢を語る姿勢において、キングの演説は境界を越え、様々な領野で解釈可能な声となる。Logan Saga における土地への意識は、キング牧師が追求する「すべてのアメリカ人が受け継ぐべき約束手形」(“a promissory note to which every American

was to fall heir” King 102) の要求と合致する。

## ② *Roll of Thunder, Hear My Cry* における抑圧

*Roll of Thunder, Hear My Cry* は特に告発の色合いが強く、1933年のミシシッピ州を舞台に、キャシーのおばあちゃん (Big Ma) のキャロライン、父親のデイヴィッド、母親のメアリー (Mary)、キャシーの兄で12歳のステイシー (Stacey)、弟で7歳のクリストファ・ジョン (Christopher-John)、リトル・マン (Little Man) ことクレイトン・チェスター (Clayton Chester) の4人兄弟を中心に物語が展開する。

ローガン家が所有する土地は、19世紀には、白人の地主であるハーラン・グレンジャー (Harlan Granger) のものだった。南北戦争後に現金が必要になったグレンジャーは、チャールズ・ジャミソン (Charles Jammison) という別の白人に土地を売り、南部の紳士であるジャミソンは、人種差別をせずに、1887年に、黒人であるポール＝エドワードとキャロラインのローガン夫婦に200エーカーを売り、さらにチャールズの息子のウェイド・ジャミソン (Wade Jammison) の代になった1918年に200エーカーを売り増した。

もとはグレンジャー家のものだった土地を手に入れたことで、ローガン家はグレンジャー家から恨まれている。戦争で失った土地のうち、数千エーカーをすでに買い戻したグレンジャー家は、隙あらば、ローガン家からその400エーカーを取り戻そうとしている。現在、ローガン一家は新しく買った方の200エーカーの土地の代金の返済中であるが、収入の道は、綿花畑の収穫と父親の出稼ぎと教員である母親の給料だけである。

*Roll of Thunder* は、人種差別が根深い地域で、黒人に対する理不尽な行為が様々な局面で起きていることを炙り出し、黒人を「見えない人間」にとどめようとする圧力に反発する。告発の第一は、肉体的な暴力である。ルイジアナ州に出稼ぎに行っていたデイヴィッドは、白人に逆らったことで解雇されたモリスン (Morrison) という中年男性を畑仕事のための男手として連れ帰る。モリスンは幼いときに「ナイトライダー」 (“nightrider”: 作中に登場する過激な人種差別集団) に襲われ、両親を殺された過去を持ち、デイヴィッド不在の家で、恐怖の「ナイトライダー」が来たときには散弾銃を構えて決死の守りにつく。商店を経営する白人のワレス (Wallace) は「ナイトライダー」の一味とされ、デイヴィッドは、子どもたちがワレス商店に出入りしたとすると、彼らを連れて「ナイトライダー」の犠牲者である黒人男性の見舞いに行く。油をかけて焼かれた男性は、動くことも話すこともできず、子どもたちはショックを受ける。その後、デイヴィッドはワレス商店の不買運動を起し、遠くのヴィックスバーグの町で買い物を始めたことで目をつけられ、撃たれて足をけがし、働けなくなる。教師である母親も、奴隷制について生徒に議論させたことで解雇される。

子どもも例外ではない。白人の貧しい小作人であるシムズ (Simms) 家の子どもである R・W とメルヴィン (Melvin) はステイシーに嫌がらせを仕掛け、その妹のリリアン・ジーン (Lilian Jean) は、キャシーを見下す。キャシーが店でずっと待っていた自分よりもリリアンが先に接客されたことがおかしいと主張すると、リリアンの父親は、キャシーの腕をねじ上げて歩道に転がし、リリアンに「さま」 (“Miz” Taylor *Thunder* 115) をつけて謝るように迫る。

精神的な暴力も告発される。黒人の子どもたちはみな、学校で人種差

別を味わう。埃だらけの道を遠くの黒人学校まで歩いていく子どもたちの横を白人学校の子どもたちを乗せたスクールバスが通り過ぎ、追い立てる。学校では、白人が使い古して使用不可になった 20 年前のお下がりの教科書が配られ、抵抗したリトル・マンは先生に叱責される。

*Roll of Thunder* は、「黒人の生活はいまだに悲しくも人種隔離の枷と差別の鎖にがんじがらめになっている」(“the life of the Negro is still sadly crippled by the manacles of segregation and 、the chains of discrimination” King 102) ことを実証し、「尊厳と克己心という高みでの苦闘」(“our struggle on the high plane of dignity and discipline” 103) を描いて、人種差別に異議申し立てをしている。自分の身に降りかかってくる人種差別と黒人憎悪にどう立ち向かうか、ローガン家の子どもたちは常に考えなければならない。

### ③ T・J の意味

人種差別の複雑さとテイラーの主張を示すために造形されているのが黒人少年の T・J である。T・J は小作人の息子で、意地悪く、ひねくれている。ステイシーにカンニングの濡れ衣を着せ、ワレス商店に出入りしたことを親に告げ口した上、シムズ家の R・W とメルヴィンに近づいて、自分が白人と同じように偉くなったかのようにふるまい始める。だが、シムズ兄弟は T・J を利用したいだけで、T・J が望むような友達になったわけではない。2 人は、T・J に手引きさせて雑貨店に強盗に入る。盗みをしているところで店主夫婦が目覚まし、もみ合っているときに、兄弟が主人を殺し、奥さんを倒してしまう。店から逃亡した後、T・J は、犯人がシムズ兄弟だと言う、と言ったことで激しく殴られ、ロ

ーガン家の子どもたちのところに助けを求めに来る。さらに、店主殺しは T・J であるという話が流れ、「ナイトライダー」がリンチに来るとい  
う噂がすぐに聞こえてくる。

切羽詰まった状況の中で、ステイシーから話を聞いたデイヴィッドは、  
暴行を避けるために、現金収入になるはずの綿花畑にひそかに火をつけ  
る。グレンジャーの畑に延焼しないように近隣の白人も黒人も集まって  
消火する間に、T・J への襲撃の計画は立ち消える。リンチは避けられる。  
しかし、T・J は収監され、黒人に不利な裁判で死刑になることが予見さ  
れる。

テイラーは、黒人は正直で清廉ならば一定の理解を得られるという白  
人のご都合主義に対し、異議申し立てをする。これまでの児童文学が「や  
ましいことのない、正直な子どもであるにもかかわらず」黒人であるゆ  
えに暴力がふるわれることの痛みを描いたとすれば、*Roll of Thunder*  
は「怠け者の悪い黒人は徹底的にリンチされてもよい」という圧力に反  
発し、暴力を受ける T・J をあえて狡猾な小心者として描くところに主  
張がある。善良でも卑屈でも、人種を理由に差別を受けることは許され  
ない。良い黒人なら人として権利を認めるという論理は、白人の優位性  
を再強化する。ずるくても、不誠実でも、それは人種差別を受ける理由  
にはならない。

私は T・J を好きだったことは一度もなかったけれど、彼はいつで  
もそこにいた。私の一部だった。私の人生の一部だった。ちょうど  
泥と雨のように。私は、彼がいつでもそこにいるだろうと思ってい  
た。だけど、泥も雨も埃も、みんな消え去ってしまうものなのだ。  
私はそれを知り、理解した。T・J にあの夜起きたことを私は理解で

きなかった。だけど、それが消え去るものではないことが分かった。  
私はあの夜起きた、消え去ることのないできごとのために泣いた。

私は T・J のために泣いた。T・J のために、土地のために。

I had never liked T.J., but he had always been there, a part of me, a part of my life, just like the mud and the rain, and I had thought that he always would be. Yet the mud and the rain and the dust would all pass. I knew and understood that. What had happened to T.J. in the night I did not understand, but I knew that it would not pass. And I cried for those things which had happened in the night and would not pass.

I cried for T.J. For T.J. and the land.

(Taylor *Thunder* 276)

善良で寛容で誠実な黒人でなければ受け入れないという重い前提に反発し、T・Jを守るために男たちは綿花畑を焼く。T・Jは、ローガン家の子どもたちの影であり黒い羊であると同時に、黒い羊であっても、正義を受けるべき人間であり、シムズ兄弟という、白人の誤った共謀関係に巻き込まれて、利用されていることと、T・Jの不良性は個人のみに理由を帰すべきでないというテイラーは批判している。

T・Jは、共に痛みを分かち合うべきアフリカン・アメリカンの共同体から切断され、シムズ兄弟と同じ土壌に立つこともない。分離から生まれる悲劇が、アフリカン・アメリカンを利用しようとする白人の共謀関係の中で増幅されていることをキャシーは悲嘆する。多様性を拒絶する閉鎖性へ、怒りが向けられる。*Roll of Thunder, Hear My Cry* という題名は、綿花畑を焼く火を消した嵐の雷鳴を表す。雷鳴の中のキャシーの

「叫び」は、白人の強大な権力というよりは、人種差別によってアフリカン・アメリカンを不可視化しなければ自分たちの権益を守れないと考える白人の弱さに向けられているのではないだろうか。

ii. 無力な白人少年 - *Mississippi Bridge* (1990)

① 公民権運動と白人

R・W、メルヴィン、リリアン・ジーンの弟で、シムズ家の末子にあたる少年ジェレミー (Jeremy) は、兄姉と異なり、黒人に対する偏見や優越感を持たない。 *Roll of Thunder* では、

彼は変わった少年だった。私が学校に通い始めてからずっと、朝は辻まで一緒に歩き、夕方はそこで私たちを待った。自分の学校ではしょっちゅうばかにされ、一度ならず、腕に大きな赤いみみず腫れを作ってきたが、彼の姉のリリアン・ジーンが満足そうに言うには、私たちとつきあった結果なのだという。それでも、ジェレミーは私たちと会い続けた。

He was a strange boy. Ever since I had begun school, he had walked with us as far as the crossroads in the morning, and met us there in the afternoon. He was often ridiculed by the other children at his school and had shown up more than once with wide red welts on his arms which Lilian Jean, his older sister, had revealed with satisfaction were the result of his associating with us. Still, Jeremy continued to meet us.

(Taylor *Thunder* 14)

と描写される。彼は、黒人と親しくするという理由で白人の子どもから軽蔑され、黒人の子どもからは白人であるという理由で、心を開いてもらえない。いずれの側から見ても、アウトサイダーになる少年である。

1950年代以降、公民権運動は激しさを増していったが、そこには、アフリカン・アメリカンではない者も多数参加していた。運動の中で最初期におこなわれたフリーダム・ライド<sup>29</sup>は、1961年に7人の黒人と6人の白人のグループでおこなわれ、座席分離のルールを公然と破りながら、グレーハウンドのバスでワシントン D.C.からニューオーリンズを目指した。非暴力の姿勢が申し渡された結果、フリーダム・ライダーたちは、南部の各停留所で、こん棒や鉄パイプを持った人種差別主義者に襲われ、特に、アラバマ州アニストンでは、バスのドアを押さえた上で焼夷弾が投げ込まれ、白人も含めて全員が焼死寸前のところを州兵がかろうじて救助した。現地の警察は、白人優位主義者たちの暴行を見過ごし、治安を混乱させた罪でフリーダム・ライドの参加者たちを逮捕した。

ウィスコンシン州出身の白人ジェイムズ・バーグ (James Zwerg, 1939-) は宗教上の理由から運動に参加し、アラバマ州バーミングハムでのフリーダム・ライドに参加したときに暴徒に襲われ、障害が残った。投票者登録運動を指導するためにミシシッピ州に入った連合組織協議会 (Council of Federated Organizations; COFO) の白人、黒人の3人の活動家たちが副保安官からKKKに引き渡され、死体で発見された暴行致死事件は、映画 *Mississippi Burning* (Allan Parker dir., 1988) の元となった実話である。



フリーダム・ライダーの勇気と彼らの闘いの正しさを称賛する人々の中には、白人の宗教指導者が大勢いた。ビリー・グラハム師は、フリーダム・ライダーを襲撃した者を起訴するよう求め、「いかなる社会においても特定の人々が 2 級市民として扱われるのは嘆かわしいこと」であると断じた。ユダヤ教のラビ、バーナード・J・バムバーガー師は、白人の人種差別主義者による暴力を「道徳的にも法律的にも全く弁護の余地のない」ものとして糾弾し、公民権運動活動家に「急がず慎重にやる」ように要求する白人たちを批判した。そして、どんなときにも心の真っすぐな人たちがいた。

(クラック 39)

運動家を襲ったのは白人の人種差別主義者であるが、その暴力に非暴力で抵抗しようとした白人がいて、この運動が混淆を求める複数の者からの声であることがしるしづけられている。

ミルドレッド・テイラーの作品は「文化的に覚醒させるフィクション」(“culturally conscious fiction” Sims 49) であり、「テイラーが関連づけているのは独特の経験で、アフロ・アメリカンだけでなくすべての子ども一般に直接に伝わるメッセージである」(“It is a distinctive experience she relates a message directed to Afro-American children in particular and to *all* children in general” (Harper 75) とされる。この意味で、白人のジェレミーと黒人のキャシーは、肌の色ではなく相手の美德によって評価するという同じ公正性を持ち、彼らと同じ精神的自由をもつ「すべての」子どもを巻きこんでいく可能性を包含する。白人による人種差別を告発しつづけてきたテイラーがジェレミーを創造したことで、テイラーの目指す公正性が、マーティン・ルーサー・キング

のめざす「肌の色によってではなく、人格そのものによって評価される国」(“a nation where they will not be judged by the color of their skin but by the content of their character” King 103) につながり、黒人を可視化しようとする試みを援護する。

## ②差別主義の敗北

ジェレミーは、人種差別の悲劇に対しては、子どもであるために無力だが、キャシーの視点から語られるできごとを別の視点から目撃することはできる。人種差別は白人とイコールで結ばれているわけではない。Logan Saga の 5 作目の *Mississippi Bridge* (1990) は、ジェレミーを主人公にし、*Roll of Thunder* と同じ時代と場所を扱いつつ、人種分離に対する異議申し立ての方法を深化させている。

*Mississippi Bridge* はジェレミー (Jeremy) の一人称で書かれている。彼は、町の雑貨屋で、店主が黒人の客には冷たい店主が白人客にはお世辞を使う様子に疑問を持っている。雑貨屋の客には白人も黒人もいるが、景気が良くない社会の中で、現金仕事に出かけることをうっかりほめた黒人のジョサイアス (Josias) に白人客が困縁をつける場面を批判的に見たり、黒人と親しく話すジェレミーに、人種差別主義者の父親が平手打ちをしたりする場面がすべてジェレミーの体感として描かれている。

町に週に一度だけ来る循環バス<sup>30</sup>は、人種隔離政策で白人用と黒人用の席が決められている。足の悪いローガン家のおばあさんが立たざるを得ず、キャシーが空いている席に座らせようとする、そこは白人用であるとおばあさん自身がキャシーを叱責する。黒人はみな、白人からの

制裁を恐れている。さらに白人客が乗り込んでくると、運転手は黒人客を無理にすべて下ろしてしまう。

この日、仕事のためにそのバスにどうしても乗らなければならないと懇願したジョサイアスはバスから蹴り出され、途方に暮れる。しかし、その後、バスを悲劇が襲う。長雨で川が増水し、その川を渡る橋が老朽化していたため、白人ばかりの客を大勢乗せたまま、転落してしまうのである。駆けつけたジェレミーとジョサイアスは茫然としつつ、救助を呼びに行く、ついさっきまで雑貨店で談笑していた婦人も幼い少女も溺死体となって引き上げられる。

*Mississippi Bridge* の中で、ジェレミーの父親は、黒人と話をしている息子を叱責し、差別用語を使って黒人を貶める。白人のバス運転手は、白人乗客のために容赦なく黒人客をバスの外に蹴り出す。しかし、ここにあるのは、白人対黒人ではなく、人種差別を自明とする町の空気と人種隔離のルールに疑問を持てるか否かの二項性である。シムズ兄弟の手先になってしまった黒人 T・J の弱さと、ローガン家の子どもたちを好ましく思うジェレミーの公平性をともに扱うことにより、キング牧師の主張と同調するテイラーは、人間個人ではなく、いかに制度が分断する悲劇に抗うかをあらわにしている。

白人の多様性を、アフリカン・アメリカンがあぶり出す。「かつての奴隷の息子たちと、かつての奴隷所有者の息子たちが、仲間として同じテーブルにつく」 (“the sons of former slaves and the former slave owners will be able to sit down together at the table of brotherhood” King 104) というキングの空想は、白人の側に黒人が招き入れられるという図式ではなく、白人も黒人もそれぞれの境界線内から出て、第三の場で仲間となることを示す。アフリカン・アメリカンの多様性と白人の

多様性が混淆して、ジェレミーとジョサイアスが新たな友好の場をつくりはじめるとき、それを叶えない分断への罰のように、バスは転覆する。

*Mississippi Bridge* の巡回バスの運転手は、排他的な単一性を保持し、多様性志向を裏切る。運賃を払って先に乗っているにもかかわらずバスから引き摺り下ろされるジョサイアスの無念を後に残して走り去る。その暴力の犠牲になるかのように、バスに乗った白人の乗客たちは濁流に飲み込まれる。T・Jの悲劇が個人の問題ではなく、アフリカン・アメリカンの重荷の問題であったように、単一化や純粋性を保持しようとする白人を乗せたバスは転覆する。アフリカン・アメリカンを目に見える人たちと捉え、白人だけが力を持つべきだという価値観に与しないジェレミーは、シムズ家の兄たちとは別の方向に歩み出す。ジェレミーが進んでいく先には、社会が強いる人種の区別を乗り越えて、アフリカン・アメリカンも白人も、互いに互いの存在を意識する多様な場が作り出され、そこで、因習の犠牲になった人たちが吊われる。

### iii. 開拓者の複数性 - *The Land* (2001)

#### ① 肌の色の白い黒人

*Logan Saga* の最終巻にあたる *The Land* (2001) は、キャシーの祖父ポール＝エドワード・ローガン (Paul-Edward Logan ; 以下ポール) がアメリカの開拓者として登場する。舞台は南北戦争後の深南部で、ポールは、奴隷のデボラ (Deborah) と白人農園主のエドワード・ローガン (Edward Logan) の間に生まれ、キャシー (Cassie) という姉がいる。デボラの父カナティ (Kanati) は、白人が入植してきて立ち退かざ

るを得なかったネイティブ・アメリカンで、父と母方の祖父の形質が現れたポールは色白で直毛のため、見た目では白人と区別がつかず、「パッシング」（なりすまし）が可能である。

家族関係は、一見人種差別とは無縁で、当時の状況と地域性を考えれば、恵まれているといえるほどである。エドワードの正妻（死去）の子である3人の異母兄、ハモンド（Hammond）、ジョージ（George）、ロバート（Robert）は、ポールと対等の兄弟精神を発揮し、ポールがいじめられると兄3人が仕返しに行ったり、4人で率直に将来の希望や土地への愛着について話し合ったりする。父のエドワードは3人とポールに分け隔てなく接し、デボラとも心から愛し合っている。ポールが特別に愛されているのは、兄たちにではなくポールだけがミドルネームに父の名前を受け継ぐ名誉を与えられていることから分かる。

第一部は、家族との複雑な愛憎を中心としたポールの少年時代のエピソードをはじめ、馬の調教に示される彼の天性の才能と、同じ地所に住むアフリカ系アメリカ人の少年ミッチェル（Mitchell）との人間関係が語られる。第二部は、窃盗事件を起こしたミッチェルと共に列車で逃げたポールがミシシッピ州にやってきて、家具職人と馬の調教師としての職を得たのち、父の遺産ではなく「自分だけのもの」としての美しい土地を手に入れるまでを描く。困難な道のりをたどって夢を実現するまでの過程において、かつて反目しあったミッチェルとポールは無二の親友になっていく。

元奴隷の子どもであるポールは、いくら見た目が白くても、白人社会に受け入れられることはない。その肌の白さは、むしろ、父母がどのような政治的関係にあったかを示す刻印でもある。しかし、公平に見えるローガン家にも複雑な力学が働いている。父と3人の息子たちは母屋に、

デボラとキャシィとポールは離れに住み、デボラは女手のない母屋に通って、家事全般を担当している。近隣の白人の客が招かれるときに、デボラが同じ席につくことはない。4人の白人と3人の黒人の家族関係は、大人になれば人種差別のある世間に出なければいけないという認識を前提としている。父は、ポールは兄たちと別の道に歩んだほうがよいと考え、ロバートを上級の学校に進学させる一方で、ポールは家具職人の徒弟に出す。ポールを嫌う白人の客がきてトラブルがあったときはあえて彼らの前で鞭をふるい、ポールに屈辱を与える。肉親の善意の情と、人種という堅牢な壁に跳ね返され、ポールは、父の土地は自分のいるべき場所ではないという思いを強めていく。

同時に、白い肌のポールはアフリカン・アメリカンの輪からも疎外される。子ども時代のミッチェルは、彼を「白いニグロめ」(“you white nigger” Taylor *Land* 10) とののしる。ポールは、肉体労働の現場では意図的に黒人の仲間から距離を置き、一人で木工をしたり本を読んだりする。成人してからも、孤独を好み、馬の調教、家具製作、材木切り出しなど様々な仕事をかけもちし、稼いだお金を堅実に貯金する。空いた時間は弟子の少年(のちに妻になるキャロラインの弟)に仕事を教えたり、本を読んだりして過ごしている。生来の勤勉さに加え、酒場にいけば不審と好奇の目で見られ、からまれるのを自己防衛するためでもある。肌の色の濃淡で、暗黙の階層化がなされている社会で、肌の色の薄さが役に立つときもあるが、誤解を受けた場合、彼はすぐに「わたしはニグロです」といい、ペナルティを避けている。彼は、白人でもあり黒人でもあるのではなく、白人でも黒人でもないことを自覚し、その中で自分の生きる道、自分の願いをかなえるための方法を模索する。

ミッチェルは、ポールと対になる青年として、ありふれた粗野な黒人

男性像を引き受けている。小作人の息子であるゆえにポール以上に抑圧され、父親に虐待されている。短気で怒りやすい性質、陽気で女好きな性格、力仕事で生計を立てる生き方など、ポールと何もかもが正反対である。だが、ミッチェルがその典型像を引き受けたからこそ、ポールは実直で冷静なポールとして、折り目正しく生きることができる。ポールは、黒人であるミッチェルの助けを借り、証人や契約書といった白人の手続きを周到に踏むことではさまを生きのび、望むものを獲得するのである。

作品は、ポールが2つの世界の間で克己努力し、感情を抑え、将来を考え、忍耐強く働いた結果、アメリカの正統な開拓者となるまでのプロセスを<sup>ビルドアップスロマンス</sup>教養小説風<sup>ビルドアップスロマンス</sup>に書いている。ポールの半生は実在の人物の伝記と同様の重みを持ち、白さと黒さの二重性という障壁を跳び越えて、美しい土地を獲得したアメリカの成功者として輪郭化され、マーティン・ルーサー・キングの「自由への渇きがあつても、敵意憎悪のコップから喉をうるおさないようにしよう」(“Let us not seek to satisfy our thirst for freedom by drinking from the cup of bitterness and hatred” King 103) という呼びかけに答えるものとなっている。

## ② チャールズ・インガルスとポール＝エドワード・ローガン

*The Land* は、白人によるアメリカ児童文学の<sup>キャノン</sup>正典であるローラ・インガルス・ワイルダー (Laura Ingalls Wilder, 1867-1957) の *Little House in the Big Woods* (1932) と相関関係におくことができる。*Little House* のシリーズの特長である、すべて自助努力で作り上げる開拓民の力強さや自然の脅威や困難に立ち向かっていく家族像は、*The Land* で

もアフリカン・アメリカンの開拓者像を通じて明示されている。

*Little House* では、作者ワイルダーの父親をモデルにしたチャールズ・インガルス (Charles Ingalls) が理想的な開拓民として描かれている。自分の手で猟をして獣をしとめ、ブタは解体してベーコンやソーセージにする。畑をたがやして小麦や野菜を手に入れる。丸太小屋も家具もすべて手作りで、生活必需品だけでなく、妻のために優雅な飾り棚を作る余裕もある。メアリー (Mary)、ローラ (Laura)、キャリー (Carrie)、グレイス (Grace) の姉妹にとってつねに良き父であり、雪にとじこめられ、狩猟も農業もできない時期にはフィドルを弾いて音楽で家族をなぐさめ、娘たちにお話を聞かせ、ごっこ遊びの相手をする。

チャールズは生まれつきの開拓者である。作者の家族が実際に辿った道のりに脚色が加えられているものの、多くの部分が伝記的事実と重なる。作中で、チャールズとその一家は、ウィスコンシン州の森の中の丸太小屋から幌馬車で旅立つ。2作目で、ネイティブ・アメリカンの土地の真ん中に小屋を建て、豊かな土地の恵みを得たものの、政府の方針と合わずに立ち退きを求められる。一家は土地を求めて放浪し、最終的には、デスメットという町の近くで測量師たちの代わりに湖畔の小屋を守って一冬を過ごし、その間に理想の土地を見つけて払い下げ申請をおこなう。

*The Land* のポールの道のりは、チャールズ・インガルスのそれと重なる。チャールズは理想の土地を求めて旅を続け、誠実に人と付き合いながら開拓に人生を捧げている。*By the Shore of Silver Lake* (1939) で払い下げ農地の申し込みをおこなうときには、古い友人のエドワーズ (Edwards) に助けられて望む土地の権利を手に入れる。チャールズと同じ物語をポールに重ねるとき、*The Land* もまた、人種隔離政策を推



進する南部の黒人像を前面に押し出しながら、土地をめぐる開拓し、自己証明しようとするアメリカ人の物語であり、開拓者としてのアフリカン・アメリカン像を可視化している。

*The Land* のポール・ローガンは、チャールズ・インガルスと同様の誠実なアメリカ市民であることを静かに主張する。2人の放浪の道のりは、最終的にもっとも納得のいく土地を得るための長いプロセスである。この道のりにおいて、高潔な人格、勤勉、賢い妻、土地という点においてチャールズ・インガルスと同様、ポール・ローガンも義務を果たすアメリカ人として努力する。*The Land* は、白人と同じ働きをする黒人の開拓者像を構築することで、開拓というアメリカの夢におけるアフリカン・アメリカン像を可視化する。

差別を自明とする社会で黒人が生きのび、自分の土地を得ようと願うとき、ポールは、劣位であることを前提に、あえて白人と同じ価値観でものを見る。彼は、経済性と高潔な人格を武器に、白人と黒人のふたつの世界を渡り、アメリカ人として開拓の権利と土地を手に入れた男であり、チャールズ・インガルスと並び立ち、アメリカの開拓者の自画像に黒人を付け加えている<sup>31</sup>。

### ③ キャロライン・インガルスとキャロライン・ローガン

児童文学が開拓を扱うとき、団結する家族像は不可欠である。チャールズ・インガルスの妻のキャロライン (Caroline) は、東部の出身で教養があり、結婚前には学校の先生もしている。夫について開拓地を転々とする生活の中でも暮らしを整えようという意識を保ち、娘たちにしつけと教育をほどこす。開拓民の妻として何でも手作りする。菜園で野菜

を育て、家畜の世話をし、バターを作り、日々の料理をし、洋服を縫い、はぎれでキルトを作るやり方を子どもに教える。勇気があり、チャールズが狩りや買い物で留守にするときには、賢く家を守る。見た目も美しく整え、親戚の家でのダンスパーティでは、コルセットの入った美しいドレスで踊り、アメリカの良妻賢母である。1930年代の不景気なアメリカで光明として受け入れられた理想のインガルス一家の中心には母親がいる。

*The Land* でポールが結婚するのは、キャロライン (Caroline) というアフリカン・アメリカン女性である。ポールとミッチェルは、ともにキャロラインを愛したのだが、ミッチェルの思いを知ったポールは慎ましく身を引き、友人夫婦を祝福する。ポールは、土地を手に入れるための材木切り出しの仕事を続けるために、3人の同居生活は続け、キャロラインは男2人と、ポールに弟子入りした自分の弟の世話と家事とを引き受ける。しかし1年もしないうちに、ミッチェルは、人種差別主義者の白人に撃たれて死に、死ぬまぎわにポールにキャロラインと結婚するよう遺言する。キャロラインを妻に迎えることは道義に反さず、むしろ、ミッチェルの強い希望なのである。一方のキャロラインも、身ごもっている子を産み、ミッチェルのやりかけた仕事を完成させたいという意志をもつ。実家へ帰ることを勧めるポールの忠告はきかず、開拓地に残る。友人の力を借りて手に入れた土地で、ポールは無事にキャロラインと結婚し、生まれた男児にミッチェルと名づける。

ポールの妻のキャロラインとチャールズの妻キャロラインは、ともに開墾地のキャロラインとして同列である。経済性と宗教はアメリカの推進力であり、多様な国民を一元化するときの旗印であり、彼女たちはともにその道を忠実にたどっている。土地に手を加えて利益を生み、キリ

スト教をよりどころとして教会に通い、祈りをささげる。惜しみなく働き、子どもを産み育てる。2人はともに、開拓の国アメリカが理想としてきた主婦である。

キャロライン・インガルスは、夫の権威を保ちながら4人の娘を教養あるレディに育て、家を建てる手伝いや家畜の世話からバター作りに料理まですべてを完璧にこなす。キャロライン・ローガンは、わびしかった開拓小屋に明るさを持ち込み、温かい食事を男たちに食べさせ、ブタやメンドリを飼って田畑を切り開き、信仰心のなかった夫を教会に連れていく。キング牧師が、肌の色を越えてアメリカ人同士として白人と黒人が同じテーブルにつくことを「アメリカン・ドリームに深く根ざした夢」(“It is a dream deeply rooted in the American dream” King 104)と述べたように、キャロライン・インガルスとキャロライン・ローガンは同じふるまいをし、人種分離は労働と生活の最先端に立つ女性たちの姿において脱構築される。

キング牧師の演説は、アフリカン・アメリカンが国の重んじる価値観を順守し、ルールを理解していることを周到に伝達するものである。「白人の兄弟」(“white brothers” King 103)というキングの呼びかけには、特定の民族集団の権利を代表したり、差別主義者を攻撃したりする閉鎖性はない。この演説は、公民権運動の最も大きな盛り上がりの瞬間のひとつであるが、公民権運動後もアメリカに響く声として受けいれられ、教科書に採択されたり、反復して暗誦されたりするようになった。それは、このメッセージがアメリカ人全体に演繹可能で、個々の文脈において解釈できる開放性を持ち合わせていたからである。アフリカン・アメリカンの開拓者夫婦を可視化する点において、*The Land*はキングの演説に応答している。

ポールとキャロラインの夫婦は特殊な例かもしれない。しかし、日々の食事の支度をし、子どもに食べさせ、家畜の世話をする主婦として、キャロライン・ローガンはキャロライン・インガルスと同じ地平に立つ。開拓民として手仕事をおこなうその場所で、アメリカは耕され、開発される。2人のキャロラインの像は空間を越え、アメリカの根幹である開拓を支える女性として重ねあわされ、アメリカの開拓の風景に多様性をもたらし、アフリカン・アメリカンの開拓者夫婦の力強さを可視化している。

### Ⅲ 受容の展開

Ⅲ章では、受容の展開を考える。第一に、民族集団におけるアフリカの受容である。子ども読者を対象にするとき、アフリカは素朴な憧憬の地となり、その経由地である西インド諸島も好ましく見つめられる。ラングストン・ヒューズとアーナ・ボンタンの *Popo and Fifina* (1932) はハイチを舞台にし、西インド諸島を経由したルーツを子ども読者に空想させる。また、“All the God’s Chillun Had Wings”の民話は大農園で苦しめられている奴隷が、アフリカの言葉の呪文を思い出してアフリカへ飛び帰るという逃亡奴隷のアレゴリーで、帰還地としてのアフリカへの憧れを示す。

第二に、家族史の中で個人がアフリカン・アメリカンであることを受容する物語があり、これについて、正の面の受容と負の面の受容の両面から考える。扱うのはいずれもヴァージニア・ハミルトンの作品で、正の面の受容の例は *M.C.Higgins, the Great* (1974)、負の面の受容の例は *Sweet Whispers, Brother Rush* (1982) である。*M.C.Higgins* は、自分の絶対的な価値観の中で生きていた少年が家族の物語を受容し、今の場所で生きていくことを決意する物語である。*Sweet Whispers* は、鏡の中で過去の世界を見て一族の負の歴史を知る少女の物語である。事実は衝撃的だが、彼女は、その負の過去を踏まえて、次の段階に歩み出すことができる。

第三に、民族集団として、奴隷制度や人種差別の歴史を捉え直す作品である。ハミルトンの *The Magical Adventures of Pretty Pearl* は、アフリカの神の子どもが新大陸にやってきてアフリカン・アメリカンになる神話的ファンタジーである。また、アンジェラ・ジョンソンのリアリ

スティックな中編 *Toning the Sweep* は、人種差別の激しい南部の受容を主題にしている。アフリカン・アメリカンの子どもが心強く生きていくために必要な過去の経験の受容を物語の形で追体験させていく過程が、いずれもエンパワメントにつながっている。

## 1. 「中間航路」の再受容

### i. ハイチに見る夢 - *Popo and Fifina* (1932)

#### ① 緩衝地としての児童文学

ハイチをはじめとするカリブ海域諸国は、アメリカから見れば、貧しく政情不安定な地域である。奴隷制時代のカリブ海地域では、少数の白人が狭い島内で大量の奴隷を使って農園経営をおこなった結果、奴隷の数が宗主国の人間の数を圧倒していった。

ハイチ革命 (“*Révolution Haïtienne*” 1791-1804) は奴隷制時代の奴隷や、奴隷解放以後のアフリカン・アメリカンを勇気づけたひとつの成功モデルである。この革命は、いくつかの段階を踏み、まず、旧仏領サン・ドマングにおけるトゥーサン・ルーヴェルチュールによる第一次黒人蜂起があり、次に、ルーヴェルチュールの部下であるジャン＝ジャック・デサリーヌ (*Jean-Jacques Dessalines, 1758-1806*) による第二次黒人蜂起が起きた。デサリーヌは、他国と共同してフランス軍に勝利し、1804年にジャック1世 (*Jacques I*) と名乗ってハイチ帝国 (*Empire du Haïti*) が建国された。また、イギリス統治領だったジャマイカでは、18世紀を通じて、洞窟や山中に逃げた奴隷がマルーン (“*maroon*”) と

呼ばれる共同体を形成して反乱を起こしつづけた。

同じ時期、アメリカ大陸では、黒人奴隷は制度上の身分だけでなく人口の点でもマイノリティであり、奴隷制時代には 1712 年のニューヨーク奴隷蜂起 (The New York Slave Revolt)、1739 年のサウス・カロライナ州でのストノの反乱 (The Stono Rebellion)、1831 年のナット・ターナー (Nat Turner, 1800-31) の反乱などがあったが、いずれも短期間に制圧され、首謀者や協力者には、報復に近い処罰や制裁が加えられていた。ハイチ革命を経たハイチ共和国は、たとえ国家としての運営が順調に進まず、経済政策の失敗、南北分裂と治安の悪化、東部のドミニカ共和国の独立などの国難が続き、1915 年から 34 年の間はアメリカが軍事支配していたとしても、黒人が主体性を獲得しえた場として、アフリカン・アメリカンが肯定的に空想することが可能な場所であるといえる。

アメリカからハイチを見ると、その先にはアフリカがある。20 世紀前半、現実のアフリカは、すでにアフリカン・アメリカンの帰る場所ではなかった。だが、黒人知識人がアメリカでの権利の拡大を求めて知的な運動をくりひろげているとき、大衆は、むしろアフリカ回帰運動であるラスタファリ運動に熱狂していた。ラスタファリとは、天国をアフリカに想像し、その精神的な基盤となる強力な思想で、1930 年代のジャマイカでキリスト教を軸にして興り、農民や労働者を引きつけた。中心になったのはジャマイカ出身のマーカス・ガーヴェイ (Marcus Mosiah Garvey, 1887-1940) で、黒人の帝国を築いたエチオピアへの回帰やレゲエ音楽との関連を特徴としている。ガーヴェイは、1914 年にジャマイカで世界黒人開発協会アフリカ会連合 (The Universal Negro Improvement Association and African Communities League ; UNIA-ACL) を結成し、植民地化されることのない国をアフリカに建て

ようと訴え、1916年に本部をニューヨークに移して思想の拡充をはかった。1930年にアフリカに黒人の王が誕生するという予言が的中したかのように、エチオピアにハイレ・セラシオ1世（Haile Selassie I, 1892-1975）が即位したことで信奉者が増え、最盛期には600万人の会員を抱えた。

アメリカにおける白人との共存を模索していた黒人運動家は、こうしたアフリカ回帰運動について、自らアメリカから分離していく傾向を助長するものとして嫌悪していた。黒人がアメリカに根づいていこうとするとき、文化も風習も言葉も異なるアフリカに行く（帰る）という選択肢は、すでに現実的に困難であると同時に、アメリカへの帰属心に水を差すことになりかねない。知識人としてのW・E・B・デュボイスは、「アフリカ系の人間はアフリカに帰ろう」という素朴な言説が「アメリカには肌の色の白い者が住むべきである」という分離思想に容易に結びつくことを懸念し、*The Crisis* 掲載の論説で、ガーヴェイが運営するブラック・スター・ライン（Black Star Line）社が白人の人種差別主義者と連携し、黒人地位向上運動を混乱させ、組織としても腐敗していると、猛然と非難している（千葉 455）。デュボイスとは立ち位置や主張が異なっていたブッカー・T・ワシントンも、この点ではデュボイスと意見を一にし、ラスタファリ運動に反対した。また、ガーヴェイの財産は結局のところ、2隻の船しか保有しない小さな海運会社であり、エチオピアへの移住はおこなわれず、ガーヴェイ自身、役員が起こした詐欺事件に関わったことで有罪判決を受け、ジャマイカに送還され、のちにイギリスで客死した。甘美なアフリカやアフリカ回帰運動は、成人たちの思想の中では実体を持ちえなかった。

このように、ラスタファリ運動と黒人の権利運動が深刻に対立すると



き、その緩衝となるかのように、子どもを対象とするテキストでは、アメリカでの権利を求めつつ、アフリカを志向しカリブ海域と接続することが自在に容認される。

## ② ヒューズの見るアフリカ

ラングストン・ヒューズは、アフリカをきわめて好ましく捉えた作家である。「アメリカにおいては、後に意図的な努力によりアフリカ文化を再発見しなければならなかった」（江成 198）アフリカン・アメリカンとして、アフリカの音楽や身体的パフォーマンスがアメリカで変形し、アフリカン・アメリカンの文化の基部になったことの意味をよく理解していた。

音楽評論家の顔も持つヒューズにとって、ジャズは「アフリカの太鼓を打つところから成長」（Hughes *Jazz* [邦訳] 17）し、多様なリズムを持つようになった音楽である。ヒューズは、ニューイングランド地方のピューリタンの讃美歌や中西部のバラッド、黒人奴隷の労働歌であるフィールド・ハラーや、宗教性を持つ黒人霊歌と同様に、ジャズを「アメリカの音楽」（ibid. 23）として誇る。アフリカというルーツとアメリカという土壌の両方を持っていることを評価し、アメリカに住む自分の根がアフリカに続いていることを自覚し、ルーツの複数性を受容する。

1920年に17歳のときの旅の途中で書きつけ、*The Crisis* に発表した“The Negro Speaks of Rivers”で、ヒューズは

ぼくは夜明けにユーフラテス川で沐浴した

ぼくはコンゴ川のそばに小屋を建て、心地よい眠りについた

ぼくはナイル川を見上げ、その上にピラミッドを掲げた

ぼくはミシシッピ川の歌を聞いた

エイブ・リンカーンがニューオリンズに行ったとき

そして川底の泥が夕暮れに金色に変わるのを見た

I bathed in the Euphrates when dawns were young.

I built my hut near the Congo and it lulled me to sleep.

I looked upon the Nile and raised the pyramids above it.

I heard the singing of the Mississippi when Abe Lincoln

went down to New Orleans, and I've seen its muddy

bosom turn all golden in the sunset

(Gates and McKay 1291)

と、血の問題を相対化する複数性のイメージを鮮やかに浮かび上がらせた。移動という変容中の空間において、ユーフラテス川からミシシッピ川に至る水流が自分の血の中に流れていることを誇り、

川は神の身体の一部であり、彼の永続性に加担している。川は永遠を地上のもので寓意したものであり、深く、連続的で、謎めいている。川は黒人の歴史と関わりを持つ順に名前が挙がっている。この黒人男性は命をうるおす川のエキスを飲み、川の不死性を取り入れた。彼と川は一体化した。ミシシッピ川が夕日によって泥から黄金に変わる魔法のように魅惑的な変容は、リンカーンの奴隷解放宣言で奴隷が自由人になったことと鏡写しになっている。

The rivers are part of God's body, and participate in his  
immortality. They are the earthly analogues of eternity: deep,

continuous, mysterious. They are named in the order of their association with black history. The black man has drunk of their life-giving essences, and thereby borrowed their immortality. He and the rivers have become one. The magical transformation of the Mississippi from mud to gold by the sun's radiance is mirrored in the transformation of slaves into free men by Lincoln's Proclamation.

(Onwuchekwa 103)

ヒューズは、アメリカ黒人である自己をより広いダイナミクスに置き直し、アフリカへの道を示そうとしている。このとき、ハイチは、“the Africa of the New World” (Corbould 2079) であり、「多様で活力のあるアフリカン・アメリカンのアイデンティティを構築できるような金床のようなもの」 (“something of an anvil on which to forge a diverse and vibrant African American identity” 2095) として理解される。ヒューズの空想の中で、アメリカ南東部から西インド諸島、アフリカへ続く空間が再構想され、西インド諸島まで包括する地図が組み立てられ、アフリカン・アメリカンはルーツを肯定することができる。

### ③ *Popo and Fifina* の空想

詩人としてのヒューズは、都会のアフリカン・アメリカンが使う口語を用いて詩壇に衝撃を与えた。アフリカン・アメリカンの現実を見つめる詩を多く書き、子どもをモチーフにするときにも態度を変えなかった。子どもの視点を取り入れた詩集 *Black Misery* (1969) も、「惨めさ」

（“misery”）をテーマにし、「惨めというのは/ラジオで きみの近所が  
スラムといわれているけれど / きみにとってはふるさとであるとき」

（“Misery is when you heard / on the radio that the neighborhood /  
you live in is a slum but / you always thought it was home” Hughes  
*Misery* n.pag.）という環境や、「惨めというのは 白人の先生が / 黒人  
はみんな歌がうまいと言うのに / きみは歌ひとつ / 歌えないとき」

（“Misery is when your white teacher / tells the class that all  
Negroes / can sing and you can't / even carry a tune” n.pag.）と人種  
的な先入観に基づいた痛みを詩にしている。

ヒューズは、*Black Misery* について、「ここにある人種差別主義はほ  
とんどの場合、アメリカの言葉の構造の中に埋め込まれた、目に見えな  
い、ごく些細な類のものである」（“Most often the racism here is of the  
invisible, super-subtle kind that lies embedded in the structure of  
the American language itself. O’Meally” n.pag.）と言う。子どもの立  
場でなければ感じ取ることのできないその些細さに、人種差別の痛みの  
最も先鋭的な部分がある。詩集の少年は「ニガーをつま先でつかまえろ」  
（“catch the nigger by the toe” n.pag.）という鬼決め唄に傷つくとき  
に「黒の惨めさ」（“black misery”）を実感する。

他方で、子どもを読者として想定するとき、その「惨めさ」は後退す  
る。アーナ・ボンタンと共同で執筆した *Popo and Fifina: Children of  
Haiti* (1932) はハイチを舞台にし、同時代には「子どものための旅の  
本」（“all our travel books for children” *The New York Times Web*）  
に分類されたほどであるが、アフリカへのつながりが感じられるハイチ  
を舞台にし、幸せな家族像を描いている。

*Popo and Fifina* は、パパ・ジャン (Papa Jean) とママ・アンナ (Mama

Anna) とポポ (Popo) とフィフィナ (Fifina)、赤ちゃんのペンシア (Pensia) の 5 人家族の物語である。彼らは貧しい山村を出て、親戚を頼ってカプ・ハイチアンの町に来る。パパ・ジャンは漁師になり、子どもたちはお手伝いをして小銭を稼ぐことで一家は貨幣経済に参入する。ホームシックも感じるが、労働して現金を手に入れることが重要であり、ポポは、叔父の手伝いで木工職人の見習いになれたことを喜び、食事の間も惜しんで木皿作りに取り組む。ママ・アンナは育児があるため家庭にとどまり、経済活動には参加しないが、フィフィナは、母親の右腕として成長していく。

一家はアメリカの核家族である。移民と開拓民を混合したユニットであり、古くからの暮らしを守る山間の村から移動してきて、海沿いの町で労働者となる。多くの新移民がたどってきた道であり、祖国の貧しい小作人から新大陸の労働者になることが、彼らの夢であり覚悟であった。アメリカにいる黒人と異なり、ハイチの彼らは、開拓民として国づくりの経済に堂々と参加し、肌の色で差別されることはない。同じ黒い肌の者同士で町を建設し、職業を持ち、分業しあって暮らしている。この協働性は、黒さをたえずつきつけられ疎外されるアフリカン・アメリカンにとってのひとつの夢であり、黒人の国づくりが隣国のハイチに仮想されている。

*Popo and Fifina* では、アフリカの文化と土着の文化が融合して生まれた風物が受容される。村の中では、夜になると若者が通りで素朴な楽器を用いたコンゴ風の踊りを明るく楽しんでいる。シュロ葺きの屋根の下で、様々な大きさの太鼓が打ち鳴らされ、楽しむ人たちを見たポポは驚き、自分も踊りたいと考える。

ハイティの音楽には、ヴードゥーに関連する音楽ばかりではなく、作業歌、遊び歌、物語り歌から抵抗の歌や諧謔的な歌にいたる世俗的な音楽においても、アフリカの伝統が豊かに息づいている。ララ（*rara* または *Ra-Ra*）は、カーニヴァルととくに関係が深い、街頭で踊るダンスである。ララの楽団のなかには、呼び笛、太鼓、伝統的なラッパを使うものから、ヴァクシーヌと呼ばれるアフリカ伝来の竹のラッパをさまざまに組み合わせてほかの楽器とともに用いたり、あるいはヴァクシーヌだけを使ったりするものもある。ヴァクシーヌが出せるのは単音だけで、その音は楽器の大きさによって決まる。またこの楽器は吹くだけではなく、棒で叩いても演奏される。

(Segal [邦訳] 702)

ヒューズは、奴隷にされる前の先祖がかつて開放的に調和して生きていた場所としてアフリカを、独自の黒人文化を持つ国としてハイチを見つめる。ハイチでは、原色の鮮やかさや草原と雨の中に多様な動植物が共生する。空想世界と同様に強く肯定的に描かれ、アフリカに続く奏樂が好ましい文化として捉えられている。作品の中にメタ的にこめられたカリブ礼賛は、魔術的な雰囲気と異国情緒と同時に、それがアメリカのすぐ近くにあり得るといふ親近感ももたらす。

西インド諸島は、「一つの万華鏡的な全体性、すなわち、保持された多様性に対する非全体主義的な意識を表現する」(Bernabé [邦訳] 42) クレオール場所であり、アフリカン・アメリカン児童文学は、白人の国アメリカから分離して、アフリカ系のトポスと接続できる。大西洋岸域と接続するアフリカン・アメリカン文化から生まれた *Popo and Fifina* は、裏庭につながる越境性を持ちつつ、囲われた待避所としての庭園を

カリブ海に形成し、大西洋航路をアフリカに向かって遡り、アフリカン・アメリカンのルーツを子ども読者に受容させようとしている。

## ii. アフリカへの憧憬 - “All the God’s Chillun Had Wings” (1975)

### ① 民話という基盤

次に、アフリカをまっすぐに見つめる民話とその受容を考える。西アフリカのヨルバ (Yorùbá) 族の語り手が口承で伝えていた “All the God’s Chillun Had Wings” という民話は、奴隷として連れてこられたアフリカ人の間で共有され、アメリカでは、逃亡奴隷のアレゴリーとして広まり、子ども向けの民話集に採録された。動物や奴隷の滑稽な日常や闘争の民話とは成り立ちが異なり、大農園の奴隷の悲哀と故郷への逃亡を表現し、概要は以下の通りである。

かつてアフリカ人には翼があったが、新大陸や島嶼部で奴隷として働かされるうちに飛ぶ力を失い、普通の人間と同じ外見になった。ある残酷な奴隷主が農園にアフリカ人の監督者を置き、奴隷をこき使っていた。出産したばかりの女奴隷が赤ちゃんを背負って働いていたが、授乳と労働の厳しさに倒れてしまう。女が近くにいた老人に話しかけると、老人は「娘よ、まだだ」と止めた。しかし、何度目かに女が倒れ、監督者が鞭をふるおうとすると、「時が来た、行きなさい」と告げた。女は赤ちゃんを抱いて、鳥のように飛び去っていった。労役に耐えられなくなった別の男たちが倒れ、監督者が鞭で打とうとすると、彼はまた何事かつぶやいた。すると、奴隷は生

気を取り戻し、飛び去っていった。監督者たちが老人をつかまえて罰しようとする、老人自身も不思議な言葉を高らかに叫び、飛び去っていった。長い間忘れていた飛ぶ力を思い出した奴隷は、みな老人の後について飛んでいった。

(Gates and McKay 132-33)

この話を初めて書籍に収録したメアリー・J・グレンジャー (Mary J. Granger) の *Drums and Shadows* (1940) では、アフリカの秘密の言葉を知るのは、アフリカから直接輸送された奴隷だけであり、クレオールCreoleの奴隷は飛び去ることができない。また、同じ本には、69セントでアフリカに送りかえしてもらった話や、飛べると称してお金を集めてまわったよそ者の話も収録されている<sup>32</sup>。

「中間航路」をアメリカに向かう奴隷船の奴隷は、鎖につながれたまま、運動不足解消のために甲板で踊らされたり、詰め込めるだけ詰め込めるように設計された棚に身動きもままならない状態で寝かされたりした。話は、そのおぞましい「中間航路」を天空から逆走することを空想し、アフリカ人を黒人奴隷に変質させた「中間航路」の禊をおこなっている。白人農園主による暴力を無効化するにあたり、奴隷たちは誰にも手出しのできない空を通り、アフリカという土地の磁力に引かれるかのように飛び去って、永遠に戻ってこない。波の上の艱難辛苦を軽やかに上書きする彼らの飛翔は中間航路を批評し、アフリカン・アメリカンの読み手の心に解放感を与える。

一般文学では、ユージン・オニール (Eugene Gladstone O'Neill, 1888 - 1953) が戯曲の *All God's Chillun Got Wings* (1924 初演) でこの民話のタイトルを使って、幼なじみである白人女性エラ (Ella) と黒



人男性ジム（Jim）の結婚を扱っている。黒人と結婚することで白人女性の輪から疎外されるエラと、エラよりもはるかに教養があり高潔であるにもかかわらず、エラの望む夫になるために、黒人社会からはアングル・トムに通じると見なされる自己犠牲を払わなければならないジムの疲弊は、「人種アイデンティティという昔からある観念についての悲劇的なねじれ」（“a tragic twist on old conceptions of racial identity” Lively 201）を示すが、飛翔や奴隷の主題はなく、アフリカン・アメリカンらしさを出すためだけにこの題名が使われたようである。

主題により迫る例では、トニ・モリスンの *Song of Solomon*（1977）で、飛び去ることが悲劇的に捉えられている。主人公のアフリカン・アメリカン青年ミルクマン（Milkman）は、先祖をたどる旅の中で、曾祖父のソロモン（Solomon）が 21 人の子どもの中で末息子のジェイク（Jake）だけを連れてアフリカに向かって飛び去ったという話を聞く。この話は、「シュガー・ガール、ここに置いていかないで / 綿ボールで窒息する / シュガー・ガール、ここに置いていかないで / 白人野郎の手がわたしに軛をかける」（“Sugargirl don’t leave me here / Cotton balls to choke me / Sugargirl don’t leave me here / Buckra’s arms to yoke me” Chapter15）というわらべ歌に結びつき、置き去りにされたソロモンの妻のひとりであるライナ（Ryna）は、嘆き悲しんで狂人になる。文学作品においては、この民話には狂気がつきまというる。

## ②再話に込められるメッセージ

他方で、子ども向けに再話された“All the God’s Chillun Had Wings”では、見送る者と羽ばたいていく者は、分かれつつもどちらも祝福さ

れ、アフリカを目指すという点でつながりあっている。ヴァージニア・ハミルトンが編纂した昔話集の *The People Could Fly* (1975) に収められた“The People Could Fly”は、飛び去った者と同様に残って語り継いだ者の重要性を強調する。呪文を伝えたトービー (Toby) 老人、実際に飛び去ったマリー (Marie) と赤ちゃん、その他の解放奴隷の魂を祝福しつつ、それと同時に彼らを見送り、語り継いだ「飛べなかった人」にも共感を寄せる。

飛べなかった奴隷は飛べた奴隷のことを子どもに話して聞かせた。自由になったときに。自由な土地で火の近くに座ったとき、その話を語った。彼らは火の明かりと自由と話をとても愛した。

飛べなかった人の子どもがその子どもに話をしたそうだ。そして今、この私があなたに話した。

The slaves who could not fly told about the people who could fly to their children. When they were free. When they sat close before the fire in the free land, they told it. They did so love firelight and *Free-dom*, and tellin.

They say that the children of the ones who could not fly told their children. And now, me, I have told it to you.

(Hamilton *People* 172)

ここでは、語り継ぐという行為そのものが焦点化され、自由になったのちも人種差別に苦しみ、血を流さざるをえない現実よりも、自由になったことを寿ぎ、過去からの声を伝えようとしている。語り手は、飛ぶ行為を称揚し、その先にある自由な未来に疑いをさしはさまず、さらに

はその奇跡を語り継いでいこうとする。逃亡という現実味のある希望と、羽を生やして飛び去るといった魔術的な手段が混合した上で、それを見届ける者の精神も称揚されるのが子ども向けの語りならではの特質である。残された者の苦さは希釈され、見送る者もまた救われる。

アフリカと直接的に結びつくアフリカの言葉も重要視されている。ハミルトンの再話の中で奴隷を導くトービーは、「クム(……)ヤリ、クム、ブバ、タンベ」(“Kum[……]yali, kum buba tambe” 169)「クム　クンカ　ヤリ、クム(……)タンベ！」(“Kum kunka yali, kum[……]tambe!” Hamilton *People* 170)や「ブーバ　ヤリ(……)ブーバ　タンベ」(“buba yali[……]buba tambe” 171)というアフリカの言葉を唱える。これは「黒い約束である古い言葉」(“the ancient words that were a dark promise” 171)であり、モリスンの *Song of Solomon* (1977) で引用される「カム　ブーバ　ヤリ、カム　ブーバ　タンビー」(“Come booba yalle, come booba tambee”)「カム　コンカ　ヤリ、カム　コンカ　タンビー」(“Come konka yalle, come konka tambee” Morrison *Solomon* Chapter12) というわらべ歌にも類似している。*Song of Solomon* での呪文はアラブ語を想起させることが指摘され (Elia 182-202)、いずれにせよ、白人の農園主や監督人には分からない原初的な言葉が奴隷を救う。

ジュリアス・レスターが編纂した民話集 *Black Folktales* (1969) に収められた “People Could Fly” では、言葉と飛翔の技術はアフリカでの職業と結びつけられる。大農園では「男」「女」「子ども」としか区分けされていない黒人奴隷が、故郷の村では教師であり農夫であったことを思いださせる。言葉を知る職業としての呪い師への敬意が奇跡につながり、先祖から飛翔の言葉を教わった若い呪い師が人々を導いていく。さ

らに、レスターは、不思議な出来事は大昔のことで誰もその言葉は覚えていない、としつつも

だけど、分からないよ。もしかして、ある朝誰かが起きたら、奇妙な言葉が舌の上にあって、それを口にすると、みな腕を伸ばし、空に向かい、血にまみれた無情な土地を後にするかもしれない

But who know? Maybe one morning someone will awake with a strange word on his tongue and, uttering it, we will all stretch out our arms and take to the air, leaving these blood-drenched fields of our misery behind.

(Lester *Folktales* 103)

としめくくり、公民権獲得ののちも厳しい人種差別的な状況を乗り越える力と結びつけ、アフリカを目指した不思議な力と言葉が今を生きるアフリカン・アメリカンに前向きに作用するというイメージを残している。

この話の直後に、レスターは、“Keep on Stepping”という話を収録している。農園主との約束により自由を得た奴隷のデイブ（Dave）は、悔しがる農園主から「だけど、覚えている、デイブ。お前はやっぱりニガーなのだ」（“But remember, Dave. You still a nigger” Lester *Folktales* 105）という悪意ある言葉を投げつけられる。しかしレスターは、デイブに、その言葉に縛られることなく堂々と「歩きつづける」と語りかける。飛翔／逃亡／自由獲得ののちの元奴隷の、それまでに損なわれた精神の力も回復しようとしているのである。レスターは、人種差別を受ける同時代の黒人も念頭におきながら、アフリカの言葉で奴隷を飛び立たせ、「ニガー」という最大級の侮蔑の言葉を無意味化する。

アフリカの言葉を使うことは、アフリカン・アメリカンとしての自己受容に結びつき、言葉が奴隷に力を与えている。あるべき土地からもぎ離されて移送された人々の言葉は、アメリカで、白人農園主には奇異に聞こえ、脅威に見える。権力を脅かしうる言葉の力が奴隷たちを最終的に飛び立たせる。民話は、奴隷として尊厳を奪う大農園に背を向け、故郷であるアフリカを目指して遡って飛び去っていくという軌跡を称揚し、中間航路の禊をおこなう。連れてこられた道をたどり直すことにより、子ども読者にルーツの受容を促し、その困難の中でも人間としての言葉を思い出して主体的にふるまえた奴隷たちの像を提示することで、同じアフリカン・アメリカンとしての誇りを持たせようという意思がある。

## 2. 家族史の受容

### i. 正の受容 - *M.C.Higgins, the Great* (1974)

#### ① ポールから地上へ

子どもの自己受容と成長は、児童文学の大きな主題のひとつであるが、ヴァージニア・ハミルトンはアフリカン・アメリカンの子どもがアフリカン・アメリカンの歴史に影響を受けて成長する作品を多く書き、メタファーを多用している。アフリカン・アメリカンの痛苦の歴史をいかに反転させて子どもの成長に結びつけるかは、作家にとって大きな挑戦になる。

ハミルトンは、「再憶」(“rememory”)と呼ぶ作業を通じて、奴隷制時代の過去の記憶と、現代を生きる子ども登場人物のサバイバルとを結合

させている。ハミルトンによると、「再憶」とは、損なわれたものを回復される機能を持ち、単に過去を追憶するのではない。「実際に起きたことも、空想上のことも合わせて、すばらしい形に織り上げられた記憶で、（再憶されなければ）言い表されえないもの」(“An exquisitely textured recollection, real or imagined, which is otherwise indescribable”

Hamilton *Speeches* 94) を意味する。ネガティブな過去の記憶を、現在をポジティブに補完できるように、コンテクストを変えて子どもを含む読者に再受容させる作業といえるだろう。

「再憶」から少年の自己受容の過程をたどる作品に *M.C.Higgins, the Great* (1974) がある。オハイオ川を臨む廃鉱山のセアラ山の山腹に建てた小屋に、アフリカン・アメリカンの少年 M・C は、両親と弟妹たちと貧しい生活をしている。小屋の裏には、廃土が山積みになって今にも崩れそうである。崩落したら家は押しつぶされ、一家は住居を失う。

父のジョーンズ (Jones) は日雇い仕事をし、山に罫を仕掛けて食糧になる動物を捕獲する。母のバナナ (Banina) は町で家政婦の仕事をし、毎日、長い道のりを往復している。歌がうまく、行き帰りには山にバナナのヨーデルが響く。M・C は並外れた体力の持ち主で、5歳のときにオハイオ川を対岸まで泳ぎ渡り、父から 15メートルの鋼鉄のポールをもらった。彼はそれに自転車のサドルを取り付け、小屋の裏手に立て、時折よじのぼって、高いところからセアラ山全体を見渡す。山の世界のすべてを手中に収めているような錯覚を持つとともに、いつか成功して、貧しいボタ山から出ていくことも夢想している。

M・C の唯一の友人はベン・キルバーン (Ben Kilburn) という少年だが、キルバーンの一族は指が 6本あることでさげすまれ、貧しいアフリカン・アメリカンたちからも差別を受けて、谷あいだけで暮らし

ている。ベンと M・C は時々一緒に狩りに行くが、ベンはほとんど M・C の前に姿を見せない。

あるとき、山に見知らぬ人たちがやってくる。いずれもアフリカン・アメリカンで、一人は立派なスーツを着た紳士、もう一人は夏休みに一人旅をしている少女ラーヘッタ・アウトロー (Lurhetta Outlaw) である。M・C は紳士がバナナの歌を録音しに来たと聞き、母が有名な歌手になってこの暮らしから逃れられるのだと考えるが、実際はスカウトではなく単なる歌の収集家でビジネスには結びつかない。ラーヘッタは落ち着いた少女で、近くにキャンプを張って自炊する。女の子だと思って見下していた M・C は、素潜りで彼女がほとんど自分と同等の力を見せたことに驚愕し、また、ラーヘッタの提案で出かけたキルバーンの谷が、M・C の想像をはるかに越え、見事に豊かな自給自足の共同体であることが分かり、ラーヘッタが M・C よりもベンに対して親切に礼儀正しくふるまうことにも動転する。ラーヘッタは、数日間の滞在ののち、何も告げずに山を下りていく。

紳士とラーヘッタの去来は、ポールの頂点にいた M・C を、文字通り、地に足の着いた場所に引き戻す。偉大 (the Great) と自認していたプライドを砕かれた M・C は、自己の絶対性を相対性の中で考え直すことができる。山を出る考えを改め、ジョーンズが忌み嫌うキルバーン一族の人間であるベンを堂々と紹介し、「ただ山の中で暮らすのではない。このおれが山で暮らすのだ。暮らすのだ..... どんなどころででも。生きるのだ」

(“Not just living on the mountain. But me, living on the mountain. *Living...anywhere. You, living*” Hamilton *M.C.* 273) と心に決め、廃土の崩落を防ぐために、ベンと一緒に防御壁を作り始める。

それを見て頑迷な父ジョーンズは、先祖の墓石を軒下から運び出し、

支えにするように手渡す。激しい内的葛藤を抱え、幻想を乗り越えて主体的にセアラ山で生きようと決めた M・C はきわめて象徴的にポールの上から降り、かつて困難を乗り越えた先祖の墓石が文字通り彼の現在を守る防壁として与えられるのである。

## ② 逃亡奴隷セアラの亡霊

*M.C.Higgins, the Great* は M・C の自己受容の物語であるが、このとき、彼を外側から目覚めさせるのがベンやラーヘッタだとすれば、内側では、逃亡奴隷セアラという先祖をどう受容するかという激しい葛藤が彼を成長させている。

セアラ山の名前の源になった逃亡奴隷のセアラは、南北戦争前夜に赤ん坊を背負ったまま大農園から逃げてきてこの山にたどり着いたと言われている。M・C も家族も、セアラの亡霊がいまだに山に彷徨っていることを感じ、それをごく自然なものとして捉えている。セアラが瀕死の赤ちゃんに歌う「オボラ（……）チョオ、パ、ヤニ、シ、ナーマーガマ、オ、デー、カー、ノ」（“O Bola（……）Coo-pa-yani, Si na-ma-gamma, O deh-kah-no” *M.C.* 78）という不思議な子守唄は、ジョーンズの記憶に刻み込まれ、M・C は、ポールの上から見る山をセアラが登ってくる白昼夢を見る。

M・C は、簡単に生きたセアラを思い浮かべられた。そこにおいて、山に面した最後の丘を越えようと急いでいた。たえず後ろをちらちら見ながら。前にある道に何もなくても、決して油断することなく。何かを抱えながら。



M・Cは、その話を暗記していた。彼女は自由のために逃げたのを知っていた。赤ちゃんを連れていた。丘のもやを目くらましにし、この先何があるのかも分からないまま2日間隠れた。何があるのかは、3日目になるまで明らかにならなかった。3日目の明け方、日光が霧を払った。注意深くセアラさんは隠れ場所から這い出してきた。

Effortlessly his mind brought Sarah back to life. There she was, hurrying over the last hill facing the mountain. She always glanced behind her, never trusting the empty trail as she raced ahead, carrying something.

M.C. knew the story by heart. He knew she ran for freedom. She carried a baby. Concealed by the hill haze, she had been hiding for two days before she knew what lay ahead of her. What it was hadn't revealed itself until the third day. On that dawning, sunshine broke through veiled mist. Cautiously Miss Sarah crept from her hiding place.

(*M.C.* 26-7)

物語の中盤まで、北に向かって山を登りつづけるセアラには圧倒的な存在感があるが、M・Cにとって彼女は奇妙で不気味な伝聞であり、むしろセアラから逃れて外に行きたいと思っている。

しかし、紳士やラーヘッタらの他者との出会いののち、奴隷制から逃れてきたセアラの軌跡がM・Cに初めて力を与える。作品において「真の自由は、遺産から逃げるのではなく、それを認めて受け入れることで得られる」(“True freedom is not found in escaping from one's

heritage, but in embracing it” Russell 256) と指摘されるように、厳しい状況でも自分は自分として生きのびていこうと決意した M・C を、自由になろうとし、実際に自由になったセアラの霊が見守る。それに気づいたとき、彷徨するセアラは恐怖ではなくなり、山と一体化してのぼりつづける力強い足取りに転換される。

セアラという逃亡奴隷 - 最も弱く、無力で、奪われてきた女性 - の像は、家族史を援助する記憶として再構成され、M・C に自己受容を促す。受容はスタートであり、ベンと M・C という新世代の関係において、キルバーン一族への差別の解消やセアラ山の生活の改善が模索される予兆を見せる。M・C の前進には、アフリカン・アメリカンとしてのヒギンズ家の家族史の受容が必須であり、そこから、彼自身の成長だけでなく、複雑な関係の中にいるセアラ山の住人が共存していく将来像も引き出していくことができる。墓石は軒下から引き出され、文字通り山を守るものとしてベンも含めた子どもたちを見守る。

*M.C.Higgins, the Great* は、引け目に感じていたセアラ山と貧困層の自画像をプラスの方向へ転換する物語である。この自己受容は、M・C にとって外からの来訪者と内側の気づきの両方からなすとげられ、家族史を見直すことで、自分の現在を知り直すことができるのである。

## ii . 負の受容 - *Sweet Whispers, Brother Rush* (1982)

### ① 幽霊の叔父

ヴァージニア・ハミルトンの *Sweet Whispers, Brother Rush* (1982) は、主人公の 15 歳のアフリカン・アメリカン少女ツリー (Tree; Teresa)

が、幽霊である叔父との出会いを通じ、家族史とアフリカン・アメリカン史を二重に理解して、与えられた状況から新しく一步を踏み出していく物語である。少年 M・C の受容と成長が家族から共同体へ拡大しているのに対し、少女であるツリーの受容と成長は、家族から家族への移動のようである。

ツリーの母のマヴィ (M'Vy; Viola) は住み込みの看護師として働くシングルマザーで、週末に帰宅する。週に一度、67歳の元ホームレスの女性プリチャード (Prichard) が、家政婦として通ってくるが、普段はツリーと兄のダブ (Dab; Dabney) が2人で生活している。ダブはスーツや革靴などのおしゃれな恰好を好み、女の子に声をかけられることもあるが、知的障害と持病を抱え、近隣で苛められ、刺激に弱く、太陽光に当たるのを嫌がる。刺激を受けると全身が痛むが、知的障害のためにその苦痛を正確に伝えることができず、鎮痛剤頼りである。プリチャードは、ダブに不親切で、ツリーとはそりが合わない。ツリーには、ダブの世話や家事など、年齢以上の肉体的精神的な負担がかかり、同時に、ダブの世話をすることで母不在の寂しさを無意識的に埋めることで、ダブに依存している。

実質上、ツリーが切り盛りしているアパートの世界は危うい。ツリーがダブの汚物を掃除し、洗濯機をまわし、母親のいない台所で簡単な食事をつくる生活の音は、部屋に充満する本質的な静けさの中に吸い込まれ、一種隔絶され抑圧された場を形成している。この空間は壊されなければならないはずだが、マヴィはその脆さを理解せず、娘の深い不安感や息子の病気を避けている。職場で出会ったシルヴァースミス

(Silversmith; Silvester Williedie Smith) と同僚以上の付き合いをしているが、子どもたちにはあまり多くを語らない。

冒頭で、ツリーは、ハンサムな青年が路上に立っているのを見かけ、その格好の良さに心を奪われる。その3週間後、ツリーはアパートの物置部屋にある檜の木のテーブルの上にその青年が立ち、ドアをそのまますり抜けていくのを見て、彼が幽霊であることを知る。さらにその後、彼は18歳で交通事故死したマヴィの弟、すなわちダブとツリーには叔父にあたるラッシュ（Rush）であることも分かる。

ツリーはラッシュを路上で見かけたときから、そのハンサムな様子に魅力を感じ、寒気はするものの、恐怖は感じない。ツリーとダブの目だけ見えるラッシュは、耳に手を当てて、鏡を持っている。鏡をのぞくと、過去の世界に入ることができ、ツリーは、幼い日の自分、幼い日の兄、若く美しいマヴィと伊達者のラッシュがどのような生活をしていたのかを知る。父のケン（Ken）が実は家族を捨てて出奔したことを含め、過去の若い日々の両親や親戚の状況や感情を理解していく。

私たちは独創的な概念を提案した。つまり、若者は彼ら自身の文化、人種、魂の遺産を反映した本を得る権利を持っているということ。文化的民主主義は、平等教育への道における大きな一歩、また、人間の平等に到達するための第一の規範だった。私たちは、人権とは、すべての人たちが自分自身と過去についての情報を自由に得ることであると見なした。

We proposed a unique concept: that the young have the right to books reflecting their cultural and racial and spiritual heritage. Cultural democracy was to be the giant step on the way to equal education and the first principle to the attainment of human equality. We assumed as a human right that all people have free

access to information about themselves and their pasts.

(Hamilton *Speeches* 138)

というハミルトンの言葉通り、*Sweet Whispers* は、ツリーが自分に続く過去の情報を得る物語である。

10年前のラッシュは、ポルフィリン症というアフリカン・アメリカン特有の疾患で、日光などの刺激によって神経系の痛みや幻覚作用が出て苦しんでいる。おしゃれなスーツで隠した腕は痛みをこらえるための掻き傷だらけで、柔らかいスウェードの手袋の下の手は斑点や傷痕で一杯である。ラッシュは、病の辛さを紛らわせるためにアルコールを飲んでいたこと、交通事故で死んだのではなく、事故を起こす寸前の自動車から、痛みから逃れるように飛び降りたために死んだことを伝える。この事故に絡んで、ツリーは、死んだと聞かされてきた父親ケンが生きていることも鏡の世界で知る。ラッシュとケンはその日、同じ自動車に乗っていたが、亡くなったのはラッシュだけで、自動車もケンも無傷だったのである。ケンは生きていて、事故の後に出奔したことをツリーはマヴィイから聞く。

さらに、ラッシュと幼いダブとツリーが3人でドライブに行く場面で、ラッシュは、無意識に光を嫌がるダブの姿から、ダブがラッシュと同じ病気に罹っていること、また、発達が遅滞しているダブをマヴィイが虐待していたことも教える。マヴィイは、弟たちと同じ病気に息子が罹っていることを認めたくない若く未熟な母親であり、ダブを医者に見せることもせず、叩き、縄でつなぐこともある。

今、17歳のダブの生命は、ラッシュが18歳で亡くなったのと同様に尽きようとしている。ダブはポルフィリン症の痛みを鎮痛剤でごまかし

て悪化させているのだが、ツリーもマヴィはそれに気づいていない。マヴィはラッシュだけでなく他の弟も同じ病気で死んだことに傷つき、同じ病が息子を襲っていることから目を背けている。

幽霊のラッシュ叔父は、自分と同じ苦しみから解き放つためにダブを迎えにきたといえる存在である。ラッシュはダブを連れ去ると同時に、ツリーも解放する。ケンとマヴィの夫婦に果たせなかった親役割を引き受け、最後には、天上の存在として、しかし、近しい親族として、マヴィの愛すべき弟としてダブを天に召し、ツリーを生きるべき世界に戻す。様々な過去が明らかになったのち、ツリーはダブと一緒に吊り橋を渡る夢を見る。綱が切れてツリーは落ちるが、ダブはケーブル線の上で踊っている。これは、落ちていくツリーが生きる側に行き、残るダブが死の世界に行くことを示すものである。

## ② 病気のメタファー

受容の過程において、ハミルトンはポルフィリン症という病気を虚構化している。作中で、ポルフィリン症は、遺伝的かつアフリカの黒人に特有の病気が奴隷制を通じてアメリカに運ばれてきた病気であるとされる。日光にも激しく皮膚が痛み、内臓が侵されていく。ダブはほとんど全身の激痛に耐えており、ラッシュの腕は無数の斑点や痣や引っかき傷でいっぱいである。

血液のポルフィリン代謝異常のひとつであるポルフィリン症は、排泄されるはずの光毒性のポルフィリンが体内に蓄積されることで、日光のあたる皮膚に潰瘍ができたり、肝機能障害を起こしたりする病気で、鎮静剤を使うと、病気はますます進行する（さくら友の会 Web）。ラッシ

ユもダブも正しい知識がないゆえに、アルコールや薬で病気を悪化させてしまっている。だが、『メルクマニュアル医学百科家庭版』（メルク）によると、同じポルフィリン症でも光線過敏症を引き起こす晩発性皮膚ポルフィリン症と肝機能障害や神経損傷を起こす急性間欠性ポルフィリン症（マヴィのいう周期性ポルフィリン症）は別物であるとされ、作中では2つの病気が混同されている。

同様に、ポルフィリン症は人種にも関係なく、たとえば、アフリカン・アメリカンに特有の血液病で有名な鎌状赤血球症とは異なる。鎌状赤血球症は、赤血球が鎌状にゆがむ病気で、脾臓や腎臓にダメージを与える。アフリカン・アメリカンの約一割が鎌状赤血球遺伝子をひとつ持つとされ（ホモ型）、この遺伝子が2つになると（ヘテロ型）発症する。付随して、作中では、罹患して死ぬのは家族の男性だけとされるが、ポルフィリン症は男性よりもむしろ女性に多い。

*Sweet Whispers* ではハミルトンは、2種類のポルフィリン症の症状を組み合わせた上に、鎌状赤血球症のような「遺伝的」「アフリカン・アメリカン」という要素を付け加えることで、病気自体をフィクション化した。そして負の過去の受容という切り口を試みている。

生きのびた者たちの強さを再確認することで未来へ進もうとする M・C に対し、ツリーは、病気という苦痛で表される過去の記憶を引き受け、ポルフィリン症に苦しむ親族の姿と、ツリーの愛する母が愛する兄を虐待していた悲しい事実を知り、さらに、ダブを弔わなければならない。

吊り橋の夢のあとまもなく、ダブは発作を起こして入院し、死ぬ。その死を受け入れられないツリーを、ラッシュは最後に、鏡の世界で自分とダブと一緒に天にのぼっていく車と一緒に乗せる。後部座席にいるツリーは振り向いたラッシュの顔が白骨化しているのを見て、もとの世界

に戻りたいと強く願い、昇っていく車から、トランクルームを抜けて落ちていき、アパートの部屋に帰ってくる。すべてはラッシュの手の中で行われる。ツリーを現実世界に立ち返らせる転回点で、ハミルトンは象徴から具象へ、今生きている子どもの現実を捉えなおし、回復の場として、ダブと過ごした確かな記憶を軸に、次の段階へ進ませようとしている。

ニナ・ミッケルセン (Nina Mikkelsen) が「ハミルトンの関心は、彼らに対して敵意を向けることの多い広い世間を生きのびていくための、ごく小さな囲いの役割を果たすものとしての拡大家族またはつくられた家族にある (そのような家族は、しばしば異文化・異世代の人間から成りたっている)」 ([Hamilton's] ideas centered on extended and created families [often these families are cross-cultural and cross-generational] as small pockets of survival in an often large and unfriendly world” Mikkelsen 13) と述べるように、結果的にツリーに用意されるのは、血縁に依らずに助け合うことを予感させる拡大家族<sup>33</sup>である。ツリーは、ダブとの世界を抜け出て、血縁の家族の醜悪な過去や民族集団の呪われた病気の過去を咀嚼し、マヴィを許したのちに、自分とマヴィ、プリチャード、シルヴァースミスとドンという不思議な共同体に居場所を見つけていく。ツリーは、警戒していたシルヴァースミスの落ち着いた振る舞いに安堵し、食事をごちそうされて、思いがけず幸福な気持ちにさえなる。

ダブの死にあたり、ツリーのショックは強く、葬儀に際して、精一杯着飾らせて見送ってやりたいと思うツリーと、経済的な問題からその願いを退けるマヴィとの間にも確執が起こる。ツリーは家出をしそうになるが、プリチャードがそれを引き止める。プリチャードは、マヴィのは



からいで住み込みの家事担当者になることが決まり、別人のようにてきぱきと働き、料理や掃除をこなし、ツリーにも心からの同情をよせる。ツリーが引き受けてきた家事をするプリチャードはホームレス暮らしの惨めさと危険を言葉少なにツリーに伝え、その世界に踏み込まない方がいいと実感のこもった忠告をする。ツリーは、自分ひとりで努力してきたダブとの二人暮らしがあっけなく崩れたことや愛するダブの死に混乱を覚え、マヴィに反抗しつつ、どこかで新たな秩序が生まれ始めていることも感じる。

ラッシュは、過去の世界で、血縁を通してつながっている家族を襲ったポルフィリン症の悲劇を示し、その上で、血でつながらない家族がこれからのツリーを回復させていくことを示す。マヴィ、ツリー、プリチャード、シルヴァースミスとドンは、孤独を知っている個人がそれぞれの中での葛藤と能動的な意志を持って集合しつつある共同体である。ツリーはダブを失い、マヴィはダブをきちんと育児せず病気と向き合わなかった自分を後悔し、プリチャードはホームレス時代に人生の辛苦を味わい、シルヴァースミスは妻をドンは母を病気で喪っている。彼らは、構成員が自分の足で立ちつつも、その上でより高みのよりどころを求めて家族をつくろうとしている。

過去を知る前のツリーのダブとの暮らしは、そのままそこにいたら窒息する可能性もあった。過去との対話を経て、ツリーは、傷つきやすく無垢な自分に別れを告げ、他者と交わり新たな家族を形成することに向かっていく。ダブがいたときには閉じ込めていた能動性が目覚め始めるのである。虐待やポルフィリン症という影を知りつつ、これから光の側に立つべきツリーがしっかり大人の女性になっていくために、ダブは病気で築いた弱い肉体を置き去りにして天国での解放を得ることが運命づ

けられている。

*Sweet Whispers*における家族史の受容は、翻案されたポルフィリン症を用い、病気や虐待という負の遺産をめぐって展開する。限定的かつ具体的な風景を見せながら、ラッシュによって明かされる過去は、逃亡奴隷の足跡のような力強く語り継がれるものではなく、ポルフィリン症という断ち切られるべき病であり、虐待という汚点である。静謐で閉じられた死の世界と、開放的で賑やかで煩わしい生の世界をツリーは行き来し、犠牲者であり死者であるラッシュの力で、生きる側へと押し戻される。ツリーは、決して輝かしくない家族の歴史を受容し、マヴィと自分、シルヴァースミスとドン、プリチャードの拡大家族的共同体の中で、一歩を踏み出し始める。

病気の正確性という点では批判を呼ぶかもしれない。しかし、ハミルトンの意図はアフリカン・アメリカンであることがもたらす負の面を受容し、その先に進ませるための装置を作ることであり、架空性を帯びたポルフィリン症は、民族集団的にも家族的にも乗り越えられ、ラッシュ叔父の愛情だけが残るのである。

### 3. アフリカン・アメリカン史の受容

#### i. 神話創造の試み - *The Magical Adventures of Pretty Pearl*

(1984)

#### ① 神話化される歴史

ヴァージニア・ハミルトンの *The Magical Adventures of Pretty Pearl*

(1984) は、子どもに向けて、トールテールのジョン・ヘンリーやヴァドゥー教の小道具をふんだんに用い、自分たちのルーツを改めて豊かなものとして想像しなおし、アフリカに遡る血筋を肯定的に受容する道筋を示そうとしている神話的ファンタジーである。

ケニアの山に住む神の子パール (Pearl) は、奴隷にされたアフリカ人たちの行方を追って兄のジョン・ヘンリー・ラストアバウト (John Henry Roustabout) と一緒にアメリカに渡る。アフリカ人たちの運命を見守りつつ、やがて兄と別れて独り立ちして、逃亡奴隷の共同体プロミス (Promise) で暮らし、その仲間とともに自由州に渡って、人間の女の子に変わる。

アフリカの神が地上に降りてきてアフリカン・アメリカンになるというプロットに加え、作品は、アフリカン・アメリカンが、新大陸でかろうじて生きのびてくるなかで生み出してきた様々な祈りと希望のアイコンに満ちている。次兄で最高神と設定されるジョン・デ・コンケア (John de Conqueror) は、民話に登場するアフリカの王子で、その名にちなんだ「ジョン・デ・コンケアの根っこ」 (John the Conqueror Root) は実在の植物で、香りがよく薬効があり、実際に民間治療にも用いられているものだ。

奴隷制時代の新大陸でジョン・ヘンリー・ラストアバウトと別れるとき、パールは大人のマザー・パール (Mother Pearl) と少女のプリティ・パール (Pretty Pearl) に分裂し、守り手となる精霊を与えられる。マザー・パールの方は、やがてたどりついたプロミスという村で「マーマー・ウーマン」 (mawmaw woman) として働き始める。この仕事は、奴隷居住区の小屋で母親が労働している間に新生児から幼児の世話を担当する「モーマス」 (maumas) と同義で、子どもが危険な目にあわないよ

うに見張り、食事を与え、乳を飲ませに母親のところに連れていく役割を担う (Webber [邦訳] 30-42)。たとえば、ジョージア州の大農園では、母親たちが農園で働く間、大勢の子どもが「保育室」と呼ばれる劣悪な環境の小屋で少数の老婆に世話をされ、監督されていた (Rose 44)。くたびれたモーマス像に、ハミルトンはプロミスの中でアメリカの理想的母親像をあてはめ、敷地全体を養育の場に変容させている。

住民たちは協働し、つつましくも満ち足りた時間を過ごしている。プロミスにリベラルで調和的な食と芸術のトポスが仮想され、外界と内界の情報が混在し、新しい話を聞き、古い物語を掘り起こす場が生成される。自由を内面化した個人が通りで集い、奴隷の強制労働の疲れや無力感ではなく、自分や家族のために労働するという自立の喜びを共有し、語り、聞くことができる。本来は貧相で希望の持てないモーマス像や、余った野菜や配給の食材を濃い味で煮込んだ節約料理のガンボスープは、*Pretty Pearl* の中であたたかく増幅され、満ち足りたイメージを喚起する。アフリカン・アメリカン文化から形成され、アフリカン・アメリカンを含めた複数の子どもたちに協働の豊かさを示している。

分裂したもう一方である少女のプリティ・パールには、首飾りにしまわれた4体の精霊が与えられ、そのうちドゥワーロ (Dwahro) という精霊だけが人間の姿になってパールと旅をする。ドゥワーロに注目するならば、パールと並行して、アフリカ出身の精霊がアメリカという土地で人間としての核を手に入れ、アフリカン・アメリカンとして完成するもうひとつの物語を見出せるかもしれない。

ドゥワーロは、神より下位の霊で、たまたま人間の姿になってパールのお供をしているが、何かあれば、すぐに首飾りの中にしまわれてしまう。霊であるゆえに動物や妖精に近い野生を保ち、パールには感じられ

ない気配や血の匂いや森のなかの生命を感じ取ることができる。彼は心の奥底で、神からの縛りをとき、自由の身になりたいと願っている。プリティ・パールと旅を始めたばかりのときには「神になりたいと思ったことはない。自由でもなく、パールに結びつけられている。哀れで汚らしい歩くドゥワーロでいるのは嫌だ」(“He had never once wanted to be a god. But he wasn’t free, he was tied to Pearl. And he didn’t want to be a poor, dirty, walking Dwahro” Hamilton *Pretty Pearl* 58) と思い、パールの首飾りと自分とを結びつけた紐を切ろうとして、ムチ蛇

(Coachwhip) の罰を受ける。主人公がパールであることで支配 - 被支配の関係はあいまいにされているが、彼は、罰せられる逃亡奴隷のようであり、主従関係は明らかである。

ドゥワーロは、ときに「おれは自由になりたい！ 人間になりたい！」(“I WANT TO BE FREE! I WANT TO BE HUMAN!” *Pretty Pearl* 101) と思いつつ、プロミスで暮らすうちにその切望を忘れはじめる。プロミスではパールとの主従関係は相対化され、パールもドゥワーロも同じ立場になり、プロミスの人々のために尽くすことになる。

やがて、試練を経て病気になったプリティ・パールのためにアフリカからやってきた長兄のジョン・デ・コンケアは、プリティ・パールを人間にして癒すのと同時に、ドゥワーロもねぎらい、彼を人間の男に変える。奴隷のような心持だったドゥワーロは、独り立ちにふさわしい分別や利他心を身につけ、いわば、試練に合格した若者と同じように成長をとげる。パールもドゥワーロも、プロミスの褐色や薄茶色の肌の人たちと同じアフリカン・アメリカンになり、アフリカというルーツへの受容と肯定が貫かれる。

ドゥワーロが人間になったあかしは、感情であらわされる。そもそも

紳士の姿をした精霊ドゥワーロは、感受性が豊かで知恵もあるように見えるが、実際は、パールが人間のふりをしているのと同様に、周到な偽装をしているにすぎない。

しかし、デ・コンケアの魔法によって、ドゥワーロは真に深さのある感情を得る。うれしいときは賑やかにふるまうことしかしていなかったドゥワーロは、人間になってからもしばらく変化に気づかず、時間をおいて事態を理解する。

そこに涙があるのを感じた。彼の指は本物の涙で濡れた。彼には分かった！深くため息をついた。ありがとう、デ・コンケア！そして、人間のように呼吸した。そして、ふりをしていたようにではなく、長い間、本当に息をし、眠っていたことに気づいた。

ドゥワーロは乗り越えた。そこに立ち、感謝に満ちていた。彼は謙虚に頭を下げた。その瞬間、彼は人間の感情があふれるのを感じた。

And felt the tears there. His fingers were wet with real tears. He knew! He signed deeply. *Thank you, de Conquer!* And breathed like a man. Then he understood that he had been breathing, sleeping and *not* pretending for a good long while.

Dwahro was overcome. Standing there, he was thankful, and he bowed his head humbly. At that moment he felt a flood of human emotions.

(*Pretty Pearl* 287-88)

プロミスで働き、仲間のために力を発揮し、得意の歌や踊りで楽しませ

るうちに、人間の「ふり」は本物に近い意識になっていく。孤児の子どもたちを気の毒に思う感情が引き出され、「ふり」を本物にする基盤となって、ドゥワーロは試験に合格している。人間となったドゥワーロは、やかましい道化役でなく、快活な若い紳士として、パールの従兄となる。人間のふりをして神から逃げようとしていたときのドゥワーロはただの入れ物であるが、人間になったときには、「感情」で十分に満たされる。

この物語を神の自伝と捉え、それをアフリカン・アメリカンの歴史として示そうとするなら、アフリカン・アメリカンの少女となったケニアの神の子パールと同様、首飾りに縛られた奴隷の精霊がアフリカン・アメリカンの堂々とした若者になるというサブストーリーもまたもうひとつの神話として読むことができ、アフリカン・アメリカン作家によるルーツの受容への強い意欲を示し得ている。

ハミルトンの神話構築の試みは、20世紀の西インド諸島の作家たちがフランス語で試みたクレオール文学とも響きあうかもしれない。西インド諸島のクレオールとは「植民地で生まれたネーティブ以外の人々。本来はスペイン語で『クリオーリョ』といい、新大陸生まれのスペイン系の人々を指したが、後、植民地生まれの白人を指すようになり、やがて混血、さらにアフリカ系をも含む」（『大辞林』）。クレオールたちは、分断と共生のはざかいで独自の文化を発展させた。特に1930年代以降、カリブ海諸国を中心とするフランス領の黒人作家がパリで起こした、黒人文学の興隆を目指すネグリチュード（Négritude）運動には、大きな意味がある。この運動から、フランス領アンチル諸島中心にクレオール文化の評価の機運が生まれ、新たな文学の創造と評価が試みられるようになった。

マルティニーク島のクレオール作家であるラファエル・コンフィアン

(Raphael Confiant, 1951-) やパトリック・シャモワゾー (Patrick Chamoiseau, 1953-) は、劣位や不純性と結びつく「クレオール」という用語を積極的な意味に転じ、クレオールの経験や独自の世界像を支配者言語であるフランス語で表し、クレオール外の世界に提示することを試みてきた。カリブ系イギリス人の批評家であるキャリル・フィリップス (Caryl Phillips, 1958-) はシャモワゾーについて

文学における『小さな脱走』を成し遂げ、マルティニクとグアドループのアフリカ系の人々に、あるいはアイデンティティの問題を倫理的にも文学的にも真剣に受け止めるすべての人々に、作家は、誰かがやってくれるのを待つのではなく、自ら、自分自身と自分が属する人々を創造しなければならない、と示したのである。

([邦訳] 331)

と述べている。シャモワゾーは、*Au Temps de l'antan-Contes du Pays Martinique* (1988) でマルティニク島の民話をクレオールの言葉で再話し、「弱い者は計略や回り道、忍耐、決して罪ではない切り抜け策を繰り出すことによって、強い者に勝つことができる、あるいは力というものの首根っこをつかむことができる」(邦訳 11) 話を採録して、カリブの黒人たちのよりどころになる物語を生んだ。出世作となった *Texaco* (1992) はマルティニク島の女闘士マリー＝ソフィー・ラボリュー (Marie-Sophie Laborieux) が、テキサコ石油会社のタンクのそばに自然発生的に形成されたスラム街であるテキサコ地区を、資本家の白人の手から守り、二代に渡る島の歴史を語り下ろしていく小説である。マリー＝ソフィーは「シャモワゾーが作品を書くたびに異教の女神として讃



える、あの超自然的と言ってよい存在を形象化した人物」(シャルフィ  
12)であり、スラム街の歴史をいわば都会の神話として語り直している。

カリブ文化圏でクレオリテの文学運動を展開した彼の試みに誘発さ  
れるかのように、アフリカン・アメリカンであるハミルトンは、自画像  
を形成するために、文化表象を用いて神話創造を試み、カリブの作家た  
ちの試みと呼応し、プリティ・パールのファンタジーを織り上げたので  
はないだろうか。

## ② 言葉の力

*Pretty Pearl* は、アフリカン・アメリカンのレンズで奴隷制時代を覗  
き、神の子どもの救済がアフリカン・アメリカンの少女になるという誇  
りを示す。主題は、総体としての民族集団史の再受容である。

だが、そのプロセスの支え壁となっているのは、物語るという行為や  
言葉の力である。パールの長兄であるジョン・デ・コンケアは、最高神  
として、言葉の威力を認識している。新大陸に来て、過酷な労働を強い  
られるアフリカの人々を目にしたプリティ・パールは、彼らを助けたく  
てたまらない。しかし、デ・コンケアは『鎖をかけられた連中はいずれ  
自由になるだろう。必ず。だけど、そのときはまだきていない』と言っ  
た。『それは書き記されるだろう。だけど、もう少しそのままにしておか  
なければならない。分かるだろう』(“De shackled crowd will be freed,  
most prob'ly, but not jes' yet,” said de Conquer. “It will get written.  
But it got to unfold some more, don't you see” *Pretty Pearl* 19) と黒  
人英語で言い、パールの訴えを退ける。彼の権威のもとでは、重要なこ  
とは書き記されるべきものであり、彼らはそれを見届けることが求めら

れている。

デ・コンケアは、苦しんでいる奴隷たちに、ジョンソン (Johnson) とライリー (Riley) という名の 2 人の霊を遣わし、2 人は、言葉を使って奴隷たちを逃亡に向かわせる。

精霊たちは実体を持った。一人はジョンソンでもう一人はライリーだった。彼らは奴隷をせかして逃げさせた。アフリカの言葉、知恵の言葉を奴隷たちの耳にささやいたのだ。奴隷たちは今や農園の労働者で夜明けから日暮れまで畑で働いていた。ひとたびその黒人たちがデ・コンケアの精霊たちの言葉を聞くと、畑で自分たちのそばにいるのが誰なのかを理解した。彼らは、アフリカの神が自分たちの後ろにいることを知った。そして、動き続けた。

The spirits took on form. One of them was Johnson and the other was Riley. They urged slaves to run, whispering words of wisdom, words of Africa, in captive ears. The slaves were now field hands, who worked in the fields from dawn to dusk. Once the black folks got the word from the de Conquer spirits, they knew who it was in the fields with them. They knew that the African god was behind them. And they carried on.

(*Pretty Pearl* 20)

奴隷たちは、黒人英語を共通の言葉にして連帯し、時に逃亡し、時に助け合う。ジョンソンとライリーがささやいた「アフリカの言葉」(“words of Africa” *Pretty Pearl* 20) は個人のなかで醸成され、逃亡へと駆り立てる。デ・コンケアが奴隷に与えた励ましは言葉に依拠し、言葉が個人

の中から主体性を引き出す力を持つ。

また、プロミス長老たちも、言葉と深く関わりを持つ。逃亡奴隷たちを助けるチェロキー族は、ネイティブ・アメリカンのなかで、独自のフォニックスと文字を持った唯一の部族であり、そのリーダーのオールド・カヌー (Old Canoe) は、それを誇りにしている。言葉の重要性を熟知しているオールド・カヌーは、チェロキー族の経験した「涙の旅路」 (“Trails of Tears” 1838) <sup>34</sup>を語り継ぎ、外の世界とのつながりから、迫りくる鉄道敷設の計画も知っている。

アフリカン・アメリカンのブラック・ソールト (Black Salt) は、外の世界で起きている事実を内部の者たちに精確に伝える。話すという行為自体が彼の高潔な人格の証となり、彼の言葉は、彼の善良さと一体化している。

ブラック・ソールトは、プリティ・パールらの一行がプロミスに入ってきたとき、火を囲みながら村人たちの前で演説するが、その前に、「私は長ではない。ここには長はいない。しかし、私は一番よく話す者だ！」 (“I ain’t the boss of it. No bosses here! But I is de one that talks de most!” *Pretty Pearl* 132) という。リーダーではないが、彼の高潔さや信頼に足る人物であることは、話す行為によって証明され、彼の語るルールや助け合いのあり方は、そのまま共同体の質を伝えるものとなっている。

また、逆に、無意味な言葉を手放すことが成長の証となる登場人物もいる。物語の終盤、自由になったドゥワーロは、ナンセンスなおしゃべりをしなくなる。ドゥワーロは、黒人霊歌の「コール・アンド・レスポンス」をよく理解している。この、メインボーカルとコーラスが呼応しあう形式、または、演者と聞き手の掛け合いを表す形式の中で、ドゥワ

一口は卑屈に身を縮めるのではなく、表舞台に出て堂々と歌い、踊ることによって村人に喜びを与える。それがやがて彼のアイデンティティとなっていく。ドゥワーロは住人を歌と踊りの輪にまきこむ。黒人霊歌の掛け合いを土台に、これまでのつらい逃亡人生や、両親をなくした子どもが生きのびてきた苦難が相互に重なり、ひとつの大きな祈りに変わる。ドゥワーロは、その熱狂をリードする立場になり、その瞬間、自分をよく見せたいとか神々からの縛りを解いて自由になりたいといった利己心をまったく忘れ、村人のためだけに歌い、踊る。その利他性が、最終的にはドゥワーロを救い、自由にする。

その後、プリティ・パールに忘却の魔法がかけられて、神の子だった時代を自然に忘れるのに対し、霊から人間になったことを理解したドゥワーロが、変化を自覚した上で沈黙を保ち続ける意味も大きい。*Pretty Pearl*において、成長は、パールのように言葉を獲得することであるのと同時に、ドゥワーロのように空疎な言葉を手放すことでもあることが示される。パールの華々しい人間化の隣で、ドゥワーロはひそやかに成長をとげ、コール・アンド・レスポンスの作法を身体化して人々の歌や踊りをリードしはじめる。

プリティ・パールは、言葉を通じて最も成長する。彼女は、長いあいだ弱々しい存在で、デ・コンケアやジョン・ヘンリーやマザー・パールやオールド・カヌーやブラック・ソールトから世話を受けている。そこから成長していくにあたり、プリティ・パールには試練が訪れる。自分の力を見せびらかしたくて首飾りに閉じこめていた精霊のハイド・ビハインド (Hide Behind) を解き放つ。気配だけを残して物陰に隠れ、相手を驚かせるハイド・ビハインドは、作業中の子どもたちを疲弊させ、道に不穏な空気をもたらす。事態を収拾しようとしたプリティ・パール

はさらに、鋭い斧のような尾を持つ馬のホーダッグ (Hodag) も放ってしまう。マザー・パールでハイド・ビハインドは首飾りに戻されるが、ホーダッグはそのまま尾で木を切り倒しながら里へ逃げていってしまう。この大失敗は、プリティ・パールにとって耐えがたい苦難となり、精霊を失った挙句に文字通り、老婆のように生気をなくしてしまう。世界は色を失い、デ・コンケアが作ったシフトドレスも魔法のリボンも色あせる。

パールは受動的に恩恵を受け、デ・コンケアという大人に導かれた子どもである。デ・コンケアは妹の窮地を救い、パールを神の子から人間のあいだで暮らす少女に変える。人間になりたいと願っていたドゥワーロと異なり、パールは憧れを意識化していたわけではないが、デ・コンケアは彼女の内面を見抜いて、無意識の願望をかなえる。試練の間、パールが口もきかず、ほとんどもものも食べられない状態にいるとき、マザー・パールに「この子は成長中だ」(“She growin” *Pretty Pearl* 216)とされるのは示唆的である。

最終的に、プリティ・パールは人間の子どもになることで、文字通り生まれ変わり、決定的に主体性を獲得する。このとき、パールには、言葉を適切に使う能力が備わり、オハイオ州に渡ったプロミススの元住人たちとともにペリー (Perry [ハミルトンの旧姓]) 家の人間になり、理想的な地縁社会で、語り手の役割を担うようになる。

パールには、仲間の人々が思わずみな重々しく、尊敬をこめて見てしまうようなものがあった。彼女は誇らしく構えた。しかし、その力は内に向くものであり、みんな、彼女から何が生まれるかまったく分からなかった。(……)「昔々」と彼女は始めた。「神が山からお

りてきました。ある晴れた日にケニア山からおりてきました」

There was something about her that made all the inside folks look at her solemnly, respectfully. She held herself most proud. But she held herself inward, and they were never sure just what would come out of her, how she would begin. (.....) “One long time, “she began, “de god came down from on high. Came down from Mount Kenya on a clear day.”

(*Pretty Pearl* 306)

プリティ・パールの成長は、語り手になることで完成を見る。そして、ひとたび語り手になるや、最強の力を身につける。すなわち、パール自身が *Pretty Pearl* を語りはじめ、神の子だった時代に自分をはぐくんだ大人たちについて語ることで、彼らに改めて生命を与えるのである。

それまで、パールを庇護してきた最高神のデ・コンケアも力強いジョン・ヘンリーも、ここに至って、プリティ・パールの語りの中で初めていのちを持つ者になる。パールは、語ることで自分の主体性を確立しつつ、聞く相手も喜ばせるという正しい形で周囲の人間と関係を結べるようになり、オハイオ州に定住した彼らの歴史や、彼らが大切にしてきた伝説や、アフリカとのつながりを語る。オハイオに渡る前に別れを告げたジョン・ヘンリーは、蒸気ドリルに勝つことを夢見ながら、パールを思って、自分を忘れないでほしいと考える。パールは忘れない。アフリカン・アメリカンの希望とするために、ハンマーを手に死んだ勇ましい男の物語を語る。パールが筋骨隆々の大男のジョン・ヘンリーの内に秘められた慈愛を語るたびに、くりかえしジョン・ヘンリーはいのちを持つ。

パールが何度でも同じ話を語るという再現性は、民衆の語りの特徴であり、ここで改めてパールは、アフリカン・アメリカンを代表する「民衆」を体現することになる。アフリカから来た神のパールが最後にアフリカン・アメリカンの言葉の使い手となり、語りという大きな力を共同体に対して発揮し、アフリカに由来する神話の伝え手となる<sup>35</sup>。伝えられる歴史は、温かく人々を励ますものとなり、痛苦からサバイバルへと書き直された物語は、アフリカン・アメリカンの子どもに新たな神話とアフリカン・アメリカンの過去の受容を促す。

## ii. 南部への回帰 - *Toning the Sweep* (1993)

### ① 死の受容

次に、奴隷制度の残滓とともにアメリカの中の異国の風味のある南部の受容の例を、アンジェラ・ジョンソン (Angela Johnson) の *Toning the Sweep* (1993) から考える。この作品は、忌まわしい差別の現場を、アフリカン・アメリカンの歴史が展開したトポスとして捉え直すことを試みている。

*Toning the Sweep* は、アフリカン・アメリカンの歴史を絡めて少女とその母が家族史を受容する中編である。オハイオ州のクリーブランドで暮らす 14 歳のエミリー (Emily) は、母のダイアン (Diane) と父と一緒に、カリフォルニア州の砂漠地帯で一人暮らしをしている母方の祖母のオラ (Ola) の家に行く。オラは癌に侵されていることが分かり、娘家族と住むために、住み慣れた家を引き払うことを決めており、一家はオラが家を整理する手伝いをしたのちに連れ帰ることになっている。エ

ミリーは、幼いころに何度もオラの家を訪れ、離れがたく泣くほど好きだったが、エミリーが成長してからは、足が遠のいている。

数日間の滞在の間に、エミリーはオラに頼まれ、オラの親友のマーサ (Martha) からビデオカメラを借りて、オラのまわりのなじみのある景色や、近所の親しい人たちへのインタビューの様子を撮影し、映画にすることになる。彼女は、「自分を主体位置へと導いてくれるカメラを手に入れたエミリーは、祖母の思い出を撮影するという行為をとおして、これまで彼女が意識の外に追いやってきた、死にまつわるさまざまな問題に向きあって」(大喜多 118-9) いき、知っているようであり知らなかったオラのことを初めて少しずつ理解していく。また、家の中にあった祖父チャールズ (Charles) の遺品である手紙や塗り絵も発見し、遠い昔に亡くなった祖父を身近に感じるようになる。

インタビューの中で、家族史がしだいに明らかになっていく。オラとチャールズ、一人娘のダイアンの3人家族は1964年当時アリゾナ州に住んでいたが、チャールズが亡くなったためにカリフォルニア州に移る。14歳だったエミリーは、あまりに慌ただしい葬儀と引っ越しのため、父の死を受け入れきれず、きちんと弔ったという感覚が持てなかったため、母であるオラを許しきれなかったのである。

さらに、ビデオ撮影や手伝いに来てくれた近所の人たちとのおしゃべりを通じ、実は、チャールズは、買ったばかりの車に「生意気なニガー」 (“UPPITY NIGGER” *Toning* 35) という落書きをされ、そのそばで銃殺され、その第一発見者がダイアンであったことも分かる。オラは、ダイアンを人種差別や暴力の醜悪さから守りたい一心で、すぐにアリゾナ州を離れ、カリフォルニア州に引っ越したのだが、それは、ダイアンに弔いの猶予を与えないふるまいだった。よかれと思った母の決断により



ダイアンは苦しみつづけ、チャールズもまた浮かばれない。チャールズは、魂として家のまわりをさまようことになり、オラは、夫の気配を感じつづけている。

エミリーは、マーサの養子のデイヴィッド (David) と話をする。デイヴィッドは、死者が活着ているかのように話しかけてくるのは、その死者が実際にまだ周辺にいること、誰かが死んだら、まわりの人は犁を鳴らして魂を天国に送るべきだということ、実際にサウス・カロライナ州で人が亡くなったとき、その人の親戚が犁をハンマーで叩いて、皆に知らせたという話を聞いたことをエミリーに教える。また、ダイアンは、ダイアンが3歳のときに祖母(エミリーの曾祖母)が亡くなったときに、祖父が犁を鳴らしたのを覚えている、とエミリーに話す。語らいの中で、弔いの儀式の形が明らかになる。オラを連れて家を去る前のクライマックスの場面で、ダイアンとエミリーは犁を打ち鳴らし、この世に心を残し、オラの家の木々にとどまっているチャールズの魂を鎮め、天国に送り出す。その行為は、さまよっていたチャールズだけでなく、死を受容しきれていなかったダイアンも救う。

## ② 南部の受容

*Toning the Sweep* は、死の受容の物語である。オラは癌を患い、鎮痛剤を飲んでいる。チャールズは、差別主義者によって無残に殺される。ダイアンは、大好きだった父親の死を受容しきれずにいる。だが、すでに死者であるチャールズも含め、4人の家族は数日間のあいだに、死をさまざまに受容し、「悲哀の仕事」(小此木 18/2935)をなしとげる。チャールズを弔うことでオラとダイアンに平安がもたらされ、新しく出発

できる。エミリーは、むしろ来るべきオラの死に向き合い、オラの生前の像をフィルムに収めて編集し、重荷をおろした母にも寄り添ってチャールズのために犁を打ち鳴らし、無念の死をとげた祖父の遺産を引き継ぐのである。

ゆえにこの作品は普遍的な家族と生死をめぐる物語といえるが、その根幹にあるのはアフリカン・アメリカンの経験と南部の悲劇の受容でもある。作中でアラバマ州とサウス・カロライナ州でおこなわれているとされる「犁を打ち鳴らす」行為は、「ある人が亡くなったときに、彼（女）が1つの形態から別のものへ移行するのに力を与えるために共同体の人が集まって金切り声を上げる西アフリカの儀式を思い起こさせる」

（“reminiscent of a West African ritual in which the community comes together and shrieks at the moment of a person’s death to strengthen his or her passage between one form of life and another” Hinton 46）。起源は定かではないが、キリスト教的な土台は感じられず、原初的だが力強い儀式性がある。

また、エミリーは、オラが裸足であることを見て、そのオラの姿をそのままフィルムに収めようと心を決める。エミリーもオラと同様に裸足を好み、学校でも裸足で過ごすほどである。靴を履いているとつま先が呼吸できない、というオラの言葉にエミリーは心から同調できる。ダイアンも、普段暮らしているクリーブランドでは決して裸足にはならなかったのに、オラの家では靴を脱いで歩き回るようになる。裸足という状態は「野性的で自由」（“wild and free” *Toning* 41）な南部を感じさせ、自分を縛る慣習から自由になると同時に、大地を踏みしめて歩いていたアフリカの記憶、あるいは、大農園の記憶とも結びつく。オラの精神性がダイアンを越えてエミリーに受け継がれ、また、裸足への志向が、犁

を打ち鳴らすという原初的な行為に近しいとすれば、靴を脱ぐことも、犁を打ち鳴らすのと同様に、自分を抑えていたダイアンを救済するものになっていく。南部はつらい人種差別の場所であるが、それでもなお家族の故郷として記憶される。リンチも暴行死も無効化するほどに、そこは家族 3 人の思い出の場所なのである。

植物のクズも、南部に続く証になる。19 世紀末に万国博覧会をきっかけに日本からアメリカに移入されたツル性植物のクズは、土壌流出防止や緑化の効果を期待されて、特に南部 (Sheina Web) で植えることが推進された。しかし、雑草に近い繁殖力と生長の早さから爆発的に繁茂し、「南部を食い尽くした」 (“the plant that ate the south” *ibid.*) と言われる、きわめて南部的な植物である。

植物を育てるのが上手なオラは、アラバマ州からカリフォルニア州の砂漠地帯に引っ越したときにクズを植えた。前庭には 3 本のジョシュア・ツリーがあり、様々な会話や出会いの背景になっている。エミリーはこの木にもたれて考え事をし、最初に撮影のインタビューをするのもこの木の下にいるマーサである。

大空に伸び行くジョシュア・ツリーの潔さと孤高さに比べ、クズは、ツルを這わせ、花を咲かせながら水平方向に増殖していく植物である。エミリーは、マーサとオラと一緒に訪ねたオラの友人のジェイク・ローランド (Jake Roland) のコテージを見て驚く。砂漠地帯の中でも池がすぐ近くにある山あいの小さなコテージは、クズの蔦で覆われ、葉をくぐり抜けないと中に入れず、しかし、そのせいで暑い日でも床の上はひんやりと涼しい。芸術家のローランドの雰囲気もそのコテージも気に入ったエミリーが植物について尋ねると、オラがアラバマ州から持ち込み、自分の温室で育てているクズを分けてくれたのだと教えてくれる。

南部では厄介者扱いされ、駆除の対象であるクズを、オラは「私はあちらにいたときいつもクズが嫌いなふりをしていたけれど、大好きなの。誰にも止められない」(“I always made believe that I hated it when I was there, but I loved it. Something no one could stop” *Toning* 73) といい、南部と直接につながるクズを近くに植えておきたい心情を吐露する。嫌われ者の植物は、オラにとって南部との絆である。南部は、チャールズを喪った悲しみの場所であると同時に、チャールズと出会い、ダイアンを授かったルーツの土地でもある。カリフォルニア州の砂漠はアラバマ州と同様の気候で、クズはよく育つ。ほかの植物を侵食しないように注意深く温室で育てながら、オラは自分のクズが南部につながっていることを夢想している。

*Toning the Sweep* の数日間は、ダイアンの悲哀の仕事在完成させるだけでなく、アラバマ州という南部につながりながら生きてきたオラの軌跡をたどる期間でもある。エミリーは、これから生きるために、インタビューをおこない、記録をとどめ、オラの言葉を深く受け止める。引き受けた家族の過去は、公民権運動や人種差別というアフリカン・アメリカンの過去と不可分に結びついている。エミリーが生きていくのは、南部の人種差別とは縁のない - むしろ自由州の入り口として知られるオハイオ州である。だが、そこを起点に、エミリーの記憶はまっすぐにアラバマ州に結びつく。南部は、オラがダイアンを守るために背を向けて逃げ出す場所ではなく、歴史として受容すべき土地として回帰され、エミリーの自画像を構築するのに不可欠の場所となっている。

南部のさらに先にはアフリカがある。小さいころ、エミリーはオラの服や帽子を引っ張り出して「アフリカの女王」(“an African Queen” *Toning* 45) になるのを好んでいる。作中の色彩の重要性について、た

たとえばオラが大好きな黄色には「愛する人を失った悲しみと、迫りくるみずからの死の不安から彼女を守る、救済者の役割」（大喜多 127）があると指摘されているが。鮮やかな黄色や赤や紫は、アフリカ的な色と結びつき、人々と土地がつながりあってエミリーの中に統合され、さらにそれが映画によって、より鮮やかなものとして記録され、受け継がれていく。

児童文学には、老人や死、赤ちゃんや幼児の時代にさかのぼり、自分はどのような連なりの先端にいるのかを知らしめる機能もある。子どもの登場人物が、過去を知る語り手の話に耳を傾けることによって、現在を生きやすくなるというのは児童文学にしばしば見られるパターンである。エミリーにとって母や祖母の語りは、祖父を知り、母をさらに知るためだけのものではない。人種差別の犠牲になった悲哀の歴史を知るとともに、犁を打ち鳴らし、裸足になり、クズを植える点では、より大きなアフリカのコンテクストを受容するためのものでもあった。家族史の受容は新たなつながりを生み、民族集団の歴史の再受容にもつながり、南部とのつながりは断ち切られない。これも、アフリカン・アメリカンとして現在を生きる子ども読者へのエンパワメントとなる。

#### IV 接続の展開

IV章では、アフリカン・アメリカンが、ゲッターのような閉じた場から出て、アフリカン・アメリカンの歴史や文化に由来するネットワークが形成されることを描く点で、子ども読者にエンパワメントを与える作品を考える。

第一に、19世紀に逃亡奴隷を北部やカナダに逃がす「地下鉄道」(“Underground Railway”)の活動を扱った作品である。実在の女奴隷であるハリエット・タブマンは、奴隷制時代に何度も北部と南部と往復して逃亡を導き、「モーセ」と称された人物である。タブマンと同じ時代に白人作家がその偉業を書きとめたテキストでは、タブマンの偉人性に光が当たっているが、そのテキストを元に1950年代にアフリカン・アメリカン作家が書いた伝記では、タブマンとその能力を生かした「地下鉄道」の仕組みそのものが称えられている。また、ヴァージニア・ハミルトンの *Time Pieces* は、「地下鉄道」で自由になった先祖を持つアフリカン・アメリカン少女が、現在と過去の接続に気づく物語である。

第二に、欠落を抱えたり、試練を受けたりしている者の接続を考える。欠落も試練もアフリカン・アメリカンに特有の問題ではないが、貧困やドロップアウトの問題を抱える層は多い。アフリカン・アメリカンが多く住むニューヨークのハーレム地区で、ストリートチルドレンの共同体を構想したハミルトンの *The Planet of Junior Brown* と、通りに住む人々の関わりあいをスケッチしたウォルター・ディーン・マイヤーズの短篇集 *145th Street* は、いずれも児童文学ならではの書き方で、痛みの中にある希望や助け合いを描写し、人と人との接続を示している。

第三に、言葉による接続である。ミルドレッド・ピッツ・ウォルター

の *Second Daughter* は、奴隷制が続いていた植民地アメリカで、独立戦争を経てアメリカ合衆国が誕生し、憲法が成立したときに「人間」の中に黒人も含まれることを主張して裁判で自由を勝ちとったエリザベス・フリーマン (Elizabeth Freeman, 1744-1829) を妹の視点から描くフィクションである。姉妹の父母はアフリカから連れられてきた奴隷で、土地の言葉であるフラニ語が、アメリカでも奴隷同士をつなぐ。さらに2人は、支配者の言葉である英語をより精確に理解することにより、新しく建てられたアメリカ合衆国の憲法の意味を知り、法廷闘争に持ち込んで、白人弁護士の助力得ることもできる。

アンジェラ・ジョンソンの *Bronx Masquerade* は、現代のニューヨークの中学校で、英語の授業の一環で詩作にとりくむ様々な民族集団の子どもたちの群像を描く。アフリカン・アメリカンの路上文化に端を発するヒップホップやラップを軸とし、若者の英語や黒人英語が詩の言葉として効果的に機能している。

逃亡という行為における接続、欠落を抱えた者同士の助け合いの接続、言葉を強い結びつき的手段とした接続が、アフリカン・アメリカンの文化から想像され、アフリカン・アメリカンの子ども読者へのエンパワメントとなっている。

## 1. 逃亡における接続 - 逃亡奴隷と「地下鉄道」

i. 「地下鉄道」というネットワーク - *Scenes in the Life of Harriet Tubman* (1869) から *Harriet Tubman: Conductor on the Underground Railroad* (1955) へ

① *Scenes in the Life of Harriet Tubman* (1869) における偉人性

アフリカン・アメリカン児童文学で「逃亡奴隷」が扱われる場合、逃亡による自由の獲得という個人の事情だけでなく、逃亡行為をめぐる有機的な輪の構築に光が当たり、ネットワークの構築の中で個人が活かされたという感覚がエンパワメントにつながっている。このとき、アフリカン・アメリカン作家は、逃亡奴隷の個人的な偉業よりも、彼らを生きのびさせたネットワークの方に着目しているのではないだろうか。

ハリエット・タブマンはメリーランド州生まれの奴隷で、5歳のときから家内奴隷として使われはじめた。ジョン・タブマンという奴隷と結婚するが、北部にある自由への憧れを消し去ることができず、逃亡した。その後は「地下鉄道」による奴隷解放運動家になり、何度も北部と南部を往復して「車掌」役として多くの奴隷を北部に連れてきた。南北戦争では看護婦となり、北軍のスパイとして活動する。ジョンはやがて別の女性と結婚し、ハリエットは後年、ネルソン・デイヴィス (Nelson Davis) という退役軍人と再婚した。

白人教師で歴史の研究者だったサラ・ブラッドフォード (Sarah H. Bradford, 1818-1912) は、タブマンの生前に直接聞き取りをおこなって *Scenes in the Life of Harriet Tubman* (1869) にまとめた。ブラッドフォードには *Lewie; Or, The Bended Twig* (1854) や *The Linton Family, Or, The Fashion of this World* (1860) などの児童書の出版歴もあり、1886年には再びタブマンを取り上げて *Harriet Tubman: The Moses of Her People* を子ども向けに出版している。

奴隷制度の中で奴隷が自由になるには、①忠実な召使として信用を得、遺言や、奴隷本人に対する贈り物として解放される ②他の農園主や商



工業者に貸し出される許可を受け、労賃から貸し賃を引いた金額を取り分とする。または、忠実な召使に与えられる制限付きの自由の中で副業をし、現金を手に入れる。その貯金で、農園主から自由を買い取る ③ 逃亡する の 3 つの方法があったが、最も白人社会への挑戦になったのは逃亡で、しばしば危険を伴ったが、多くの黒人奴隷が試みた<sup>36</sup>。

1850年まで、奴隷は北部と南部の境界であるメイソン・ディクソン線 (Mason and Dixon Line) を越えて自由州に行くことを目指したが、1850年の改正逃亡奴隷法 (Fugitive Slave Act of 1850) で、奴隷が自由州に逃亡しても、元の持ち主が来れば、引き渡されて戻されることが定められた。そのため、逃亡者は、国境を越えてカナダやイギリスまで渡らなくてはならなくなった。フィラデルフィア州やメリーランド州は比較的 free state に近く、逃亡が現実味を持っていた反面、ミシシッピ州やアラバマ州などの深南部は、奴隷への態度においても、境界線まで距離が長いという点においても、逃亡はきわめて危険な賭けだった。道中では犬に追われ、つかまれば暴行を受ける危険と隣り合わせだったが、それでも逃げる者は後を絶たなかった。逃亡という移動だけが積極的な主体性と結びつく。奴隷 - 農園主という閉じた関係性を越えて、複数の援助者と結びつく開放性を持つ逃亡は、農園主 - 奴隷という絶対的關係を相対化できる行為でもあった。

アンテベラム期に北部の大衆に流布していた逃亡奴隷像は孤立的で、一人ないしは家族で逃亡するイメージが形成されていた。南北戦争中に描かれたイーストマン・ジョンソン (Eastman Johnson, 1824-1906) の “A Ride for Freedom: The Fugitive Slaves” (1862) の絵<sup>37</sup>は、3人家族が馬で北部に逃げていく様子を描き、野蛮な南部を貶め、革新的な北部を礼賛する共同体の合意を示す。 *Uncle Tom's Cabin* の大衆演劇版

である「トム・ショウ」<sup>38</sup>では、原作で数行の伝聞にすぎないエライザ（Eliza）と息子のハリー（Harry）の逃亡が、音楽や大きなセットを駆使した見せ場になっている（常山 34）。凍った川を飛び越えていく母子は、野蛮人から逃れてキリスト教徒のところへ救済を求めるイメージとなり、子どもを守る母としての北部の良妻賢母像と、アフリカの野生味が合体しているが、この二者は誰かに助けられるわけではなく、孤独な旅を続けることがほのめかされる。

ブラッドフォードのタブマン像には、この、孤高の逃亡奴隷像の影響が残る。ブラッドフォードは、邪悪な奴隷制度が廃止されたことを喜ばしく思い、奴隷制度を支持していた南部白人への啓蒙を念頭においている。タブマンを支えた「地下鉄道」のシステムへの考察はなく、*Scenes*の中で“Underground Railway”という表現が出てくるのは

あるときにはタブマンは森に一行を残し、彼女の言う「地下鉄道の駅」のうちの1つに、長い回り道をしながら行った。ここで彼女は空腹の一行のために食べ物を入手した。彼らの食べ物のために、1日5ドル分、苦勞して稼いだお金から支払うこともしょっちゅうだった。しかし、危険を冒さず、夜まで戻らなかった。見張られて、隠れ場所が暴かれるのを恐れていたからである。

At one time she left her party in the woods, and went by a long and roundabout way to one of the “stations of the Underground Railway,” as she called them. Here she procured food for her famished party, often paying out of her hardly-gained earnings, five dollars a day for food for them. But she dared not go back to them till night, for fear of being watched, and thus revealing

their hiding-place.

(Bradford 25)

という一か所のみである。ブラッドフォードにとって「地下鉄道」はあまりなじみのない言葉であったように見受けられ、逃亡と「モーゼ」役は、あくまでタブマン個人の偉業として扱われている。

*Scenes* の「前書き」には、聞き取りと執筆の経緯に加え、白人社会改良家で奴隷制度廃止主義者のゲリット・スミス (Gerrit Smith, 1797-1874)、白人弁護士で政治家の奴隷制度廃止論者 ウェンデル・フィリップス (Wendell Phillips, 1814-1884)、元逃亡奴隷で奴隷制度廃止論者のフレデリック・ダグラスからの祝意を伝える手紙が掲載され、タブマンの素晴らしさを称えている。また、本編は章立てがなく、タブマンが語った話を三人称体で語り直し、ところどころに、キリスト教徒としてのコメントや語り手の声がさしはさまれる。後半には、タブマンの回顧を補完する白人支援者らの複数の手紙が並び、たとえば、タブマンには不思議な力があって、多額の懸賞金が賭けられ常に危険と隣り合わせだったにもかかわらず、追手に見つかったことは一度もないというエピソードが書かれている。最終的に、数十人から数百人と見積もられる奴隷を逃がしたことや、信念によって必要な支援を得ることができたことを証言している。

ブラッドフォードは、タブマンの信仰心に注目し、タブマンが逃亡希望の奴隷を連れ出していく様子は

ある天気の良い朝、ジョーが、また、別の大農園からは彼の弟のウィリアムがいなくなった。ピーターとエライザもいなくなった。彼

らはハリエットの次の一団に加わり、メリーランドからカナダまで  
- 彼らの表現でいえば「エジプトから約束の地カナン」までの巡礼  
を始めようとしていた。

One fine morning Joe was missing, and his brother William, from  
another plantation; Peter and Eliza, too, were gone; and these  
made part of Harriet's next party, who began their pilgrimage  
from Maryland to Canada, or as they expressed it, from "Egypt to  
de land of Canaan."

(Bradford *Scenes* 29)

と、多くの黒人霊歌と同様に、聖書の中の出エジプト記にたとえている。  
自由州でタブマンはメイドの仕事などをしながら資金を貯め、再び南部  
へ行くという繰り返しをしていたことも明らかにし、南北戦争中は北軍  
の看護婦となって、自由に鉄道に乗れる通行証も手に入れていた。彼女  
は、自由州に来た同胞に当座の生活をさせるためのお金や、奴隷を助け  
に南部に行くためのお金が尽きると篤志家のところへ行く。

彼女は紳士の事務所に行った。

「何が要るんだい、ハリエット？」という声がまず迎えた。

「お金です」

「ほんとかい？いくら要るんだね？」

「20ドルです」

「20ドルだって？誰に言われてここに来た？」

「神様です」

「それなら、今回は神様がお間違えになったのではないかい」

「そうは思いません。とにかく、いただくまではここに座らせていていただきます」

She went into this gentleman's office.

“What do you want, Harriet?” was the first greeting.

“I want some money, sir.”

“You do? How much do you want?”

“I want twenty dollars, sir.”

“Twenty dollars? Who told you to come here for twenty dollars?”

“De Lord tole me, sir.”

“Well, I guess the Lord's mistaken this time.”

“I guess he isn't, sir. Anyhow I'm gwine to sit here till I git it.”

(*Scenes* 109-110)

ユーモアを交えた会話の中にタブマンの信仰心が見え隠れする。結果的に、タブマンは、紳士の事務所の廊下から動かず、事務所を訪れた人から 60 ドルの資金提供を受けている。

奴隷を導く行為そのものも、資金集めも、焦点が合わせられているのは個人としてのタブマンであり、そのまわりに、白人の資金提供者や社会改良家が描かれる。この評伝出版が、南北戦争でスパイ活動をしたにも関わらず黒人であるために恩給を受けられなかったタブマンの資金集めの一環であったことも、タブマンの個の卓越性を強調する理由であるが、いずれにしろ、「地下鉄道」という活動はタブマンという偉大な個人像の前に霞んでいる。

② *Harriet Tubman: Conductor on the Underground Railroad* (1955)

におけるネットワーク性

他方で、現代のアフリカン・アメリカンの作家がタブマンを語る際には、彼女を活かしたネットワークに力点がおかれる。*Scenes*を定本にして、アフリカン・アメリカン作家のアン・ピトリ (Ann Lane Petry, 1908-97) が書いた評伝 *Harriet Tubman: Conductor on the Underground Railroad* (1955) は、タブマンが頼った「地下鉄道」のネットワークそのものに着目している。

逃亡奴隷は「地下鉄道」を通じて北部へ、1850年の改正逃亡奴隷法以降は北部を拠点にさらにカナダへと逃れていた。「地下鉄道」の秘密運動は、平和主義を掲げるクエーカー教徒、ドイツ系移民を中心とした奴隷制度反対主義者、自由黒人らによる共闘的な試みであり、市民権をもつ白人や、自由黒人や解放奴隷が逃亡者に一夜の宿や食事を提供したり、衣類を与えたり、馬車で次の支援者の家へ送ったりした。援助者の家には、目印のランタンが灯っている、示された小屋に逃げ込み、白い布を巻くと食料や衣類が運ばれてくるなど、工夫をこらした合図があった。誰が支援者なのかは公にはされないまま、大がかりなネットワークが存在し、そのつながりが強調されている。

「地下鉄道」では、逃亡奴隷は「乗客」(“passenger”)、案内役は「車掌」(“conductor”)、支援者の家は「駅」(“station”)と呼ばれた。経済的支援を含む大きな役割を果たした人物は複数名いたが、特定の団体の主宰ではなく、組織の長としてのリーダーもなく、市井の人々が自己の信念に基づいて結びつき、支援者の点と点がつながって線となったレジ

スタンスである。奴隷や逃亡奴隷をめぐって複雑な越境性があるとき、「地下鉄道」は、奴隷州の町と自由州の町を点と点でつなぐ線ではなく、奴隷州の中にも自由州の中に混淆している奴隷制度廃止論者同士をつなぐ複数の線を俯瞰する面になる。

ピトリの *Harriet Tubman* では、タブマンは農園奴隷として働いているときにタイス・デイヴィッツ (Tice Davids) <sup>39</sup>の逃亡伝説を耳にし、「小包」「箱」「乗客」と呼ばれるものが逃亡奴隷の隠語であることや、ナット・ターナー (Nat Turner, 1800-31) の反乱をはじめとする暴動が起きていることを知る。

ハリエットは、北部に延びる『地下鉄道』が鉄道でも何でもないと知った。地下を走っているものでもなかった。ゆるやかに組織された集団で、食べ物や泊まる場所、隠れ場所を、北部へそして自由へ向かう長い道のりを進み始めた逃亡者に提供してくれるのだ。

Harriet learned that the Underground Railroad that ran straight to the North was not a railroad at all. Neither did it run underground. It was composed of a loosely organized group of people who offered food and shelter, or a place of concealment, to fugitives who had set out on the long road to the North and freedom.

(Petry 97)

何度目かの試みで単独の逃亡に成功したのち、彼女は、トーマス・ギャレット (Thomas Garrett, 1789-1871) に保護され、その後、「車掌」役を務めるようになる。

ギャレットはクエーカー教徒で奴隷解放主義者の社会改良家の白人で、*Scenes* では、「すばらしく心が広く寛大で、彼の手を通じて、2000人の自分で自分を解放しようとする奴隷が自由への道を通り抜けていった、とハリエットは言う」(“a man of a wonderfully large and generous heart, through whose hands, Harriet tells me, two thousand self-emancipated slaves passed on their way to freedom” *Scenes* 30) と述べられている。

*Scenes* では、タブマンからギャレットに向かう線が注目されているが、*Harriet Tubman* ではギャレットもタブマンも「地下鉄道」という面の活動で相対化されている。「モーセ」であるタブマンがたったひとりで英雄的な行為をなしとげたのではないのと同様、ギャレットも北部の拠点で仲間とともにハリエットを支援し、指示を与え、ハリエットが連れ帰る逃亡奴隷の身の振り方を考えている。タブマンもギャレットもネットワークの中で協働していたことをピトリは強調する。

ピトリは、「駅」であることを隠して支援をおこなう多数の白人にも着目する。ある農家の夫婦は、合言葉を合図に扉を開け、一宿一飯を提供する。ある農夫は、四輪馬車の積荷の下の隙間に逃亡奴隷たちを匿って運び、奴隷狩りの追手に問われたときにはユーモアをまじえて隠し通す。あるクエーカー教徒の男性は、すぐそばにタブマンら奴隷たちが隠れているのに気づき、姿の見えない彼らに向かってわざと大声で「私の四輪馬車は、道の真向かいのすぐ先の農家の前庭にある。馬は馬小屋にいる。手綱はかけ釘にかかっている」(“My wagon stands in the barnyard of the next farm, right across the way. The horse is in the stable. The harness hangs on a nail” *Harriet Tubman* 205) と独り言を言う。



当事者である黒人奴隷の逃亡の動きに合わせ、それを助ける白人支援者や自由黒人が複数で関わる場において「地下鉄道」は機能する。ギャレットがタブマンの後ろ盾になったように、奴隷州と自由州の境界線を攪乱しつづける「車掌」はさまざまなレベルで支援者とつながる。タブマンの背後には、通常の市民の暮らしを営みながらそれを支援した人びとがいて、無数の有機的なネットワークを形成していた。

「地下鉄道」は、顔の見える白人、黒人ひとりひとりのつながりによって可能となる活動である。タブマンは、「地下鉄道」の網の目の中で最前線を担うひとつのコマである。白人と黒人が接続してネットワークを形成し、その中においてタブマンは初めて意思を貫けるということ、ピトリは忘れない。ギャレットもまた、一人ですべてを支えていたのではなく、きわめて大きな役割を果たしていたにしても、それは、より広範囲の市民の多数の関係性の中で機能するものである。

奴隷 - 農園主という閉じた関係性を越えて、複数の援助者と結びつく開放性を持つ逃亡は、様々な人の手を借りながら北ににじり寄ろうとする意思の産物である。命を賭けても自由になりたいという奴隷の必死な思いが、様々な人を少しずつ巻きこんでいく。奴隷制度に抵抗する過激な行為であっても、人間としての尊厳を求めて逃避する逃亡者の後ろに、「地下鉄道」の線路が形成され、醜悪な制度を崩壊させようという意思において接続する。白人女性のブラッドフォードがタブマンの個人的な偉大さに着目しているのに対し、アフリカン・アメリカン作家であるピトリはタブマンを生かしたネットワークに注目し、偉人タブマンがいかにも名も知られない多くの一般人の輪の中にいたのかを主張している<sup>40</sup>。

アフリカン・アメリカンが経験した奴隷制度と人種差別の闇は、様々な被抑圧者と接続していく可能性を持ち、肌の色や時代を越えて、他者

の痛みに共感し、他人の感情を疑似体験させる文学においては、弱者の多様性を浮かび上がらせ、抑圧の中にいるアフリカン・アメリカン以外の人たちと連携していく可能性も残すのが「地下鉄道」の精神であり、ピトリの評伝はタブマンを媒介にしながら、児童文学という形式において、ネットワークをもうひとつの主人公のように浮かびあがらせ、接続を重要視しているように見受けられる。

ii. 「地下鉄道」がつなぐ過去と現在 - *Time Pieces: A Book of Times* (2000)

ヴァージニア・ハミルトンの *Time Pieces: A Book of Times* (2000) は、10歳の少女ヴァリナ (Valena) が夏休みに「地下鉄道」をめぐる歴史を知ることで自己認識を深め、前向きになるまでを描く中編である。「地下鉄道」を通じて、20世紀のヴァリナと19世紀の逃亡奴隷が接続し、現在に対して過去が直接的な力を持つ<sup>41</sup>。

ヴァリナは、進級に不安を感じ、姉のベビーシス (Babysis) がけがをし、町がトルネードに襲われ、おばさんが怪我をして入院し、老犬が交通事故で死んだことで気がふさいでいる。

彼女の気持を変えたできごとのひとつは、一家で出かけたサーカスでゴリラのガルガンチュア (Gargantua) を見たことである。アフリカの大地で囚われ、異国の地で見せ物にされる巨大なゴリラに、ヴァリナはアフリカン・アメリカンの過去を思い、激しさを内に秘めた前思春期の自分を重ねる。本来あるべきところから引き離されて暴力を受けるもの、つまり、奴隷にされた当時のアフリカの様々な部族の人間たちが想起される。そして、そのしめつけられる苦しみが、成長に向かいつつある少

女の心の葛藤に重ねあわされている。

私は、あのもっとも偉大な野生の動物の、あの恐ろしかった光景を、これからずっといつでも大事にするだろう。私は、彼を忘れないだろう。私はこれからいつでも彼を称え、再憶の中で彼を心配するだろう。後になって、ヴァリナの父さんは新聞でガルガンチュアの話を読んだ。この動物の顔面がすっかり醜くなっているのは、ジャングルから連れてくるボートの中で意地悪な船員が酸をかけたからなのだ。

ガルガンチュアは絶対に檻なんていらなかったと思う。たとえ、すごく大きくて幅のあるものであっても。誰がそんなものほしが  
る？ そうね、私は絶対にほしくない。彼は外に出て自然の中  
にいたいだけ。彼は今の私のように。彼は、自由になりたがっている。

*I will always love the scary sight of that greatest wild animal. I will never forget him. I will always admire him and worry over him in my memory. Later, in the papers, Valena's dad read a story about Gargantua. The animal's face was all ugly because a mean sailor threw acid on him, on the boat that brought him from the jungle.*

*I bet Gargantua never wanted a cage, even a great big long one. Who would? Well, I sure wouldn't. He only wants to be outside in nature. He's like I am. He wants to be free.*

(Hamilton *Time Pieces* 43)

本来あるべきところから引き離されて暴力を受けるもの、つまり、奴隷

にされた当時のアフリカの様々な部族の人間たちが想起される。そのしめつけられる苦しみが、成長に向かいつつある少女の心の葛藤にも重なり、19世紀の集団的苦悩と21世紀の個人的葛藤が出会う。ガルガンチュアを通じて、ヴァリナは、過去から続く自己像に意識が向き、個人が歴史の一部となる感覚を覚える。

ヴァリナにとって、もうひとつの重要な経験は、逃亡奴隷と地下鉄道の口承の物語に触れたことである。母方のハーパー（Harper）家の女性たちは、月に1回集まって奴隷制時代や南北戦争時代の祖先の話を語り、書きとめる会を催している。ヴァリナは、母親のハリエット（Harriet）がヴァリナの曾祖父のルーク（Luke）の逃亡について話すのを偶然立ち聞きし、深い感銘を受ける。ルークは、南北戦争末期に、母親のメアリー（Mary）と一緒に北部へ逃げ、逃亡奴隷を助ける町モード・フリーで生きるすべを学んでひとり立ちしていった。さらにその時代からさかのぼった奴隷制時代に、ハリエット・タブマンを思わせるタニー・フリー（Tunny Free）という逃亡奴隷がいて、モード・フリーの礎を作ったことも語られる。

*Time Pieces* では、逃亡が個人的な経験に帰せられていない。タニー・フリーは、並外れた身体能力を持つ小柄な女奴隷で、少女のときに拉致され、アメリカの農園で奴隷になった。野生に近い感性を持ち、連れられてきた農園で奇声を発するため、檻に入れられる。彼女を野蛮と見なす白人たちの中で、農園主の幼い息子スピンドリー（Spindly）はその力強さに心を奪われ、いつかこのすばらしい人を自由にするのだと決意する。長じて、実際にタニーはスピンドリーと一緒に北部へ逃げて自由になり、その後も、何度も往還し、たくさんの逃亡奴隷の手助けをしたとされる。

タニーは、自分や家族などの狭い範囲で物事を見ることはしない。自分だけが逃亡するのではなく、言葉も通じ合わない、どこの部族かも分からない、アフリカ出身の人々をひたすらに北に導こうとする。タニーが逃亡奴隷のために築いた複雑な逃亡ルートは「迷路」(maze)と呼ばれる。

時代が下って、ルークは母親のメアリーと一緒に、「迷路」を通過して大農園から逃げる。彼はモード・フリーで目覚めたときにメイブリー(Maybrey)という青年から、メアリーがどこかへ去ったと告げられる。

おれがやったのでもないし、おまえがやったのでもない。大勢の人間が、必要なときには出ていく。あの昔のアフリカ人みたいに。外の世界に、やらなくてはいけない自分だけの仕事があるんだ。

I didn't do it, and you didn't do it. Lotsa folks go when they has to, just like that old African. Had her own business to tend to in the worries outside.

(*Time Pieces* 170)

メアリーはルークを置き去りにする。だがそれは遺棄ではなく、自由の町にいる他の青年、すなわち、同じ経験を共有してきたであろう仲間を信頼し、無言のうちに託し、他の奴隷を導くために戻ったためであることが示唆される。メアリーは、他の奴隷を自由にするというより高い目的のために姿を消すが、自分がいなくとも、共同体の中で育てられ、その中で自助努力していくようにという信頼を残していく。個別的な愛着に絡め取ることなく、巣立たせる役割を果たし、母子のつながりよりも大きなコンテクストにおいて息子を生かすのである。

ルークは、タニーと母親が重なることに気づいたのち、独り立ちして、手に職をつけ、結婚する。逃亡奴隷は、単独で、自分さえよければという気持ちで北部に旅立ったのではない。その行為はつねに集団性の中にあり、援助者だけでなく、他の逃亡者との関係性を生み、あるいは、永遠に庇護を受ける側ではなく、逃亡者から援助者へ役割が変転していくことも含めて、逃亡が有機的であることが強調されている。

困難な時代を生きた自分の先祖たちに先立って、奴隷制の時代に卓越した強さを発揮した小さな女性タニーを知ったヴァリナは、物語によって人生の輪郭を理解し、先祖の生き方に触れることで自信を持つことができる。過去からの声、困難を生きのび、人間らしい人生を手に入れた先祖たちの物語が、ヴァリナの中でより生き生きと輪郭を持ち始めるにつれて、憂鬱な気持ちも晴れていく。ヴァリナは、自分が家系図の中に落ち着き、母方のハーパー家で語り継がれている物語を知り、父方のマクギル (McGill) 家の従姉とふれあうことで、ファミリー・ツリーの一部として自己理解を深め、成長を実感する。ヴァリナの内部で、逃亡奴隷のネットワークを媒介に、過去と現在が接続し、ヴァリナにエンパワメントを与えている。

## 2. 欠落による接続 - 路上の人間関係

### i. 「新しい人類」の空想 - *The Planet of Junior Brown* (1971)

#### ① アメリカの路上

ニューヨーク市のハーレム地区は、19世紀にはオランダ領の小さな村

に過ぎなかったが、現在では、110丁目とセントラルパークより北側、155丁目より南側の、ハドソン川とハーレム川にはさまれた都会の一区画となっている。1920年代にはハーレム・ルネッサンスの舞台となって、文学、音楽、演劇など様々なジャンルで果実を実らせた一方、移住者の受け入れや街の整備は順調だったわけではない。アフリカン・アメリカンが押し寄せることによって結果的に白人が他の地区へ移動し、街の美化や安全が低下し、「西インド諸島の黒人が1920年代にハーレムに定住することがこの共同体の人種問題に別の複雑な側面をもたらした」(“the settlement of West Indian Negroes in Harlem on the 1920’s added another complicating dimension to the racial problems of this community” (Osofsky 120)。大恐慌以降にゲッター化したハーレムは、治安、美化、生活水準などの点で停滞し、アフリカン・アメリカンの低所得者層が他にどこにも行けずに暮らす危険な地区となった。1990年代にニューヨーク市が治安改善に乗り出すまで、アメリカでも有数の貧困と犯罪の地区だった。

アメリカ児童文学の中で、<sup>ストリート</sup>路上は家庭の対になる危険な場所とみなされてきた。移民や貧民の押し寄せる都会の路上は、19世紀にはすでに「誠実な空間としての家を求める人々が、みずから裏腹に不誠実な行いに手を染めかねない、行動倫理の臨界」(新田 28)である。「都市はその本性として異質性を内包するが、そのなかでもっとも極端な形で異質性をはらむ空間がストリート」(鈴木裕之 15)であり、人が行きかう路上にとどまらざるを得ない底辺層やドロップアウトした若者が固有のコードを創り出す。彼らは路上で小銭を稼ぎ、徒党を組み、ときに闇社会と手を結ぶ。

路上は、孤独を増幅させる。J・D・サリンジャー (J.D.Salinger,

1919-2010)の *The Catcher in the Rye* (1951) の主人公ホールデン・コールフィールド (Halden Callfield) は、寮を飛び出したあと、実家に戻ることもできず、ニューヨークの路上をうろつきながら知り合いに電話をかけ続ける。しかし、実際に相手に会ってみても良いつながりを持つことはできない。恒常的に路上にいるのは、本来、そこにいるべきでない者である。子どもは、できるだけ路上を避け、早く帰宅しなければならない。1920年代に黒人文化が開花したハーレム地区は、大恐慌以降に荒廃し、その路上は他の都市や地区の路上以上に、危険な場所と見なされてきた。

## ② *The Planet of Junior Brown* における路上の「惑星」

ヴァージニア・ハミルトンの *The Planet of Junior Brown* (1971) は、ハーレム地区を舞台に、欠落を抱える者同士が接続を試みる作品である。都会の路上への見方を転覆し、アフリカン・アメリカンの共同性を基盤に、本来は周縁の場所である路上に新たな光を当てている。

*Junior Brown* は、ニューヨークのストリートチルドレンのバディ・クラーク (Buddy Clark) と、同じ中学校に通うジュニア・ブラウン (Junior [本名 Virgil] Brown) の友情を描く。バディは14歳のアフリカン・アメリカンで、裏通りの廃屋にひそかに形成されている「惑星」 (“planet”) と呼ばれるホームレスチルドレンの共同体の指南役「明日のビリー」 (“Tomorrow Billy”) をつとめている。9歳で家出したバディは、偶然迷い込んだ「明日のビリーの惑星」 (“the planet of Tomorrow Billy”) で3年間を過ごし、盗みや麻薬に手を染めずに路上で生きのびる方法を学び、今では彼自身が自分の「惑星」で暮らす年少者のために



心を砕く。数学の天才である賢さに、野生動物のようなたくましさを持ち、献身的である。

バディの親友のジュニアは、体重が 120kg を超える巨漢のため、容姿の醜さというコンプレックスを持っている。裕福な家の一人息子で、ピアノと絵画の天才だが、父親は不在で、母親のジュネラ (Junella) とピアノ教師のピーブス (Peebs) から強い抑圧を受けている。ジュネラはジュニアを思い通りにしようとし、コンサートなどの社交に無理やり連れ出す一方、神経に障るという理由で家のピアノの弦をすべて切断し、ジュニアが描き進めていた絵も捨ててしまう。ピーブスは優秀なピアニストで、ジュニアは、彼女のおかげでセントラルパークの野外コンサートに出演できた。だが、グランドピアノはコンサートピアニストのためのものである、という持論から、レッスンでもジュニアにピアノに触らせず、「汚い親戚の男が家に上がりこんでいる」という虚言にジュニアを巻きこむ。口止めされたジュニアは抑圧を受け、最後には、彼にもその男の幻想が見えるようになってしまう。

ジュニアとバディは互いの境遇を知らずに親しくなり、授業をサボタージュして中学校の地下室で、用務員で元数学教師のプール氏 (Mr. Pool) と一緒に太陽系の模型を作ることに熱中している。プール氏もアフリカン・アメリカンで、バディは彼の助けを借りながら太陽系 10 番目の惑星として、肥満のジュニアになぞらえたベージュと黒の巨大な「ジュニア・ブラウンの惑星」 (the Planet of Junior Brown) を加える。バディは最後に、精神的に打ちのめされているジュニアを助けるためにプール氏に秘密を打ち明け、彼を惑星に避難させ、暫定的な名前しかなかった「惑星」に、友情の証として、模型と同じ「ジュニア・ブラウンの惑星」という名前が与えられる。

*Junior Brown* は、路上を大人も子どもも年齢に関係なく集う場と見なし、家庭に帰るまでの刹那的な時空間ではなく、家庭と同様のシェルター機能を持つという積極的な意味が与えている。路上において親からの遺棄や混乱を抱えた弱者を生きのびさせつつ、惑星運営においては、それに手を貸す年長者も巻き込み、自然発生的な援助と共同の場を構想している。用務員のプール氏だけでなく、バディがホームレスであることを知らずに新聞スタンドでアルバイトをさせている 24 歳の青年ドゥーム・マラク (Doum Malach) もアフリカン・アメリカンで、最終的に、ジュニア・ブラウンをめぐる「惑星」の秘密を教えられ、活動に手を貸すガーディアンの一人名となる。

ある面から見れば、これらの成人からの援助がなければ、「惑星」もジュニアの救済もおこなわれえない点が児童文学の限界であるが、作家の意思は、手を貸す大人も巻き込み、一方的に手を貸すのではなく、手を貸すことによって大人も精神的に救済されるような共同体の構想にある。性別や年齢を超えて緩やかに連帯する者たちは、プール氏が夢想する「まったく新しい人類」(“The whole new being” *Junior Brown* 13) である。「惑星」と路上に関わるすべての者が、欠落を越えて助け合えるように構造化され、大人を含むことにより、「新しい人類」が、やがて、アフリカン・アメリカンだけでなく、より多様な人間の中から生まれてくることが予見される。

これは、ジュニアが秘かに描き続けている「赤い男」(Red Man)<sup>42</sup>の絵にも暗示されている。ジュニアは、母のジュネラが持病の発作を起こすとき、投薬や注射をおこなわなければならない、精神的にも身体的にも大きな負担を抱えている。その重荷を払拭するように、ジュネラが熟睡している間に大きなキャンバスに向かい、「赤い男」の絵に取り組んでいる。

「赤い男」の内部には路上が再現され、無数の小さな人々や事物が細かく描きこまれている。

ジュニアには思いや夢があり、それを描いた。すばらしい音を出すピアノも描いた。学校とジュニア・ブラウンの惑星。通りにはバディ・クラークがいて自由にたくましく突き進んでいる。みんなが自由に浮かんでいるところも--プール氏とその父、バディの父、勝負事、バス、老人、樹木。

Junior had thoughts and dreams, which he drew. He had pianos with splendid sound which he painted. He had the school and the planet of Junior Brown. He had the streets with Buddy Clark free and tough, knocking his way through them. He had everyone flowing free—Mr. Pool and his daddy and Buddy’s daddy and games and buses and old people and trees.

(*Junior Brown* 138-9)

「惑星」は、「あらゆる姿と肌の色の1インチ大の人間たち」(“inch-high people of all shapes and colors” 138)が描きこまれている絵と関連し、子どもだけでなく、勉学に傷ついた青年も、職業上の目標を見失った元教師も力づける。

③ 奴隷小屋の「<sup>ストリート</sup>通り」のイメージ化

*The Planet of Junior Brown* の惑星や路上のイメージのもとになっているのは奴隷小屋の「<sup>ストリート</sup>通り」である。ジョージ・ローウィックによると、

19世紀の南部の奴隷小屋は母屋敷から見えないところに並べて建てられ、いずれも、簡素で雑然としていた。しかし、洗濯小屋や鍛冶屋など自然発生的に生まれた共同の作業場を中心に奴隷小屋のあいだを縫う「通り」は、ある種の自律的な領域と見なされ、生活の場であるだけでなく、奴隷どうしがつながりあえる歌や踊りの場となった。

「通り」は雑多で曖昧な場所であり、社交や共同作業が行われる場所だった。奴隷たちは、実質的な理由からも、気分的な理由からも、暗く狭い小屋の中よりも、外での煮炊きや娯楽を好んだ。いさかきもあれば相互扶助もある。農園主には秘密の宗教的な集会がおこなわれ、成員を結びつけ、情報を分かち合う場となる。小屋という惨めなプライベートと、暴力的に働かされる農園というソサエティのあいだに「通り」はあり、「アフリカの過去とアメリカの現在から得た素材で自分たち自身の共同体を築いた。そこには、新たな創造に意味と方向性を与えるアフリカの価値観と記憶があった。彼らは、日の入りから日の出までを生き、愛し合った」(“They built their own community out of materials taken from the African past and the American present, with the value and memories of Africa giving meaning and direction to the new creation. They lived and loved from sundown to sunup” Rawick [邦訳] 11-12)。

*Junior Brown* は、こうした、白人農園主の目には見えない奴隷小屋の「通り」をニューヨークの通りにあてはめている。廃屋や人目につかない場所に点在する「惑星」は、他者のために生きられる者たちの共同体である。少年たちは「惑星」で力を蓄えたのちに路上に再び出て行き、高邁に生きていこうとする。「明日のビリー」に、「明日も来る？ビリー？」(“Tomorrow, Billy?” *Junior Brown* 73) と聞かなくなった日、「惑星」の子どもたちは自立したとみなされ、次の日から「明日のビリー」は来

なくなり、グループはばらばらになるが、「惑星」に育まれた少年たちは自力で路上に居場所を見つけ、やがて、通常の共同体と並存するもうひとつの生活のネットワークを作る。それは、白人支配者階級の文化と並存して自分たちの暮らしを確かに組み立て、奴隷小屋のはざままでコミュニケーションをはかっていた奴隷の姿にも似ている。

独特な「通り」観を持つアフリカン・アメリカン文化が子ども読者と出会うことではじめて、この奇跡的な「惑星」は構築されるのではないだろうか。作品では、ニューヨークの雑多な「通り」と奴隷小屋をつなぐ「通り」を重ね合わせ、なおかつ、子ども読者を意識したときに、廃墟の陰や使われていないビルの一室に、暴力を介さずに子どもの力と知恵だけで生きのびることを可能にする保護機能が空想されている。ハミルトンは「惑星」の自律的なダイナミクスを賛美し、奴隷制時代の人間性回復の場所の現代版として、70年代のニューヨークの路上を見ている。黒人奴隷の歴史に遡上し、かつて奴隷だった先祖たちが生み出していたかもしれないぬくもりや、ひそやかに反逆を企てた高揚感を現代に再生している。ハミルトンの描く路上には、豊穡な関係性とネットワークが再創造され、盗みや麻薬に手を染めることなく大都会でともに生きのびていこうとする人々の意思が描かれている。

欠落を抱えつつ協働するアフリカン・アメリカンの大人と子どもが連携して運営していく「ジュニア・ブラウンの惑星」は、かつて奴隷小屋の「通り」で連帯していた奴隷たちを現代の都会に空想したものである。欠落しつつ、それを補いあって生きのびる子どもと大人の接続を描くことで、現実をサバイバルしている子どもたちにエンパワメントを与えようとしている。

ii . 共同する場 - *145<sup>th</sup> Street* (2000)

① ニューヨーク 145 番通りで交接する人生

ウォルター・ディーン・マイヤーズは、ウェスト・ヴァージニア州生まれで、母親の死後に父親の友人でニューヨークのハーレム地区に暮らすディーン家に姉たちとともに引き取られた。経済的な理由で大学進学を断念し、軍隊経験を経て文筆への道を志した。アフリカン・アメリカンが読者対象として考えられていないことにジレンマを抱え、等身大のロール・モデルを見出せずにアイデンティティを確立しにくかった子ども時代の経験を土台に、コンテストでの受賞をきっかけに児童文学作家になった。リアルなアフリカン・アメリカンの登場する物語を子どもに向けて書き、アフリカン・アメリカンの子どもたちが本来的に抱える空虚さを埋めるために自分の才能を使おうと決心したのである (Bishop “Presenting” 135)。

マイヤーズは、ハーレムの厳しさを理解しつつ、そのシニフィアンの内側に複雑な人間関係と利害を越えた結びつきがありうることを探ってきた。*Scorpions* (1988)では、少年ジャマール (Jamar) が、刑務所に入っている兄からのメッセージを受けてストリート・ギャングのリーダーになり、友人のティトが敵対するグループのメンバーを誤って銃で殺してしまったことで苦い別離を経験する辛さを描く。*Somewhere in the Darkness* (1992)では、刑務所から出て、自分の無実を知らせようとする父親と葛藤を抱える息子との関係を軸にし、暴力と隣り合わせのハーレムの絶望を基盤にしている。

その一方で、初期の *Fast Sam, Cool Clyde, and Stuff* (1978)は、116

丁目に住む子どもたちの成長や恋や友情をテーマにし、*The Young Landlord* (Myers, 1979) は、行動隊を作って古いビルを美化する 6 人の子どもたちの騒動が描かれている。いずれも、マイヤーズ自身のハーレムの楽しい子ども時代をもとに書かれ、ハーレムが明るく空想されている。

*145<sup>th</sup> Street* は 10 編から成る連作短編集で、ハーレム地区の共同性を浮かび上がらせることに成功している。“*Big Joe’s Funeral*”では、客足の途絶えないバーベキュー屋を経営し、界限で尊敬されているビッグ・ジョー (Big Joe) が自分で生前葬とパーティを企画する。ビッグ・ジョーの恋人で未亡人のセイディとその娘のピーチズ (Peaches) は企画が気に入らず、町の人たちも困惑するが、会は成功裏に終わる。

“*The Baddest Dog in Harlem*”は、自動小銃を持った男がいるという通報で大勢の警官が駆けつけ、アパートの窓に人がいるという叫び声をきっかけに激しい銃撃がおこなわれる。関係のないアパートに多数の銃弾が撃ち込まれ、部屋の住人メアリー (Mary) と警官と一緒にたまたま現場に連れていかれた「ぼく」は、部屋でメアリーの飼い犬が殺され、また、隣の部屋では、たまたま窓辺に寄って来たと思われる男の子が死んでいるのを見て絶望的な気持ちになる。

“*Fighter*”は、1 試合 145 ドルのボクシングで妻と幼い子どものために稼ぐビリー・ジャイルズ (Billy Giles) の試合前後の話である。彼にボクシングの才能はないが、退学してレールから降りた人生を立て直すのは困難で、ファイトマネーでなんとか暮らしを立てようとしている。試合では、これまでの人生で負け犬になった場面がフラッシュバックする中、ノックアウト負けを喫する。

“*Angela’s Eyes*”は、タクシー運転手だった父親が殺された 7 年生のア

アンジェラ・ルース・コロン（Angela Luz Colón）の「夢」の話である。アンジェラが夢に見た人が続けて不慮の死を遂げるという事件が続き、彼女は不吉な娘扱いされるようになる。小さなきっかけから警戒は解かれるが、実際は、アンジェラは実際には父親が死ぬ前にも夢を見、また、核爆弾を思わせる大量破壊の夢を見続けている。

“The Streak”は、高校生のジェイミー・ファレル（Jamie Farrell）に運の悪い出来事が続けざまに起きたのちに、それを逆転するかのようになり、続けざまに良いことが起きていく愉快な話である。ジェイミーは最後に幸運を使って美人のシーリア（Celia）をダンスパーティに誘おうとするが、その前に、予想外に出されたバスケットボールの試合で最後のパスのつもりで打ったボールが逆転シュートを決めるという幸運が起きてしまう。幸運の連鎖は終わりかと思ったせつな、シーリアの方から誘いがきてジェイミーは天にもものぼる気持ちになる。

“Monkeyman”は、けんかを止めたために不良集団のティグロス（The Tigros）に目をつけられた高校生のモンキーマン（Monkeyman）について級友の「ぼく」が語る。読書が好きで争いを好まないモンキーマンは、集団のティグロスの前に丸腰で現れ、殴られるままになるが、けんかにならないことでティグロスの方が氣勢をそがれる。数週間後、彼はティグロスのメンバーに逆恨みされ、刺されて重傷を負うが、回復する。「ぼく」は、大したことがないと思っていたモンキーマンの心の大きさに感銘を受け、将来を語り合う。

“Kitty and Mack: A Love Story”は、メジャーリーグ級の野球選手で高校生のマック（Mack）が発砲事件に巻き込まれ、右足を失って、恋人のキティ（Kitty）にも心を閉ざす。キティは心変わりをせず、マックとの待ち合わせ場所で待ち続ける。級友たちが純愛を応援し、マックは再



びキティと向き合い、キティを守れる男になれない悔しさを告げると、キティは、マックがありのままでいるだけで十分に男らしいと返す。

“A Christmas Story”は、ハーレムの外の郊外に暮らしながら通勤して来る警官のオブライエン（O'Brien）と、ハーレムで最年長といっているほどのマザー・フレッチャー（Mother Fretcher）のふれあいを描く。オブライエンが、具合を悪くしたマザー・フレッチャーのための救急車を手配し、お礼に手編みのカーディガンが警察署に届いたことからやりとりが始まり、オブライエンがマザー・フレッチャーの年齢を話題にしたことで家族も彼女に興味を持つ。マザー・フレッチャーからのクリスマス・ディナーの招待を儀礼的に受けたオブライエンは、家族に押されるように、非番にも関わらずハーレムに行き、良い時間を過ごす。

“A Story in Three Parts”は、麻薬中毒の少年ビッグ・タイム（Big Time）の更生の兆しをとらえる。第1部では祖母に麻薬を買うお金を無心し、第2部では、ヘロイン注射で快感と不快感を味わう。第3部で、たまたま入った空きビルの一室で小さな男の子ベニー（Benny）に出会ったところで、階下の麻薬中毒者が火事を起こす。火の手が迫る中、ビッグ・タイムはベニーを隣の建物に放り投げ、自分は墜落寸前のところ、何とか這い上がる。その後、ビッグ・タイムは不思議とベニーに対して保護者めいた気持ちが湧いてくる。

最終話の“Block Party-145<sup>th</sup> Street Style”で、少女のピーチズは、自分の母親とビッグ・ジョーの再婚が決まって苛立っている。ピーチズは親友のスクイーズィ（Squeezie）と一緒に市主催の無料のストリートパーティーに行くが、癩癩を抑えられない。ホームレス状態で暮らす級友の少年JTに偶然会うが暴言を吐いてしまう。落ち着きを取り戻したあと、スクイーズィと2人で屋台の食べ物をJTに届けに行くと、JTは栄養失

調と不衛生の中で病気になっていた母親を庇い、暴れて彼女たちを拒絶する。ピーチズは温かい感情を取り戻し、苛立ちの元凶であったはずのビッグ・ジョーのところへ行って母子への援助を頼み、自分の母親に渡すつもりだったお祝い用のお金を JT 母子に贈る。ビッグ・ジョーの尽力で母子は小さな部屋に住みはじめ、自立への一歩を踏み出す。

## ②ハーレムに生まれる絆

10の短編の登場人物や舞台はあちこちで絡み合い、ハーレム地区という場所そのものが浮かび上がる。マイヤーズはハーレムの貧困と暴力のイメージに踏み込み、現実を現実としてとらえつつ、その中に見出せる希望に目を向けていこうとしている。人間関係という点から新たなトポスを示す試みにおいて、貧困や暴力などの負の部分は、若者が乗り越えるべき試練として位置づけられ、ハーレム像は再構築される。

*145<sup>th</sup> Street*には、現実として様々な欠落が描かれている。通りに住む半数以上の大人は職がなく、学校を中退している若者も多い。治安は悪く、警察が踏み込んでくることも銃撃も、疑わしいそぶりをしただけで手を後ろに組まされ、地面に伏せさせられて身体検査されるのも日常茶飯事である。自分には何の落ち度もなくともマックは自分の足と将来を奪われ、少年の目の前で幼い子どもが誤射で命を落とす。空きビルの一室には麻薬中毒者がたむろし、アンジェラの父親はタクシー強盗で殺される。安全も、職も、安定も、治安も、欠落だらけの地区である。

ハーレム地区をよく知るマイヤーズは、それでも、第一に、その中に生じうるモラルの芽生えをとらえる。モンキーマンの捨身の正義に出会った「ぼく」は「あの晩の公園で、モンキーマンはすごくちっぽけに見

えたけれど、今、おれの頭と心の中で、彼はとても大きくなっている。そう、モンキーマン」(“That night in the park Monkeyman had seemed so small, but now, in my mind and in my heart, he has grown. Yeah, Monkeyman” Myers *145<sup>th</sup> Street* 86) と、彼の勇気と行為に時間をおいて敬服し、彼が「ぼく」のことも変化させたのを感じる。

麻薬中毒のビッグ・タイムは、かつて1ペニー硬貨になぞらえて「ペニー」(Penny)と呼ばれていた幼少期の自分と、目の前にいる小さなペニーを重ねる。名前の類似性だけでなく、強がっていた幼かったときの自分をペニーの中に見て、小さな彼への庇護の気持ちが湧く。JTに暴言を言い放ったピーチズは後悔して、謝るために山盛りのバーベキューを持っていく。近隣の人に避けられるようになったアンジェラを気の毒に思い、彼女を庇おうとするのは店の常連客である。

マイヤーズは、欠落しかないと思えるところに小さな希望の瞬間を見出す。ボクサーのビリーが145ドルを持って帰宅すると、夫が身体を犠牲にして稼いでくることに、妻は胸を痛める。しかし、複雑な気持ちを乗り越えて、感謝やいたわりを込めてベッドの中でそっと手を握ると、その気持ちはビリーに通じていく。

そこから、次の接続の輪が生まれる。モンキーマンに心を動かされるのは「ぼく」だけではない。彼に危ないところを助けてもらったピーチズも含め、級友たちはそろって夜中の公園に行き、モンキーマンのために凶悪なティグルスに向きあう。キティを心配する友人たちは、キティに会いに行くようマックに勧め、マックは何度も転びながら、義足で待ち合わせの場所に行く。JTと母親は、ビッグ・ジョーの援助を受けるが、その前に母と息子を数晩泊めるのはマザー・フレッチャーである。

マイヤーズは、危険で暴力に満ちた場所と見なされるハーレムの内側

に、利害を越えた複雑であたたかい結びつきがありうることを探る。

*145<sup>th</sup> Street* の住民は、互いの事情をよく知りながら距離感を保っている。銃撃事件や殺人など、治安の悪い地区ならではの悲劇は、当たり前のことではなく、悲劇として悲嘆されている。犯罪が日常茶飯事であるから、犠牲の痛みが薄れるわけではない。個々の隣人の顔が見えている場所で生まれる連帯により、人間らしく悲しむことができる。ハーレムは、暴力がはびこると同時に、それを重大事として捉え、心を痛めることができる住人たちの接続によって、ハーレム地区に人間を人間として育成する余地を形成している。男の子の死体を見た「ぼく」は、

ぼくはみんなに、なんてひどいんだ、ハーレムではこんな風に簡単に命を落としてしまうのはなんて恥ずべきことなんだと言ってほしかった。ぼくたちがみんな集まって、この痛みを放ったら、空に昇って、あの殺された子も同じように感じているその場所に届くかもしれない。

I wanted them to say how bad they felt about it and what a shame it was the way life could slip away so easily in Harlem, in our community, on our street. Maybe when we got together and let our pain out it would rise up and reach someplace where the kid could feel it, too.

( *145<sup>th</sup> Street* 24-25 )

と思う。犯罪や暴力が日常茶飯事であっても、一人ひとりの中に痛みはある。痛みを痛みと思い、JTの母親を助けたいと願う心の柔らかさを包み込むハーレムをマイヤーズは空想する。

大都会ならどこでも構想されうる「ジュニア・ブラウンの惑星」とは異なり、マイヤーズは、ハーレムという地区にこだわり、ハーレムというだけで想起される負のイメージを転覆し、老若男女が接続できる場を空想する。不良のティグルスがいる反面で「おれはただ、間違いを見せようという人たちがいるときに、別の人たちは正しさを見せようとすると考えただけだ」(“I just thought that some people were going to show wrong, and some others were going to show right” *145<sup>th</sup> Street* 85)

といえるモンキーマンがいる。多様性の中に、痛みも明るさもユーモアも愛情も含め、ハーレムの外で中流の暮らしをする非番の警官と、所轄内の老婆がクリスマス・ディナーを一緒に食べるという一期一会のふれあいも含めた場が形成される。欠落をひとつの共通軸にしながら、生きのびる痛みがあってもなお、生きて接続しようとする大人と子どもの力に光を当て、マイヤーズは、現実を生きる子どもに、児童文学にできるやり方で、痛みを知る者同士の接続を伝えようとし、エンパワメントを構築している。

### 3. 言葉による接続

#### i. フラニ語<sup>43</sup>と英語 - *Second Daughter* (1996)

##### ① エリザベス・フリーマンの戦い

この章では、言葉が他者との接続の要になっている作品を考える。まず、奴隷制時代の奴隷が言葉によっていかに主体性を獲得しえたかを描く *Second Daughter* (1996) である。作者のミルドレッド・ピッツ・ウ

ウォルターはルイジアナ州生まれのアフリカン・アメリカン作家で、サザン大学を卒業したのち教職に就き、公民権運動団体である「人種平等会議」(Congress of Racial Equity)の活動を通じて夫となる人物と知り合った。出世作の *Justin and the Best Biscuit in the World* (1986) は、ジャスティン (Justin) 少年の気づきを描く中編である。ジャスティンは、料理や皿洗いやベッドメイキングは女性の仕事だと思ってやりたがらなかったが、ロデオの名人でカウボーイの祖父のところで過ごすうちに、日常の雑用は大人の男としてふるまうために必要な仕事であることを理解する。現代にも通じるジェンダーの問題のほか、当時、実際に人数が多かったにも関わらず、十分に描かれてこなかった黒人のカウボーイ像を提示している点でも評価された。

*Second Daughter* (1996) は、独立戦争直後のマサチューセッツ州で、奴隷制度の違法性を争って裁判を起こし勝訴した、実在の奴隷のエリザベス・フリーマンについての史実を、ウォルターが脚色したフィクションである。作品では、エリザベス (以下ベット [Bett]) の本名をファトゥ (Fatou; フラニ語で「長女」の意味) と想定し、ファトゥとその妹がどのように自由を獲得したかという事実を大枠に、細部に言葉の力を重視する価値観をしのばせている。

記録ではベットの「姉もしくは妹」(“sister”) としか記載されていない女性について、ウォルターは 6 歳年下の妹アイサ ([Aissa] フラニ語で「2 番目に生まれた娘」の意味。奴隷名はリジー [Lizzie]) と想定し、語り手としている。

作中で、ファトゥとアイサの父ジョサイア (Josiah) は、所有者である農園主に反抗したことで暴行を受け、アイサが生まれる前に死に、母親はアイサを産んで 9 日目に亡くなる。産婆をつとめた奴隷のオルブン

ミ (Olubunmi [ヨルバ語<sup>44</sup>で「この最も素晴らしい贈り物は私のもの」の意味]) は、奴隷共同体の中でファトゥとアイサに仕事を教え、とりわけファトゥには、自分の持つ薬草や民間療法の知識を伝授する。ファトゥは6歳のときから、母親代わりに妹のアイサの世話をし、成長してからは、オルブミーから習った治療の知識を奴隷たちの間で役に立てて、奴隷という境遇に対し、表立った不満は言わない。

アイサが5歳のとき、ニューアムステルダムの判事ジョン・アシュリー (John Ashley) が婚約者のアンナ (Anna) への贈り物としてファトゥを買う。ファトゥはアイサと一緒にいさせてくれるよう懇願し、聞き届けられ、アイサはファトゥよりはるかに安い値段で売り渡される。このときに一緒に買われた男性奴隷のブロム (Brom) と姉妹との間には、血縁に近い結びつきが生まれる。

アシュリー家で、姉妹は、ナンス (Nance) という台所奴隷の女性から仕事の手順を教わる。まもなくファトゥは近所に住む自由黒人のジョサイア・フリーマン (Josiah Freeman) と恋愛し、奴隷という身分のまま結婚する。ベットはジョサイアの家に住みながら、アシュリー家に通って夫人の家内奴隷となる。2人が同じアフリカン・アメリカンでありながら自由黒人と奴隷という身分の差があることが悲劇であり、夫婦間に生まれた一人娘のアイシャ (Ayisha) は母親の身分により、生まれながらの奴隷である。ジョサイアは、フリーマンという苗字を選択している点からも、同胞に奴隷がいることに心を痛め、その主義主張を様々な機会に言語化する。特に、独立戦争に向かう政治状況の中では、奴隷解放主義者の白人支援者とともに新憲法に基づいた奴隷解放の嘆願を起こし、反発も招く。

辛抱強く器用なファトゥは、アシュリー家では女主人のアンナの生活

に不可欠な小間使いであるが、雇い主と召使という関係ではなく、あくまで奴隷である。ファトゥとアイサの法的な所有者はアンナで、彼女が5番目の子どもを産むとき、医者への到着が間に合わないという事態が生じる。ファトゥが産婆をつとめられることは知られているが、アンナは「黒人の産婆が私の赤ちゃんを取りあげますって。まさか！お医者様に来るわ。待ちましょう」(“A black conjurer-woman delivering my baby, never! The doctor will come. We’ll wait” Walter *Second* 53) と拒絶する。しかし、お産が進み、アンナの容体が悪くなると、ファトゥが登場せざるを得ない。アシュリーはより早いタイミングでファトゥの介助を望んだが、規定上、ファトゥはアンナを間に立てなければアシュリーの命令を聞くことができず、この時点で、母体は危険な状態になっている。もしうまくいかなかったら厳罰を受けるところ、ファトゥは、立派に男の子のリトル・ジョン (Little John) を取り上げる。しかし、この介助でファトゥが手に入れるのは、アンナを介さずにアシュリーから直接に命令を聞いてもよいという、奴隷としての新たなステータスだけである。

ナンスが病気で亡くなったのち、サラ (Sarah) という自由黒人の女性が屋敷の料理人として雇い入れられる。同じ仕事と異なる立場をめぐり、ファトゥとサラは緊張した関係になるが、サラが読み書きできることを知ったアイサは字を習い始め、識字の力に気づきはじめる。

やがて、イギリス植民地としての政情が不安定になり、独立派が力を強めると、白人、自由黒人、奴隷がそれぞれに異なる思惑を持つようになる。アシュリー家は独立派の集まるサロンの役割を果たすようになり、2階では、男性たちが集まって新しい憲法の草案を考えたり、意見の交換会が行われたりする。その部屋にアンナらの白人女性は入ることはできないが、逆に給仕や伝令をする召使のファトゥやアイサは入ることが



できる。彼女たちは、そこで何が話し合われているか、耳をそばだてる。

ジョサイアは、給金でアイサとアイシャの自由を買い戻すために独立軍に加わろうとするが、戦争の当初、黒人は志願兵になれず、多くの黒人を失望させる。また、自由を約束した王党派のイギリス軍側につこうとする黒人もいて、それぞれが難しい選択を迫られる。ジョサイアは、戦況が悪化して黒人兵を受け入れるようになったあとで独立軍に参加するが、給金も支払われず、戦闘ではなく飢えと病気で兵士が死んでいく厳しい戦況と窮境を手紙で伝えて、まもなく戦死する。ファトゥは嘆き悲しみながら、ジョサイアの願いであった家族の自由を買うために何ができるかを考え続ける。同じころ、ファトゥの奴隷仲間であるザック・マレン (Zach Mullen) が、無抵抗の自分を銃で脅して暴力をふるったとして白人主人に対し 9 ポンド 19 シリングの損害賠償を訴え、奴隷に対する虐待という観点で裁判に勝利し、ファトゥを驚かせる。

これまで、短気なアンナは、しばしば気の利かないアイサに辛く当たり、ファトゥがそれを庇ってきた。ある日、アンナの命令にすぐに従わず、椅子から立たなかったアイサを、アンナが真っ赤に焼けた暖炉のシャベルで叩こうとし、間に入ったファトゥが上腕に骨まで見える火傷を負うという事件が起きる。それまで、アイサのことを考えて従順にアンナに尽くしてきたファトゥは、これ以上、賃金なしにアンナの小間使いをすることはしないと宣言し、ジョサイアが遺した財産を使って、アイサを連れ、奴隷制度廃止論者の白人弁護士でマレンの裁判でも勝利したセジウィック (Sedgewick) の家を訪れ、告発を依頼する。法廷では火傷が暴行の証拠となって勝訴し、独立した合衆国憲法のもとでは奴隷制が違憲であるという判決により、ファトゥもアイサもアイシャも自由の身分になる。

## ② 言葉による接続

ベットの静かな戦いは、怒りを顔や態度に表しやすいアイサとの対比の中で、特に言葉をめぐって展開する。

最初にファトゥの主体性の核を形成するのはアフリカの言葉である。コロンビア郡の大農園で、ファトゥ、アイサ、彼女たちを取りあげた産婆のオルブンミを結びつけるのはフラニ語である。奴隷貿易がまだ合法であった18世紀、アフリカの部族の言葉は異邦人にとって第一のよりどころとなる。オルブンミはアフリカの記憶や土着の知恵を持ち、ファトゥに産婆術と薬草の使い方を継承させる。

農園主は、奴隷たちのフラニ語を警戒し、オランダ語以外で会話したら、一方を棘のついた鞭で打ち、もう一方を南部に売ると脅す。しかし、オルブンミは「母語を話すことは、それと引き換えに鞭で打たれてもよいと思えるような喜びを与えてくれる」(“*To speak my mother tongue gives me a pleasure worth being beaten for*” *Walter Second* 7) と言い、ルーツを肉体の痛みと引き換えにしないことを宣言する。農園を移ってからのファトゥと、夫となるジョサイアを結びつけるのもアフリカ言葉であり、ジョサイアは初対面のとき、ファトゥという名前からすぐに彼女が「長女」であることを理解していることを伝え、親愛の情を示す。フラニ語は、情感と結びつく。

ファトゥが薬草を用いて、奴隷たちの中で苦しむ人を助けたり、産婆をしたりする「仕事」は、提供した働きに対する正当な支払いと敬意を受けられる技術である(一部はアシュリーに没収される)。ファトゥの手仕事は、アフリカ言葉と深くつながり、助けを求めに来る人の輪を広

げ、非 - 白人の世界との連関を保つ。まれに、農園主や別の奴隷に恨みを持つ奴隷が毒を求めに来ることもあるが、ファトゥはそうした要求には応えず、あくまで、人を生かし、健やかにする方向に知識を使う。

ファトゥは、家内奴隷としての仕事の合間に秘密裡に森に行く。あるとき、薬草やハーブや植物の根を摘んでいるとき、ネイティブ・アメリカンを思わせる背の高い若者と母親に出会う。互いの母語は分からないが、その母親とファトゥが同類の治療者であることは互いに理解され、女性からファトゥに貴重な薬草が贈られる。2人の中で言葉は通じないが、同じ植物を見てその薬効を理解し、非 - 白人の言語で互いの文化の文脈で受容できる。このとき、白人の知らない世界が白人の知らない言語で浮かび上がり、つながりを生む。

他方で、フラニ語を抑圧する支配者の言語である英語は、ファトゥやアイサを縛り、フラニ語から遠ざけ、自由を奪う言語であると同時に、その力を理解し、ひそやかに学び、最も効果的な時と場所で用いることで、姉妹の人生を大きく変化させる。英語を正しく理解することは、暴力をふるわない白人との結びつきをもたらし、見返りを与えてくれるのである。

愚かで鈍重と思われている奴隷たちは、それぞれ独立戦争の政治の意味と自分たちを縛る奴隷制度の状況を理解している。ファトゥとアイサは、アシュリー家の階上で開かれる会合で給仕をしながら、白人男性たちが喝采をもって作り上げた憲法草案に自分たちが含まれるのかと問う。独立宣言が「われわれは、以下の事実を自明のことと信じる。すなわち、すべての人間は生まれながらにして平等であり、その創造主によって、生命、自由、および幸福の追求を含む不可侵の権利を与えられているということ」(“We hold these truths to be self-evident, that all men are

created equal, that they are endowed by their Creator with certain unalienable rights, that among these are life, liberty, and the pursuit of happiness” *Second* 112 [邦訳：アメリカンセンターJAPAN Web]) と述べていることを自分の身に引きつけて問い直す。このとき、集う白人男性たちの意識をはるかに超えて、女性の黒人奴隷たちの耳は英語の音声とそのシニフィエを聞き取り、抽象的な単語が示す概念を考え抜いている。英語を介し、ファトゥやアイサは支援者と出会うこともできる。アンナに火傷を負わされたファトゥは、思い切って弁護士セジウィックに会いに行くが、このとき、ファトゥの理性と知性は立派な英語を話すことによって担保される<sup>45</sup>。

ファトゥは、自分の状態が同情を呼ぶべき特殊な事例として考えることを拒絶し、奴隷という身分そのものが不法であることを伝えようとする。セジウィック弁護士は、新しい憲法が奴隷の自由に関して何も規定がないことを踏まえ、パイロットケースにするために裁判を引き受けるが、ファトゥが主人たちへの不満を持っていないにも関わらず訴えようとしていることが興味深いと述べ、必ずしも、奴隷の感情と一致していない。セジウィックは、勝つために、アンナがファトゥに負わせた火傷を用人への虐待や主人としての不適格の証拠とし、ファトゥを奴隷身分から解放できると考えるが、ファトゥは、憐みを乞うためではなく当然の権利を得るために戦うのだと述べる。この乖離に、時代のリアリティがある。

アンナが横暴な主人であるかを声高に話したくてたまらないアイサに、ファトゥは決して口を開かないように厳命し、沈黙しながら考える。最終的にはセジウィック弁護士の戦略通りに傷を見せながらも、自分がアンナやアシュリー氏の考える「召使」(“servant”)ではなく、「奴隷」

（“slave”）であることを主張して、「善良で親切な主人を説明する言葉は、奴隷制度を話すときにはあてはまらない。（……）傷があろうとなかろうと、私たちは自由になるのにふさわしい」（“Words describing a *good and kind* masters do not go together when talking about slavery.(……)With or without wounds, we deserve to be free” *Second* 183) と伝える。また、実際の裁判でも「しかし、彼女が親切かどうかには関係なく、憲法は私たちに自由の権利があると言っている」（“But whether she is kind or not, the constitution says we have rights to our freedom” *Second* 198) と証言する。

アシュリー夫妻が上告する可能性にベットとアイサは怯えるが、勝ち目がないと判断した夫妻は上告を取り下げる。ベットの身分が子どもの身分であるためアイシャも自由になり、やがて、裁判の事例が広まる中で、「合衆国憲法では奴隷制を違法と認める」という判例を根拠に、アイサも、自分が合衆国憲法の誕生とともにすでに自由であったことを実感できる。

結末で、ファトゥとアイシャは、自由黒人としてニューアムステルダムに残る。他方で、アイサはボストンに出て住み込みの家政婦の仕事を見つける。アイサは、読み書きを武器に、身分上の自由だけでなく、より高い給金を得て自活する道を得ることもできる。

*Second Daughter* は、奴隷が合衆国憲法に違反しているという判決を引き出したという史実に依拠しつつ、ベットの妹のアイサをフィクション化し、奴隷が平等な人間であるという、当時としては過激な思想が最先端の平等性を持っていたことをたどる物語である。この中で、ベットやアイサを守り、力を与えるのは二種類の言葉である。アフリカの言葉であるフラニ語は、姉妹の名前に意味を与える言語であり、薬草の知識

やアフリカの物語を奴隷どうしで共有しあうときの力になる。支配者の言葉であるオランダ語や英語は、白人・男性の話すその言葉を理解する知性があれば、奴隷に自由を与えうる強い武器となり、奴隷が憲法違反だと考える白人・男性とのつながりをももたらしうる。彼女たちの主体性の確立においてはフラニ語が支えになり、外の世界との交渉においては英語の力が有用である。言葉をめぐる自立と接続のプロセスを示すことが、エンパワメントにつながっていく。

## ii. ポエトリー・リーディングの力 - *Bronx Masquerade* (2002)

### ① *Bronx Masquerade* における詩作

次に、アフリカン・アメリカンの中学生が、独特の黒人英語や若者らしい表現を用いて初めて詩を書き、その作業を通じて前向きに生きる力を得ていく作品を検討する。この詩作の過程では、言葉が何よりも重要である。

ニューヨーク生まれのアフリカン・アメリカン作家ニッキ・グライムズは、言葉の力に着目し、第一作の *Jazmin's Notebook* (1998) は、アフリカン・アメリカンの少女ジャズミン (Jazmin) の日記体として構成されている。ジャズミンと姉は、両親を亡くしてから里親のもとを転々としていたが、現在は姉がウェイトレスをして働き、ハーレム地区で二人暮らしをしている。麻薬や性暴力の危機や経済的困窮など多くの問題が周囲にはあるが、ジャズミンは姉をモラルのよりどころとしてどのようにふるまうかを考え、易きに流されず、ささやかだが強い意思に支えられた暮らしを営んでいく。ジャズミンの日記にあるのは、アフリカン・

アメリカン文化に根ざした力強い言葉である。

コレッタ・スコット・キング賞受賞作である *Bronx Masquerade* (2002) は、アフリカン・アメリカンの言葉による詩と救済の力を取り入れた作品である。ニューヨーク市のブロンクス地区の学校に通う 15 才の高校生 18 人が受講した 1 年間の英詩の授業を迫うもので、生徒たちは、まず講義の中で、自分たちと同じ境遇から言葉を紡ぎ出した詩人ラングストン・ヒューズを学び、感動する。ハーレムの黒人文化の殿堂であるアポロ・シアターで音楽や演劇に挑戦したアフリカン・アメリカンのミュージシャンや俳優の歴史を知り、プラスのエネルギーを受ける。

アフリカン・アメリカンの遺産を理解させたのち、担当教師は毎月 1 回金曜日に「オープン・マイク・フライデー」(“Open Mike Fridays”) と名づけたポエトリー・リーディング (詩の朗読) を企画する。ポエトリー・リーディングは、英米では比較的よく知られたパフォーマンスで、詩人が自作の詩を読み、時には、それに合わせた演奏や身体表現が付随する場合もある。この作品では、舞台となる場所や生徒たちの背景も含め、アフリカン・アメリカンならではの言葉を用いた詩作がおこなわれ、言葉が子どもたちを接続させ、救済している。

「オープン・マイク・フライデー」では、順番に級友の前で自作の詩を朗読し、目で追うだけでなく耳で聞き、実際に声に出すことで詩を様々なに味わう。詩の創作と音読を通じて、無機質だったクラスの間人間関係が血の通うものとなり、言葉が生徒たちを救っていく。オーソドックスな言葉の力への回帰だけでなく、アフリカン・アメリカンをはじめとする下層の子どもたちの路上の言葉で詩作がおこなわれていることの意義が大きい。

「オープン・マイク・フライデー」の直接のきっかけとなったのは、

「バッド・ボーイ」(“Bad Boy”)と呼ばれるウェズリー・ブーン (Wesley Boone) がハーレム・ルネッサンスの詩人についてのレポートの代わりに、ラングストン・ヒューズについて「笛吹みたいだね / 詩があなたの笛 / 誇らしく、うれしい / あなたに敬意を表することが / 真のハーレム・ルネッサンスの人」(“You were a pied-piper, brother man / with poetry as your flute. / It’s my honor and pleasure to salute / You, a true Renaissance man / of Harlem” Grimes *Bronx* 6) という詩を書いたことである。詩人の功績に対し、詩で応えた生徒から輪が広がり、教師が音頭をとって詩の会が結成される。互いに詩人になり観客になり、自分や級友の中から言葉が引き出されていく体験が生徒たちを変える。

真剣な聞き手がいることで、詩は、書き手／読み手に強い力を与える。受講者のディオンドラ・ジョーダン (Diondra Jordan) は 180 センチを越す長身の少女で、父親からはプロの女子バスケットボール選手になってほしいと期待され、周囲からも身体能力が高いと思われている。しかし、実際は運動が苦手でバスケットボール部への誘いも断り続けている。ディオンドラは限られた友人にしか打ち明けていなかった本来の夢である美術への思いを、詩作を通じて明らかにしていく。最初の「オープン・マイク」の「高飛び込み」(“High Dive”) という詩では「深呼吸して / 空に / 絵筆を少し浸して / 長い跳躍 / そして... / 続く」(“I take a deep breath, / dip the tip of my brush / into sky, / take one long leap / and... / To be continued” 100) と決意を表わし、次の「オープン・マイク」での「自画像-父への詩」(“Self-Portrait: A Poem for My Father”) で、父への決別を告げ、「これが私の自画像 / パパは自分のキャンバスを選んだ / 私にも自分のキャンバスを選ばせて」(“This is my portrait. / You chose your canvas. / Let me choose mine” 155) と宣言する。



ポーシャ・ジョンソン (Porscha Johnson) は、母親に虐待されたのち、その母親を麻薬のオーバードーズで亡くした過去がある。母親への怒りを抱え続けていたが、詩を通じて、級友の詩に力づけられたり、他にも母親を亡くしたクラスメイトがいることを知ったりして「母への手紙」(“A Letter to My Mother”) で、皮下注射をした姿のまま亡くなっていた母に向け、「ママ、ついに許してあげる / 愛をこめて / ポーシャ / 追伸 / さようなら」(“Mom, I finally forgive you. / Love, / Porscha. / P.S. / Good-bye” 161) という詩を読み上げることができる。

最初は月に1度の開催だった「オープン・マイク」は、手応えを感じた教員によって週に1回に頻度が上がり、詩人招聘というイベントにも発展し、実在の詩人ペドロ・ピエトリ (Pedro Pietri, 1944-2004) が学校訪問することが空想されている。

## ② ヒップホップとポエトリー・リーディング

ハーレムの路上では、1970年代ごろから、アフリカン・アメリカンやプエルト・リコの若者を中心にヒップホップ文化が自然発生的に生まれた。「事情に明るい、粋な」(hip) と「跳ぶ」(hop) を融合して発展したもので、「『音楽』として認識されながら『歌』ではなく『語り』が中心であり、楽曲も過去の音源の『サンプリング』で構成されることが多」(大和田 228-9) く、黎明期にはDJのアフリカ・バンタータ (Africa Bambaataa [本名 Kevin Donovan], 1957-) が牽引した。

ヒップホップは、①ラップ - 抑揚をつけ、しゃべるように韻を踏みながら歌う ②DJ - ブレイクビーツやスクラッチなどの技法を用い、ターンテーブルを操って音楽をかけ、ダンスやレイブを動かす ③ブレイク

ダンス - エントリー、フットワーク、パワームーブ、フリーズの要素を含むアクロバティックなダンスをおこなう ④グラフィティ - 取締りの目をかいくぐって公共の場所の壁やバス、地下鉄車両にスプレーで絵や文字を描く違法なアートを展開する という4つの要素によって特長づけられ、身体的パフォーマンスや路上アートと有機的に結びつく。

実際のハーレム地区では、プエルト・リコ系、ドミニカ系、アフリカ系がそれぞれワシントン・ハイツ、ハーレム、イースト・ハーレム、サウスブロンクスに住み分けている。しかし、若者たちの共通の生活圏に組み込まれたヒップホップは地区を越える。「中学生から大学生くらいの若者たちは、リアーナ (Rihanna, 1988-) やクリス・ブラウン

(Christopher Maurice “Chris” Brown, 1989-) など世界的に知名度のあるアーティストの歌やファッションを友人との共通の話題にし」(三吉103)、彼らに強い仲間意識を保持させうる。

アフリカの社会では今日でも、単に誰かの作った歌や踊りを演ってみせられるというだけでなく、その人ならではの音楽的な身ぶりを作り出す能力が、すべての人に当然視されている。日常的なやりとりのなかで練り広げられる、音楽的な精神への刺激を通して、すべての人間がその能力を開花させてゆくのだ。(中略) かれらの世界では、どんな人間も、ミュージッキングという共同の活動に、一定の貢献ができることされている。

(Small [邦訳] 386-7)

特殊な才能の持ち主でなくとも、音楽の感性がアフリカに由来し、協働活動に参画できる。ヒップホップは、現代の若者がその場に参加し、

自分の音楽を表現し、互いに掛け合いをしながら楽しむことのできる場そのものであり、*Bronx Masquerade* はそれをより豊かに、若者たち自身が、詩によってこれまで自分では気づいていなかった内面を自分で理解できるような機会とし、ポエトリー・リーディングという共同の活動の中で、人間関係の化学反応が起きていく様子を描く。

ヒップホップにはまた、かつて、本物のバイオリンを手に入れることができなかつた奴隷たちが落ちていた馬の毛の弦にしてバイオリンを作ったり、ごみバケツをひっくり返してドラム代わりにしたりして、音楽を生み出したように、何もないところから何かを作り出す強さとたくましさがある。「<sup>バッド</sup>悪い」を「<sup>バッド</sup>かっこいい」と形容し始めるような挑戦的な言語文化の中で、白人 - 男性 - 大人とは異なる価値観を路上で示し、階層も出自も越えて無限にセッションしつづけられ、カリブ系から現代のアフリカ移民まで巻きこんでエネルギーを発する。

ラップは、母親を貶めたりからかったりする口げんかに端を発する「ダズンズ」(“dirty dozens”) を原型にしたオーラル・プレイの一種である。「ダズンズ」という命名は、奴隷が市場でダース売りされた屈辱に由来するが、別の点から見ればそれゆえにきわめてアフリカン・アメリカン的であり、韻文の巧みさや内容で競争する中で、野卑な表現が一種の様式美を獲得し、コンテストの意味合いも持つようになっていった

(Abrahams *Deep Down* 58)。韻を踏む言葉を重ねるとき、スラングや汚い言葉が多く用いられ、カウンターカルチャーとして政治や偏見に抵抗するメッセージも含まれることもあり、ヒップホップに内在する言葉の力がアフリカン・アメリカン児童文学を活性化させる。

*Bronx Masquerade* の中で展開されるヒップホップではセッションが重視され、その場にいる人を取り込んで舞台性<sup>46</sup>のある掛け合いの空間

を作ることが可能である。*Bronx Masquerade*でも、語り手のタイロン (Tyron) はラップの DJ 志望で、「オープン・マイク」の各回では、詩が読み上げられたあとに、彼の一人称で感想やクラスメイトの変化が語られる構成になっている。

つまり、タイロンは、すべての詩に反応する。肥満を理由にからかわれ続けていたジャネラ・バトル (Janelle Battle) が固い殻に大切な自分を守っていることを喩えて「だって私はココナッツ / 芯の部分は / あなたが知っているより / 甘いだよ」 (“for I am coconut, / and the heart of me / is sweeter / than you know” *Bronx* 49) という詩を読むと、タイロンは、自分以外の人間に感情があるという当たり前のことに初めて気づき、体重について冗談ばかり言っていたことを恥じる。個々の内的変化が静かな共感を呼ぶと同時に、「オープン・マイク」の後のタイロンのモノログによって、それぞれの詩が対話的になる。

詩が広がる場合もある。アフリカの血を誇るタニーシャの「オープン・マイク」のあと、タイロンは、タニーシャの朗読に合わせてアフリカのドラムで伴奏をするか DJ をしようと思いつき、うれしくなる。タニーシャの詩がタイロンの中から音楽を引き出し、全校集会という場で融合しようと思いつかせる。

タイロンがウェズリーと一緒にラップを創作しているところに、白人のスティーブ (Steve) が加わりたいと申し出る。彼らは白人にラップがやれるわけがないというが、実際に拍を取ってセッションを試みると、スティーブは見事にラップに参加することができる。3人で作り上げた「5時のニュース」 (“News at Five”) という歌は黒人の犯罪率の高さや貧困問題を報道する夕方5時のニュースを批評するものである。タイロンは「おれはラッパー、銃は撃たない。言葉がおれを解放する / マーテ

インの力を信じるぜ、あのキングはもう死んでしまったけれど」 (“I’m a rapper, not a shooter. Words are my release. / I believe in Martin’s power, though the King is gone” 130) と歌い、青い目のスティーブは「やつらが話すのを聞くと、麻薬と暴力だけがおれたちの歌だとさ / おれは思う それは嘘だと証明するときだと」 (“Hear them tell it, drugs and violence is our only song. / For myself, I think it’s time that we all prove them wrong” 131) と続く。アフリカン・アメリカンのウェズリーは「明日のニュースを書くのは俺たちだ / 今から始めよう みんな自分を真新しい仲間にする」 (“Come tomorrow, we will be the ones to write the news. / Starting now, we can create ourselves a whole new crew” *ibid.* 131) とラップをつなぎ、3人はそれぞれに「おれはここにずっといる、なあ。おれは演奏するためにここにいる、なあ。あばよ」 (“I am here to stay, yo. I am here to play, yo. Peace” 132) というフレーズで揃えてしめくくる。

若者らしい詩の背後には、対抗文化としての受動性を越えて、幅広い年齢・人種・性別の人々をひきつけ、次々に展開していくヒップホップ文化がある。「黒人音楽の特質である『ループ』も、大縄跳びのようなものだと思えばいいんですよ。12小節A Bというルールが設定されたブルースも、特定の曲がお題として与えられるモダン・ジャズも、もちろん、ヒップホップも、その“場”に参加して『跳びたい』と思う人に開かれているわけです」(大和田&長谷川 238) と述べられるように、場としてのヒップホップ概念からの接続性が、*Bronx Masquerade* ではテキスト化されている。

タイロンを魅了するラップは、多様な聞き手の若者を言葉の連鎖に巻きこみ、熱気あるかけあいを生む。路上は、アフリカン・アメリカンの

文脈において、背を向けて立ち去る場所ではなく、積極的に足を踏み入れ、参加し、互いにまじわる場になる。ヒップホップにおける路上と同じ場が教室に形成され、「オープン・マイク・フライデー」を媒体にヒップホップを基盤にした言葉が武器となり、メッセージ性や鼓舞する力が増幅される。伝統的な言葉使いから解放された言語の力が若者を救済し、「自分たちの言語」が主体性と結びつく。

子ども読者にとって重要なのは、本の中で自分の限界を越えられる仮想体験をすることである。越えた先が茫漠とした空白なのではなく、様々な肌の色の同じ若者たちとの新たな出会いがあることを示すことができれば、より跳びやすくなるだろう。跳んだ先のつながる力を称揚する *Bronx Masquerade* では、複数の若者が、詩人として境界を越え、自然にセッションしている。ヒップホップの「つながる力」は暴力のはびこる都会に新たなネットワークを浮かびあがらせ、若者世代をつなぐ。家庭の状況や肌の色を越えて思いを分かち合う「場」にある混淆を描くとき、アフリカン・アメリカンの詩と言葉が大きな力を持って子どもたちを接続させ、エンパワメントとなっている。

おわりに - アフリカン・アメリカン児童文学の現在と今後の展望

## 1. アフリカン・アメリカン児童文学の現在

本論では、1920年代の *The Brownies' Book* を源流に、アフリカン・アメリカン文化に依拠した「エンパワメント」であるところのアフリカン・アメリカン児童文学が、「可視化」「受容」「接続」の要素を拡大させながら子ども読者を力づけてきたことと、単一的で直線的な流れではなく、3つの要素が併流しながら拡大してきたことを考察してきた。

21世紀以降のアフリカン・アメリカン児童文学にも、「エンパワメント」と3つの特質は引き継がれている。「可視化」の例として挙げられるのは、2005年のコレッタ・スコット・キング賞を受賞したトニ・モリスンの写真絵本 *Remember: The Journey to School Integration* (2004) である。学校における人種統合の問題を扱い、前半は、これまで白人にとって見えていても存在を感じていなかったアフリカン・アメリカンの児童や生徒が入学してくることが決定した白人学校の保護者や生徒の混乱や排斥デモを描く。マーティン・ルーサー・キングの写真が掲載された後半以降は、黒人の子どもと白人の子どもが微笑を浮かべながら教室で学び、一緒に昼食を食べる写真が続く。写真絵本であることで説得力を持ち、公民権運動への反対運動と宥和へ向かった道筋の証言にもなっている。

「受容」には、ジュリアス・レスターの戯曲 *Day of Tears: A Novel in Dialogue* (2005) が挙げられる。1859年にジョージア州でおこなわれた史上最大規模の奴隷市から始まるドラマを扱い、家族と離ればなれになって売られる12歳の少女エマ (Emma) の視点を軸に、奴隷たちの涙

で土砂降りの雨になったという伝説の日に売られた奴隷たちの複数の慟哭が交錯する。奴隷であることに満足しているふりをせざるを得ない奴隷、奴隷になる子どもを産みたくないと考える奴隷、主人にへつらう仮面を見せ続けた上で油断させて逃亡する奴隷、心から奴隷を面倒見たいと考える白人農園主夫人など、様々な立場からの感情やものの見方が明らかにされる。奴隷にもさまざまな考え方があったのと同様、白人の側も、奴隷を家畜と同等にしか考えられなかった者もいれば、「地下鉄道」に協力して車掌役を務める者もいる。その複数性は、結果的に人間の多様性にもつながるものである。一面的ではない歴史を提示し、声なき者であった奴隷たちの声を書き起こしている。

受容へのもうひとつの道筋である偉人伝の系脈は途切れることがない。カディール・ネルソン（Kadir Nelson, 1974-）の *We Are the Ship: The Story of Negro League Baseball*（2008）はプロ野球の黒人リーグの成立と苦闘を扱い、同じネルソンの *Heart and Soul: The Story of America and African Americans*（2011）は、奴隷制時代からの通史を史実と絵でたどる。ジェリー・ピンクニーの *Hand in Hand: Ten Black Men Who Changed America*（2012）は、科学者のベンジャミン・バネカー（Benjamin Banneker, 1731-1806）、黒人運動指導者のフレデリック・ダグラス、公民権運動指導者のフィリップ・ランドルフ（Philip Randolph, 1889-1979）、ケニア系で初のアフリカン・アメリカン大統領のバラク・オバマ（Barak Obama, 1961-）らの人生をスケッチしている。いずれも、アフリカン・アメリカンが達成してきたことを可視化する試みである。

「接続」の点では、シャロン・ドレイパー（Sharon Draper, 1948-）の *Copper Sun*（2006）が出色である。西アフリカで平和に暮らしてい



た少女アマリ（Amari）はアメリカの農園主の息子への贈り物にされ、奴隷になる。その境遇から逃亡するにあたり、アマリは契約労働で奴隷と同じような扱いを受ける白人少女ポリリー（Polly）と協働する。2人の逃亡者はフロリダ州境のポート・モーゼにたどり着くまでの2か月の中で、白人を含む多くの援助者に出会う。制度からの逃走にあたり、救いの手が連帯していき、白人の少女と黒人の少女がともに逃げる点にも、抑圧されている者たちのつながりが感じられる。

「地下鉄道」に、白人や自由黒人の助力が不可欠であり、公民権運動に多くの白人が加わっていたように、不可視化されている人々の輪郭を捉えて提示したり、ルーツをさかのぼって受容させたり、立場の異なる人々の接続を描いたりするアフリカン・アメリカン児童文学には、肌の色を越えて多様な作家が参与しうる可能性が開かれ、目標の実現に文字通り肌の色は関係ない。白人の作家<sup>47</sup>でも、アフリカン・アメリカン児童文学に参加することは可能である。

白人作家のゲイリー・ポールセン（Gary Paulsen, 1939-）の *Nightjohn*（1993）は、禁じられた読み書きへの希求を核に、奴隷の少女が人間としての権利に目覚めるまでを描いた中編である。作品では、奴隷少女サーニー（Sarny）が働く綿花畑に、ナイトジョン（Nightjohn）というたくましい奴隷が鎖につながれ、痣だらけで送り込まれてくる。彼は、サーニーに字の読み方という危険な秘密と、北部に自由があることを教える。屈強なために労働力として重宝されているが、逃亡するたびに罰を受けてきたので傷だらけなのである。ナイトジョンは、サーニーに字を教えただけでなく、やがて、近隣の奴隷たちを川辺の葦原の陰にこっそり集めた「学校」で読み書きも教え始め、サーニーはその手伝いをすることになる。

*Nightjohn* では、黒人英語が精確に用いられ、奴隷の生活の描き方も冷静である。アフリカン・アメリカン作家が生み出す作品に比肩する深みを持ち、奴隷制を生きのびた人たちの歴史を追憶し、それを生きのびた奴隷の軌跡を現代のアフリカン・アメリカンの子どもへのエンパワメントとして構築しえている。

## 2. アフリカン・アメリカン児童文学の展望

最後に、アフリカン・アメリカン児童文学の今後の展望を考えたい。独自の文化に依拠したエンパワメントが、様々な国や民族集団の児童文学の核を形成すると見なすとき、アフリカン・アメリカン児童文学もアフリカン・アメリカン文化から深く恩恵を受け、白人作家のポールセンの示した可能性も含め、着実に豊かになってきている。その一方で、「アフリカン・アメリカン児童文学」として存在感を増すほどに、非・白人という他者としての居場所をみずから固定化し、白人のアメリカが構築してきた「主流」から断絶しているのではないかという疑問も生まれる。

神宮輝夫は、1974年にアメリカ児童文学について、

実験と比較の積み重ねの上に生みだされた一つの結論である。そして、その根本的理念は、独立戦争、南北戦争、第一次・第二次世界大戦で正当性を確認されたものである。冷戦、ベトナム戦争、人種問題、企業支配等は、その根本をゆるがしたが、それが児童文学に本質的な変化を生むとは思えない。児童文学を支える思想は、理想の国づくりが理想的に進んだ時代に確立し、以後それがアメリカのたてまえになっているからであり、アメリカには今も正しい方向へ

の復元力があるからである。アメリカで児童文学と児童像が変わるのは、政治形態が変わるとき以外にない

(『児童文学の中の子ども』94-95)

と予見した。21世紀の今も、その状況は大きくは変わっていない。イギリスやオランダから植民地に移り住んだ人々による13州の独立と建国以来、旧宗主国からの移民の子孫が政治経済の上で優位に立ち、東欧やアイルランドからの「新移民」や中華系や日系の移民、国の発展と不可分であったアフリカ系の奴隷は、新しい土地にあってなかなか手に入れられない市民権や福祉を求めて闘ってきた。特に、ヨーロッパ以外の出身である「アフリカン・アメリカン」「アジアン・アメリカン」「ヒスパニック・アメリカン」はいわゆる「ハイフン付アメリカ人」であり、彼らをどれだけ白人社会の内部に受け入れるかが政治の攻防となってきた。

管理の指針のひとつは英語の読み書きである。アメリカでは、自由への道は英語のリテラシーと明確に関連し、移民は、英語を身につけるために努力し、親世代は、アメリカ生まれの子どもにアメリカ流の教育を受けさせるために必死になる。黒人英語を使うアフリカン・アメリカンは一種の未開人<sup>バベリアン</sup>であり、奴隷制時代の奴隷が英語の読み書きを切望し、白人がその学びを法律で禁じたのは、読み書きや自由と力の源泉であることを双方が了解していたからである。再建期終了後の南部では、黒人が政治に参加することを妨げるため、投票にあたって読み書き能力を求めたり、試験を課したりして、事実上黒人を排除する州法が次々に成立した。公民権運動は、その撤廃も目的とした運動である。

2010年のアメリカの人口統計で、自分を白人と規定する人は約75%、アフリカン・アメリカンと規定する人は約13%であり(U.S. Census

Bureau. Web)、白人はいまだに数的に優位にある。また、人種問題が社会格差や貧困問題へと展開している状況下で、アフリカン・アメリカンは、相対的にマイノリティに位置づけられる。1960年代から90年代にかけての世帯収入や教育費について調査したジュリア・アイザック

(Julia B. Isaac) の2007年のレポートでは、州法や風土的な格差など様々な要因を差し引いても、黒人の親のほうが白人の親よりも所得が低く、追跡調査では、中産階級に生まれても、白人よりも黒人のほうが大人になってから低所得者層に落ちる割合が高いとされている。

平等な政治が標榜されていても、人種差別は残存し、アフリカン・アメリカンの子どもは矛盾を抱えた現実の中で将来を考えなければならない。卓越して優れた才能や学力を持たないマイノリティの子どもは、ときに立ちすくみ、途方に暮れる。環境的要因で貧困から抜け出せず、たやすく退学し、離職する。既定路線から外れた若者が困難に直面する場合、おおまかにいって、アフリカン・アメリカンの軌道修正の方が難しいように見受けられる。

こうした状況下で、1920年代以降のアフリカン・アメリカン児童文学と文学史構築は、主流に入ることを許されない他者であるという状態を一度受け入れた上で通行手形を手にいれようとし、白人からの承認の度合いを勝利と見なしてきたようである。その流れにおいて、アフリカン・アメリカンの存在感を主流の内部で増大させていくことが、アフリカン・アメリカンの研究者の目的となっているように見受けられ、たとえば、ビショップは、1999年のアメリカの児童書出版点数2,500~3,500点のうち、アフリカン・アメリカンを扱ったものは2%であり、不足は明らかであると指摘している (Bishop “Walk Tall” 556)。

2014年も、出版点数は全体的に増えたものの、5,000点の児童向け出

出版物のうち、アフリカン・アメリカン作家によって書かれたものは 84 点、アフリカン・アメリカンの経験や歴史を扱ったものが 180 点で少数にとどまっているとされる (Horning Web)。質と量、両方の拡大を求める声は、アフリカン・アメリカンが他者であるという自覚から生まれるものだろう。アフリカン・アメリカンであることを意識すればするほど、アフリカン・アメリカンは、白人のアメリカでの領土の狭さを示さざるを得ず、白人の領域が優先される状況下で闘ってきた。この視点で見ると、アフリカン・アメリカンにとって、主流のアメリカ児童文学は、やはり「一つの結論」であり、政治形態が変わるときにしか文学も変わりそうになく、彼らがその内部に入っていくのは難しいという推論は正しい。

しかし、本論では、アフリカン・アメリカンの文化や経験から引き出される「エンパワメント」の構築を検討することにより、非 - 白人ではなくアフリカン・アメリカンとしての独自の自立的な質を探ってきた。交流と混沌と多文化の現代社会にあって、アフリカン・アメリカン児童文学がすでに作られている領土の外に締め出されているものではなく、白人のアメリカと交流しながらひとつの基軸を持つ文学となる領域だと見なすなら、アフリカン・アメリカン児童文学はむしろ、自分たちが立っているところまでアメリカ児童文学の境界を拡大させる引力を持つ。境界を混淆させながらアメリカ児童文学の領土を広げうるフロンティアになれる。

単調な労働歌が洗練されて黒人霊歌になり、厳しい状況の奴隷の救済を歌いつつ、そのルーツが相対化されてアメリカの大衆文化に欠かすことのできないアメリカ音楽に展開していったのと同様に、アフリカン・アメリカン児童文学は、その物語が胸にひびくすべての読者のためのもの

のになりえる。民族集団を背負いつつも、個人が個人として自分らしく  
生きのびていこうとすることを伝え、アフリカン・アメリカンであるこ  
とを自ら越えて、常に現前にいる多様な読者とセッションをおこなうこ  
とができる。

荒このみは、

体系性や透明性に疑義が呈され、あらゆることには<sup>オリジン</sup>根源がある  
という前提が崩壊した今日、「オパシテ」<sup>48</sup>で表現される思考領域が  
含むであろう可能性に、私たちは期待を抱く。アメリカ文学が見な  
おされ、アフリカン・アメリカン文学やその他の「メインストリー  
ム」に含まれなかった文学が注目され研究されているのは、あまり  
にも抑圧的であった、アメリカ文学の「体系」を否定する文学的衝  
動でもある。そしてアメリカ的精神とは「オパシテ」を含み、その  
思考性を許容する基本精神であると私は考えている。固定性を頑固  
に否定する力強い精神である。

(『アフリカン・アメリカン文学論』229)

と述べ、アフリカン・アメリカン文学が持ち得る混濁性がアメリカ文学  
にすでに不可欠であると指摘している。流動性と開放を受け入れる場で、  
アフリカン・アメリカン児童文学は、もはや白人のアメリカを枷にせず、  
白人のアメリカ児童文学の内部に入りこもうとしなくても、独自の立ち  
位置をもって白人の側とやりとりすることが可能である。むしろ、やが  
ては、アメリカの枠を越え、他国のアフリカ系の文学や西インド諸島の  
クレオール文学とも結びつきながら、アメリカ児童文学というトポスに  
揺さぶりをかけ、活性化させていける可能性も持つ。

2016年度のコールデコット賞佳作の *Voice of Freedom* (Carol Weatherford & Ekuia Holmes, 2015) と *Trombone Shorty* (Troy Andrews & Bryan Collier, 2015) は、いずれもアフリカン・アメリカンの人生を主題にし、コレッタ・スコット・キング賞にも推薦されている。*Voice of Freedom* は、黒人霊歌の歌い手として公民権運動をリードした活動家のファニー・ルー・ヘイマー (Fannie Lou Hamer, 1907 - 77) の半生を一人称の韻文で描く。コラージュと油絵の技法は、ヘイマーの信念を力強く浮かび上がらせているが、この中では、白人と黒人という区分けではなく、肌の色を越えて共闘する人たちの強さに焦点が当てられる。ヘイマーは、「ある日、白人の老人が私に言った / 彼には怖くてやれなかったことをしてくれて感謝していると / どれほど長い間、彼が変化を望んでいたか言葉にもできない / 彼は、私が自由になるまで自分も自由になることはできない、と」(“One day and old white man told me / he appreciated me doing what he was afraid to do. / Ain’t no telling how long he’d wanted change. / He could not be free until I was free.” Weatherford & Holmes n.pag.) と述べ、アフリカン・アメリカンの戦いの最前線にあった肌の色を越えた結びつきを伝えている。

*Trombone Shorty* で生き立ちを一人称体で語るのは、天才奏者のトロンボーン・ショーティ (Trombone Shorty) ことトロイ・アンドリュース (Troy Andrews, 1936-) である。トロイは、ジャズやブルースをはじめ多様な音楽のあふれるニューオーリンズに生まれ、4歳のときに壊れたトロンボーンを拾って修理し、楽器の半分ほどの背丈 (ショーティ) にもかかわらず、兄と一緒に舞台デビューした。

絵本の中で、トロイは、読者に何度も「よう」(“Where Y’at?” n.pag.) とニューオーリンズ特有の表現で呼びかけている。これは、かつてジャズ・

ミュージシャンたちが「どこの酒場で演奏しているんだい？」と聞きあったことに由来するくだけた挨拶だが、愛してやまないトロンボーンを手にしつつ、トロイは、その挨拶に掛けて、「君の生きる場所はどこ？」、「君の音楽はどこ？」と問いかけているのである。トロンボーン・ショーティの音楽が南部のアフリカン・アメリカンの文化と環境から影響を受けつつ、すでにアメリカのミュージシャンとして他の国の観衆の胸すら打つことを考えるなら、彼の音楽は、クレオール土地ニューオーリンズとアフリカン・アメリカン文化にはっきりと白人文化に対抗する必要もなく、普遍性を獲得し得ている。

児童文学に与えられるニューベリー賞について、1970年代にすでに、いわゆるアフリカン・アメリカンの現状や歴史を問題視した作品が並んでいる。1970年の受賞作は、白人作家ウィリアム・アームストロング (William H. Armstrong, 1911-99) による *Sounder* (1969)、1974年は白人作家ポーラ・フォックス (Paula Fox, 1923-) の *The Slave Dancer* (1973)、1975年にヴァージニア・ハミルトンの *M.C. Higgins, the Great*、1977年にミルドレッド・テイラーの *Roll of Thunder, Hear My Cry* である。だが、1930年代の南部に生きる貧しい黒人一家の悲哀を描く *Sounder* が黒人の「少年」(a boy) の内的感情に必ずしも触れずに安全なところから眺めているに過ぎず、違法の奴隷貿易を扱う *The Slave Dancer* に連れ込まれる白人少年ジェシー (Jessie) に奴隷への共感がまったくないとするなら、そこにはやはり分離の思想が働いているといわざるを得ない。当初、*The Slave Dancer* を評価していたペリー・ノーデルマン (Perry Nodelman) は、学生からの意見で「この本のアフリカ人たちが声なき者であること、彼ら自身の苦しみや物語を語る方法も持たない者である」(“the Africans in the book are left without a voice, and



with no way to speak of their own suffering or tell their own story”  
Nodelman *Pleasures* 126) ことに気づき、混乱が生まれたことを告白している。1970年代の4作の授賞は、公民権運動の熱気後のアフリカン・アメリカンに対する政治的なアプローチであり、アフリカン・アメリカンへの配慮とパワーバランスの視点が選考側に残る。

しかしながら、2016年度のニューベリー賞受賞作のマット・デ・ラ・ペーニャ (Matt de la Peña, ?-) の *Last Stop on Market Street* (2015) は趣が異なる。絵本と言っていいほど短いこの作品では、毎週、教会から祖母と一緒にバスで帰る少年 CJ が、祖母に、自分がウォークマンを持っていない理由や、バスの中で見かけた目の不自由な人について尋ねる。祖母のナナ (nana) は、「あの人に、私たちに一曲弾いてくれるか聞いてごらん」 (“Why don’t you ask the man if he’ll play us a song?” Peña n.pag.) とギターを持った人を指さし、目の不自由な人については「世界を耳で見る人もいるのよ」 (“Some people watch the world with their ears” n.pag.) と言い、自分も目をつぶる。挿絵によって、CJ と祖母がアフリカン・アメリカンであることが分かり、彼らが教会に通ったり、自家用車を持たずにバスで移動したりする日常も、物語と不可分である。だが、ニューヨークのアフリカン・アメリカンの日常を土台にしつつ、人生を生きやすくするヒントを子どもに与え、そのメッセージは肌の色を越えたものとして伝わっていく。

*Voice of Freedom* や *Trombone Shorty* がアフリカン・アメリカンというカッコ付きではなくアメリカの絵本としてコールデコット賞を受賞し、*Last Stop on Market Street* がアメリカの児童文学としてニューベリー賞を受賞していることはひとつの兆しである。主流を自認する白人のアメリカ児童文学は反発したり保守化したりするかもしれない。しか

し、複数性と流動に向かっていく世界の現状において、アメリカの中でそれぞれの民族集団や文化集団からの「エンパワメント」を内包した複数の児童文学が並立するならば、白人の児童文学もまた相対化されたアメリカ児童文学になっていくことが予見できるのではないだろうか。こうして、いずれ、複数のエンパワメントが並ぶとき、アメリカ児童文学は、真に多様な子どものための多様な場になる。

政治はまだ変わらないかもしれない。しかし、子どもへの希望の磁場である児童文学の中では、それぞれの文化集団からの「エンパワメント」がメタ・メッセージとなって児童文学という文学を推進していける。今はまだ民族集団のかけこが残る「アフリカン・アメリカン」児童文学は、境界の解消を訴え続けてきた旗手として、最前線でエンパワメントを構築し続ける。そして、早く到達したランナーとして、アメリカ児童文学の広がりを迎え入れようとしているのではないだろうか。

## 注

---

- <sup>1</sup> 読書反応批評の用語。「文学の『わかる人』を想定して、フィッシュは『知識のある読者』と名づけ、ドイツのヴォルフガング・イーザーは『教養ある読者』と呼んでいる。ウェイン・ブースは、『含意された読者』、つまり作品によって作られた読者の存在を想定し、この役割を演じることによってのみ、読者は作品を真に理解できるものとした」（廣野由美子 134-5）。フィッシュは読者反応批評理論家のスタンリー・フィッシュ（Stanley E. Fish）を指す。*The Oxford Dictionary of Literary Terms*におけるクリス・バルディック（Chris Baldick）の定義によると、「どんなテキストでもある『理想』の読者を前提としている。その読者は、テキストが100%の効果を達成するためにふさわしい特定の態度（モラル面、文化面等）を持っている。この内包された読者は、実際の読者とは区別され、実際の読者は内包された読者の地位にとって代わることはできないし、またその気もない」（“Any text may be said to presuppose an ‘ideal’ reader who has the particular attitudes (moral, cultural, etc) appropriate to that text in order for it to achieve its full effect. This implied reader is to be distinguished from the actual readers, who may be unable or unwilling to occupy the position of the implied reader” 166)。
- <sup>2</sup> ただし、ハリエット・ビーチャー・ストウ（Harriet Beecher Stowe, 1811-96）と同様、奴隷に同情はしても、解放奴隷が白人と同じ市民として並び立つことはありえないという、一般的な北部の奴隷制度廃止論者の立場であったようである。
- <sup>3</sup> オーストラリアのジェラルディン・ブルックス（Geraldine Brooks,

---

1955-) の *March* (2005) は、奴隷解放主義者として北軍に従軍したマーチ氏 (Mr. March) の若者時代と、マーチ夫人 (Mrs. March) の夫婦関係を想像したポストモダン小説で、*Little Women* へのオマージュとなっている。本作では、行商人時代に南部の屋敷で美しい奴隷の女性グレイス (Grace) と出会ったマーチ氏は理想に燃えて北軍に従軍するが、戦争の現実打ちのめされ、負傷したところを看護師になっていたグレイスの献身的な看病を受ける。*Little Women* における黒人不在を越える現代のひとつの試みで、ピューリッツァー賞を受賞した。

- 4 白人や黒人の芸人が、顔を黒く、唇を大きく厚く赤く塗って、黒人の外見を戯画的に強調し、茶番劇やだじゃれの演説などをおこなって笑わせる人種差別的な大衆演劇。1830年代ごろから出現し、19世紀末までにエンターテインメントの多様化により衰退したが、キャラクターの造形や、黒人を見下した笑う態度は残存した。
- 5 日本では、ドビアスの挿絵を採用した1927年の岩波書店版が長く親しまれていたが、黒人差別を理由に1988年に絶版となった。人種差別に見える表現は時代的な背景に帰するものだから、細部ではなく話としてのおもしろさを評価するべきであるという論と、ユーモア的一端が人間の身体的特徴を強調することで生まれるなら無批判に子どもに与えるべきではないという論がぶつかりあい、論争を呼んだ。時間をおき、バンナーマン自身の挿絵を用いた『ちびくろさんぼのおはなし』が1999年に径書房から出版されたほか、瑞雲社が2005年に岩波書店の版を『ちびくろ・さんぼ』として復刊した。「ちびくろさんぼ論争」については杉尾敏明と棚橋美代子の著作を参照。

- 
- 6 原作は、奴隷制度反対主義の新聞に掲載されて大きな反響を呼んだ小説であり、作中では、混血の逃亡奴隷ジョージ・ハリス (George Harris) は逃亡中に追手に対し「私らはあんたたちの法律なんて認めない。あんたたちの国も認めない。私らはここ、神の空の下に、あんたたちと同じ自由な人間として立っている。私らをお造りになった偉大なる神にかけて、私らは自由のために死ぬまで闘うつもりだ」(Stowe [邦訳] 236) と大胆に宣言する場面もある。主人公の黒人奴隷のアンクル・トム (Uncle Tom) は、奴隷制というアメリカの原罪を背負い、キリストとして運命を甘受しながら、神の祝福する国アメリカで奴隷制は認められるのかという問いを差し出す布教者で、殺されることでアメリカの罪を暴こうとしている。トム・ショウは、原作をきわめて恣意的に改変し、感傷性に訴えかける芸能である。
- 7 南部の白人芸人のトーマス・ディクソン・ライス (Tomas Dickson Rice, 1808-60) 考案の、つぎはぎだらけの服を着て、ナンセンスな二行詞を歌いながら飛び跳ねる奇妙なキャラクターである。
- 8 ジム・クロウと対照的な都会派ダンディで、シルクハットに燕尾服を身につけ、単純な繰り返しの多い歌を歌う奇妙なキャラクターである。
- 9 西アフリカからカリブ海諸国にかけて伝播している民話の主役で、主にクモの形をしている。秩序をかきまわして騒動を起こす道化やいたずら者の役割を担い、転覆的な力を持つ。だましたりだまされたりしあう関係の中で、痛い目にあうこともあれば、敵の裏をかいて、鮮やかな勝利を得る場合もある。
- 10 アフリカン・アメリカン作家が子どものためにテクストを書くという行為じたいの源流は 19 世紀末にある。歴史的な意義においては、カ

---

ナダ生まれのアメリア・E・ジョンソン(Amelia E. Johnson, 1858-1922)が嚆矢で、彼女は、浸礼派教会の牧師と結婚してフィラデルフィア州に住み、夫を助けて日曜学校向けの話を書いた。1887年に3か月間発行した8ページ足らずの子どものためのキリスト教布教の小冊子 *The Joy* では自作の詩や短い話を掲載し、いずれも、黒人の経験には関連しない、伝道のための教訓話である (Rapunfuse Web)。ジョンソンが *The Joy* の廃刊後に書いた *Clarence and Corrine: or God's Way* (1890) と *The Hazely Family* (1894) は、この分野の最初期の単行本作品である。 *Clarence and Corrine* のクラレンス (Clarence) とコリーン (Corrine) 兄妹は貧しい家の孤児だが、親切な夫婦に引き取られ、教会に通って教育を受け、長じてクラレンスは医者になり、コリーンは教師になる。副題の「神の道」の通り、19世紀前半の教訓話の形式を後追いし、人種や肌の色に関わる言及は皆無である。登場する子どもたちは戯画的に貶められたものではない代わりに、黒い肌の持ち主であるとも明言されず、挿絵にも黒人らしいしるしはない。ホーテンス・スピラーズ (Hortense Spillers) やクロードィア・テイト (Claudia Tate) らのアフリカン・アメリカン文学の批評家は、ジョンソンが白人読者と同じ信仰と価値観を持っていることを前景化したことで、アメリカの共同体の一員として対等に立ったことを評価している (Wagner 97)。肌の色を伏せることは、逆に、アフリカン・アメリカンの書き手がアメリカの規範を理解していることを示し、宗教の上に成立する国家アメリカに、正当なふるまいを求めることを可能にしたのかもしれない。

<sup>11</sup> 「パッシング (なりすまし)」は、一般のアフリカン・アメリカン文学でも大きなテーマになるふるまいで、ときに、アフリカン・アメリ

---

カンのアイデンティティに二重の混乱をもたらすこともある。ネラ・ラーセンの *Passing* (1929) は、白人になりすますことのできる 2 人の女性アイリーン (Irene) とクレア (Clare) を主人公に、なりすまして白人男性と結婚したクレアに対するアイリーンの複雑な感情と 2 人の同性愛的な関係が絡みあう。同じハーレム・ルネッサンス期のジェシー・フォセット (Jessie Fauset, 1882-1961) の *Plum Bun: A Novel without a Moral* (1928) は、姉妹でありながら、見た目が黒人である妹と、なりすましが可能な姉のそれぞれの人生を追う。

<sup>12</sup> 40 年代に書いた歴史ノンフィクションである *A Story of the Negro* (1948) は、1949 年のニューベリー賞佳作に選ばれている。この年のニューベリー賞選定委員 4 人のうちの一人であるハールマエ・ヒル・ローリンズ (Charlemae Hill Rollins, 1897-1979) はミシシッピ州生まれのアフリカン・アメリカンで、ハワード大学を経てシカゴ公共図書館で司書になり、ラングストン・ヒューズ (Langston Hughes, 1902-1967) の評伝や、アフリカン・アメリカンの子どもに向けたブックガイドの *We Build Together: A Reader's Guide to Negro Life and Literature for Elementary and High School Use* (1941) を最初期に出版した人物である。アメリカ児童文学の中核で対抗的なロビー活動をおこなったことがボンタンの受賞につながったことが推測される。

<sup>13</sup> 白人芸人であるアル・ジョルソン (Al Jolson, 1886-1950) は、1930 年代のテレビ番組の中で“Goin' to Heaven on a Mule” (1934) というショーを見せ、黒人の天国を空想した。黒塗りの顔と厚い唇を強調するメーキャップの黒人が愚かしくふるまう天国は極端に戯画化され、

---

きわめて minstrel 的である。ボンタンのように意識の高い知識人にも、ジョルソンのように意識の低い芸人にも「黒人の天国」が想像できないところに苦悩の本質がある。

14 キング牧師の妻のコレッタ・スコット・キング (Coretta Scott King, 1927-2006) の名前にちなんで創設された。クレア・ギャトレル・ステューブンス (Clare Latrell Stephens) が、この賞の概要や教材としての用いられ方を詳述している。

15 この賞は、アフリカン・アメリカン児童文学の担い手の充実ぶりを示すと同時に、四半世紀のあいだには同じ人物が複数回受賞している事実から分かるように閉鎖性も持っている。理念を前面に押し出すことが重要である反面、アフリカン・アメリカン児童文学や絵本というジャンルが硬直する危険性もある。

16 ラレッタ・ヘンダーソン (Laretta Henderson) の *Ebony Jr!* (2008) に、*Ebony Jr!* の内容と歴史的意義が詳述されている。

17 同じ黒人少女であったとしても、救われることのなかったピコーラ (Picola) と異なり、姉や母との女性共同体の中で守られていたジェニファ (Jennifer) はふみとどまり、「愛とは自分自身を愛すること」 (“love means learning to love herself”) だと発見する (Beaulieu 70)。

18 リチャード・ライトの *Invisible Man* (1952) の題名にもなっている「不可視性」はアフリカン・アメリカンと結びつけられやすい用語である。この作品では、白人中心の社会で、元優等生の黒人大学大学生は、自分が白人社会の歯車として有用になるための黒人にすぎないことを思い知らされ、挫折して、地下に姿を消す。不可視性は、アメリカのアフリカン・アメリカンに常につきまとう問題である。



---

19 ヒギンソンの生涯はティルデン・エデルシュタイン (Tilden G. Edelstein) の論を参照。南北戦争時の歌謡文化に対するヒギンソンの影響はジョン・ピッカー (John Picker) が詳しく論じている。

20 黒人霊歌では重要な要素である。伝道集会の参加者は、互いに信仰を確認しあうように、牧師のリードに続いて大声で聖書の一節をくり返し、それに合わせて手拍子を打ったり、体を揺らしたりする。“Swing Low, Sweet Chariot”の歌詞でも、

説教者：静かに揺れよ、二輪馬車

会衆：私をわが家に連れ帰るためにやってくる

説教者：静かに揺れよ、二輪馬車

会衆：私をわが家に連れ帰るためにやってくる

説教者：私より前に、あなた方が家に着くなら

会衆：私をわが家に連れ帰るためにやってくる

説教者：友に伝えてください、私もすぐに行くよと

会衆：私をわが家に連れ帰るためにやってくる

Preacher: Swing low, sweet chariot

Congregation: Coming for to carry me home

Preacher: Swing low, sweet chariot

Congregation: Coming for to carry me home

Preacher: If you get there before I do

Congregation: Coming for to carry me home

Preacher: Tell all my friends, I'm coming too

Congregation: Coming for to carry me home

と、わが家になぞらえた天国へ行くことについて、説教者と参加者の間で掛け合いがおこなわれ、ソロとコーラスに展開している。コール・アンド・レスポンスの芸術性と高らかな歌声の迫力は、信仰宣言と合致する。ヴァナキュラーなアイデンティティ表象として考えるとき、「コール・アンド・レスポンス」は文学にも侵入し、ラングストン・ヒューズやニッキ・ジョバンニは、俗世の言葉を用いて詩作をおこない、白人主流文化に挑みつつ、黒人の読み手との間にコール・アンド・レスポンスを行きかわせている（中山 Web）。

<sup>21</sup> 「地下鉄道」の総括的な歴史は、1898年に出版されたウィルバー・H・シーバート（Wilbur H. Siebert）の著作に詳しい。オハイオ州には、国立地下鉄道自由センター（The National Underground Railway Freedom Center）があり、奴隷小屋や逃亡奴隷に関する展示のほか、「現代における奴隷制度」として21世紀に残存する隷属的労働や児童搾取の実態を暴いている。

<sup>22</sup> *St. Nicholas* は月刊で販売されたのち、表紙を外して6か月ないしは1年分をまとめて合冊にして再販した。現在流通している本の多くが合冊版で、今回の調査では1920年10月号と12月号の表紙絵を手に入れることはできなかった。しかし、1921年の表紙の多くもレリエイが担当していたことを考えると、10月号と12月号でもコンセプトに大きな変化はないと類推できる。1920年代の表紙絵は、主にチャールズ・マーク・レリエイ（Charles Mark Relyea, 1863-1932）が担当していた。レリエイはニューヨーク州に生まれ、ペンシルヴァニア美術

---

学校（Pennsylvania Academy of the Fine Arts）に学んだのちパリに渡った。*St. Nicholas*のほか、大人向けの月刊教養雑誌 *Munsey* でも仕事をし、その絵は、写実的で、白人の明るさに満ちている。

<sup>23</sup> 他方で、20世紀前半までの女性のスレイブ・ナラティブはこのパターンと相いれない。ハリエット・アン・ジェイコブズ（Harriet Ann Jacobs）の *Incidents in the Life of a Slave Girl. Written by Herself*（1861）で、ジェイコブズは、所有者の性的搾取から逃れるために、理解ある白人男性との間に子どもをもうけ、その子どもに事実を隠して祖母の家の屋根裏に数年間も隠れたのちにニューヨーク州に逃げ、最終的には支援者の白人女性が彼女を買う形で自由になる。文字や言葉は、複雑なネットワークの中で、ジェイコブズを陥れるために用いられ、彼女の特徴を詳細に記した懸賞広告を読むとき、ジェイコブズには、自分が情報化され、印刷されてばらまかれる恐ろしさを実感する。その恐怖は、男性のスレイブ・ナラティブに逆流する反・リテラシーである。北部に来て生まれ変わるダグラスと、迷いつづけるジェイコブズは正反対である。子どもを思うがゆえに自己実現に踏み切れなかったジェイコブズの選択について、訳者の小林憲二は「『語られたこと』とともに『語られなかったこと』、あるいは書き言葉となって表に流出してきたものとその行間に留まり続けたもの、さらには語り手が言い淀んだり沈黙を守ったりしてきたもの、いわばそうしたものの総体がジェイコブズの『語り』の内実を形作って」（Jacobs [邦訳] 51）と述べる。ためらいの中にある独白と、時折我に返ったように読者宛てに許しを乞う文体からは、逃亡奴隷としての自己を誇らかに語る上昇機運は感じられない。

---

さらに、奴隷の母性は子殺しと悲劇的に結びつく。1856年に、マーガレット・ガーナー (Margaret Garner) という混血の奴隷が逃亡し、南部に連れ戻される際、連れていた2人の乳児を殺害するという事件が起き、社会に衝撃を与えた。トニ・モリスンの *Beloved* はこの事件を下敷きにし、逃亡奴隷のセテのところに現れる喪服の少女ピラヴドは、子殺しの過去と同時に、中間航路や農園で殺された奴隷の死も象徴している。奴隷から生まれた子どもは、動産としての奴隷になるというルールにより、子を産み落とした母親の苦悩はより複雑になる。殺すということが最上の愛になるような奴隷の母の在り方は、それ自体が児童文学の許容範囲を超えている。*Beloved* の最後は、象徴的に「これは人から人へと伝える物語ではなかった」(“This is not a story to pass on” Morrison *Beloved* Chapter III) と3回繰り返されて沈黙で結ばれ、子殺しする女性の声は、語り継ぐことを旗印とする児童文学と正反対の立ち位置にあることも分かる。同じ痛みを持つ奴隷の女性が沈黙のうちに欠落に共感しあうとき、言葉はむしろ力を持たなくなり、それぞれの痛みは語られざる中に溶け出ていく。直線的に語り直し、共有し、伝えていくことを本質とする児童文学の語り方において、あるいは、子を産み、はぐくむ力に光を当てる児童文学の性質において、子どもに近しく感じられるはずの女性のスレイブ・ナラティブは、児童文学化が難しい。

<sup>24</sup> ジョン・ヘンリーのルーツとなる人物について、カーリン・ヘンペル (Carlene Hempel) は、1840年代か50年代にノース・カロライナ州かヴァージニア州で奴隷として生まれた、身長6フィート、体重200ポンドという巨漢の労働者で、奴隷解放後、南北戦争で損害を受けた国

---

土の再建設のためチェサピーク & オハイオ鉄道会社 (Chesapeake and Ohio Railway) に低賃金で雇われた人物を挙げている (Hempel Web)。スコット・レイノルズ・ネルソン (Scott Reynolds Nelson) も、*Steel Driven' Man John Henry: The Untold Story of an American Legend* (2006) で 1870 年代にヴァージニア州で窃盗罪により捕まったジョン・ウィリアムズ・ヘンリー (John Williams Henry) という黒人労働者を具体的に挙げている。ただし、いずれにせよ、断定するには不足で、特定の一人の人物というよりも、一般的な労働者の生活の細部を付け加えたり、体の大きさや扱える道具の重さが誇張されたりすることで、無数の労働者の総体を引き受けた像と考える方が妥当と考えられる。

- <sup>25</sup> アフリカン・アメリカン以外の作家による再話はバラッド寄りになるように見受けられる。ニューヨークに育ち、アフリカン・アメリカンの隣人と親しく付き合っていたユダヤ系の絵本作家エズラ・ジャック・キーツ (Ezra Jack Keats, 1916-83) の *John Henry: An American Legend* (1965) では、白人である自分と黒人である隣人の友愛関係を反映するかのよう、ジョン・ヘンリーと対決する蒸気掘削機を運転するのは友人のリル・ビル (L'il Bill) という白人男性で、口髭をたくわえ、パイプをくわえている。2 人はともに鉄道敷設への誇りを持っており、敵対関係にはない。リル・ビルとジョン・ヘンリーは、力を合わせて掘削の限界に挑戦しているかのようでもあり、掘っているジョンが蒸気機関を操作しているリル・ビルに、替えのハンマーを渡してくれ、と頼むことさえする。見守る工夫たちは、疲れきったジョン・ヘンリーとリル・ビルの双方に冷たい水をかけ、本人たちが納得

---

するまで競争を続けさせる。ジョン・ヘンリーと蒸気機関との対決は、労働者同士の絆の物語に書き換えられ、ジョン・ヘンリーの挑戦への称賛と友情が焦点化されている。互いに全力を尽くして戦ったのち、胸がやぶれて死んだジョン・ヘンリーをリル・ビルも含め労働者仲間全員で追悼する。白人の詩人スティーブ・サンフィールド (Steve Sanfield, 1943-2015) の絵本 *A Natural Man: The True Story of John Henry* (1986) はモノトーンで構成され、ジョン・ヘンリーには困惑したような表情がつきまとう。キーワードは「自然の男」(“the natural man”) で、理性や利害関係ではなく本能のままに行動するジョン・ヘンリーの人生に焦点が合っている。21世紀の *John Henry* (Carol Ottolenghi & Steve Haefele, 2013) では、結婚相手の名前はルーシー・アン (Lucy Ann) で、ジョン・ヘンリーが蒸気機関と競争するのは、機械が持ち込まれて仲間の雇用が失われるのを防ぐためという理由づけがされている。いずれも、白人が、ジョン・ヘンリーを自分たちの側に引き込んでいるように見受けられる。

- <sup>26</sup> 「虹を肩にまきつける」という表現は、テレビのボードヴィル・ショウで人気を博した東欧出身の白人の芸人アル・ジョルソン (Al Jolson, 1886-1950) の “There’s A Rainbow Round My Shoulder ” (1928) という恋の歌に由来するようである。「ぼくの肩には虹がある / 見上げれば青空 / この太陽の輝き / 世界は素敵 / だってぼくは恋をしているんだ」 (“There’s a rainbow ‘round my shoulder / And a sky of blue above / How the sun shines bright / The world’s all right / ‘cause I’m in love”) という歌詞自体には黒人と結びつく要素はないが、1920年代から30年代にかけて、ジョルソンが黒塗りの顔と厚い

---

唇のメークアップを施した minstrel 芸人として活躍していたため、皮肉にも黒人文化と結びつけられるようになった。他方で、アフリカン・アメリカン作家は、ジョルソンが示した minstrel 的なイメージを転覆し、虹の積極的な面に目を向ける。民俗学者の Howard Washington Odum (1884-1954) のフィクション *Black Ulysses Series* の *Rainbow Round My Shoulder* (1928) は、南部黒人の John Wesley Gordon (John Wesley Gordon) の放浪に合わせて、黒人の歌や民話を紹介する 3 部作の 1 作目で、ユリシーズに見立てられた Gordon の出立を虹のイメージで祝福する。黒人舞踏家の Donald McKayle (Donald McKayle, 1930-) によるコレオグラフィー “Rainbow Round My Shoulder” (1959) は、7 人の黒人チェインギャング（鎖につながれながら炭鉱や材木収集などの肉体労働に従事する囚人）と自由をイメージしたひとりの黒人女性が登場し、7 人に救いがもたらされる。

27 ペンシルヴァニア州の Carlisle Indian Industrial School (Carlisle Indian Industrial School) の校長だった Richard H. Pratt (Richard H. Pratt, 1840-1924) の「インディアンを殺し、人間を救え」(Kill the Indian, and Save the Man) というマニフェストのもと、1910 年代からはネイティブ・アメリカンの子どもが親元から連れ去られ、寄宿学校で英語とキリスト教の厳しい教育が施された。今もトラウマに苦しむネイティブ・アメリカンがいる。

28 モチーフとして好まれるのはたとえば「自然」だった。白人が好ましいと考えるネイティブ・アメリカン像やものの見方がエコロジーとの関連の中で強調されている。1975 年のコールデコット賞を受賞したジ

---

ェラルド・マクダーモット (Gerald McDermott, 1941-) の *Arrow to the Sun* (1974) では、中南米のインディオ風の抽象的かつプリミティブな図柄やモチーフが使われている。現代でも、たとえばシンデレラの類話である *The Rough-Faced Girl* (Martin, 1992) で、醜い末娘が見ることのできる偉大な「見えない男」(The Invisible Man) は大自然のスピリットであり、自然と調和して美しく表現されている。

<sup>29</sup> 差別撤廃を訴え、当時、座席が人種で分けられていたバスに黒人と白人のグループが並び席で同乗し、長距離バスに乗ってワシントン D.C. から南部に向かっていく運動。バスに火炎瓶が投げられたり、ターミナルで待ち構える群衆から引きずり降ろされて暴行を受けたりする危険と隣り合わせだった。

<sup>30</sup> バスは、車を持たない者や運転できない者、すわなち弱者を運ぶ公共交通機関の象徴でもある。アフリカン・アメリカンがバスのボイコット運動でバス会社に経済的打撃を与えたことが公民権運動を大きく前進させ、危険だが白人も参与したフリーダム・ライドによって多様な差別反対活動が活性化した。バスはただの乗り物ではなく、アフリカン・アメリカンの集団性とも結びつく。

<sup>31</sup> *The Land* の混血の開拓者の現代性は、ネイティブ・アメリカンとの関わりにも先鋭的に表れている。インガルス一家は、インディアン・テリトリーに入りこんで開拓を進め、キャロラインがオーセージ族を野蛮人と断定することが批判されている。この問題を注意深く扱った2001年の *The Land* では、ネイティブ・アメリカンは「ネイション」(“the Nation”) と呼ばれ、デボラの父はネイションの男性である。南北戦争で連邦軍が攻めてきたときに、祖父が戦わずにアラバマ州か



---

ミシシッピ州に去ったと聞いたポールは、会ったことのない祖父のことを懐かしく考え、「この土地は (...) 最初はカナティたちのものだった」(“This land,” I said, “it belonged to his people first” Taylor *Land* 42) と言う。19世紀の白人農園主としてはきわめて進歩的な考えのエドワードは、ネイティブ・アメリカンも包含して土地を見ることができると述べている。

<sup>32</sup> 類話の展開についてはオリビア・スミス・ストーリー (Olivia Smith Storey) の論 (1-34) に詳述されている。

<sup>33</sup> 『大辞林』では「子が結婚後も両親と同居し、複数の核家族から成る家族」と定義されているが、婚姻関係によって生まれる血のつながらない者同士の家族や、ひとり親家庭同士での再婚など、より広い意味でも使われる。

<sup>34</sup> 1830年の「インディアン移住法」(Indian Removal Act) に基づき、1838年にネイティブ・アメリカンのチェロキー族 15,000人をジョージア州に集め、後にオクラホマ州となる地域のインディアン居留地まで徒歩で強制移動させたことを指す。旅の中で約 4,000名が亡くなった。

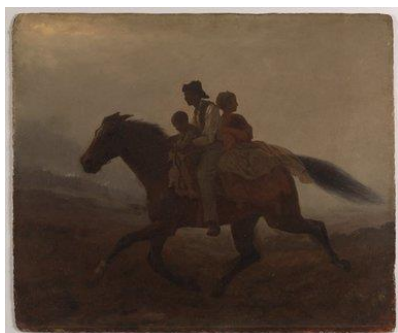
<sup>35</sup> ハミルトンの自伝的な *Arilla Sun Down* (1976) では、地域社会の中で際立って個性的な家族を持つ少女アリラ (Arilla) が、自分のアイデンティティをどのように確立しようか逡巡した末に、言葉を聞き、受け止め、語りなおす「言葉の守り手」(“Wordkeeper” Hamilton *Arilla* 214) という役割が自分の道であることに気づく。過去を掘り起こし、現在に向けて語る語り手としての自己に目覚めるアリラの姿は、そのままハミルトンの軌跡にあてはまるが、その系譜に、ポールも連なっ

---

ていく。

<sup>36</sup> 自由の買戻しの例は多く、身内が働いて送金する例もあった。だが、この支払いは強い心理的抵抗も生む。自由を買い戻す場合、所有者の言い値でなければならないが、自由を買うという矛盾への葛藤について、たとえば元奴隷のハリエット・ジェイコブズ (Harriet Jacobs, 1813-97) は、自伝の *Incidents in the Life of a Slave Girl* (1861) で「私の稼いだお金はどうしても子どもたちの教育と、子どもたちのために安全な家を得るのに使いたかった。自分の[自由を買う]ために使うのは耐え難いだけでなく不当であるように思えた。私は自分を一個の財産だとはどうしても見なせなかった」 (“The money I had earned, I was desirous to devote to the education of my children, and to secure a home for them. It seemed not only hard, but unjust, to pay for myself. I could not possibly regard myself as a piece of property” Jacobs [邦訳] Chapter 38) と述べ、所有者のフrint 医師 (Dr. Flint) に強い拒否感を持っている。

37



<sup>38</sup> タブマンは、ストウに敬意を表しながらも、*Uncle Tom's Cabin* の芝居は決して見に行かないと述べ、実際の奴隷制度と舞台の上での乖離、また、奴隷の演技への嫌悪を示している。

- 
- 39 ケンタッキー州の農園から逃げた奴隷で、オハイオ川に飛び込んで自由州に渡った。このとき、追手の農園主は彼の動きを追っていたにもかかわらず捕獲できず、「奴は地下の道にもぐったに違いない！」と叫んで農園に戻ったといわれ、これが「地下鉄道」の由来となった(The Institute for Research on the African Diaspora in the Americas and the Caribbean Web)
- 40 この接続は、現代には新たな展開を示す。アンテベラム期から南北戦争が終わるまで奴隷制度廃止運動に関わっていた運動家たちの多くが、南北戦争後には次の被抑圧者の救済に動き始めた。ソジャーナ・トゥルースは、南北戦争後に婦人参政権の運動に参加している。オハイオ州シンシナティに 2004 年に設立された国立地下鉄道自由センター(National Underground Railroad Freedom Center)は、歴史遺産である「地下鉄道」を扱うだけでなく、現在、世界各地で進行中の人身売買や、奴隷のように搾取される労働者の問題も扱い、啓蒙を進めている。
- 41 祖父母の昔話を聞いたり、歴史を学んだり、タイムトラベルで過去をさかのぼったりすることで、主人公の子どもが励ましを得る作品は、これまでも書かれている。ジョアン・ロックリン(Joanne Rocklin, 1946-)の *Strudel Stories* (1999) は、伝統菓子であるリンゴのシュトルーデルを台所で焼きながら、ユダヤ系の家族の苦労のお話がユーモアをまじえて語られていく。イギリスのバーリー・ドハティ(Berlie Doherty, 1943-)の *Granny Was a Buffer Girl* (1986) は、フランス留学に発つ前の孫娘に、祖母が青春時代の葛藤や恋愛をめぐる冒険を話して聞かせる。いずれも、聞き手の少女たちに過去の物語が作用

---

し、その先を生きていく力とすることができる。しかし、ヴァリナの場合は、単なる家族史ではなく、アフリカン・アメリカンという民族集団に関わる経験を引き継いでいる点で一線を画す。

42 この連帯の姿勢について、男が「脈打つ血の赤」(“throbbing blood-red” Hamilton *Junior Brown* 136) で描かれている点に共産主義や 1960 年代の左翼思想を見いだすことも可能かもしれない。ハミルトンが通ったニュー・スクール・フォー・ソーシャル・リサーチ (New School for Social Research) は、第一次世界大戦下の 1918 年に、検閲や外国人排斥の動きが高まっていたことに憂慮したコロンビア大学の教員のジョン・デューイらが設立した教育機関で、学士号を持たない社会人を受け入れた。1948 年からデュボイスが教鞭をとっていたり、他に先駆けて女性学の講義を設けたりしたきわめて革新的な学校で、現在はニュースクール大学 (The New School University) と名前を変えている。第二次世界大戦時にはユダヤ系を始めとする亡命してきた多くの知識人を迎え入れ、1933 年にロックフェラー財団の支援を受けて、学内に「亡命者の大学」(The University in Exile) が大学院部門として設立された。抵抗と自由の姿勢を理念に持つ大学に 1960 年代に学んだことで、左翼的なリベラリズムの実験と子どもの文学における社会民主主義を試みていたとも仮定できる。20 世紀の社会民主主義は「暴力革命を否定し、議会を通じて漸進的に改良を重ねて社会主義を実現しようとする立場。狭義には、ベルンシュタインの修正主義を初めとする非マルクス主義的社会主義の総称」(『大辞林』) で、穏健な改良主義を指すが、肌の色の素朴な言説の背後で、ハミルトンがアフリカン・アメリカン作家の中でも比較的早い時期から白人中心のア

---

アメリカ児童文学界で、多様性をもたらす作家として歓迎されたのは、政治的な中立性と白人への共感も含めたリベラリズムがその土台になったからであり、ホームレスや過干渉な親を持つ若者に焦点を合わせることによって、多様なアメリカ人が包含できるように巧妙に構想されている点が戦略的である。*Junior Brown* が発表された 1971 年は、冷戦を背景に 1960 年から続いてきたベトナム戦争に大衆からの批判が高まり、反戦運動が盛んになっていた。日本語版訳者の掛川恭子は、解説で、惑星という共同体に「フラワーチルドレン」([邦訳] 309) と同じ哲学を見いだしている。フラワーチルドレンとは 1960～70 年代にベトナム戦争での徴兵や派兵に反対し、「花または花の力」(“Flower aka Flower power”) というスローガンを掲げて平和的な運動を展開し、全身を花で飾ったり、銃口に花を挿すパフォーマンスをおこなったりしたムーブメントの参加者を指す。ハミルトンが 1960 年代の左翼思想としてアイン・ランド (Ayn Rand, 1905-82) の影響を受け、*Junior Brown* が *The Fountainhead* (1943) のパロディになっていることは、藤森かよ子参照 (Web)。*Junior Brown* には、奴隷制度に由来するアフリカン・アメリカンの理想と 1960 年代の左翼思想が混雑しているともいえるかもしれない。

<sup>43</sup> アフリカ北西部のセネガルからチャドにかけての広い範囲で、主にフラ (Fula) 人が用いる言語である。1,400 万人の話者がいる。

<sup>44</sup> アフリカ西部のニジェール・コンゴ語族に属し、ナイジェリアやトーゴに住む Yorùbá (Yorùbá) 人が用いる言語である。

<sup>45</sup> ファトゥは、ある奴隷が「きちんとした英語を話すから」解放されてもよいという論や、「ひどい主人のもとにいるから」解放されるべき

---

であるという論に抵抗し、どの黒人奴隷も等しく解放される権利があることを訴えるが、建国当時のアメリカでは、まだその理屈は通じない。

46 W・T・ラモン・ジュニア (W. T. Lhamon Jr.) は、ヒップホップのダンスを minstrel・ショウにおけるジム・クロウ像やブラック・フェイスと同列に位置づけ、「1980年代から1990年代にかけて、ヒップホップの動きとラップの手つきの強調が盛り上がったのは、ライスが1830年代にジム・クロウを踊ったときと同じように、国境を越えた公共性を形成する、特にカリスマのあるジェスチャーの一例である。この近年の熱狂は、ブラック・フェイスを伝える環の一部である」 (“The surge of hip hop moves and rap hand italics through 1980s into the 1990s is another instance of particular charismatic gestures organizing transnational publics just as Rice did in the 1830s when he danced Jim Crow. This recent surge is very much part of the blackface lore cycle” Lhamon 218) と述べて批判しているが、ヒップホップは、ジム・クロウのように戯画的なカリカチュアを嘲笑するのではなく、アフリカン・アメリカンに特徴的な身振りや言語が最先端の流行となり、肌の色を越えて魅力を放つので、ブラック・フェイスとは異なる積極性が見出せる。

47 アフリカン・アメリカン児童文学批評が追及してきたように、60年代のアメリカ児童文学の中で、白人作家がアフリカン・アメリカンのシニフィアンに深く入り込むことは難しい。ナット・ヘントフ (Nat Hentoff, 1925-) の *Jazz Country* (1964) は、ジャズに憧れる白人少年トム (Tom) が味わう逆差別と困難を扱うが、自由と未来がある

---

のは天才ジャズメンの黒人モーセ・ゴッドフリー (Moses Godfrey) ではなくトムであり、モーセの息子のフレッド (Fred) は黒い肌を呪い、ジャズを嫌悪している。E・L・カニグズバーグ (E. L. Konigsburg, 1930-2013) の *Jennifer, Hecate, Macbeth, William McKinley, and Me, Elizabeth* (1967) でもエリザベス (Elizabeth) が一緒に魔女修行をおこなう隣家のジェニファ (Jennifer) の他者性は、学校参観でジェニファがアフリカン・アメリカンであること (Chapter 5) と連動し、肌の色によって補完される。

<sup>48</sup>マルティニーク島出身の詩人エドゥアール・グリッサン (Édouard Glissant, 1928-2011) が提唱した用語で、ヨーロッパ世界が押しつける純粋さや体系性に対する「不透明さ」であり、有機的な混淆を示す。

## 引用・参考文献

### 一次資料

### 文献

- Abrahams, Roger D. *African-American Folktales: Stories from Black Traditions in the New World*. New York: Pantheon-Random, 1985. Originally published as *Afro-American Folktales: Stories from Black Traditions in the New World*. Kindle ebook file. (『アフロ - アメリカンの民話』北村美都穂訳. 青土社, 1996.)
- Adler, David A. *A Picture Book of Frederick Douglass*. Illus. Samuel Byrd. New York: Holiday House P, 1995.
- Alcott, Louisa May. *Little Women*. Boston: Robert and Brothers, 1868. *iBooks* ebook file. (『若草物語』矢川澄子訳. 福音館書店, 2004.)
- . *Little Men: Life at Plumfield with Jo's Boys*. Boston: Robert and Brothers, 1871. *iBooks* ebook file. (『第三若草物語』吉田勝江訳, 1961. 改版. 角川書店, 2008.)
- . *Hospital Sketches*. Boston: James Redpath, 1863. Bedford: Applewood, 1993. (『病院のスケッチ』谷口由美子訳. 篠崎書林, 1985.)
- Alger, Horatio. Jr. *Ragged Dick; or, Street Life in New York with the Boot Blacks*. 1867. Boston: A. K. Loring, 1868. *iBooks* ebook file. (『ぼろ着のディック』畔柳和代訳. 松柏社, 2006.)
- An Na. *A Step from Heaven*. New York: Penguin, 2001. (『天国までもう一步』代田亜香子訳. 白水社, 2002.)
- Anaya, Rudolfo, ed. "Lupe and La Llorona." *My Land Sings: Stories from the Rio Grande*. 1999. New York: Harper Collins, 2001.
- Andersen, Hans Christian. "Den Lille Havfrue." 1836. "Den Lille Havfrue." *H. C. Andersen Information*. 8 Jan. 2016. <[http://www.hcandersen-homepage.dk/?page\\_id=1228](http://www.hcandersen-homepage.dk/?page_id=1228)>. (「人魚姫」『完訳アンデルセン童話集1』大畑末吉訳. 岩波書店, 1984.)
- Andrews, Troy "Trombone Shorty." *Trombone Shorty*. Illus. Bryan Collier. New York: Abram Books, 2015.
- Anzaldua, Gloria. *Prietita and the Ghost Woman*. New York: Children's Press-Scholastic, 1996.
- Armstrong, William. *Souder*. 1969. New York: Harper Collins, 2002. (『父さんの犬サウンダー』曾田和子訳. 岩波書店, 1998.)
- Asbjørnsen, Peter Christen, and Jørgen Moe, eds. *Norske Folkeeventyr*. 1841-44. *Norske Folkeeventyr*. 8 Jan. 2016. <<http://runeberg.org/folkeeven/>>.
- Auldreich, Thomas Bailey. *The Story of a Bad Boy*. Boston: Fields, Osgood & Co, 1870. Kindle ebook file.
- Baker, Elizabeth Dawson. *The Frog Princess*. 2002. New York: Bloomsbury, 2004.



- Bannerman, Helen. *The Story of Little Black Sambo*. 1899. New York: Harper Collins, 1923. (『ちびくろさんぼのおはなし』なだもとまさひさ訳. 径書房, 1999.)
- . *Little Black Sambo*. Illus. Frank Dobias. New York: Happy Hour-Macmillan, 1927. (『ちびくろさんぼ』光吉夏弥訳. 岩波書店, 1953.)
- Beaumont, Jeanne-Marie Leprince de. “La Belle et La Bête”. *Magasin des enfants*. Londres, 1757. (『美女と野獣』鈴木豊訳. 角川書店, 1992.)
- . *Famous Negro Athletes*. New York: Dodd, 1964.
- . *Sad-Faced Boy*. Cambridge: Riverside Press, 1937.
- Beecher, Catharine E (sther). *From Domestic Economy to Home Economics: The Transformation of American Women’s Lives* Vol. 2. 1841; 1847 ed. Tokyo: Athena, 2008.
- . *A Treatise on Domestic Economy, For the Use of Young Ladies at Home, and at School*, 1842. Rev. ed. New York: Harper, 1845. *Kindle* ebook file.
- Bonham, Frank. *Durango Street*. 1965. New York: Puffin, 1999.
- Bowman, Cloyd. *John Henry, the Rambling Black Ulysses*. Chicago: A. Whitman, 1942.
- Bradford, Sarah H. *Lewie; Or, The Bended Twig*. New York: James C. Derby, 1854. 23 July. 2016. <<https://archive.org/details/lewieorbendedtw00bradgoog>>.
- . *The Linton Family, Or, The Fashion of this World*. New York: Pudney & Russell, 1860. 23 July. 2016. <<https://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=nyp.33433081936928;view=1up;seq=7>>.
- . *Harriet Tubman: The Moses of Her People*. New York: G. R. Lockwood & Son, 1886. New York: Dover, 2004.
- . *Scenes in the Life of Harriet Tubman*. 1869. U of North Carolina at Chapel Hill. 8 Jan. 2016. <<http://docsouth.unc.edu/neh/bradford/bradford.html>>.
- Brooks, Geraldine. *March*. New York: Viking, 2005. (『マーチ家の父 - もうひとつの若草物語』高山真由美訳. 武田ランダムハウスジャパン, 2010.)
- Brown, William S. *Narrative of William W. Brown, a Fugitive Slave. Written by Himself*. Boston: Anti-Slavery Office, 1847. Documenting the American South. 8 Jan. 2016. <<http://docsouth.unc.edu/neh/brown47/brown47.html>>.
- Chamoiseau, Patrick. *Au Temps de l’antan-Contes du Pays Martinique*. Paris: Hatier, 1988. (『クレオールの子供』吉田加南子訳. 青土社, 1999.)
- . *Texaco*. Paris: Blanche, 1992. (『テキサコ』(上)(下) 星楚守之訳. 平凡社, 1997.)
- Clifton, Lucille. “Listen Children.” *Listen Children: An Anthology of Black Literature*. Ed. Dorothy S. Strickland. New York: Yearling, 1999.
- Cooper, James Fenimore. *The Deerslayer: The First War Path*. 1841. *Kindle* ebook file.
- . *The Last of the Mohicans: A Narrative of 1757*. 1826. *Kindle* ebook file.
- . *The Pathfinder: The Inland Sea*. 1840. *Kindle* ebook file.
- . *The Pioneers: The Sources of the Susquehanna; A descriptive Tale*. 1823. *Kindle* ebook file.
- . *The Prairie: A Tale*. 1827. *Kindle* ebook file.

- Cotton, John. *Milk for Babes: Drawn Out of the Breasts of Both Testaments. Chiefly, for the Spirituall Nourishment of Boston Babes in Either England: But May Be of Like Use for Any Children*. Cambridge: S.G., 1656. Ed. Paul Royster. Libraries at University of Nebraska-Lincoln. 9 Jan. 2016. <<http://digitalcommons.unl.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=1018&context=etas>>.
- Cox, Palmer. *The Brownies: Their Book*. 1887. New York: Dover, 2011.
- Cullen, Countee. *Color*. New York: Harper, 1925. (『色 - カウンティ・カレン詩集』 斎藤忠利, 寺山佳代子訳. 国文社, 1998.)
- . *On These I Stand: An Anthology of the Best Poems of County Cullen*. New York: Harper, 1947.
- Curtis, Christopher Paul. *Elijah of Buxton*. New York: Scholastic, 2009.
- . *The Watsons Go to Birmingham- 1963*, 1995. New York: Yearling, 1997. (『ワトソン一家に天使がやってくる時』 唐沢則幸訳. くもん出版, 1997.)
- Daley, James, ed. *Great Speeches by African Americans: Frederick Douglass, Sojourner Truth, Dr. Martin Luther King, Jr., Barack Obama, and Others*. Dover, 2006.
- Defoe, Daniel. *The Life and Strange Surprizing Adventures of Robinson Crusoe, Of York, Mariner (Annotated)*. 1719. Kindle ebook file.
- Delany, Sarah, A. Elizabeth Delany and Amy Hill Hearth. *Having Our Say: the Delany Sisters' First 100 Years*. New York: Kodansha America, 1993. (『セイディーとベッシー - アメリカ 200 年を生きた私たち』 藤井ひろこ訳. 講談社, 1993.)
- Doak, Robin S. *Harriet Tubman*. New York: Scholastic, 2015.
- Dodge, Mary Mapes, ed. *St. Nicholas: A Monthly Magazine for Boys and Girls*. New York: Scribner; Nov. 1873-June 1881, and Century; July 1881-May 1930. *Hathi Trust Digital Library*. 8 Jan. 2016. <<http://catalog.hathitrust.org/Record/000640805>>.
- Doherty, Berlie. *Granny Was a Buffer Girl*. London: Methuen, 1986. (『シエフィールドを發つ日』 中川千尋訳. 福武書店, 1990.)
- Douglass, Frederick. *The Life and Times of Frederick Douglass Written by Himself: His Early Life as a Slave, His Escape from Bondage, and His Complete History*, 1881. Hartford: Park, 1882. *California Digital Library*. 7 Jan. 2016. <<http://www.archive.org/details/lifeandtimesoffr00dougiala>>.
- . *My Bondage and My Freedom*. 1855. Ed. John Stauffer. New York: Random, 2003.
- . *Narrative of the Life of Frederick Douglass, an American Slave*. New York: Dover, 1845. iBooks ebook file. (『数奇なる奴隷の半生 - フレデリック・ダグラス自伝』 岡田誠一訳. 法政大学出版局, 1993.)
- , ed. *The North Star*. 1847-51. Frederick Douglass Paper. 1851-61. The North Star: Online Collection. St. John Fisher College Lavery Library. 7 Jan. 2016. <<http://cdm16694.contentdm.oclc.org/cdm/search/collection/p15109coll7/searchterm/VZJ001/fielld/all/mode/exact/conn/and/>>.
- Draper, Sharon. *Copper Sun*. New York: Atheneum, 2008.
- Du Bois, W. E. B. *The Autobiography of W. E. B. DuBois: A Soliloquy on Viewing My Life from the*

- Last Decade of Its First Century, New York: International P, 1968.
- , ed. *The Brownies Book*. New York: Du Bois and Dill, 1920-21. *The Library of Congress*. The Rare Book and Special Collections Division. 8 Jan. 2016. <<http://hdl.loc.gov/loc/rbc/ser.01351>>.
- , ed. *The Crisis*. New York: NAACP. 1910-1934. 1934-present.
- . "The Study of the Negro Problems." *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, Vol. XI, January 1898.1-23. U of Toronto. <<https://archive.org/details/annalsaa11ameruoft>>.
- . *The Philadelphia Negro*. Philadelphia: U of Philadelphia. 1899. 2 Mar. 2016. <[https://archive.org/stream/philadelphianegr001901mbp/philadelphianegr001901mbp\\_djvu.txt](https://archive.org/stream/philadelphianegr001901mbp/philadelphianegr001901mbp_djvu.txt)>.
- . *The Souls of Black Folk*. 1903. *Kindle* ebook file. (『黒人のたましい』木島始, 鮫島重俊, 黄寅秀訳, 岩波書店, 1992.)
- Dumas, Alexandre. *D'Artagnan*. Baudry. 1844, 1845, 1851. *Kindle* ebook file. (『三銃士』生島遼一訳. 岩波書店, 1970.)
- . *Le Comte de Monte-Cristz*. 1844-46. *Kindle* ebook file. (『モンテ・クリスト伯』山内義雄訳. 岩波書店, 2000.)
- Ellison, Ralph. *Invisible Man*. 1952. 2<sup>nd</sup> ed. New York: Vintage, 1995. (『見えない人間[I][II]』松本昇訳. 南雲堂フェニックス, 2004.)
- Equiano, Olaudah. *The Interesting Narrative of the Life of Olaudah Equiano, or Gustavus Vassa, the African. Written by Himself*. London. Published by the author, 1789. *Kindle* ebook file. (『アフリカ人、イクアーノの生涯の興味深い物語』久野陽一訳. 研究社, 2012.)
- Fauset, Jesse. *Plum Bun: A Novel without a Moral*. 1928. (『プラムバン-道徳とは縁のない話』風呂本淳子訳. 新水社, 2013. )
- Fitzgerald, Francis Scott Key. *Tales of the Jazz Age*, 1922. Oxford: Oxford UP, 2011. (『ジャズ・エイジの物語ーフィッツジェラルド作品集1』渥美昭夫, 井上謙治編. 荒地出版社, 1981.)
- Fox, Paula. *The Slave Dancer*. 1973. New York: Bantam Doubleday Dell, 1991. (『どれい船にのって』ホウゴ一政子訳. 福武書店, 1989.)
- Franklin, Benjamin. *The Autobiography of Benjamin Franklin*. Philadelphia: J. B. Lippincott, 1868. New York: Dover, 1996. (『フランクリン自伝』松本慎一, 西川正身訳. 岩波書店, 1957.)
- Garrison, William Lloyd, ed. *The Liberator*. Boston: Garrison and Knapp. Jan 1831-29 Dec 1865. "The Liberator" *Fair Use Repository*. 8 Jan. 2016. <<http://fair-use.org/the-liberator/>>.
- Gates, Henry Louis Jr., and Nellie Y. McKay, eds. *The Norton Anthology of African American Literature*. 1997. 2<sup>nd</sup> ed. New York: Norton, 2004.
- Graham, Shirley. *Booker T. Washington : Education of Hand, and Heart*. New York: Messner, 1955.
- . *George Washington Carver*. Peterborough: Graham and Lipscomb, 1944.
- . *Paul Robeson : Citizen of the World*. 1946. Connecticut: Negro UP, 1972.
- . *There Once Was a Slave : The Heroic Story of Frederick Douglass*. New York: Messner, 1947.
- Granger, Mary. *Drums and Shadows: Survival Studies among the Georgia Coastal Negroes*. Athens:

- U of Georgia P, 1940. *Kindle* ebook file.
- Grimes, Nikki. *Bronx Masquerade*. New York: Dial, 2002.
- . *Jazmin's Notebook*. New York: Dial, 1998.
- Grimm, Jacob Ludwig and Wilhelm Carl Grimm. *Kinder und Hausmärchen*. 2<sup>nd</sup> ed. 1819. 「グリム童話集テキストデータベース」福岡大学図書館. 7 Sep 2016.  
<<http://www.lib.fukuoka-u.ac.jp/e-library/data/grimmdatabase/g-database.html>>.
- Guy, Rosa. *Bird at My Window*. Minneapolis: Coffee House, 1966.
- , ed. *Children of Longing*. New York: Bantam, 1970. (『ハーレムの子どもたち』黄寅秀訳. 晶文社, 1973.)
- . *Ruby*. New York: Viking, 1976. (『女友たち』加地永都子訳. 晶文社, 1980)
- . *My Love, My Love or the Peasant Girl*, 1985. Minneapolis: Coffee House, 2001. (『マイ・ラブ、マイ・ラブ！ - ある貧しい娘の恋物語』藤本和子訳. 筑摩書房, 1989.)
- Haley, Alexander Palmer. *Roots: The Saga of an American Family*. New York: Doubleday, 1976. (『ルーツ』安岡章太郎, 松岡鉄訳. 社会思想社, 1978.)
- Haley, Gail E. *A Story-A Story*. New York: Atheneum, 1970.
- Hamilton, Virginia. *Arilla Sun Down*. New York: Scholastic, 1976. (『わたしはアリラ』掛川恭子訳. 岩波書店, 1985.)
- . *M.C. Higgins, the Great*. 1974. New York: Aladdin, 1993. (『偉大なる M・C』橋本福夫訳. 岩波書店, 1980.)
- . *The House of Dies Drear*. 1968. New York: Simon and Schuster, 1984.
- . *The Magical Adventures of Pretty Pearl*. New York: Harper Collins, 1983. (『プリティ・パールのふしぎな冒険』荒このみ訳. 岩波書店, 1996.)
- . *The People Could Fly: American Black Folktales*. New York: Knopf, 1985. (『人間だって空を飛べる - アメリカ黒人民話集』金関寿夫訳. 福音館書店, 1989.)
- . *The Planet of Junior Brown*, 1971. New York: Simon and Schuster, 1993. (『ジュニア・ブラウンの惑星』掛川恭子訳. 岩波書店, 1988.)
- . *Time Pieces: Book of Times*. New York: Blue Sky, 2002.
- . *Virginia Hamilton: Speeches, Essays and Conversations*. Ed. Arnold Adoff and Kacy Cook. New York: Blue Sky, 2010.
- . *Zeely*. New York: Simon and Schuster, 1967. (『わたしは女王を見たのか』鶴見俊輔訳. 岩波書店, 1979.)
- Harper Lee, Nel. *To Kill a Mockingbird*. 1960. New York: Harper, 1988. (『アラバマ物語』菊池重三郎訳. 暮しの手帖社, 1984.)
- Harris, Benjamin. *The New England Primer*. Boston, 1680's. 1777 ed. *Internet Sacred Text Archive*. 9 Jan. 2016. <<http://www.sacred-texts.com/chr/nep/1777/>>.
- Harris, Joel Chandler. *The Complete Tales of Uncle Remus*. Ed. Richard Chase. 1955. Boston: Houghton, 1983.
- . *Daddy Jake the Runaway, and Short Stories Told After Dark*. 1898. *Open Library*. U of Toronto. 8

- Jan. 2016. <<http://archive.org/stream/daddyjakerunaway00harruoft#page/n7/mode/2up>>.
- Hentoff, Nat. *Jazz Country*. New York: Harper, 1964. (『ジャズ・カントリー』木島始訳. 晶文社, 1997.)
- Higginson, T (homas) W (entworth) .“Negro Spirituals.” *The Atlantic Monthly* 19 (1867): 685-94.  
*Making of America*. Cornell U Library. 8 Jan. 2016.  
 <<http://digital.library.cornell.edu/cgi/t/text/text-idx?c=atla;idno=atla0019-6>>.
- Hinton, Susan. *The Outsiders*, New York: Viking, 1967. *Kindle* ebook file. (『アウトサイダーズ』唐沢則幸訳. あすなろ書房, 2000.)
- Holmes, Joseph. “Interview with Ila B. Prine.” 11 June 1937. Ed. George P. Rawick. “Joseph Holmes, Mobile, Alabama.” *American Slave Narratives: An Online Anthology*. 8 Jan. 2016.  
 <<http://xroads.virginia.edu/~hyper/wpa/holmes1.html>>.
- Hopkinson, Deborah. *Sweet Clara and the Freedom Quilt*. New York: Dragonfly, 1993.
- Hughes, Langston. *The Big Sea: An Autobiography*. New York: Alfred A. Knopf, 1940.
- . *Black Misery*. 1969. Oxford: Oxford UP, 1994.
- . “Call of Ethiopia.” *Opportunity: Journal of Negro Life*. 13 (1935): 276. 6 Jan. 2016.  
 <<http://newdeal.feri.org/texts/144.htm>>.
- . *The Collected Poems of Langston Hughes*. Ed. Arnold Rampersad. New York: Vintage, 1994.
- . *The First Book of Jazz*. New York: Franklin Watts, 1955. (『ジャズの本』木島始訳. 晶文社, 1988.)
- Hughes, Langston, and Arna Bontemps. *Popo and Fifina: The Children of Haiti*. 1932. Oxford: Oxford UP, 2000. (『ポポとフィフィナ』木島始訳. 岩波書店, 1958.)
- Hurston, Zola Neale. *Their Eyes Were Watching God: A Novel*. Philadelphia: J.B. Lippincott, 1937.  
*Kindle* ebook file. (『彼らの目は神を見ていた』松本昇訳. 新宿書房, 1995.)
- Jackson, Jesse. *Call Me Charlie*. New York: Harper, 1945.
- . *Anchor Man*. New York: Harper, 1947.
- . *Charley Starts from Scratch*. New York: Harper, 1958.
- Jacobs, Harriet Ann. *Incidents in the Life of a Slave Girl: Written by Herself*. Ed. L. Maria Child. Boston: Thayer & Eldridge, 1861. *Kindle* ebook file. (『ハリエット・ジェイコブズ自伝-女・奴隷制・アメリカ』小林憲二編訳. 明石書店, 2001.)
- Johnson, A. E. *Clarence and Corrine; or God's Way*. 1890. New York: Oxford UP, 1988.
- . *The Hazeley Family*. 1859. New York: Oxford UP, 1988.
- Johnson, Angela. *The First Part Last*. New York: Simon, 2003. (『朝のひかりを待てるから』池上小湖訳. 小峰書店, 2006.)
- . *Toning the Sweep*. New York: Scholastic, 1993.
- Johnson, John H., ed. *Ebony*. Chicago: Johnson. Nov 1945-present.
- . *Ebony Jr!*. Chicago: Johnson. May 1973-Nov 1981.
- Keats, Ezra Jack. *John Henry, An American Legend*. 1965. New York: Dragonfly, 1993.
- King, Martin Luther, Jr., *I Have a Dream: Writings and Speeches that Changed the World*. Ed. James M. Washington. New York: Harper Collins, 1992.
- Knox, Margaret and Anna M. Lutkenhaus. “The Future Democracy of America as our Young Folk See

- it.” *St. Nicholas*. v.47 pt.1 1919-1920 Nov-Apr. *Hathi Trust Digital Library*. 14 Sept. 2014.  
 <<http://hdl.handle.net/2027/mdp.39015068521726?urlappend=%3Bseq=311>>.
- Konigsburg, E. L. *Jennifer, Hecate, Macbeth, William McKinley, and Me, Elizabeth*. 1967. *Kindle ebook file*.
- Kulling, Monica. *Escape North!: the Story of Harriet Tubman*. New York: Random House, 2000.
- Larsen, Nella. *Passing*. New York: Knopf, 1929. (『白い黒人』植野達郎訳. 春風社, 2006.)
- Le Guin, Ursula. *Earthsea Revisioned*. Cambridge: Green Bay P, 1993.
- . *The Farthest Shore*. 1972. New York: Puffin, 1974. (『さいはての島へ』清水真砂子訳. 岩波書店, 1977.)
- . *The Other Wind*. New York: Harcourt, 2001. (『アースシーの風』清水真砂子訳. 岩波書店, 2003.)
- . *Tales from Earthsea*. New York: Harcourt, 2001. (『ゲド戦記外伝』清水真砂子訳. 岩波書店, 2004.)
- . *Tehanu*. New York: Puffin, 1990. (『帰還』清水真砂子訳. 岩波書店, 1993.)
- . *The Tombs of Atuan*. 1971. New York: Puffin, 1974. (『こわれた腕環』清水真砂子訳. 岩波書店, 1976.)
- . *A Wizard of Earthsea*. 1968. New York: Puffin, 1994. (『影との戦い』清水真砂子訳. 岩波書店, 1976.)
- Lester, Julius. *Black Folktales*. 1969. New York: Grove, 1991. (『アメリカ黒人昔話集』岡田誠一訳. 社会思想社, 1978.)
- . *Days of Tears*. New York: Jump at the Sun-Disney, 2005. (『私が売られた日』金利光訳. あすなろ書房, 2006.)
- . *John Henry*. Illus. Jerry Pinkney. New York: Puffin, 1994.
- . *The Tales of Uncle Remus: The Adventures of Brer Rabbit*. New York: Puffin, 1987.
- . *To Be a Slave*. 1968. New York: Puffin, 1998.
- Levine, Ellen. *Henry's Freedom Box*. Illus. Kadir Nelson. New York: Scholastic, 2002. (『ヘンリー・ブラウンの誕生日』千葉茂樹訳. 鈴木出版, 2008.)
- Machado y Alvarez, Antonio. *La Bibliotheca de las Tradiciones Populares Españolas*. Madrid: Sevilla, 1886. *Internet Archive*. 9 Jan. 2016. <<https://archive.org/details/folkloreespaol01mach>>.
- Martin, Rafe. *The Rough-Faced Girl*. Illus. David Shannon. 1992. New York: Puffin, 1998.
- McDermott, Gerald. *Arrow to the Sun*. New York: Viking, 1974. (『太陽へとぶ矢-インディアンにつたわるおはなし』神宮輝夫訳. ほるぷ出版, 1975.)
- McMullan, Kate. *The Story of Harriet Tubman: Conductor of the Underground Railroad*. New York: Bantam Doubleday Dell, 1991.
- Milne, A(lan) A(lexander). *Winnie, the Pooh*. 1926. New York: Puffin, 1992. (『クマのプーさん』石井桃子訳. 岩波書店, 2000.)
- Morrison, Toni. *Beloved*. 1987. New York: Vintage, 2004. (『ビラヴド』吉田廸子訳. 集英社, 1998.)
- . *The Bluest Eye*. 1970. New York: Vintage, 2007. (『青い眼がほしい』大社淑子訳. 早川書房, 1981.)
- . *A Mercy*. New York: Knopf, 2008. (『マーシイ』大社淑子訳. 早川書房, 2010.)
- . *Remembers: The Journey to School Integration*. New York: Houghton, 2004.

- . *Song of Solomon*. New York: Knopf, 1977. *Kindle* ebook file. (『ソロモンの歌』金田眞澄訳. 早川書房, 1994.)
- . *Tar Baby*. 1981. New York: Plume, 1982. (『タール・ベイビー』藤本和子訳. 早川書房, 1995.)
- Myers, Walter Dean. *145<sup>th</sup> Street: Short Stories*. New York: Laurel-Leaf, 2000. (『ニューヨーク 145 番通り』金原瑞人, 宮坂宏美訳. 小峰書店, 2003.)
- . *Fallen Angels*. New York: Scholastic, 1988.
- . *Fast Sam, Cool Clyde, and Stuff*. New York: Puffin, 1978.
- . *Scorpions*. New York: Harper Trophy, 1988.
- . *Somewhere in the Darkness*. New York: Scholastic, 1992.
- . *Where does the Day Go?*. New York: Parents' Magazine P, 1969.
- . *The Young Landlord*, New York: Viking, 1979.
- Nelson, Kadir. *Heart and Soul: The Story of America and African Americans*. New York: Balzer & Bray-HarperTeen, 2011.
- . *We Are the Ship: The Story of Negro League Baseball*. New York: Jump at the Sun-Disney, 2008.
- Odum, Howard Washington. *Rainbow Round My Shoulder: The Blue Trail of Black Ulysses*. 1928. Bloomington: Indiana UP, 2006.
- O'Neill, Eugene Gladstone. *All God's Chillun Got Wings*. 1924. *Project Gutenberg*. 8 Jan. 2016. <<http://gutenberg.net.au/ebooks04/0400071h.html>>.
- Ottolenghi, Carol., and Steve Haefele. *John Henry*. North Carolina: Brighter Child, Carson-Dellosa, 2013.
- Parks, Van Dyke. *Jump! The Adventures of Brer Rabbit*. 1986. New York: Voyager-Harper, 1997.
- Patterson, Lillie. *Martin Luther King, Jr.: Man of Peace*, 1969. New York: Dell-Random, 2000.
- Paulsen, Gary. *Nightjohn*. New York: Bantam-Doubleday Dell, 1993.
- Peña , Matt de la. *Last Stop on Market Street*. New York: G. P. Putnam's Sons, 2015. *Kindle* ebook file.
- Peter, Paul and Mary. "If I Had A Hammer Lyrics." *Lyrics Freak*. 26 Mar. 2016. <[http://www.lyricsfreak.com/p/peter+paul+mary/if+i+had+a+hammer\\_20107670.html](http://www.lyricsfreak.com/p/peter+paul+mary/if+i+had+a+hammer_20107670.html)>.
- Petry, Ann. *Harriet Tubman: Conductor on the Underground Railroad*. 1955. New York: Harper, 1983.
- Pinkney, Andrea Davis. *Hand in Hand: Ten Black Men Who Changed America*. New York: Disney-Hyperion, 2012.
- Plato, Ann. *Essays: Including Biographies and Miscellaneous Pieces, in Prose and Poetry*. 1841. Oxford: Oxford UP, 1988.
- Prince, April Jones. *Who Was Frederick Douglass?*. New York: Penguin, 2014. *Kindle* ebook file.
- Rand, Ayn. *The Fountainhead*, Indianapolis: Bobbs Merrill, 1943. (『水源』藤森かよ子訳. ビジネス社, 2004.)
- Ransome, Arthur. *Swallows and Amazons*. 1930. London: Red Fox-Random, 2001. (『ツバメ号とアマゾン号』神宮輝夫訳. 岩波書店, 2010.)

- Rawlings, Marjorie Kinnan. *The Yearling*. New York: Charles and Scribner's Sons, 1938. (『仔鹿物語』土屋京子訳. 光文社, 2012.)
- Reynolds, Mary. Interview with Ila B. Prine. June 11, 1937. George P. Rawick, Hem ed. *The American Slave: A Composite Autobiography, Vol.8*. Westport: Greenwood, 1977. 3284-99.
- Rocklin, Joanne. *Strudel Stories*. New York: Random, 1999. (『シュトルーデルを焼きながら』こだまともこ訳. 偕成社, 2000.)
- Sabatella, Matthew. "This Old Hammer." *Ballad of America*. 25 Mar. 2016.  
<<http://www.balladofamerica.com/music/indexes/songs/thisoldhammer/>>
- Salinger, Jerome David. *The Catcher in the Rye*. 1951. New York: Puffin, 2010. (『キャッチャー・イン・ザ・ライ』村上春樹訳. 白水社, 2006.)
- Sanfield, Steve. *A Natural Man: The True Story of John Henry*. Boston: David R. Godine, 1986.
- Schotter, Roni. *F is for Freedom*. New York: Doring Kindesley, 2000.
- Scott, Walter. *The Lady of the Lake: A Poem*. 1810. New York: Cosimo, 2005.
- Slade, Suzanne. *Frederick Douglass: Writer, Speaker, and Opponent of Slavery*. Minnesota: Picture Window Books, 2007.
- Solomon, Barbara Bryant. *Black Empowerment: Social Work in Oppressed Community*. New York: Columbia UP, 1977.
- Stowe, Harriet Beecher. *A Key to Uncle Tom's Cabin*. 1853. Boston: John P. Jewett, 1854. Ed. Stephen Railton. *Uncle Tom's Cabin & American Culture*. 8 Jan. 2016.  
<<http://utc.iath.virginia.edu/uncletom/key/kyhp.html>>.
- . *Uncle Tom's Cabin; or, Life Among the Lowly*. Boston: John P. Jewett. 1852. *Kindle* ebook file. (『新訳アンクル・トム的小屋』小林憲二監訳. 明石書店, 1998.)
- Taylor, Mildred. *The Friendship*. 1987. New York: Puffin, 1998.
- . *The Gold Cadillac*. 1987. New York: Puffin, 1998.
- . *The Land*. 2001. New York: Puffin, 2002.
- . *Let the Circle Be Unbroken*, 1981. New York: Puffin, 1991.
- . *The Mississippi Bridge*. New York: Puffin, 1990.
- . *The Road to Memphis*, 1990. New York: Puffin, 1992.
- . *Roll of Thunder; Hear My Cry*. 1976. New York: Puffin, 1991. (『とどろく雷よ、私の叫びをきけ』小野和子訳. 評論社, 1981.)
- . *Song of the Trees*. New York: Dial, 1975.
- . *The Well: David's Story*. 1995. New York: Puffin, 1998.
- Twain, Mark. *The Adventures of Huckleberry Finn*. New York: Webster, 1885. *Kindle* ebook file. (『ハックルベリー・フィンの冒険』大久保博訳. 角川書店, 2004.)
- . *The Adventures of Tom Sawyer*. Hartford: The American, 1876. *Kindle* ebook file. (『トム・ソーヤーの冒険』大久保康雄訳. 新潮社, 1953.)
- . *The Autobiography of Mark Twain*. 1924. Ed. Charles Neider. 1959. New York: Harper, 1990.
- Upton, Florence Kate. *The Adventures of Two Dutch Dolls and a Golliwogg*. 1895. *Kindle* ebook file.



- (『二つのオランダ人形の冒険』ももゆりこ訳. ほるぷ出版, 1985.)
- Walker, Alice. *The Color Purple*. 1982. New York: Pocket, 1985. (『カラーパープル』柳沢由美子訳. 集英社, 1986.)
- . *Possessing the Secret of Joy: A Novel*. 1992. New York: New, 2008. (『喜びの秘密』柳沢由美子訳. 集英社, 1995.)
- Walker, Sally M. *Freedom Song: the Story of Henry "Box" Brown*. New York: Harper, 2012.
- Walter, Mildred Pitts. *Justin and the Best Biscuit in the World*. 1948. New York: Harper Collins, 2010.
- . *Second Daughter*. New York: Scholastic, 1996.
- Washington, Booker T. *A New Negro for a New Century: An Accurate and Up-to-Date Record of the Upward Struggles of the Negro Race*. Chicago: American Publishing House, 1900. Apr 13 2010. *Open Library*. June 30 2013.  
<[http://openlibrary.org/books/OL14992270M/A\\_new\\_Negro\\_for\\_a\\_new\\_century](http://openlibrary.org/books/OL14992270M/A_new_Negro_for_a_new_century)>.
- . *Up from Slavery: An Autobiography*. 1901. *Kindle* ebook file.
- . *Working with the Hands: Being a Sequel to "Up from Slavery", Covering the Author's Experiences in Industrial Training at Tuskegee*. New York: Doubleday, Page and Company. 1904. 4 Mar. 2016.  
< <https://archive.org/details/workingwithhand02washgoog>>.
- Weatherford, Carole Boston. *Voice of Freedom: Fannie Lou Hamer, Spirit of the Civil Rights Movement*. Illus. Ekua Holmes. Massachusetts: Candlewick P, 2015.
- Wheatley, Phillis. *Poems on Various Subjects, Religious and Moral, 1773. Wheatley, Phillis, 1753-1784. Poems on Various Subjects, Religious and Moral*. Electronic Text Center, U of Virginia Library. 8 Jan. 2016. <<http://etext.lib.virginia.edu/toc/modeng/public/WhePoem.html>>.
- Wilder, Laura Ingalls. *Little House in the Big Woods*. 1932. New York: Harper, 2008. (『大きな森の小さな家』恩地三保子訳. 福音館書店, 1972.)
- . *By the Shore of Silver Lake*. 1939. New York: Harper, 2008. (『シルバー・レイクの岸辺で』恩地三保子訳. 福音館書店, 1973.)
- Williams-Garcia, Rita. *One Crazy Summer*. New York: Harper, 2010. (『クレイジー・サマー』代田亜香子訳. 鈴木出版, 2013.)
- Wilson, Harriet E. *Our Nig, or Sketches from the Life of a Free Black*. 1859. *Project Gutenberg*. 8 Jan. 2016. <<http://www.gutenberg.org/cache/epub/584/pg584.html>>.
- Woodson, Jacqueline. *Between Madison and Palmetto*. 1993. New York: Puffin, 2002. (『メイゾンともう一度』さくまゆみこ訳. ポプラ社, 2001.)
- . *Brown Girl Dreaming*. New York: Nancy Paulsen-Penguin, 2014.
- . *I Hadn't Meant to Tell You This*. 1994. New York: Puffin, 2010. (『レーナ』さくまゆみこ訳. 理論社, 1998.)
- . *Last Summer with Maizon*. 1990. New York: Puffin, 2002. (『マーガレットとメイゾン』さくまゆみこ訳. ポプラ社, 2000.)

- . *Maizon at Blue Hill*. 1992. New York: Puffin, 2002. (『青い丘のメイゾン』 さくまゆみこ訳. ポプラ社, 2001.)
- . *Miracle's Boys*. 2000. New York: Puffin, 2003. (『ミラクルズボーイズ』 さくまゆみこ訳. 理論社, 2002.)
- Wright, Richard. *Black Boy*. New York: Harper, 1945. Ed. Edward P. Jones. *Kindle* ebook file. (『ブラック・ボーイ - ある幼少期の記録』 野崎孝訳. 岩波書店, 2009.)
- . *Black Power*. New York: Harper, 1954. *Three Books from Exile: Black Power; The Color Curtain; and White Man, Listen!*. Ed. Cornel Wes. *Kindle* ebook file.
- Zangwill, Israel. *The Melting Pot*. 1908. New York: The American Jewish Book Company, 1921. *Kindle* ebook file

“NAACP Legal History.”NAACP. 2 Mar. 2016. <<http://www.naacp.org/pages/naacp-legal-history>>.

#### 視聴覚資料

- Broonzy, Big Bill. “John Henry.”1951. *Lyrics Time*. 12 Sept 2014. <<http://www.lyricstime.com/big-bill-broonzy-john-henry-lyrics.html>>.
- Clemens, Ron. and John Musker, dir. *The Princess and the Frog*. 2009. Walt Disney. DVD. 2009.
- Doc Watson. “The Ballad of John Henry.”1962. You Tube. Doc Watson song “The Ballad of John Henry.” 8 Jan. 2016. <<https://www.youtube.com/watch?v=Xaq0t9OQOd8>>.
- Hand, David, dir. *Snow White and the Seven Dwarfs*. 1937. DVD. Walt Disney, 2009.
- Henn, Mark, dir. “John Henry.” DVD. *American Legends*. Walt Disney Video, 2000.
- Holliday, Billy. “Strange Fruit.” Rec. 20 Apr 1939. *Strange Fruit*. Jazz World, 1999.
- Johnson, Eastman. “A Ride for Freedom: The Fugitive Slaves.”1862. Brooklyn Museum, New York. 2 Sep 2016. <<https://www.brooklynmuseum.org/opencollection/objects/495>>.
- Jolson, Al. “There’s A Rainbow Round My Shoulder.”1928. You Tube. Al Jolson song “There’s A Rainbow Round My Shoulder.” 8 Jan. 2016. <<https://www.youtube.com/watch?v=LRB2AOopF0c>>.
- Marley, Bob. “Africa Unite.”1979. *Africa Unite: the Singles Collection*. Jamaica: Tuff Gong-Island, 2005.
- McKayle, Donald, choreographed. *Rainbow 'Round My Shoulder*. Alvin Ailey American Dance Theater, New York. September. 1959. You Tube. “Donald McKayle's Rainbow 'Round My Shoulder excerpt.”. 8 Jan. 2016. <<http://www.youtube.com/watch?v=kXZ2ca066Lo>>.
- Parker, Allan William, dir. *Mississippi Burning*. 1988. DVD. MGM, 2001.
- Rollins, Charlemae Hill. *We Build Together: A Reader's Guide to Negro Life and Literature for Elementary and High School Use*. 1941. Chicago : National Council of Teachers of English, 1948.
- Smith, Albert Alexander. “They Have Ears but They Hear Not.” 1920. *The Crisis*, XX I (Nov, 1920) 23 July. 2016. <<http://glc.yale.edu/they-have-ears-they-hear-not>>.

Spruell, Freddie. "Milk Cow Blues." Rec. 1926. "Freddie Spruell Milk Cow Blues 1926." 6 Jan. 2016. <<https://archive.org/details/FreddieSpruellMilkCowBlues1926>>.

The U.S. National Archives and Records Administration. "Declaration of Independence."1776. *The Charters of Freedom*. 7 Jan. 2016. <<https://www.archives.gov/exhibits/charters/declaration.html>>.

Virgo, Clément, dir. *Junior's Groove*. 1997. DVD. Ardustry, 2003.

Wise, Kirk, dir. *Beauty and the Beast*. 1991. DVD. Walt Disney, 2015.

## 二次資料

### 事典

*The Columbia Dictionary of Modern Literary and Cultural Criticism*. Childers, Joseph, and Gary Hentzi, eds. New York: Columbia UP, 1995. (『コロンビア大学現代文学・文化批評用語辞典』杉野健太郎, 中村裕英, 丸山修訳. 松柏社, 1998.)

*The Longman Dictionary of Contemporary English*. 6<sup>th</sup> ed. New York: Pearson, 2014.

*The Oxford Companion to Children's Literature*. Carpenter, Humphrey, and Mari Prichard, eds. Oxford: Oxford UP, 1984. (『オックスフォード世界児童文学百科』神宮輝夫監訳. 原書房, 1999.)  
『世界児童文学百科現代編』神宮輝夫編. 原書房, 2005.

『大辞林』松村明編. 三省堂, 第3版. 2006.

『メルクマニュアル医学百科家庭版』メルク, オンライン版, 2009.10. 5 July. 2016.

<<http://www.merckmanuals.jp/home/index.html>>.

### 文献

Abott, Lynn, and Doug Seroff. *Out of Sight: The Rise of African American Popular Music, 1889-1895*. Jackson: UP of Mississippi, 2002.

Abrahams, Roger D. *Deep down in the Jungle*. 1964. 2<sup>nd</sup> ed. New Brunswick: Aldine Transaction, 2008.

---. "The Changing Concept of the Negro Hero." The Texas Folklore Society. *The Golden Log*. 31 (1962) : 119-32. *The Golden Log*. Dallas: Southern Methodist UP.

Agawu, Kofi. "Contesting Difference: A Critique of Africanist Ethnomusicology." Ed. Martin Clayton, Trevor Herbert, and Richard Middleton. *The Cultural Study of Music: A Critical Introduction*. New York: Routledge, 2003. 17-126. (『音楽のカルチュラル・スタディーズ』若尾裕監訳. アルテス, 2011. 259-72.)

Allen, Marlene D. "Ann Petry (1908-1997)." *Contemporary African American Novelists: A Bio-Bibliographical Critical Sourcebook*. Ed. Emmanuel S. Nelson. Westport: Greenwood, 1999. 377-83.

Allen, William Francis, Charles Pickard Ware, and Lucy McKim Garrison, Compiled. *Slave Songs of the United States*, New York: A. Simpson & Co., 1867. Massachusetts: Applewood, 2010.

Alvarez, Joseph A. "The Lonesome Boy theme as Emblem for Arna Bontemps's Children's Literature." *The Free Library*. 1998, African American Review. 9 June. 2014.

<<http://www.thefreelibrary.com/The+Lonesome+Boy+theme+as+emblem+for+Arna+Bontemps's+children's...-a020610469>>.

- Andrews, Williams (L). "North American Slave Narratives: An Introduction to the Slave Narratives." 2004. *Documenting American South*. U of North Carolina. 23 June. 2013. <<http://docsouth.unc.edu/neh/intro.html>>.
- . "The Representation of Slavery and Afro-American Literary Realism." *African American Autobiography: A Collection of Critical Essays*. Ed. William L. Andrews. New Jersey: Prentice Hall, 1993. 70-85.
- Archer, Jermaine O. *Antebellum Slave Narratives: Cultural and Political Expressions of Africa*. New York: Routledge, 2009.
- Baker, Houston A. R. *Modernism and the Harlem Renaissance*. Chicago: U of Chicago P, 1987. (『モダニズムとハーレム・ルネッサンス - 黒人文化とアメリカ』小林憲二訳. 未来社, 2006.)
- Barker, Jani L. "Racial Identification and Audience in *Roll of Thunder, Hear My Cry* and *the Watsons Go to Birmingham—1963*." *Children's Literature in Education* 41 (2010) :118-45.
- Barksdale, Richard K. *Langston Hughes: The Poet and His Critics*. Chicago: American Library Association. 1977.
- Barrett, Leonard E. Sr. *The Rastafarians: Sounds of Cultural Dissonance*. 1976. 2<sup>nd</sup> ed. Boston: Beacon, 1988. (『ラスタファリアンズ - レゲエを生んだ思想』山田裕康訳. 平凡社, 1996.)
- Barthes, Roland. *Le Plaisir du Texte*. Paris: Tel Quel, 1973. (『テキストの快楽』沢崎浩平訳, みすず書房, 1977.)
- Baxter, Richard. *A Christian Directory : or a Body of Practical Divinity, and Cases of Conscience, 1673*. *Internet Archive*. 6 Jan. 2016. <<http://archive.org/stream/achristiandirec04baxtgoog#page/n5/mode/1up>>.
- Beaulieu, Elizabeth Ann, ed. *The Toni Morrison Encyclopedia*. Westport: Greenwood, 2003. (『トニ・モリスン事典』荒このみ訳. 雄松堂出版, 2006.)
- Beecher, Catharine E, and Harriet Beecher Stowe. *The American Woman's Home: Or, Principles of Domestic Science*. New York: Arno, 1869. Ed. Nicole Tonkovich. New Brunswick: Rutgers UP, 2002.
- Berghahn, Marion. *The Image of Africa in Black American Literature*. Lanham: Rowman and Littlefield, 1977.
- Bernabé, Jean, Patrick Chamoiseau, Raphaël Confiant. *Éloge de la Créolité*. Toulon: Gallimard – Accueil, 1993. (『クレオール礼賛』恒川邦夫訳. 平凡社, 1997.)
- Bernard, Emily, ed. *Remember Me to Harlem: The Letters of Langston Hughes and Carl Van Vechten*. 2001. New York: Vintage, 2002.
- Bhaba, Homi K. *The Location of Culture*. London: Routledge, 1994. (『文化の場所 - ポストコロニアルの位相』本橋哲也, 正木恒夫, 外岡尚美, 阪元留美訳. 法政大学出版局, 2005.)
- . *Collection of Essays*. 1994, 1996, 1998, 2000, 2000, 2005. (『ナラティブの権利 - 戸惑いの生に向けて』磯前順一, ダニエル・ガリモア訳. みすず書房, 2009.)
- Bishop, Rudine Sims. *Free Within Ourselves: The Development of African American Children's Literature*. Portsmouth: Heinemann, 2007.

- . "Presenting Walter Dean Myers." *Something about the Author*. Michigan: Gale. 71 (1993): 133-37.
- . "Walk Tall in the World: African American Literature for Today's Children." *Journal of Negro Education* 59 (1990) : 556-65.
- Blair, Walter. *Tall Tale America: A Legendary History of our Humorous Heroes*. New York: Coward-McCann, 1944. (『ほら話の中のアメリカ - 愉快な英雄たちの痛快伝説でつづるアメリカの歴史』 廣瀬典生訳. 北星堂書店, 2005.)
- Bontemps, Arna. *Story of the Negro*. 1948. New York: Random House, 1968.
- Brezina, Corona. *Sojourner Truth's "Ain't I a Woman?" Speech*. New York: Rosen, 2005.
- Brooks, Peter. *The Melodramatic Imagination: Balzac, Henry James, Melodrama, and the Mode of Excess*. 1976. New Haven: Yale UP, 1995.
- Brooks, Wanda. "Reading Representations of Themselves: Urban Youth Use Culture and African American Textual Features to Develop Literary Understandings" *Reading Research Quarterly* 41 (2011) :372-92.
- Burke, Peter. *Cultural Hybridity*. Cambridge: Polity, 2009. (『文化のハイブリディティ』 河野真太郎訳, 法政大学出版局, 2012.)
- Bush, Margaret. "New England Book Women: Their Increasing Influence." *Library Trends* 44 (1996) : 719-36.
- Callahan, A. Dwight. *The Talking Book: African Americans and the Bible*. New Haven: Yale UP, 2008.
- Cartwright, Keith. *Reading Africa into American Literature: Epics, Fables, and Gothic Tales*. Lexington: UP of Kentucky, 2002.
- Chaney, Michael A. *Fugitive Vision: Slave Image and Black Identity in Antebellum Narrative*. Bloomington: Indiana UP, 2009.
- Claybaugh, Amanda. *The Novel of Purpose: Literature and Social Reform in the Anglo-American World*. Ithaca: Cornell UP, 2006.
- Cockrell, Amanda. "Harris, Joel Chandler." *The Oxford Encyclopedia of Children's Literature*. Ed. Jack Zipes and et all. Oxford: Oxford UP, 2006.
- Cole, Diane. "Were Quilts Used as Underground Railroad Maps?" U. S. News. 24 June. 2007. 28 Feb. 2016.  
<<http://www.usnews.com/news/articles/2007/06/24/were-quilts-used-as-underground-railroad-maps>>.
- Collins, Fiona M., and Judith Graham, eds. *Historical Fiction for Children: Capturing the Past*. London: David Fulton, 1988.
- Corbould, Clare. *Becoming African American: Black Public Life in Harlem 1919-1939*. Cambridge, MA: Harvard UP, 2009. *Kindle* ebook file.
- David, Jay ed. *Growing Up Black from Slave Days to Present: 25 African-Americans Reveal the Trials and Triumphs of their Childhoods*. 1968. New York: Avon, 1992.
- Davis, Amanda J. "Shatterings: Violent Disruptions of Homeplace in Jubilee and *The Street*." *The*

- Journal of the Society for the Study of Multi-Ethnic Literature of the United States* 30(2005): 25-51.
- Dewey, John. *Experience and Education*. Indiana: Kappa Delta, 1938. (『経験と教育』市村尚久訳. 講談社, 2004.)
- . *The School and Society*. Illinois: U of Chicago P, 1915. 2 July. 2016.  
< <https://archive.org/details/schoolsociety00dewerich>>. (『学校と社会』宮原誠一訳. 岩波書店, 1957.)
- Drescher, Seymour. *Abolition: A History of Slavery and Anti-Slavery*. Cambridge: Cambridge UP, 2009.
- . *From Slavery to Freedom: Comparative Studies in the Rise and Fall of Atlantic Slavery*. New York: New York UP, 1999.
- Dunbar, Seymour. *A History of Travel in America*. 1915. Westport: Greenwood, 1968.
- Edelstein, Tilden G. *Strange Enthusiasm: A Life of Thomas Wentworth Higginson*. New Haven: Yale UP, 1968.
- Egoff, Sheila. *Worlds Within: Children's Fantasy from the Middle Ages to Today*. Chicago: American Library Association, 1988. (『物語る力 - 英語圏のファンタジー文学: 中世から現代まで』酒井邦秀, 轟田公江, 南部英子, 西村醇子, 森恵子訳. 偕成社, 1995.)
- Elbert, Sarah, ed. *Louisa May Alcott on Race, Sex and Slavery*. Boston: Northeastern UP, 1997.
- Elford, Charles. *Black Mahler*. 2011. 6 Jan. 2016. < <http://www.blackmahler.com/>>.
- Elia, Nada. "Kum Buba Yali Kum Buba Tambe, Ameen, Ameen, Ameen": Did Some Flying Africans Bow to Allah?" *Callaloo* 26(2003): 182-202.
- Emanuel, James A. *Langston Hughes*. Woodbridge: Twayne, 1967.
- Fishkin, Shelly Fisher. *Was Huck Black?: Mark Twain and African-American Voices*. New York: Oxford UP, 1993.
- Foster, Frances Smith. *Witnessing Slavery: The Development of Ante-Bellum Slave Narratives*. 2<sup>nd</sup> ed. U of Wisconsin P, 1979.
- Foucault, Michel. *Surveiller et Punir, Naissance de la Prison*. Paris: Gallimard, 1973. (『監獄の誕生』田村俶訳. 新潮社, 1977.)
- Francis, Allen William and Pickard and Garrison, eds. *Slave Songs of the United States*. 1867. New York: Dover, 1995.
- Frank, Andrew. *The Birth of Black America: the Age of Discovery and the Slave Trade*. New York: Chelsea House, 1996.
- Franklin, John Hope, and August Meier, eds. *Black Leaders of the Twentieth Century*. Illinois: U of Illinois P, 1982. (『20世紀のアメリカ黒人指導者』大類久恵, 落合明子訳. 明石書店, 2005.)
- Fray, Charles, and John Griffith. *The Literary Heritage of Childhood: An Appraisal of Children's Classics in the Western Tradition*. New York: Greenwood, 1987. (『子どもの本を読みなおす - 世界の名作ベストセレクト 28』鈴木宏枝訳. 原書房, 2006.)
- Gates, Henry Louis Jr.. *The Signifying Monkey: A Theory of Afro-American Literary Criticism*. New York: Oxford UP, 1988. (『シグニファイング・モンキー - もの騙る猿 / アフロ・アメリカン文学批

- 評理論』松本昇, 清水菜穂監訳. 南雲堂フェニックス, 2009.)
- . *Life Upon These Shores: Looking at African American History, 1513–2008*. New York: Knopf, 2011.
- Gates, Henry Louis Jr., and Kwame Anthony Appiah, eds. *Langston Hughes: Critical Perspectives Past and Present*. New York: Amistad, 1993.
- Gates, Henry Louis Jr., and William L. *Pioneers of the Black Atlantic: Five Slave Narratives from the Enlightenment 1772-1815*. Washington D. C. : Counter Point, 1998.
- Genette, Gérard. *Nouveau Discours du Récit*. Paris: Seuil, 1983. (『物語の詩学 - 続・物語のディスクール』和泉諒一, 青柳悦子訳. 水声社, 1985.)
- Goldner, Ellen J. and Safiya Henderson-Holmes eds. *Racing & (E)Racing Language: Living with Color of Our Words*. New York: Syracuse UP, 2001.
- Gruesser, John Cullen. *Black on Black: Twentieth-Century African American Writing about Africa*. Lexington: UP of Kentucky, 2000.
- Gubar, Susan. *White Skin, Black Face in American Culture*. Oxford: Oxford UP, 1997.
- Guerin, Wilfred L, Earle G. Labor, Lee Morgan and John R. Willingham. *A Handbook of Critical Approaches to Literature*. 2<sup>nd</sup> ed. New York: Harper, 1979. (『文学批評入門』日下洋右, 青木健訳. 彩流社, 1986.)
- Hamm, Charles. *Music in the New World*. New York: W. W. Norton, 1983.
- Handy, W.C. *Father of the Blues: an Autobiography*. Ed. Arna Bontemps. New York: McMillan, 1941. Boston: Da Capo, 1991.
- Harper, Mary Turner. “Merger and Metamorphosis in the Fiction of Mildred D. Taylor.” *Children's Literature Association Quarterly* 13 (1988) : 75-80.
- Harris, Violet J. “African American Children’s Literature: The First One Hundred Years” *The Journal of Negro Education* 59 (1990) :540-55.
- . “From *Little Black Sambo* to *Popo and Fifina*: Arna Bontemps and the Creation of African-American Children’s Literature.” *The Lion and the Unicorn* 14 (1990) :108-27.
- Haskins, James, and Kathleen Benson. *Building a New Land: African Americans in Colonial America*, New York: Harper, 2001.
- Heiner, Heidi Anne. *Beauty and the Beast Tales From Around the World*. n.p., 2013.
- Helbig, Alethea K. and Agnes Regan Perkins. *This Land is Our Land: A Guide to Multicultural Literature for Children and Young Adults*. Westport: Green P, 1984.
- . *Ebony Jr!: The Rise, Fall and Return of a Black Children’s Magazine*. Lanham: Scarecrow, 2008.
- Hempel, Carlene. “The Man: Facts, Fiction and Themes.” *John Henry: The Steel Driving Man*. 25 Mar. 2016. <[https://www.ibiblio.org/john\\_henry/analysis.html](https://www.ibiblio.org/john_henry/analysis.html)>.
- Henderson, Darwin, and Manna Anthony L. “Interview with Jerry Pinkney.” *Children’s Literature in Education* 21 (1990) :135-44.
- Henderson, Laretta. *Ebony Jr!: The Rise, Fall and Return of a Black Children’s Magazine*. Lanham: Scarecrow P, 2008.



- . "The Black Arts Movement and African American Young Adult Literature: An Evaluation of Narrative Style" *Children's Literature in Education* 36 (2005) :299-323.
- Hinton, Kaa Vonia. *Angela Johnson: Poetic Prose*. Maryland: Scarecrow P, 2006.
- Hollindale, Peter. *Signs of Childness in Children's Literature*. Stroud: Thimble, 1997. (『子どもと大人が出会う場所 - 本のなかの「子ども性」を探る』猪熊葉子監訳. 柏書房, 2002.)
- Horning, Kathleen T., compiled. "Children's Books by and about People of Color and First/Native Nations Published in the United States." Cooperative Children's Book Center, School of Education, U of Wisconsin-Madison. 24 Feb 2015. 6 Jan. 2016.  
<<https://ccbc.education.wisc.edu/books/pcstats.asp>>.
- Hume, Kathryn. *Fantasy and Mimesis: Responses to Reality in Western Literature*. New York: Methuen, 1984.
- Hunt, Peter. *An Introduction to Children's Literature*. Oxford: Oxford UP, 1994.
- Hunter, Jane H. *How Young Ladies Became Girls: The Victorian Origins of American Girlhood*. New Haven: Yale UP, 2002.
- Inglis, Fred. *The Promise of Happiness: Value and Meaning in Children's Fiction*. Cambridge: Cambridge UP, 1981. (『幸福の約束 - イギリス児童文学の伝統』中村ちよ, 北條文緒訳. 紀伊國屋書店, 1990.)
- The Institute for Research on the African Diaspora in the Americas and the Caribbean. "Origin." *Routes*. 4 July . 2013. <<http://www.undergroundrailroadexperience.cuny.edu/>>.
- Isaac, Julia B. "Economic Mobility of White and Black Families." The Brookings Institution, 2007. <[http://www.brookings.edu/~media/research/files/papers/2007/11/blackwhite%20isaacs/11\\_blackwhite\\_isaacs.pdf](http://www.brookings.edu/~media/research/files/papers/2007/11/blackwhite%20isaacs/11_blackwhite_isaacs.pdf)>.
- Jackson, Blyden. *A History of Afro-American Literature Volume 1: The Long Beginning, 1746-1895*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1989.
- James, Williams. 1907. *Pragmatism: A New Name for some Old Ways of Thinking*, Cambridge, MA: Harvard UP, 1975. (『プラグマティズム』舛田啓三郎訳. 岩波書店, 1957.)
- Johannes, Postma. *The Atlantic Slave Trade*. Westport: Greenwood, 2003.
- Johnson, Dianne A. *Telling Tales: The Pedagogy and Promise of African American Literature for Youth*. Connecticut: Praeger, 1990.
- Johnson, Gail. *African and Caribbean Celebrations*. Gloucestershire: Hawthorn, 2007.
- Johnson-Feeling, Dianne, ed. *The Best of the Brownies' Book*. Oxford: Oxford UP, 1996.
- Jones, LeRoi. i.e. Amiri Baraka. *Blues People: Negro Music in White America*. 1963. New York: Harper-Perennial, 2003. (『ブルース・ピープル - 白いアメリカ、黒い音楽』飯野友幸訳. 平凡社, 2011.)
- Jordan, Don and Michael Walsh. *White Cargo: The Forgotten History of Britain's White Slavery in America*. Edinburgh: Mainstream, 2007. *Kindle* ebook file.
- Kamerman, Sylvia E., ed. *Plays of Black American Septisodes from the Black Experience in America*. Boston: Plays, 1994.

- Kelsch, Amy. "Bird at My Window by Rosa Guy." *Voices from the Gaps*. U of Minnesota. 8 Jan. 2016.  
<[http://voices.cla.umn.edu/essays/fiction/bird\\_at\\_my\\_window.html](http://voices.cla.umn.edu/essays/fiction/bird_at_my_window.html)>.
- Kline, Lucinda. "African-American Children's Literature." Fairfield U, 1992. 8 Jan. 2016.  
<<http://www.eric.ed.gov/PDFS/ED355520.pdf>>.
- Ladson-Billings, Gloria. *The Dream-Keepers: Successful Teachers of African American Children*. 2<sup>nd</sup> ed. San Francisco: Jossey-Bass, 2009.
- Larson, Kate Clifford. *Harriet Tubman: A Portrait of American Hero*. New York: One World Ballantine, 2004.
- Laycock, Liz. "Slavery and the Underground Railroad: Working with Students." Ed. Fiona M Collins and Judith Graham. *Historical Fiction for Children: Capturing the Past*. London: David Fulton, 2001. 150-60.
- Lejeune, Philippe. *L'Autobiographie en France*. Paris: Armand Colin, 1971. (『フランスの自伝 - 自伝文学の主題と構造』小倉孝誠訳. 法政大学出版局, 1995.)
- Lhamon, W. T. Jr. *Raising Cain: Blackface Performance from Jim Crow to Hip Hop*. Cambridge, MA: Harvard UP, 1998.
- Li, Stephanie. *Something Akin to Freedom: The Choice of Bondage in Narratives by African American Women*. New York: State U of New York, 2010.
- Lively, Adams. *Masks: Blackness, Race and Imagination*. New York: Oxford UP, 1998.
- Lüthi, Max. *Das Volksmärchen als Dichtung. Ästhetik und Anthropologie*. Düsseldorf: Diederichs Eugen, 1975. (『昔話 - その美学と人間像』小澤俊夫訳. 岩波書店, 1985.)
- Lynch, Jack. "Every Man Able to Read." Colonial Williamsburg. 2011 Winter. 29 Mar. 2016.  
<<https://www.history.org/Foundation/journal/Winter11/literacy.cfm>>.
- MacLead, Anne Scott. *American Childhood: Essays on Children's Literature of the Nineteenth and Twentieth Centuries*. Athens, GA: U of Georgia P, 1994.
- Manna, Anthony L., and Carolyn S. Brodie, eds. *Many Faces, Many Voices: Multicultural Literary Experience for Youth*. Fort Atkinson: Highsmith, 1992.
- Marsh, J. B. T. *The Jubilee Singers and Their Songs*. 1892. New York: Dover, 2003. (『物語と黒人霊歌集』津川主一訳編. 音楽之友社, 1960.)
- Martin, Michelle. *Brown Gold: Milestones of African-American Children's Picture Books, 1845-2002*. New York: Routledge, 2004.
- . "African American." *Keywords for Children's Literature*. Ed. Phillip Nel and Lisa Paul. New York: New York UP, 2011.
- . "Performing Race, Performing Music & Black Identity: The Sad-Faced Boys of Arna Bontemps." *Paper presented at the annual meeting of the American Studies Association Annual Meeting, Hyatt Regency, Albuquerque, New Mexico*. 13 Dec. 2013. 15 April. 2014.  
<  
[http://citation.allacademic.com/meta/p\\_mla\\_apa\\_research\\_citation/2/3/7/0/2/p237024\\_index.html](http://citation.allacademic.com/meta/p_mla_apa_research_citation/2/3/7/0/2/p237024_index.html)  
>.

- McConnell, William S., ed. *Harlem Renaissance*, Michigan: Greenhaven, 2003.
- McDowell, Deborah E. *"The Changing Same": Black Women's Literature, Criticism, and Theory*.  
Bloomington: Indiana UP, 1995.
- McDowell, Kelly. "Roll of Thunder, Hear My Cry: A Culturally Specific, Subversive Concept of Child Agency." *Children's Literature in Education* 33 (2002) :213-25.
- McNair, Jonda C. "I Never Knew There Were So Many Books About Us': Parents and Children Reading and Responding to African American Children's Literature Together." *Children's Literature in Education* 44(2013): 191-207.
- Mickenberg, Julia L. and Philip Nel eds. *Tales for Little Rebels: A Collection of Radical Children's Literature*. Introduction by Jack Zipes. New York: New York UP, 2008.
- Mikkelsen, Nina. *Virginia Hamilton: Twayne's United States Authors Series*, New York: Twayne P, 1994.
- Minh-ha, Trinh T. *When the Moon Waxed Red: Representation, Gender and Cultural Politics*. New York: Routledge, 1991. (『月が赤く満ちる時 - ジェンダー・表象・文化の政治学』小林富久子訳. みすず書房, 1996.)
- . *Woman, Native, Other: Writing Postcoloniality and Feminism*. Bloomington: Indiana UP, 1989. (『女性・ネイティブ・他者 - ポストコロニアリズムとフェミニズム』竹村和子訳. 岩波書店, 1995.)
- Mintz, Sidney W. Interview with Kazuko Fujimoto. 『聞書 アフリカン・アメリカン文化の誕生 - カリブ海域黒人の生きるための闘い』藤本和子編訳. 岩波書店, 2000.
- Minz, Steven. *Huck's Raft: A History of American Childhood*. Cambridge, MA: Belknap P of Harvard UP, 2004.
- Mitchell, Angelyn, ed. *Within the Circle: An Anthology of African American Literary Criticism from the Harlem Renaissance to the Present*. Durham: Duke UP, 1994.
- . *Steal Drivin' Man: John Henry, the Untold Story of an American Legend*. Oxford: Oxford UP, 2006.
- Naidoo, Beverly. "Before the Thunder." *Guardian*. 15 Mar 2003. 6 Jan. 2016.  
<<http://www.theguardian.com/books/2003/mar/15/featuresreviews.guardianreview27>>.
- Nathans, Heather S. *Slavery and Sentiment on the American Stage, 1787-1861: Lifting the Veil of Black*. Cambridge: Cambridge UP, 2009.
- Nelson, Scott Reynolds. *Ain't Nothing But a Man: My Quest to Find the Real John Henry*.  
Washington D.C.: National Geographic, 2007.
- . *Steel Driven' Man: John Henry: The Untold Story of an American Legend*. New York: Oxford UP, 2006.
- The New York Times. "Books for Children." *New York Times Online* 23 October 1932. 13 Sept .2014.  
<<http://www.nytimes.com/books/01/04/22/specials/hughes-popo.html>>.
- Nichols, Charles H., ed. *Arna Bontemps/Langston Hughes Letters, 1925-1967*. New York: Dodd, 1980.
- Nilon, Charles H. "The Ending of Huckleberry Finn." *Satire or Evasion?*. Ed. James S. Leonard, 258

- Thomas Tenney, and Thadious M. Davis. Durham and London: Duke U of P, 1992. *Kindle* ebook file.
- Nobles, Melissa. *Shades of Citizenship: Race and Census in Modern Politics*. Redwood: Stanford UP, 2000.
- Nodelman, Perry. *The Hidden Adult: Defining the Children's Literature*. Baltimore: The Johns Hopkins UP, 2008.
- . "The Other: Orientalism, Colonialism, and Children's Literature." *Children's Literature Association Quarterly* 17 (1992) : 29-35.
- . *The Pleasures of Children's Literature*. 1992. 2<sup>nd</sup> ed. New York: Longman, 1996.
- Noll, Mark A. *God and Race in American Politics: A Short History*. Princeton: Princeton UP, 2008. (『神と人種 - アメリカ政治を動かすもの』赤木昭夫訳. 岩波書店, 2010.)
- Oliver, Paul. *The Story of the Bruce*. 1969. Boston: Northeastern UP, 1998. (『ブルースの歴史』米口胡訳. 晶文社, 1978.)
- Onwuchekwa, Jemie. *Langston Hughes: An Introduction to The Poetry*. New York: Columbia UP, 1976.
- Otto, Carolyn. *Celebrate Kwanzaa with Candles, Community, and Fruits of the Harvest*, Washington D.C.: National Geographic, 2008.
- Owens, Louis. *Mixedblood Messages: Literature, Film, Family, Place*. Norman: U of Oklahoma P, 1998.
- Papillon Gallery. Albert Alexander Smith. "Cabaret." *Paillon Gallery*. 8 Jan. 2016. <[http://www.papillongallery.com/sold/albert\\_alexander\\_smith.html](http://www.papillongallery.com/sold/albert_alexander_smith.html)>.
- PBS. "Exploring Freedom: Laura Wheeler Warring." *African American World*. 8 Jan. 2016. <<http://www.pbs.org/wnet/aaworld/arts/waring.html>>.
- Pederson, Carl. "Middle Passages: Representations of the Slave Trade in Caribbean and African-American Literature" *The Massachusetts Review*. 34 (1993) :225-238. <[http://www.jstor.org/stable/25090419?seq=1#page\\_scan\\_tab\\_contents](http://www.jstor.org/stable/25090419?seq=1#page_scan_tab_contents)>.
- Peters, Erskine, ed. *Lyrics of the Afro-American Spiritual*. Westport: Greenwood, 1993.
- Pettit, Arthur G. *Mark Twain and the South*. Lexington: UP of Kentucky, 2005.
- Phillips, Caryl. *A New World Order*. New York: Vintage, 2001. (『新しい世界のかたち-黒人の歴史文化とディアスポラの世界地図』上野直子訳. 明石書店, 2007.)
- Picker, John. 'Red War Is My Song': Whitman, Higginson, and Civil War Music." *Walt Whitman and Modern Music: War, Desire, and the Trials of Nationhood*. Ed. Lawrence Kramer. New York: Garland, 2000.
- Ramirez, Gonzalo Jr., and Jan Lee Ramirez. *Multiethnic Children's Literature*. New York: Delmar, 1994.
- Rapenfuse, Edward C. "Last of the Old Guard." *Maryland State Archives*. 20 Oct, 1998. 7 July 2013. <<http://msa.maryland.gov/msa/stagser/s1259/121/6050/html/12414100.html>>.
- Rappaport, Doreen. *No More!: Stories and Songs of Slave Resistance*. Massachusetts: Candlewick,

2002.

- Rawick, George P. *The American Slave: A Composite Autobiography. Vol.1-19. Supplement, Series 1. Vol.1-12. Supplement, Series 2. Vol. 1-10.* Westport: Greenwood, 1972-79.
- . *From Sundown to Sunup: the Making of the Black Community.* Westport: Greenwood, 1973. (『日没から夜明けまで - アメリカ黒人奴隷制の社会史』西川進訳. 刀水書房, 1986.)
- Reynolds, Mary. "Interview with Ila B. Prine." June 11, 1937. *The American Slave: A Composite Autobiography, Vol.8.* Ed. George P. Rawick. Westport: Greenwood, 1977. 3284-99.
- Rollins, Charlemae Hill. *We Build Together: A Reader's Guide to Negro Life and Literature for Elementary and High School Use.* 1941. Chicago : National Council of Teachers of English, 1948.
- Rose, Willie Lee. *Slavery and Freedom,* Oxford: Oxford UP, 1982.
- Ruas, Charles. *Conversations with Toni Morrison.* Jackson: UP of Mississippi, 1994. Originally *Conversations with American Writers.* New York: McGraw Hill, 1984.
- Russell, David L. "Cultural Identity and Individual Triumph in Virginia Hamilton's *M. C. Higgins, the Great.*" *Children's Literature in Education* 21 (1990) : 253-59.
- Said, Edward Wadie. *Orientalism.* 1978. New York: Vintage: 1979. (『オリエンタリズム』今沢紀子訳. 平凡社, 1993.)
- San Souci, Robert D. and Brian Pinkney. *Cut from the Same Cloth: American Women of Myth, Legend, and Tall Tale.* New York: Puffin, 1993.
- Schechter, Joel, ed. *Popular Theatre: A Sourcebook.* New York: Routledge, 2003.
- Schowalter, Elaine, ed. *Alternative Alcott.* New Brunswick: Rutgers UP, 1988.
- Schwebel, Sara L. *Child-Sized History: Fictions of the Past in U.S. Classrooms.* Nashville: Vanderbilt UP, 2011.
- Segal, Ronald. *The Black Diaspora: Five Centuries of the Black Experience Outside Africa.* New York: Farrar, 1995. (『ブラック・ディアスポラ - 世界の黒人がつくる歴史・社会・文化』富田虎男訳. 明石書店, 1999.)
- Sheina. "Species profile: Kudzu." Invasivore.org: Invasive species on your mind and on your plate. 9 Dec. 2011. 25 Mar. 2016. < <http://invasivore.org/2011/12/species-profile-kudzu/>>.
- Siebert, Wilbur H. *The Underground Railroad from Slavery to Freedom: A Comprehensive History.* 1898. New York: Dover, 2006.
- Sieruta, Peter D. "Bontemps, Arna Wendell" *Oxford Encyclopedia of Children's Literature.* Oxford: Oxford UP, 2006.
- Sims, Rudine. *Shadows and Substances: Afro-American Experience in Contemporary Children's Fiction.* National Council of Teachers, 1982.
- Slier, Deborah, ed. *Make a Joyful Sound: Poems for Children by African-American Poets.* New York: Checkerboard, 1990.
- Small, Christopher. *Musicking: The Meanings of Performing and Listening.* Connecticut: Wesleyan UP, 1998. (『ミュージッキング - 音楽は<行為>である』野澤豊一, 西島千尋訳. 水声社, 2011.)

- Smith, Karen Patricia. "Imagination and Scholarship: The Contributions of Women to American Youth Services and Literature." *Library Trends* 44(1996):1-16.
- Smith, Katharine Capshaw. "The Brownies' Book and the Roots of African American Children's Literature." *The Tar Baby and The Tomahawk: Race and Images in American Children's Literature*. Center for Digital Research in the Humanities at the University of Nebraska–Lincoln, in conjunction with the Center for the Humanities at Washington University in St. Louis. 8 Mar. 2016. <<http://childlit.unl.edu/topics/edi.harlem.html>>.
- Spivak, G (ayatri) . C (hakravorty) . *A Critique of Postcolonial Reason: Toward a History of the Vanishing Present*. Cambridge, MA: Harvard UP, 1999. (『ポストコロニアル理性批判 - 消え去りゆく現在の歴史のために』上村忠男, 本橋哲也訳. 月曜社, 2003.)
- . *Can the Subaltern Speak? Marxism and the Interpretation of Culture*. Ed. C. Nelson and L. Grossberg. Urbana: U of Illinois P, 1988. (『サブアルタンは語ることができるか』上村忠男訳. みすず書房, 1998.)
- . *Nationalism and the Imagination*. Calcutta: Seagull, 2010. (『ナショナリズムと想像力』鈴木英明訳. 青土社, 2011.)
- Spivak, Gayatri Chakravorty, et al. *Conversations with Gayatri Chakravorty Spivak*. London: Seagull, 2006. (『スピヴァクみずからを語る - 家・サブアルタン・知識人』大池真知子訳. 岩波書店, 2008.)
- Starling, Marion Wilson. *The Slave Narrative: Its Place in American History*. 1981. Washington D.C.: Howard UP, 1988.
- Stephens, Clare Gatrell. *Coretta Scott King Award Books: Using Great Literature with Children and Young Adults*. Englewood: Libraries Unlimited-Greenwood, 2000.
- Stepto, Robert B. *A Home Elsewhere: Reading African American Classics in the Age of Obama*. Cambridge, MA: Harvard UP, 2010.
- Sterling, Dorothy, ed. *We Are Your Sisters: Black Women in the Nineteenth Century*. 1984. New York: Norton, 1997.
- Steven C. Tracy. *A Historical Guide to Langston Hughes*. Oxford: Oxford UP, 2003.
- Stewart, Susan Louise. "In the Ellison Tradition: In/Visible Bodies of Adolescent and YA Fiction." *Children's Literature in Education* 40 (2009) :180-96.
- Storey, Olivia Smith. "Flying Words: Contests of Orality and Literacy in the Trope of the Flying Africans." *Journal of Colonialism and Colonial History* 5 (2004):1-34.
- Styles, Morag. *From the Garden to the Street: Three Hundred Years of Poetry for Children*, London: Cassell-Pinter. 1997.
- Takioka, Hiroko. "Mark Twain's Outlook on the Universe: Traveling through Time and Space." Diss. Shirayuri College, 2002.
- Tompkins, Jane. *Sensational Designs: The Cultural Work of American Fiction 1790-1860*. Oxford: Oxford UP, 1985.
- Townsend, John Rowe. *A Sounding of Storytellers: New and Revised Essays on Contemporary*

- Writers for Children*. New York: J. B. Lippincott, 1979.
- Tracy, Steven C. *Langston Hughes and the Blues*. Champaign: U of Illinois P, 1988.
- Trites, Roberta Seelinger. *Disturbing the Universe: Power and Repression in Adolescent Literature*. Iowa City: U of Iowa P, 2000. (『宇宙をかきみだす - 思春期文学を読みとく』吉田純子監訳. 人文書院, 2007.)
- Turner, Nat. *The Confessions of Nat Turner: The Leader of the Late Insurrection in Southampton, Virginia*. Baltimore: T. R. Gray, 1831. U of North Carolina Library. *Documenting the American South*. 8 Jan. 2016. <<http://docsouth.unc.edu/neh/turner/menu.html>>.
- U. S. Census Bureau. *United States Census 2010*. 24 Jan. 2016. <<http://www.census.gov/2010census/>>.
- Wagner, Wendy. "Black Separatism in the Periodical Writing of Mrs. A. E. (Amelia) Johnson." *The Black Press: New Literary and Historical Essays*. Ed. Todd Vogel. New Brunswick: Rutgers UP, 2001. 93-104.
- Walker, Alice, ed. *I Love Myself when I am Laughing and Then Again when I am Looking Mean and Impressive: A Zola Neale Hurston Reader*. New York: Feminist Press, City U of New York, 1979.
- Walker-Dalhouse, D(oris). "Using African-American Literature to Increase Ethnic Understanding." *The Reading Teacher* 45(1992) : 416-422.
- . "Fostering Multi-Cultural Awareness: Books for Young Children." *Reading Horizons* 33 (1992) :47-54.
- Webber, Thomas L. *Deep like the Rivers: Education in the Slave Quarter Community, 1831-1865*. New York: W. W. Norton, 1980. (『奴隷文化の誕生 - もうひとつのアメリカ社会史』西川進監訳. 新評論, 1988.)
- Whyte, William Foote. *Street Corner Society*. 4<sup>th</sup> ed. 1943. Chicago: UP of Chicago, 1993. (『ストリート・コーナー・ソサエティ』奥田道大, 有里典三訳. 有斐閣, 2000.)
- Wilentz, Gay Alden. "What Is Africa to Me?": Reading the African Cultural Base of (African) American Literary History." *American Literary History* 15 (2003) : 639-653.
- Wilkins, Ebony Joy. "Using African American Children's Literature as a Model for 'Writing Back' Racial Works" *Trayvon Martin, Race, and American Justice*. Eds. Kenneth J Fasching-Varner Rema E. Reynolds Katrice A Albert Rottredam: Sense P, 2014. 67-71.
- Williams, Eric. *Capitalism and Slavery*. 1944. Chapel Hill: U of North Carolina P, 1994. (『資本主義と奴隷制 - ニグロ史とイギリス経済史』中山毅訳. 理論社, 1987.)
- Williams, Pamela Rose. "10 Famous Gospel Songs." Telling Ministries LCC. *What Christians Want to Know*. 7 Jan. 2016. <<http://www.whatchristianswanttoknow.com/10-famous-gospel-songs/>>.
- Wintz, Cary D., ed. *Harlem Speaks: A Living History of the Harlem Renaissance*. Illinois: Sourcebooks, 2007.
- Witek, John. "Frank Walts." *VanacularArts.com*. 10 Sept. 2013. <[http://vernaculararts.com/section/156653\\_Frank\\_Walts.html](http://vernaculararts.com/section/156653_Frank_Walts.html)>.
- Wolfe, Bernard. "Uncle Remus and Malevolent Rabbit: Takes a Limber-Toe Gem-mun fer ter Jump

Jim Crow.” *Critical Essays on Joel Chandler Harris*. Ed. R. Bruce Bickley Jr. Boston: G. K. Hall, 1981.74-5.

Wood, Gordon S. *The Americanization of Benjamin Franklin*. New York: Penguin, 2004. (『ベンジャミン・フランクリン、アメリカ人になる』池田年穂, 金井光太郎, 肥後本芳男訳. 慶應義塾大学出版会, 2010.)

Work, John W. *American Negro Songs: 230 Folk Songs and Spirituals, Religious and Secular*. 1940. Mineola: Dover, 1998.

Zurier, Rebecca. *Art For The Masses: A Radical Magazine and Its Graphics 1911 – 1917*. Philadelphia: Temple UP, 1989.

アメリカンセンターJAPAN 「独立宣言 1776 年」 20 July. 2016.

<<https://americancenterjapan.com/aboutusa/translations/2547/>>.

荒このみ『アフリカン・アメリカンの文学 - 「私には夢がある」考』平凡社, 2000.

--- 『アフリカン・アメリカン文学論 - 「ニグロ」のイデオロムと想像力』東京大学出版会, 2004.

--- 『アメリカの黒人演説集 - キング・マルコム X・モリスン他』岩波書店, 2008.

--- 『黒人のアメリカ - 誕生の物語』筑摩書房, 1997.

--- 「アフリカン・アメリカン文学におけるアメリカ的精神」博士論文. 東京外語大学, 2001.

--- 編訳 『アメリカの黒人演説集 - キング・マルコム X・モリスン他』岩波書店, 2008.

有賀夏紀『アメリカの 20 世紀』中央公論新社, 2002.

粟谷佳司『音楽空間の社会学・文化における「ユーザー」とは何か』青弓社, 2008.

井川眞砂「アメリカ合衆国における『ハックルベリー・フィン』論争・黒人描写と人道主義をめぐって」  
『国際文化研究論集』12(2004):13-28.

池本佐恵子「プランテーションの神話 - ジョエル・チャンドラー・ハリス」『たのしく読める英米児童文学』本多英明, 桂育子, 小峰和子編. ミネルヴァ書房, 2000.

石崎浩一郎『アメリカン・アート』講談社, 1980.

泉山真奈美編『アフリカン・アメリカンスラング辞典』改訂版. 研究社, 2007.

伊藤章「『観念の都市』から『経験の都市』へ - 十九世紀におけるニューヨークの文学的風景」筑和正格  
編著『モダン都市と文学』洋泉社, 1994. 44-61.

伊藤詔子, 吉田美津, 横田由理編『新しい風景のアメリカ』南雲堂, 2003.

今井光映『アメリカ家政学前史 - ビーチャーからリチャーズヘドメスティックフェミニズムの思想』光生館, 1992.

今関恒夫『ピューリタニズムと近代市民社会 - リチャード・バクスター研究』みすず書房, 1988.

ウエルズ恵子「アメリカ南部民謡, ハンマーソング: ジョン・ヘンリーになりたくなかった男たちの歌 - 死の予感の中から」『立命館言語文化研究』8(1996): 73-89.

--- 『黒人霊歌は生きている - 歌詞で読むアメリカ』岩波書店, 2008.

上野俊哉『ディアスポラの思考』筑摩書房, 1999.

魚津郁夫『プラグマティズムの思想』筑摩書房, 2006.

梅津順一『ヴェーバーとピューリタニズム - 神と富の間』新教出版社, 2010.



- 江口伸清「垂直モザイク社会カナダ・トロントのカリブ海地域出身者の 祭り、カリバーナの意味」『立命館言語文化研究』4 (1993) :63-88.
- 江成幸「アメリカ合衆国のアフリカン・ディアスポラ - 反人種主義の連携を求めて」駒井洋監修『ブラック・ディアスポラ』明石書店, 2011. 194-207.
- 遠藤泰生, 木村秀雄編『クレオールのかたち』東京大学出版会, 2002.
- 大喜多香枝「視覚がもたらす死の受容—アンジェラ・ジョンソンの『犁を打ち鳴らす』」吉田純子, 鈴木宏枝, 大喜多香枝『マイノリティは苦しみをのりこえて - アメリカ思春期文学をよむ』冬弓社, 2012.
- 大和田俊之『アメリカ音楽史 - ミンストレル・ショー、ブルースからヒップホップまで』講談社, 2011.
- 大和田俊之, 長谷川町蔵『文化系のためのヒップホップ入門』アルテスパブリッシング, 2011.
- 奥田恵二『「アメリカ音楽」の誕生 - 社会・文化の変容の中で』河出書房新社, 2005.
- 奥野みち子「トニ・モリソン『ソロモンの歌』 - ソフォクレスとアイスキュロスから読み解くミルクマンの成長」『中国四国英文学研究』5 (2009) : 53-67.
- 小此木圭吾『対象喪失 - 悲しむということ』中央公論新社, 1979. *Kindle* ebook file, 2012.
- 小澤俊夫『グリム童話の誕生 - 聞くメルヘンから読むメルヘンへ』朝日新聞出版, 1992.
- 越智道雄『エスニック・アメリカ - 民族のサラダ・ボウル、文化多元主義の国から』明石書店, 1995.
- 折島正司, 平石貴樹, 渡辺信二編『文学アメリカ資本主義』南雲堂, 1993.
- 加藤恒彦『トニ・モリスンの世界 - 語られざる, 語り得ぬものを求めて』世界思想社, 1997.
- 加藤恒彦, 北島義信, 山本伸編『世界の黒人文学 - アフリカ・カリブ・アメリカ』鷹書房弓プレス, 2000.
- 亀井俊介『サーカスが来た! - アメリカ大衆文化覚書』1976. 岩波書店, 1992.
- 川口喬一, 岡本靖正編『最新文学批評用語辞典』研究社, 1998.
- 川島浩平『人種とスポーツ - 黒人は本当に「早く」「強い」のか』中央公論新社, 2012.
- 河野真太郎『<田舎と都会>の系譜学 - 二〇世紀イギリスと「文化」の地図』ミネルヴァ書房, 2013.
- 川端康雄『葉蘭をめぐる冒険 - イギリス文化・文学論』みすず書房, 2013.
- 木内徹, 森あおい編『トニ・モリソン』彩流社, 2000.
- 木島始編訳『ラングストン・ヒューズ評論集 - 黒人芸術家の立場』創樹社, 1977. («黒人芸術家と人種の山」[「ネーション」1926年6月23日号]、「黒人は何を要求するか」[「コモン・グラウンド」誌1941年秋号]、「南部をわれわれはどうするか」[「コモン・グラウンド」1943年冬号]、「民主主義とわたし」[1939年6月カーネギーホールにおける第3回アメリカ作家会議]、「社会詩人としてのわたしの冒険」[「ファイロン」1947年秋号]、「ウォルト・ホイットマンと黒人」[ブルックリン・カレッジ「ノクターン」1955年春号]、「黒人作家の位置」[1957年5月7日ニューヨーク市アルヴィン劇場での全国作家劇作家討論集会]、「スピングーン賞受賞演説」[1960年6月26日ミネソタ大学NAACP第51回大会で第45回スピングーン賞]、「ブルースと呼ばれる歌」[「ファイロン」1941年夏号])
- 久保芳和『アメリカ経済学の歴史』啓文社, 1988.
- クラック、ジョージ「ついに自由を我らに」米国大使館アメリカンセンターレファレンス資料室, 2011. 7 Jan. 2016. <<http://aboutusa.japan.usembassy.gov/pdfs/wwwf-pub-freeatlast.pdf>>.
- 小関隆「コメモレイションの文化史のために」『記憶のかたち - コメモレイションの文化史』阿部安成, 小


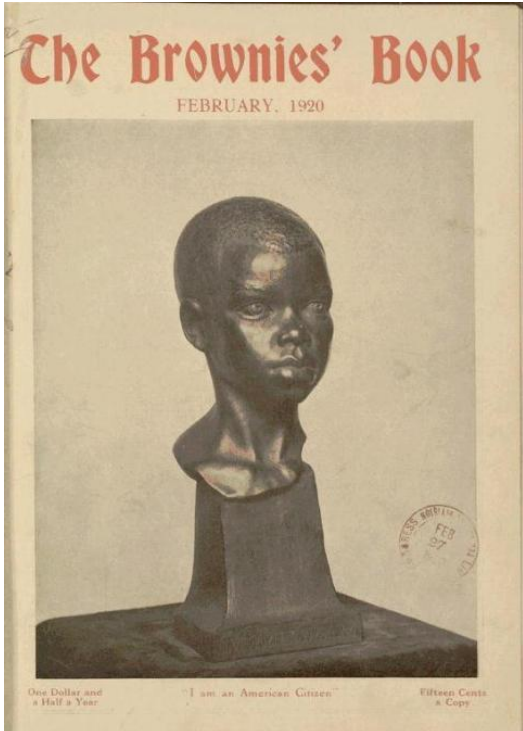
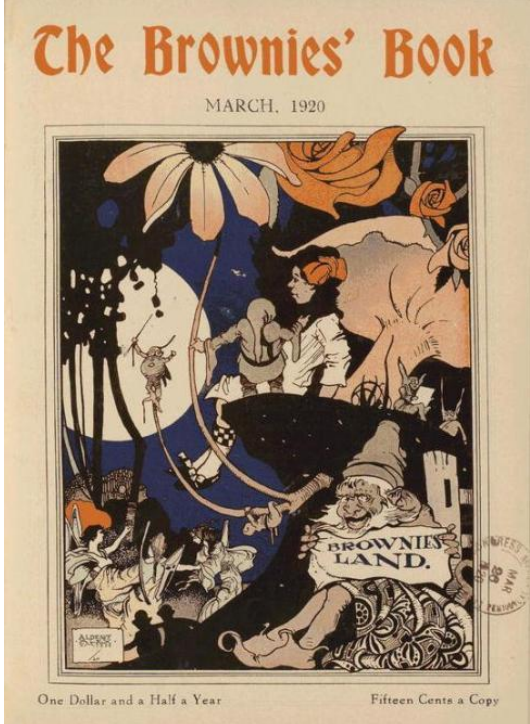

- 関隆, 見市雅俊, 光永雅明, 森村敏己編. 柏書房, 1999.
- 小林富久子監修『憑依する過去 - アジア系アメリカ文学におけるトラウマ・記憶・再生』金星堂, 2014.
- 小林泰秀「黒人の英語と言語の自然性」『広島女学院大学論集』30 (1980) : 193-214.
- 駒井洋『ブラック・ディアスポラ』明石書店, 2011.
- 斎藤忠利「日本におけるラングストン・ヒューズ - その紹介の経緯について」『一橋論叢』98 (1987) : 524-42.
- 斎藤偕子『19世紀アメリカのポピュラー・シアター - 国民的アイデンティティの形成』論創社, 2010.
- さくら友の会「ポルフィリン症<porphyria>の概要」全国ポルフィリン代謝障害友の会, 4 July. 2016.  
< <http://www.sakuratomonokai.com/porphyria/shurui.htm> >.
- 佐藤恵津子「H・B・ストウ『アンクル・トムの小屋』が書くアメリカの未来：帝国の欲望と女性の役割」『大阪府立大学人間社会学研究集録』6(2011):165-88.
- 真田桂子「倫理的自伝文学についての覚書 - ロワの自伝『あがなえし遙かな時』をめぐって」『立命館国際研究』46 (2003) : 255-265.
- 古津智之『抒情するアメリカ - 明滅するモダニズム』研究社, 2009.
- 島式子「黒い少女の眩き - Virginia Hamilton の描く美と醜について」『甲南女子大学英文紀要』27(1991) : 103-115.
- .「ノンフィクション - 『セント・ニコラス』が映し出した時代と社会」『アメリカの児童雑誌「セント・ニコラス」の研究』「セントニコラス研究会」編.「セントニコラス」研究会, 1987. 100-120.
- .「E. L. カニグズバーグとヴァージニア・ハミルトンが遺した言葉 - 多文化の真の意味をさぐる」日本イギリス児童文学会西日本支部 2013 年度講演会. 大阪産業創造館, 20 July. 2013.
- シャルフィ, サミア・カッサブ.「パトリック・シャモワゾー」Institute Français, 2012. 1 Sep 2016.  
<[http://www.institutfrancais.jp/wp-content/uploads/2013/02/Patrick\\_Chamoiseau\\_IF.pdf](http://www.institutfrancais.jp/wp-content/uploads/2013/02/Patrick_Chamoiseau_IF.pdf)>.
- 秦邦生, 中井亜佐子, 富山多佳夫, 溝口昭子, 早川敦子『<終わり>への遡行 - ポストコロニアリズムの歴史と使命』英宝社, 2012.
- 神宮輝夫『現代イギリスの児童文学』理論社, 1986.
- .『児童文学の中の子ども』NHK ブックス, 1974.
- 菅原大一太「ゾラ・ニール・ハーストン『彼らの目は神を見ていた』研究 - 音とプロットについて」『成蹊人文研究』21 (2013) : 17-30.
- 杉尾敏明, 棚橋美代子『ちびくろサンボとピノキオ - 差別と表現・教育の自由』青木書店, 1990.
- .『焼かれたちびくろサンボ - 人種差別と表現・教育の自由』青木書店, 1992.
- 鈴木宏枝「An Na の作品にみる韓国系『アメリカの少女』の構築 - *A Step from Heaven* と *Wait for Me*」『英語圏児童文学研究 Tinker Bell』57 (2012) : 45-56.
- 鈴木裕之『ストリート之歌 - 現代アフリカの若者文化』世界思想社, 2000.
- 鈴木雅雄「解説 - 『ブルース衝動』の行方」『ブルース・ピープル - 白いアメリカ、黒い音楽』リロイ・ジョーンズ, 飯野友幸訳. 平凡社, 2011. 399-413.
- 諏訪部浩一編『アメリカ文学入門』三修社, 2013.
- 高田賢一『アメリカ文学のなかの子どもたち - 絵本から小説まで』ミネルヴァ書房, 2004.
- 田中久男監修『アメリカ文学研究のニュー・フロンティア-資料、批評、歴史』南雲堂, 2009.

- 谷本征剛『児童文学とは何か - 物語の成立と展開』中教出版, 1990.
- 千葉則夫「W.E.B.デュボイスの人種平等獲得に賭けた生涯 (その2)」、『国際関係紀要』8(1999) : 437-74.
- 長チノリ「ジャズ・エイジ」DNP. artscape. 27 Feb 2016. < <http://artscape.jp/artword/index.php/ジャズエイジ> >
- 常山菜穂子『アンクル・トムとメロドラマ-19世紀アメリカにおける演劇・人種・社会』慶應義塾大学教養センター, 2007.
- 富田太佳夫『ポパイの影に - 漱石、フォークナー、文化史』みすず書房, 1996.
- 中條献『歴史のなかの人種 - アメリカが創り出す差異と多様性』北樹出版, 2004.
- 中山麻衣子「黒人口承文学におけるヴァナキュラーなアイデンティティ表象 - Langston Hughes, Gwendolyn Brooks からヒップ・ホップまで」日本アメリカ文学学会第45回全国大会. 2006.10.15. 口頭発表. < [http://als-j.org/contents\\_1032.html](http://als-j.org/contents_1032.html) > 7 Jan. 2016.
- 西成彦『クレオール事始』紀伊國屋書店, 1999.
- . 「近代大衆と人種のオブセッション - 『黒さ』の表象に介入したものたち」『立命館言語文化研究』23 (2006) :3-18.
- 西出敬一「ブラック・アトランティックの世界」紀平英作, 油井大三郎編著『グローバリゼーションと帝国』ミネルヴァ書房, 2006. 39-61.
- 新田啓子『アメリカ文学のカルトグラフィ - 批評による認知地図の試み』研究社, 2012.
- 日本イギリス児童文学学会編『英米児童文学ガイド - 作品と理論』研究社出版, 2001.
- 野口啓子「『アンクル・トムの小屋』の色分けされた黒人たち」『津田塾大学紀要』39 (2007) : 1-17.
- 野口啓子, 山口ヨシ子編『アメリカ文学に見る女性と仕事』彩流社, 2006.
- 野々村淑子「19世紀アメリカの『母』言説」『九州大学大学院教育学研究紀要』3 (2001) : 79-105.
- バーダマン, ジェームス・M『アメリカ黒人の歴史』森本豊富訳. NHK 出版, 2011.
- 濱田雅子『黒人奴隷の着装の研究-アメリカ独立革命期ヴァージニアにおける奴隷の被服の社会的研究』東京堂, 2002.
- 早瀬博範編『アメリカ文学と狂気』英宝社, 2000.
- 原昌「アメリカ児童文学」『児童文学事典』日本児童文学学会編, 東京書籍, 1988.
- バフチン, ミハイル『ミハイル・バフチン全著作第五巻「小説における時間と時空間の諸形式」他 - 一九三〇年代以降の小説ジャンル論』伊東一郎, 北岡誠司, 佐々木寛, 杉里直人, 塚本善也訳. 水声社, 2001.
- バラカン, ピーター『魂<sup>ソウル</sup>のゆくえ』1989. アルテス, 2008.
- 平石貴樹, 後藤和彦, 諏訪部浩一編『アメリカ文学のアリーナ - ロマンズ・大衆・文学史』松柏社, 2013.
- 複数文化研究会編『<複数文化>のために - ポストコロニアリズムとクレオール性の現在』人文書院, 1998.
- 藤本和子『ブルースだってただの唄 - 黒人女性のマニフェスト』朝日新聞社, 1986.
- 藤森かよ子「ある発見」. 『藤森かよ子の日本アイン・ランド研究会』. 2002. 6 Jan. 2016. <<http://www.aynrand2001japan.com/akira/akira20020116.html>>.
- . 「不在の少女たちからのメッセージ: *The Planet of Junior Brown* の再読」『児童文学研究』25 (1993) : 111-101[12-21].

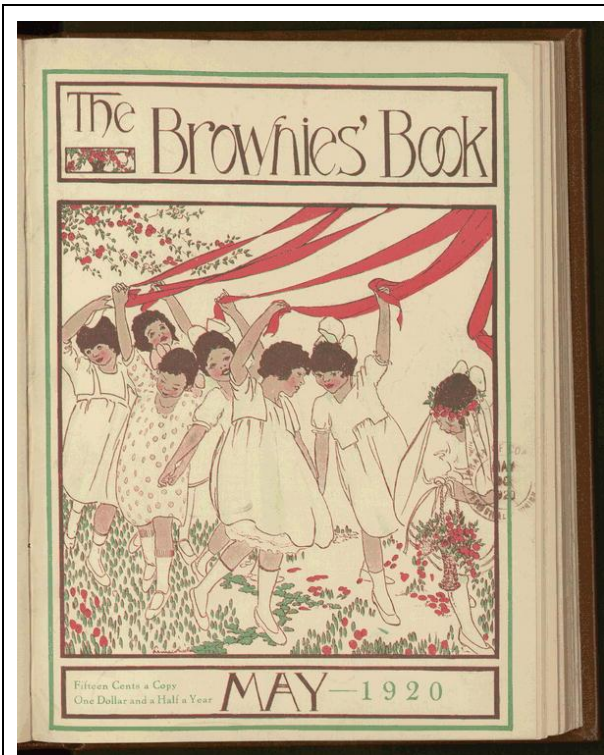
- 風呂本惇子編『アメリカ文学とニューオリンズ』鷹書房弓プレス, 2001.
- 保坂昌光「ルーツ志向と音楽産業」『ブルースに囚われて - アメリカのルーツ音楽を探る』飯野友幸編. 信山社, 2002. 29-54.
- 本田創造『新版アメリカ黒人の歴史』岩波書店, 1991.
- 本間長世『思想としてのアメリカ - 現代アメリカ社会・文化論』中央公論社, 1996.
- 増田聡『聴衆をつくる - 音楽批評の解体文法』青土社, 2006.
- 三浦玲一「選択と新自由主義と多文化主義 - グローバル化時代の文学としての『ハリー・ポッター』シリーズ」『英文学研究』 88 (2011) :33-47.
- . 「『文学』の成立と社会的な想像力の排除 - 『キャッチャー・イン・ザ・ライ』の現在とコーマック・マッカーシーの『ザ・ロード』」『文学研究のマニフェスト - ポスト理論・歴史主義の英米文学批評入門』三浦玲一編. 研究社, 2012. 63-86.
- 三吉美加「ヒップホップとレゲトンにみる黒人性とラティーノ性」『立教アメリカン・スタディーズ』 35 (2013) : 97-114.
- 村田宏「アレンズバーグ・サークルとニューヨークのモダニズム - 『アメリカ的なるもの』を求めて」モダニズム研究会編『モダニズム研究』思潮社, 1994. 439-62.
- 柳生智子「アメリカ・バージニアにおける奴隷市場の発展」『慶應義塾大学日吉紀要・社会科学』 21 (2010) :1-42.
- 山田史郎『アメリカ史の中の人種』山川出版社, 2006.
- 吉田純子『少年たちのアメリカ - 思春期文学の帝国と<影>』阿吽社, 2004.
- 横田順子「読者反応批評」『英米児童文学ガイド - 作品と理論』日本イギリス児童文学学会編, 研究社出版, 2001, 179-198.

資料

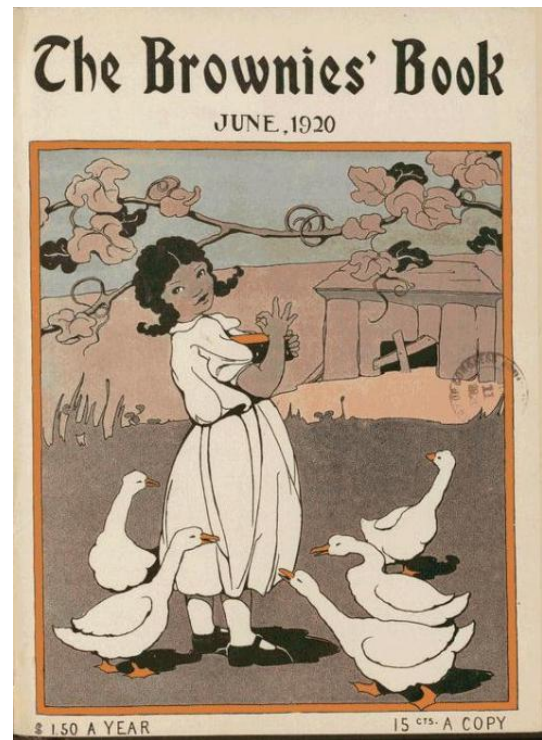
The Brownies' Book 1920年1月号～1921年11月号

	
<p>① January, 1920. Photograph by Battey. (1)</p>	<p>② February, 1920. Photograph of Abbate's Bust of a Boy: "I am an American Citizen."(35)</p>
	
<p>③ March, 1920. Cover Drawing by Albert Smith. (69)</p>	<p>④ April, 1920. Cover Drawing by Marcellus Hawkins. (103)</p>

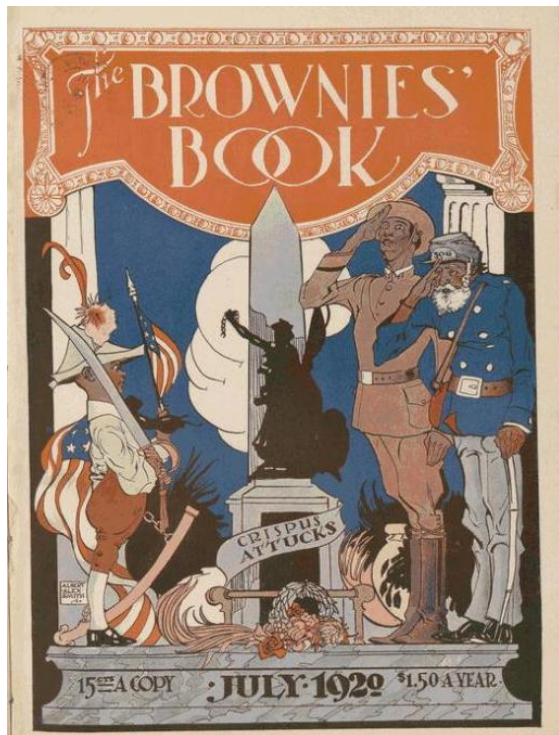




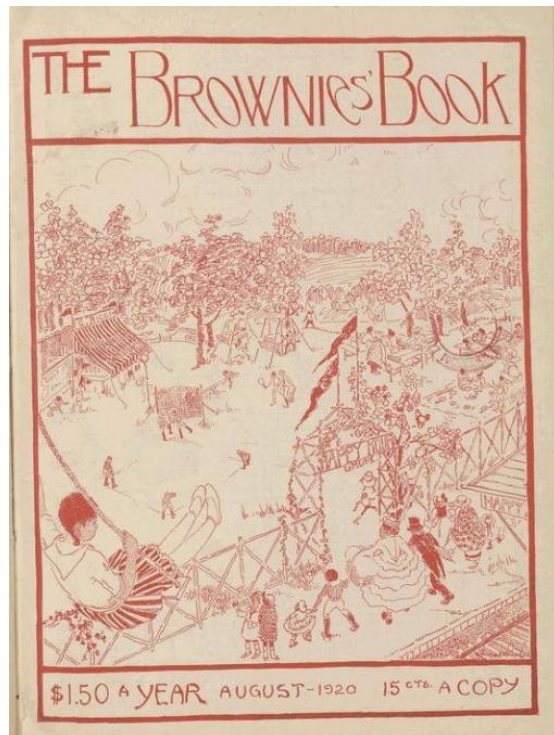
⑤ May, 1920. "Winding the May Pole" by Laura Wheeler. (137)



⑥ June, 1920. Cover Drawing by Hilda Wilkinson. (171)

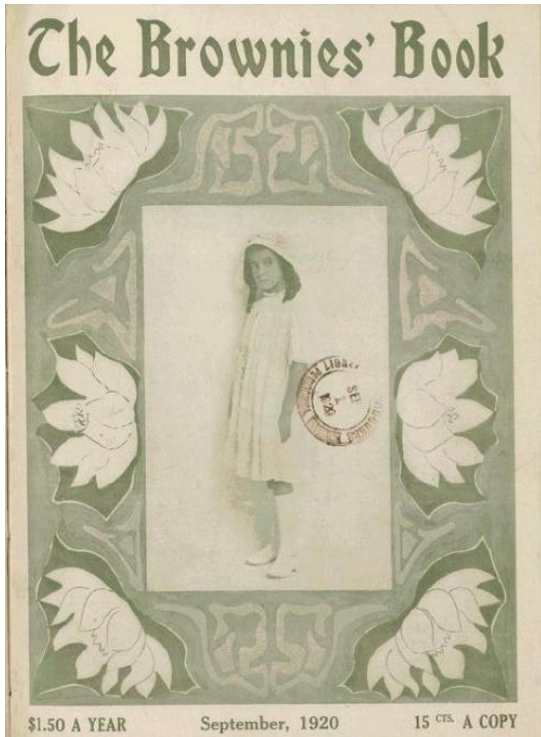


⑦ July, 1920. "From Generation to Generation" by Albert A. Smith. (205)

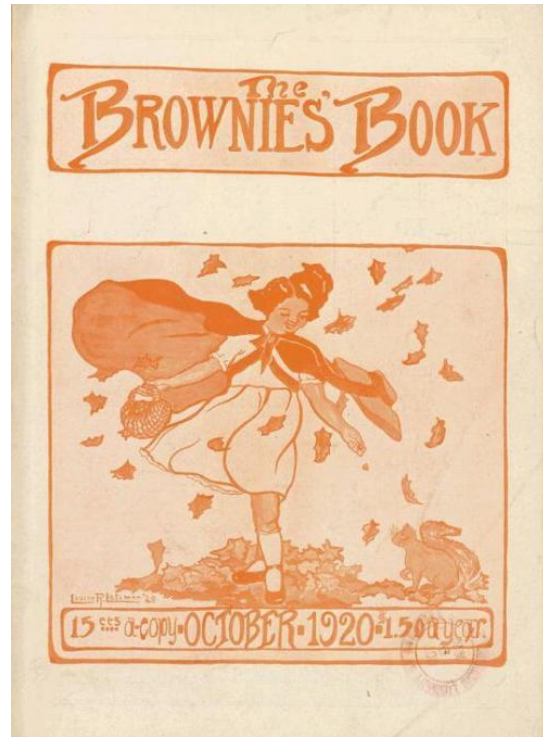


⑧ August, 1920. "Sunday School Picnic" by Laura Wheeler. (239)

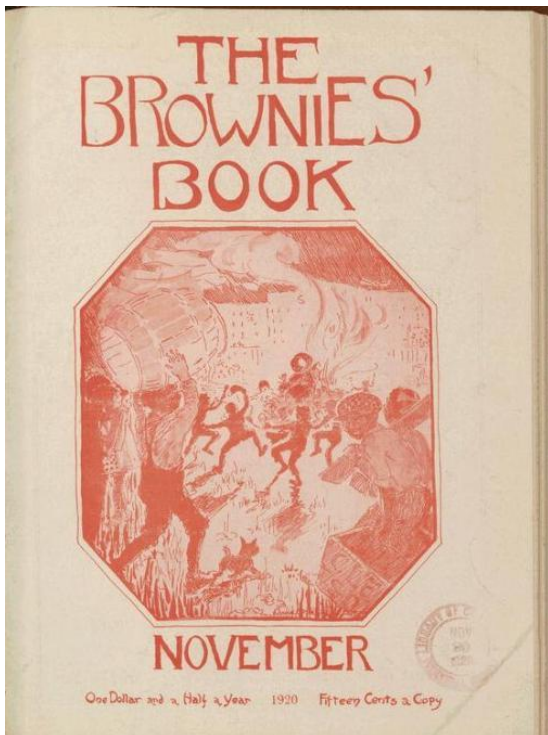




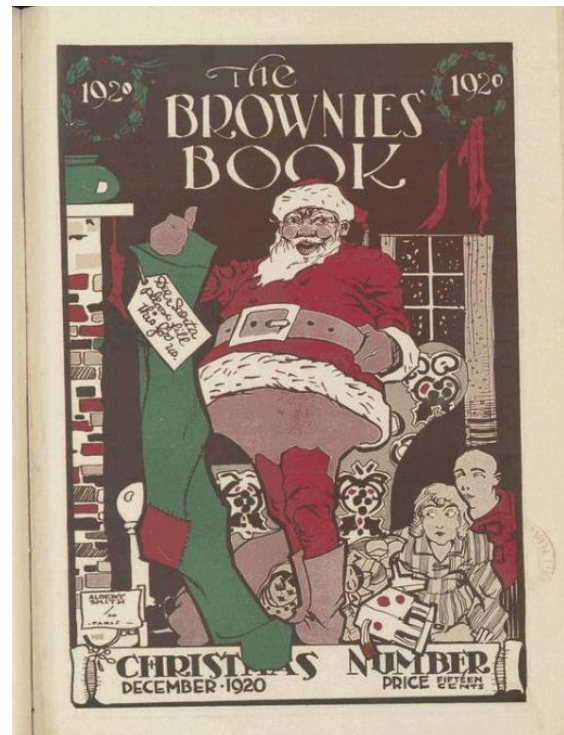
⑨ September, 1920. "The School Girl": Portrait of Charlotte Elizabeth Crawford. (273)



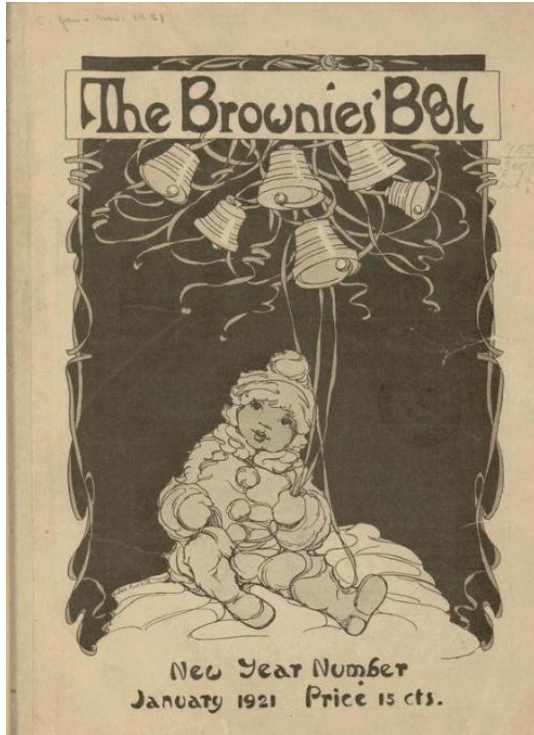
⑩ October, 1920. "October Maid" by Louisa R. Latimer. (307)



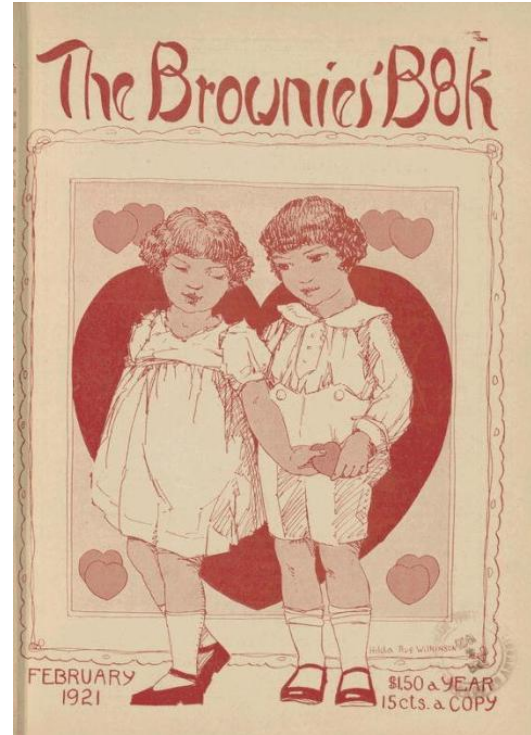
⑪ November, 1920. "The Election Bonfire" by Laura Wheeler. (341)



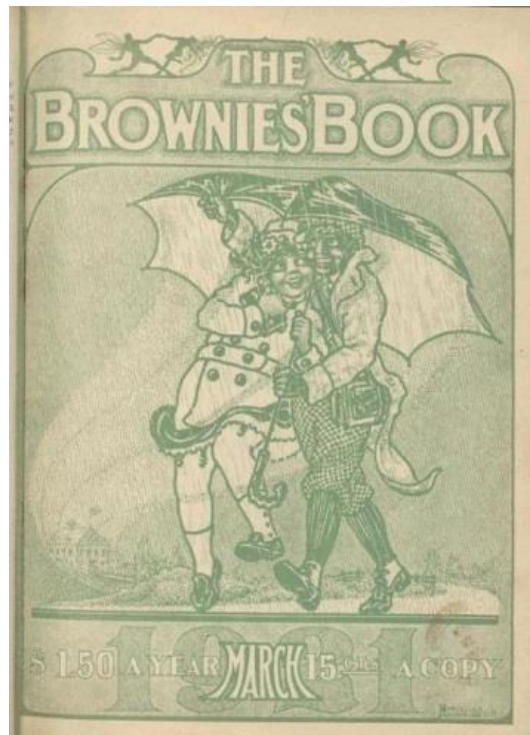
⑫ December, 1920. "Jolly Old Saint Nicholas" by Albert Smith. (375)



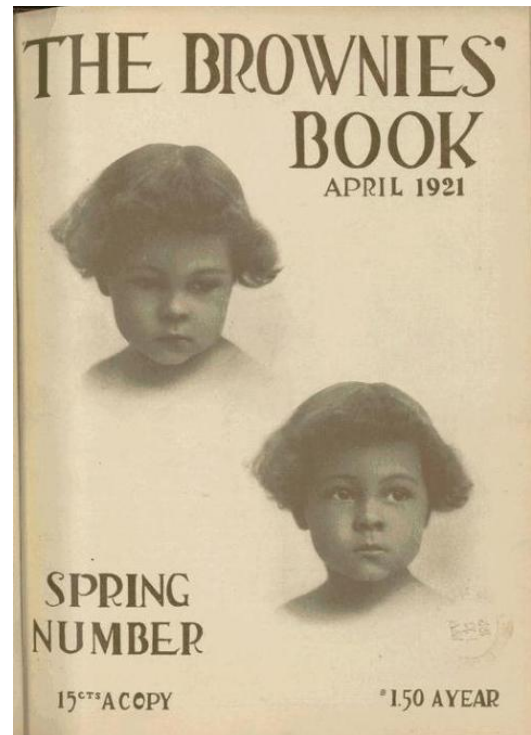
⑬ January, 1921. "Happy New Year" by Hilda Rue Wilkinson. (411)



⑭ February, 1921. "Be My Valentine" by Hilda Rue Wilkinson. (445)



⑮ March, 1921. "In Spite of Wind and Weather" by Marcellus Hawkins. (479)

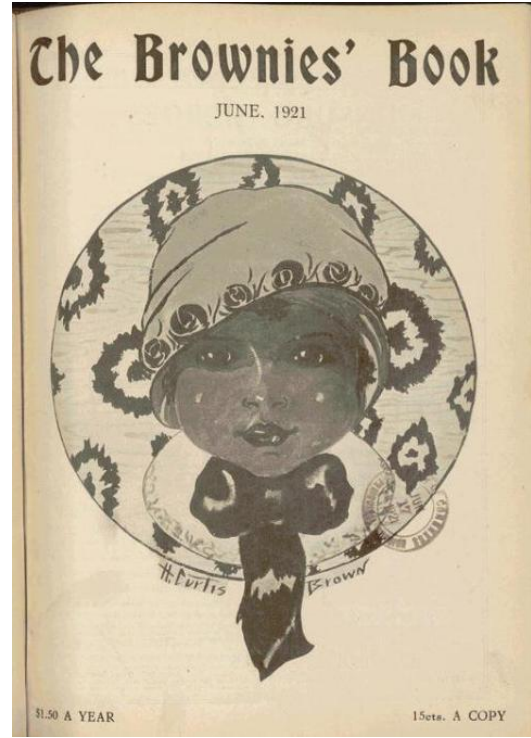


⑯ April, 1921. Photograph of Yvette Keelan. (513)

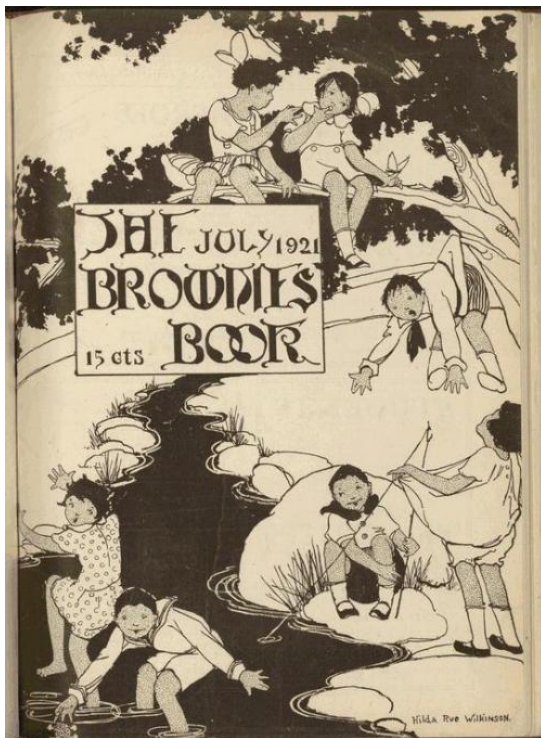




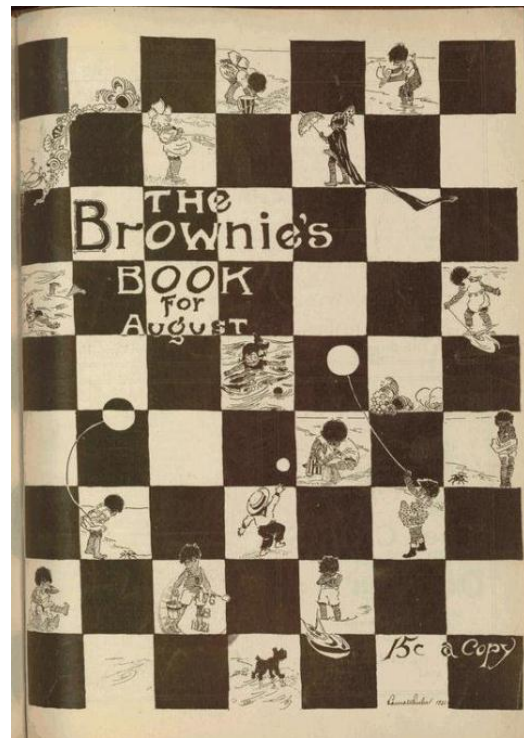
⑰ May, 1921. "The Merry Month of May" by Laura Wheeler. (547)



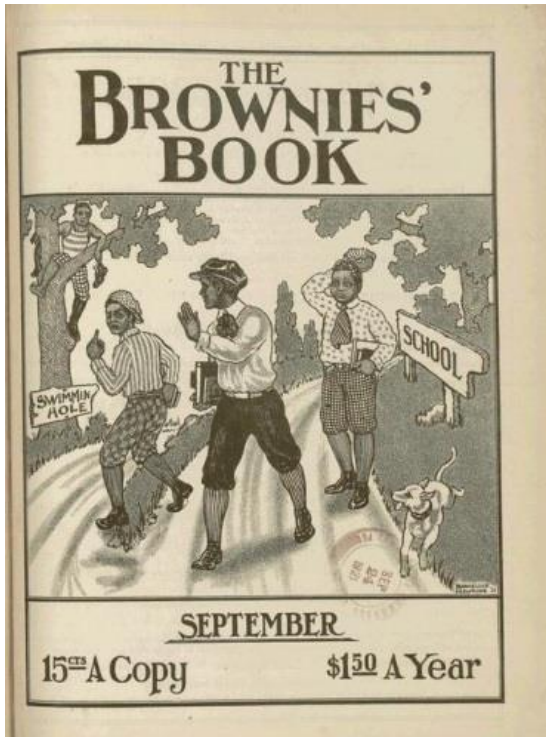
⑱ June, 1921. "The Baby Belle" by H. Curtis Brown. (581)



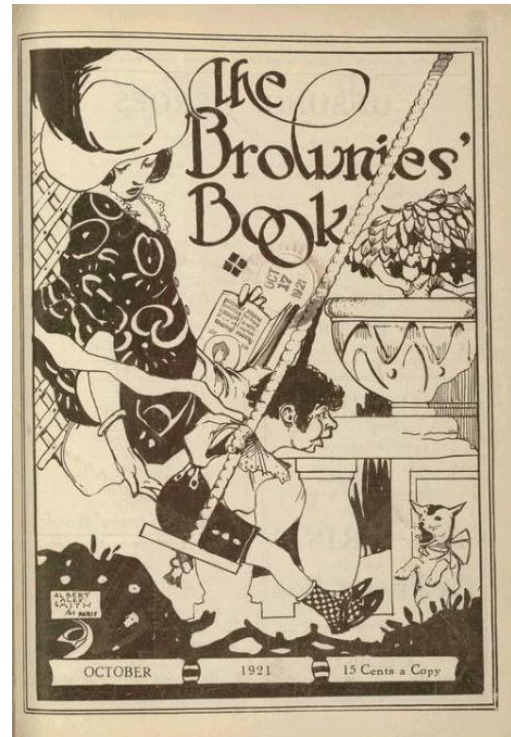
⑲ July, 1921. "Vacation Begins" by Hilda Rue Wilkinson. (611)



⑳ August, 1921. "August Sports" by Laura Wheeler. (641)



②September, 1921. "My! But It Is Hard To Choose!" by Marcellus Hawkins. (671)



②October, 1921. "How Would You Like To Go Up In A Swing?" by Albert Alex Smith. (701)



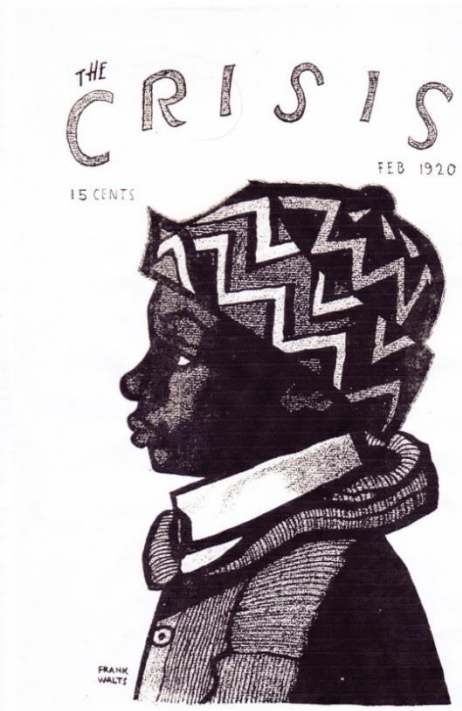
③ November, 1921. "A Maiden of Algiers" by Hilda Rue Wilkinson. (731)

出典 Du Bois, W. E. B. ed. *The Brownies Book*. New York: Du Bois and Dill, 1920-21. The Library of Congress. The Rare Book and Special Collections Division. 20 July. 2016. <<http://hdl.loc.gov/loc.rbc/ser.01351>>.





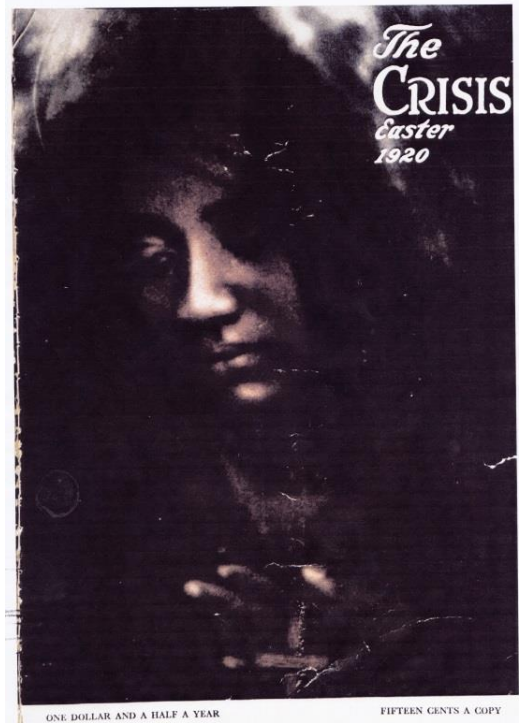
④ Jan, 1920. "Woman of Santa Lucia" Photograph by Brown and Dawson.



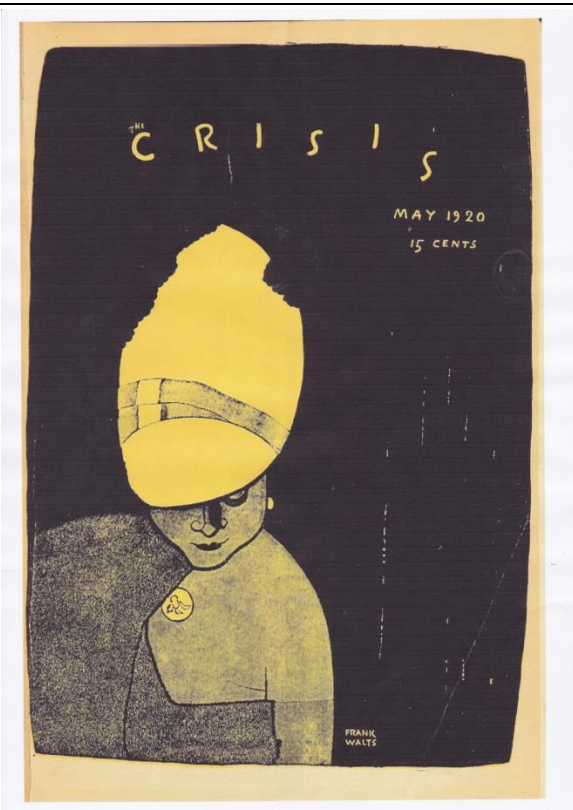
⑤ February, 1920. "Portrait of Harry Elan." By Frank Walts.



⑥ March, 1920. "Photograph." By Battey.

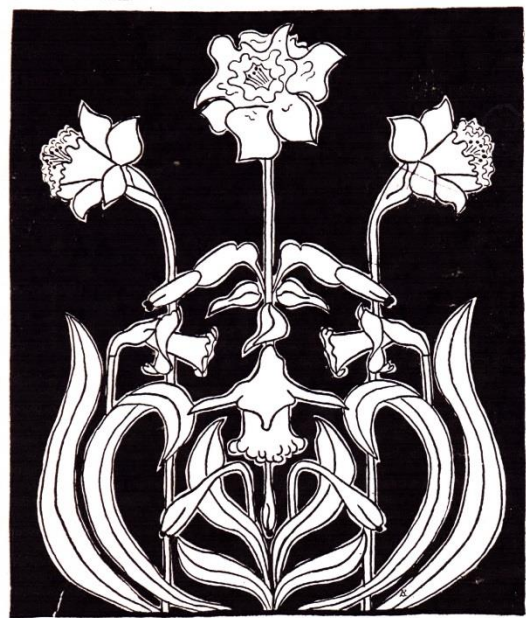


⑦ April, 1920. "Photograph." By Battey.

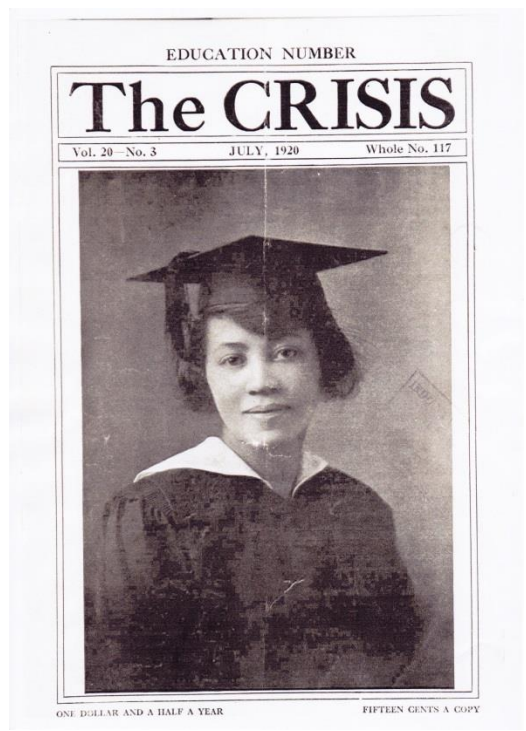


28 May, 1920. "Portrait of Mattie Fleming." by Frank Walters.

# THE CRISIS



29 June, 1920. "Drawing." By Lucie Rogers and Hilda Wilkinson.



30 July, 1920. "Portrait of Eva R. Marshall."

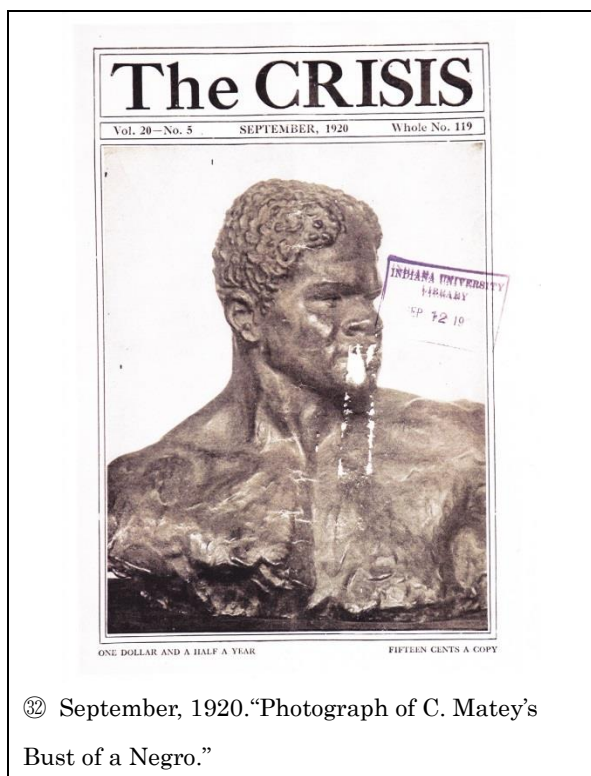
# The CRISIS

Vol. 20 - No. 4 AUGUST, 1920 Whole No. 118

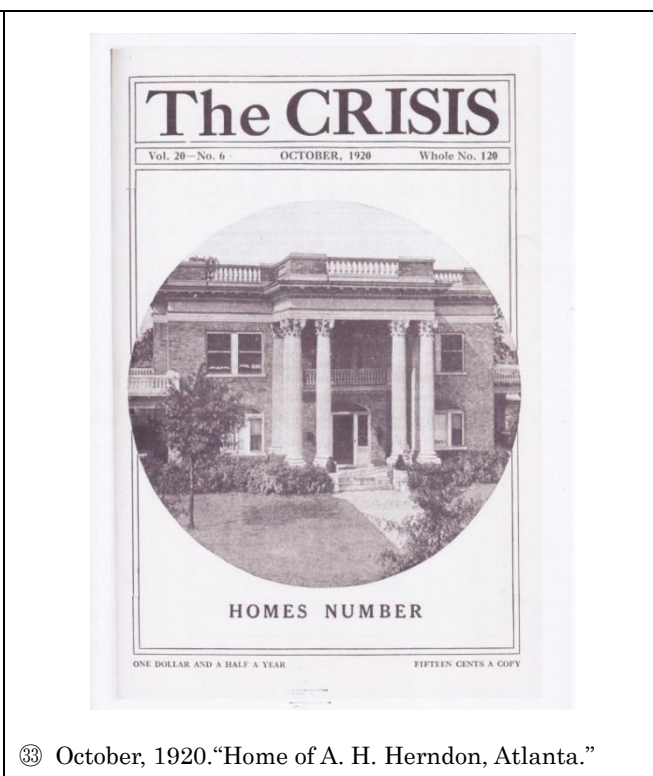


31 August, 1920. "Portrait of a Young Singer." Photograph by Green.





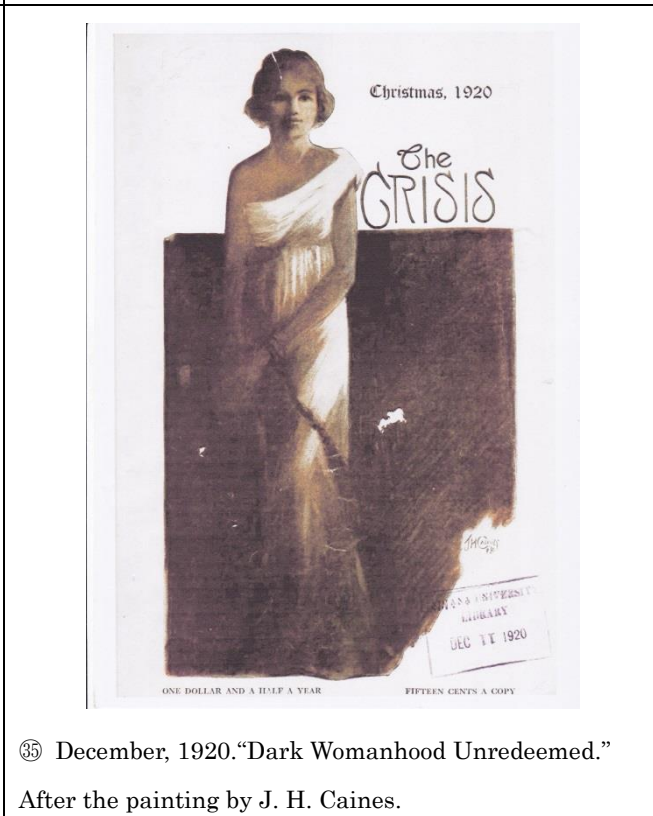
㉔ September, 1920. “Photograph of C. Matey’s Bust of a Negro.”



㉕ October, 1920. “Home of A. H. Herndon, Atlanta.”



㉖ November, 1920. “Drawing by Frank Walters”

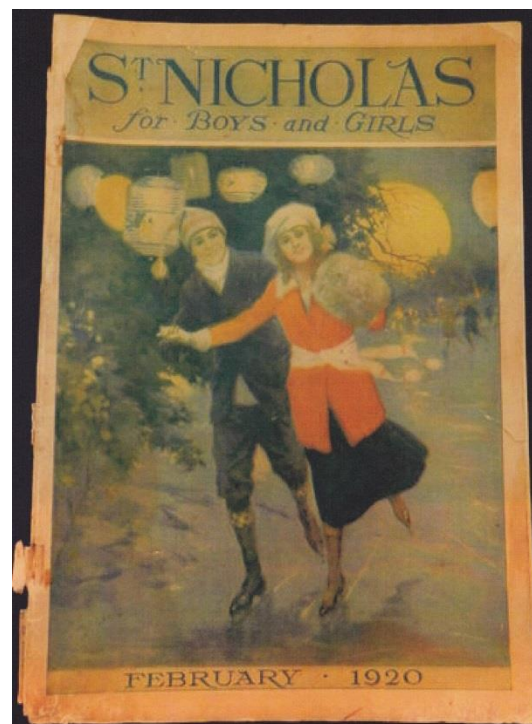


㉗ December, 1920. “Dark Womanhood Unredeemed.”  
After the painting by J. H. Caines.

㉔～㉗ 出典 “The Crisis:A Record of the Darker Races Du Bois, W. E. Burghardt (editor) New York: National Association for the Advancement of Colored People, 1910-11 / 1922-12” *The Modernist Journals Project*. Brown University and the University of Tulsa. 20 July. 2016. <<http://hdl.loc.gov/loc.rbc/ser.01351>>. Path: Journals⇒The Crisis.



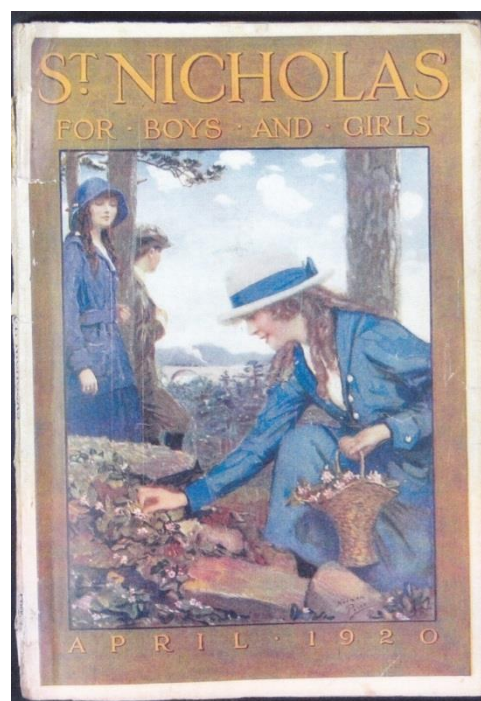
③⑥ January, 1920.



③⑦ February, 1920.



③⑧ March, 1920.

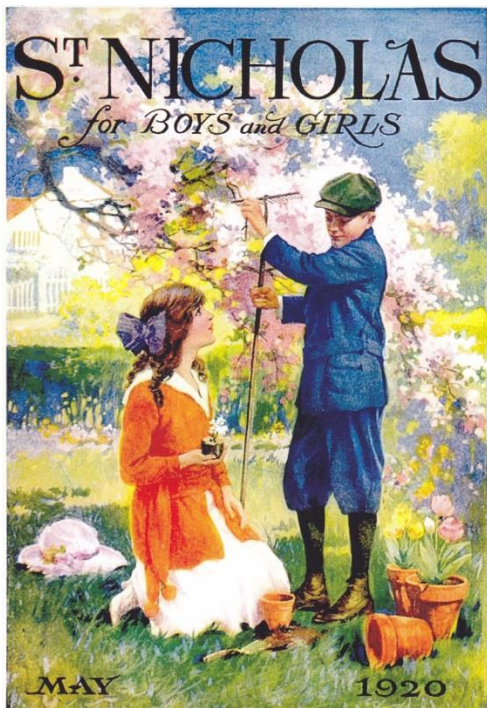


③⑨ April, 1920.

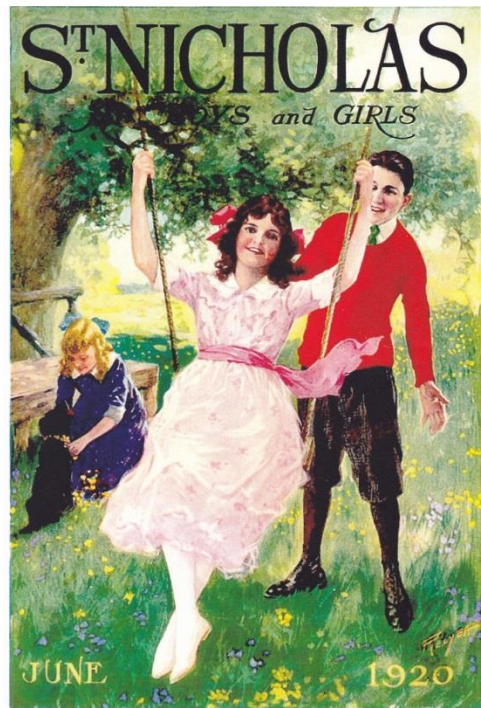
出典 ③⑥~③⑨ Hathi Trust Digital Library. "St. Nicholas : a monthly magazine for boys and girl. ... v.47 pt.1 1919-1920 Nov-Apr." original from University of Michigan. 20 July. 2016.

<<http://hdl.handle.net/2027/mdp.39015068521726>>.





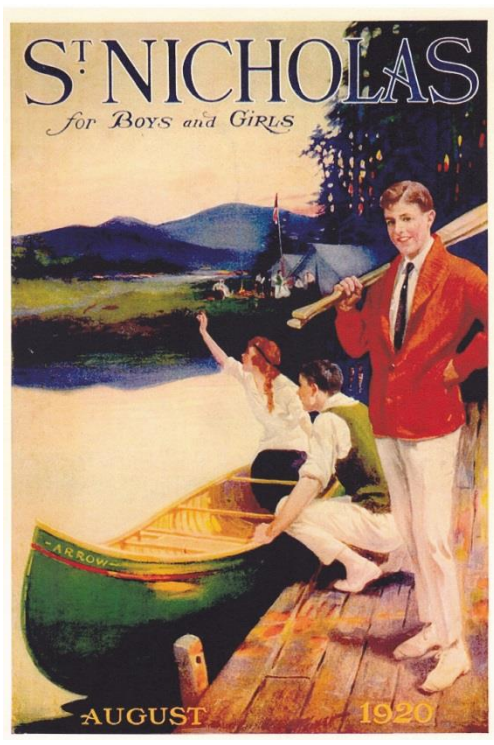
④⑩ May, 1920. Drawn by C. M. Relyea.



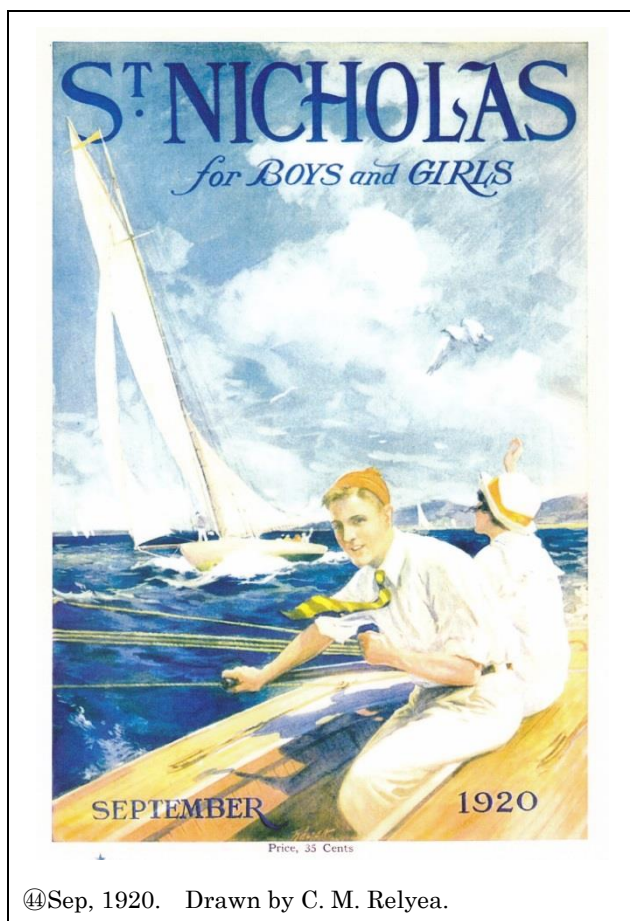
④⑪ June, 1920. Drawn by C. M. Relyea.



④⑫ July, 1920. Drawn by C. M. Relyea.



④⑬ August, 1920. Drawn by C. M. Relyea.



④Sep, 1920. Drawn by C. M. Relyea.



⑤Nov, 1920. Drawn by C. M. Relyea.

出典

④～④ Magazine Art Org. Hidden Knowledge. "St. Nicholas Magazine 1920-05 – 1920-09." 20 July 2016.

<<http://www.magazineart.org/main.php/v/youth/stnicholas/>>.

⑤国立国際子ども図書館所蔵。



## 謝辞

本論文の執筆にあたり、数年間にわたってあたたかく励まし、ご指導くださいました白百合女子大学文学部児童文化学科白井澄子教授に謹んで御礼申し上げます。先生が見守ってくださらなければ、希望を持って完成を目指すことはできませんでした。言い尽くせない感謝の気持ちでいっぱいです。また、学位論文審査において、改訂への貴重な示唆を何度もくださり、激励してくださいました白百合女子大学文学部児童文化学科井辻朱美教授、アメリカ史や文化を考察する上で多くの重要事項をご指摘くださいました白百合女子大学文学部英語英文学科糸井輝子教授、構成や術語の点でご教示くださり、前進に向けて励ましてくださいました白百合女子大学文学部児童文化学科石井直人教授、読者論の点からご示唆を賜りました白百合女子大学人間総合学部発達心理学科鈴木忠教授に、謹んで御礼申し上げます。

白百合女子大学大学院文学研究科児童文学専攻修士課程・博士課程在籍中からご指導いただき、研究の道をたえず照らし続けてくださる青山学院大学神宮輝夫名誉教授に、心より感謝申し上げます。先生がいらっしゃらなかつたら、今の自分はありません。本論文執筆においては、先生からのご教示が、改訂と前進への大きな原動力となりました。これからも、先生の教えてくださったことを灯として励んでまいります。

ひとつの視点をもって文学作品に切り込んでいくことの大切さを教えてくださいました聖心女子大学猪熊葉子名誉教授、アメリカ児童文学研究への指針を示してくださっただけでなく「早く目的地に着くのではなく、ゆっくり遠くまで歩む」ことを教えてくださいました神戸女学院大学文学部英文学科吉田純子元教授、つねに新しい学びを与えてくださる日本イギリス児童文学会の先生方、白百合女子大学大学院でともに学んだ大切な友人たち、論文執筆を励ましてくれた白鷗大学教育学部発達科学科英語教育専攻の同僚の先生方、サポートくださいました児童文化研究センターの皆さまに心より感謝申し上げます。

最後に、学位取得まで応援しつづけてくれた家族、特に、つねに前進し、なすべきことをなせと言いつづけてくれた父に心から感謝します。